北埋調報 190

森　町

濁川左岸遺跡 —B地区—

— 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成13･14年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

森　町

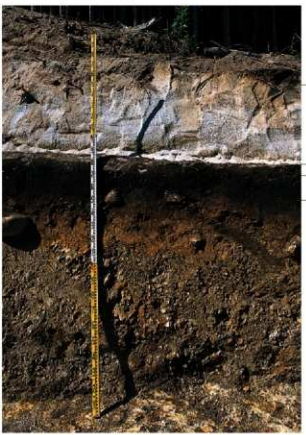
濁川左岸遺跡 —B地区—

— 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成13･14年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

遺跡遠景（南東から）



基本土層

口絵 2

竪穴住居跡調査状況（南から）

NP－ 82遺物出土状況（西から）

NP－ 82出土遺物

口絵 4

B地区出土の土器

B地区出土の石器

例　言

1．本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成13・14年度に実施した森町濁川左岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書には平成13・14年度に調査したB地区の調査結果を掲載する。
3．調査は平成13年度を第2調査部第4調査課が、平成14年度を第2調査部第3調査課が担当した。
4．本書の執筆は、各章・節について担当の調査員がそれぞれ行い、文末に文責者名を記している。全体の編集は村田大が行った。
5．遺構は調査を担当した調査員がそれぞれ整理し、村田が取りまとめた。遺物は土器を影浦覚、石器等を大泰司統が担当した。
6．遺物等の現場での一次整理および台帳管理は大泰司が統括した。
7．発掘調査での写真撮影は平成13年度を中山昭大、平成14年度は各担当の調査員が行い、遺物の写真撮影・焼付けなどは中山が行った。
8．フローテーション試料については大泰司が統括した。
9．各種分析、同定は下記に依頼した。
　ヒスイ産地同定（京都大学原子炉実験所　藁科哲男）
　炭化種子同定（札幌国際大学　吉崎昌一・椿坂恭代）
10．火山灰分析および土層の観察は第1調査部第1調査課花岡正光による。
11．石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡の指導のもと、大泰司が行った。
12．遺物・記録類は整理および報告書作成後、森町教育委員会が保管する。
13．調査にあたっては下記の諸機関および諸氏にご協力、ご指導頂いた。

北海道教育庁文化課、森町教育委員会、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町立濁川小学校、森町教育委員会：藤田　登・荻野幸男・横山英介・佐藤　稔・原　靖寿・八重樫　誠・山田あや子・渡部明美、八雲町郷土資料館：三浦孝一・柴田信一、八雲町教育委員会：安西雅希・吉田　力、札幌国際大学：吉崎昌一・椿坂恭代、北海道教育大学函館校：鴈沢好博、北海道開拓記念館：平川善祥・山田悟郎・右代啓視、㈶北海道北方博物館交流協会：野村　崇、函館市教育委員会：田原良信・中村公宣・野村祐一・野辺地初雄、函館市立博物館：長谷部一弘、函館市立博物館五稜郭分館：佐藤智雄、七飯町教育委員会：石本省三、南茅部町教育委員会：阿部千春・福田裕二・南茅部町埋蔵文化財調査団：小林　貴・輪島慎二・坪井睦美、今金町教育委員会：寺崎康史、乙部町教育委員会：森　広樹、上磯町教育委員会：森靖裕、上ノ国町教育委員会：松崎水穂・斉藤邦典・松田輝哉、木古内町教育委員会：菅野文二・木本豊・三上英則・大谷内愛史、知内町教育委員会：松本征八・高橋豊彦、松前町教育委員会：久保　泰・前田正憲・谷岡康孝・天方直仁、伊達市教育委員会：大島直行・青野友哉、苫小牧市博物館：赤石慎三、苫小牧市勇武津資料館：佐藤一夫、苫小牧市：宮夫靖夫・二階堂啓也・工藤　肇・兵藤千秋・大泉博嗣・渡辺俊一・鈴木耕栄、岩内町教育委員会：小柳リラコ、泊村教育委員会：田部　淳、札幌市教育委員会：加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久・秋山洋司・石井　淳、石狩市教育委員会：石橋孝夫・工藤義衛、恵庭市教育委員会：上屋真一・松谷純一・森　秀之・佐藤幾子、江別市教育委員会：高橋正勝・野中一宏・稲垣和幸、千歳市埋蔵文化財調査センター：大谷敏三・田村俊之・豊田宏良・松田淳子、千歳サケのふるさと館：高橋　理、平取町教育委員会：森岡健治・長田佳宏、富良野市教育委員会：杉浦重信・澤田健、釧路市埋蔵文化財調査センター：石川　朗、網走市郷土博物館：和田英昭、斜里町立知床博物館：松田　功、常呂町埋蔵文化財センター：武田　修、青森県立資料館：鈴木克彦、青森県埋蔵文化財センター：成田滋彦、青森教育委員会：神　康夫、青森市教育委員会：遠藤正夫・児玉大成、八戸市教育委員会：村木　淳・小保内裕之、東北町教育委員会：古屋敷則雄

凡　　例

1．本文および図・表中では以下の略号を用い、原則として確認順に番号を付した。なお混用を避けるため、平成14年度に調査したものについて渟川左岸遺跡の頭文字「N」をそれぞれの略号の頭に付けた。

H（NH）：住居跡　　P（NP）：土壙　　F（NF）：焼土・石組炉
SP（NSP）：柱穴様の小ピット　　HP：住居内の柱穴　　HF：住居内の焼土

2．挿図中の出土遺物は、それぞれに凡例を付した。

3．掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。

遺構	1：40	遺物出土状況	1：20	復元土器	1：3	土器拓影	1：3
剥片石器	1：2	磨製石器	1：2	礫石器	1：3	土・石製品	1：2

4．遺構の規模は「確認面の長軸長／床面・壙底面での長軸長× 確認面の短軸長／床面・壙底面での短軸長× 確認面からの最大深（単位はm）」の順で記した。一部破壊されているものについては現存長を（　）で示し、不明のものは―で示した。

5．土層の表記は、基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。

6．土層の色調は『新版標準土色帖19版』（小山・竹原1997）に準じた。

7．土層の説明は『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジー学会編　1997）を参考に、土性、粘着性、堅密度および礫の混入、その他に分けた。一部、土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表してある。

A＋B：AとBがほぼ同量混じる
A＞B：AにBが少量混じる
A≫B：AにBが微量混じる

8．火山灰の略号は、『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会　1982）による。

9．遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位はm）を示している。

10．石器・土製品・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を（　）で示した。
最大長× 最大幅× 最大厚（単位はmm）

目　次

口絵
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要
　1　調査要項 ……1
　2　調査体制 ……1
　3　調査にいたる経緯 ……2
　4　調査概要 ……2
　（１）発掘区の設定……2
　（２）調査の方法……3
　（３）遺跡の土層……3
　（４）整理の方法……8
　（５）遺物の分類……8
　（６）調査結果の概要 ……12
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　遺跡の位置と周辺の地形……15
　2　周辺の遺跡……15
Ⅲ　遺構と遺構出土の遺物
　1　住居跡……22
　2　土壙……58
Ⅳ　包含層出土の遺物
　1　土器等 ……105
　2　石器等 ……123
Ⅴ　自然科学的分析
　1　濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析 ……143
　2　森町濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子 ……151
Ⅵ　成果と課題
　1　遺構 ……155
　2　土器 ……157
　3　石器 ……158
一覧表……163～188
引用参考文献 ……189
写真図版 ……191
報告書抄録 ……261
奥付

挿図目次

Ⅰ　調査の概要
図Ⅰ－１　遺跡の位置
図Ⅰ－２　遺跡周辺の地形と調査区
図Ⅰ－３　発掘区設定図
図Ⅰ－４　基本土層と土層断面
図Ⅰ－５　遺構位置図

Ⅱ　遺跡の位置と環境
図Ⅱ－１　遺跡周辺の地形（１）
図Ⅱ－２　遺跡周辺の地形（２）
図Ⅱ－３　遺跡周辺の地形（３）
図Ⅱ－４　周辺の遺跡

Ⅲ　遺構と遺構出土の遺物
図Ⅲ－１　B地区遺構位置図
図Ⅲ－２　H－１（１）
図Ⅲ－３　H－１（２）と遺物（１）
図Ⅲ－４　H－１の遺物（２）
図Ⅲ－５　H－２（１）
図Ⅲ－６　H－２（２）と遺物（１）
図Ⅲ－７　H－２の遺物（２）
図Ⅲ－８　H－３（１）
図Ⅲ－９　H－３（２）
図Ⅲ－10　H－３（３）
図Ⅲ－11　H－３の遺物
図Ⅲ－12　H－４（１）
図Ⅲ－13　H－４（２）と遺物（１）
図Ⅲ－14　H－４の遺物（２）
図Ⅲ－15　H－９と遺物（１）
図Ⅲ－16　H－９の遺物（２）
図Ⅲ－17　NH－13（１）
図Ⅲ－18　NH－13（２）
図Ⅲ－19　NH－13（３）
図Ⅲ－20　NH－13の遺物（１）
図Ⅲ－21　NH－13の遺物（２）
図Ⅲ－22　NH－13の遺物（３）
図Ⅲ－23　NH－17
図Ⅲ－24　NH－17の遺物（１）
図Ⅲ－25　NH－17の遺物（２）
図Ⅲ－26　NH－19
図Ⅲ－27　NH－19の遺物（１）
図Ⅲ－28　NH－19の遺物（２）
図Ⅲ－29　P－１
図Ⅲ－30　P－１の遺物とP－３
図Ⅲ－31　P－４と遺物
図Ⅲ－32　P－５・６と遺物
図Ⅲ－33　P－７と遺物
図Ⅲ－34　P－８と遺物
図Ⅲ－35　P－11と遺物（１）
図Ⅲ－36　P－11の遺物（２）
図Ⅲ－37　P－12と遺物（１）
図Ⅲ－38　P－14と遺物、P－17
図Ⅲ－39　NP－60と遺物（１）
図Ⅲ－40　NP－60の遺物（２）
図Ⅲ－41　NP－60の遺物（３）
図Ⅲ－42　NP－60の遺物（４）
図Ⅲ－43　NP－60の遺物（５）
図Ⅲ－44　NP－60の遺物（６）
図Ⅲ－45　NP－60の遺物（７）
図Ⅲ－46　NP－60の遺物（８）
図Ⅲ－47　NP－60の遺物（９）
図Ⅲ－48　NP－60の遺物（10）
図Ⅲ－49　NP－61と遺物（１）
図Ⅲ－50　NP－61の遺物（２）NP－62と遺物
図Ⅲ－51　NP－65と遺物、NP－67
図Ⅲ－52　NP－68・69・70
図Ⅲ－53　NP－77と遺物、NP－80
図Ⅲ－54　NP－81
図Ⅲ－55　NP－82
図Ⅲ－56　NP－82の遺物（１）
図Ⅲ－57　NP－82の遺物（２）
図Ⅲ－58　NP－84、NP－85と遺物
図Ⅲ－59　NP－86と遺物
図Ⅲ－60　NP－88と遺物（１）
図Ⅲ－61　NP－88の遺物（２）
図Ⅲ－62　NP－89・90、NP－92と遺物

Ⅳ　包含層出土の遺物
図Ⅳ－１　包含層出土の土器（１）
図Ⅳ－２　包含層出土の土器（２）
図Ⅳ－３　包含層出土の土器（３）
図Ⅳ－４　包含層出土の土器（４）
図Ⅳ－５　包含層出土の土器（５）
図Ⅳ－６　包含層出土の土器（６）
図Ⅳ－７　包含層出土の土器（７）
図Ⅳ－８　包含層出土の土器（８）
図Ⅳ－９　包含層出土の土器（９）
図Ⅳ－10　包含層出土の土器（10）
図Ⅳ－11　包含層出土の土器（11）
図Ⅳ－12　包含層出土の土器（12）
図Ⅳ－13　包含層出土の土器等（13）
図Ⅳ－14　包含層出土の土器分布図
図Ⅳ－15　包含層出土の石器（１）
図Ⅳ－16　包含層出土の石器（２）
図Ⅳ－17　包含層出土の石器（３）
図Ⅳ－18　包含層出土の石器（４）
図Ⅳ－19　包含層出土の石器（５）
図Ⅳ－20　包含層出土の石器（６）
図Ⅳ－21　包含層出土の石器（７）
図Ⅳ－22　包含層出土の石器（８）
図Ⅳ－23　包含層出土の石器（９）
図Ⅳ－24　包含層出土の石器（10）
図Ⅳ－25　包含層出土の石器等（11）
図Ⅳ－26　包含層出土の石器分布図（１）
図Ⅳ－27　包含層出土の石器分布図（２）

Ⅴ　自然科学的分析
１　濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析
図１　ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布圏
図２　ヒスイ原石の元素比値Zr／Sr対Sr／Feの分布および分布圏
図３　ヒスイ原石の元素比値Ca／Si対Sr／Feの分布および分布圏
図４　ヒスイ原石の元素比値Na／Si対Mg／Siの分布および分布圏
図５　濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品（88308）の蛍光X線スペクトル
２　濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子
図版　濁川左岸遺跡出土炭化種子

Ⅵ　成果と課題
図Ⅵ－１　縄文時代後期前葉の住居跡と中期前半の土壙
図Ⅵ－２　石器のまとめ（１）
図Ⅵ－３　石器のまとめ（２）

表目次

Ⅰ　調査の概要
表Ⅰ－１　出土遺物一覧

Ⅱ　遺跡の位置と環境
表Ⅱ－１　森町の遺跡一覧

Ⅲ　遺構と遺構出土の遺物
表Ⅲ－１　遺構規模一覧
表Ⅲ－２　遺構出土遺物一覧
表Ⅲ－３　遺構出土掲載土器一覧（復元土器）
表Ⅲ－４　遺構出土掲載土器一覧（拓影図）
表Ⅲ－５　遺構出土掲載石器一覧

Ⅳ　包含層出土の遺物
表Ⅳ－１　包含層出土土器等一覧
表Ⅳ－２　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）
表Ⅳ－３　包含層出土掲載土器等一覧（拓影図）
表Ⅳ－４　包含層出土石器一覧
表Ⅳ－５　包含層出土掲載石器一覧

Ⅴ　自然科学的分析
１　濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析
表１　ヒスイ製遺物の原産地の判定基準（１）
表２　ヒスイ製遺物の原産地の判定基準（２）

表３　濁川左岸遺跡のヒスイ製石製品の元素分析と比量の結果
表４　濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の原産地分析結果
２　濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子
表１　濁川左岸遺跡炭化種子一覧
表２　フローテーション試料一覧

図版目次

口絵１　遺跡遠景　基本土層
口絵２　竪穴住居跡調査状況
口絵３　NH－82の調査
口絵４　B地区出土の遺物

平成13年度の調査
図版１
１　住居跡確認（南西から）
２　住居跡確認（南東から）
図版２
１　H－１東西セクション（北西から）
２　H－１南北セクション（北東から）
３　H－１遺物出土状況（南東から）
図版３
１　HF－１・HP－１セクション（北から）
２　HF－１セクション（北から）
３　HP－１セクション（南から）
４　HP－２セクション（北西から）
５　H－１完掘（北西から）
図版４
１　H－２東西セクション（南東から）
２　H－２南北セクション（東から）
３　HF－１確認（南東から）
４　HF－１セクション（南から）
５　H－２完掘（南東から）
図版５
１　H－３東西セクション（南から）
２　HP－１セクション（南から）
３　HP－７セクション（南から）
４　HP－８セクション（西から）
５　H－３完掘（北東から）
図版６
１　H－４セクション（北から）
２　HF－１セクション（南西から）
３　HP－２セクション（東から）
４　H－４出土状況（北東から）
図版７
１　H－９セクション（西から）
２　H－９遺物出土状況（東から）
３　HF－１セクション（北西から）
４　H－９完掘（東から）
図版８
１　P－１セクション（東から）
２　P－１遺物出土状況（北東から）
３　P－３セクション（東から）
４　P－３完掘（北西から）
５　P－４セクション（北西から）
６　P－４完掘（北から）
７　P－５セクション（南から）
８　P－５完掘（南から）
図版９
１　P－６セクション（南から）
２　P－６遺物出土状況（西から）
３　P－７セクション（東から）
４　P－８完掘（南東から）
５　P－11セクション（南西から）
６　P－11遺物出土状況（西から）
７　P－12セクション（南西から）
８　P－12完掘（北西から）

平成14年度の調査
図版10
１　火山灰除去作業（東から）
２　B地区完掘（北東から）
図版11
１　NH－13東西セクション（南西から）

2　NH－13南北セクション（南東から）
3　NH－13覆土1層遺物出土状況（北東から）
図版12
1　HF－１セクション（東から）
2　HF－２セクション（東から）
3　HP－２セクション（西から）
4　HP－３セクション（西から）
5　NH－13完掘（西から）
図版13
1　NH－17遺物出土状況（東から）
2　NH－17東西セクション（南から）
3　HF－１検出状況（北東から）
4　HF－１セクション（北西から）
図版14
1　NH－17完掘（南から）
2　NH－19東西セクション（南から）
3　NH－19南北セクション（南西から）
図版15
1　HF確認（北から）
2　HF確認（西から）
3　HFセクション（南から）
4　NH－19完掘（東から）
図版16
1　NH－17（手前）・19（奥）調査状況（南から）
図版17
1　NP－60遺物出土状況（南西から）
2　NP－60遺物出土状況（南西から）
3　NP－60遺物出土状況（南西から）
4　NP－60遺物出土状況（南西から）
5　NP－61セクション（南から）
6　NP－61遺物出土状況（東から）
図版18
1　NP－62セクション（西から）
2　NP－62完掘（南西から）
3　NP－65完掘（西から）
4　NP－68完掘（北から）
5　NP－67セクション（東から）
6　NP－67完掘（東から）
7　NP－69セクション（西から）
8　NP－69完掘（北から）
図版19
1　NP－70セクション（南西から）
2　NP－70完掘（南西から）
3　NP－77セクション（東から）
4　NP－77遺物出土状況（南東から）
5　NP－77完掘（南東から）
6　NP－80完掘（南から）
7　NP－81セクション（南西から）
8　NP－81完掘（南から）
図版20
1　NP－82確認（西から）
2　NP－82セクション（南西から）
3　NP－82遺物出土状況（西から）
4　NP－82完掘（西から）
5　NP－84セクション（南から）
6　NP－84完掘（北から）
図版21
1　NP－85セクション（南から）
2　NP－85完掘（西から）
3　NP－86セクション（南から）
4　NP－86完掘（東から）
図版22
1　NP－88確認（北東から）
2　NP－88遺物出土状況（北東から）
3　NP－88セクション（南東から）
4　NP－88完掘（東から）
5　NP－89セクション（東から）
6　NP－90完掘（北東から）
図版23
1　NP－92セクション（東から）
2　NP－92完掘（東から）
3　恵山式土器出土状況（北から）
4　円筒下層ｄ式土器出土状況（北から）
5　フレイク出土状況（F－40区）（北から）
6　ヒスイ製玉

掲載遺物
図版24　遺構出土の遺物（１）
図版25　遺構出土の遺物（２）

図版26　遺構出土の遺物（３）
図版27　遺構出土の遺物（４）
図版28　遺構出土の遺物（５）
図版29　遺構出土の遺物（６）
図版30　遺構出土の遺物（７）
図版31　遺構出土の遺物（８）
図版32　遺構出土の遺物（９）
図版33　遺構出土の遺物（10）
図版34　遺構出土の遺物（11）
図版35　遺構出土の遺物（12）
図版36　遺構出土の遺物（13）
図版37　遺構出土の遺物（14）
図版38　遺構出土の遺物（15）
図版39　遺構出土の遺物（16）
図版40　遺構出土の遺物（17）
図版41　遺構出土の遺物（18）
図版42　遺構出土の遺物（19）
図版43　遺構出土の遺物（20）
図版44　包含層出土の土器（１）
図版45　包含層出土の土器（２）
図版46　包含層出土の土器（３）
図版47　包含層出土の土器（４）
図版48　包含層出土の土器（５）
図版49　包含層出土の土器（６）
図版50　包含層出土の土器（７）
図版51　包含層出土の土器（８）・土製品
図版52　包含層出土の土器（９）
図版53　包含層出土の土器（10）
図版54　包含層出土の土器（11）
図版55　包含層出土の土器（12）
図版56　包含層出土の土器（13）
図版57　包含層出土の土器（14）
図版58　包含層出土の土器（15）
図版59　包含層出土の土器（16）
図版60　包含層出土の石器（１）
図版61　包含層出土の石器（２）
図版62　包含層出土の石器（３）
図版63　包含層出土の石器（４）
図版64　包含層出土の石器（５）
図版65　包含層出土の石器（６）
図版66　包含層出土の石器（７）
図版67　包含層出土の石器（８）・石製品

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

遺 跡 名：濁川左岸遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－ 15－ 22）
事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：茅部郡森町字石倉町401ほか
調査面積：4,930㎡（平成13年度：1,300㎡、平成14年度：3,630㎡）
発掘期間：平成13年７月24日～10月26日
　　平成14年５月７日～８月30日
整理期間：平成14年10月28日～平成15年３月31日（B地区のみ）

2　調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター
（平成13年度）
理　　事　　長　大澤　満
専　務　理　事　宮崎　勝
常　務　理　事　木村尚俊（平成13年７月17日まで）
総　務　部　長　柳瀬茂樹
第２調査部長　大沼忠春（第１調査部長兼務　平成13年７月18日付）
第４調査課課長　熊谷仁志（発掘担当者）
主　　任　影浦　覚（発掘担当者）
主　　任　中山昭大
主　　任　袖岡淳子（発掘担当者）
文化財保護主事　大泰司　統
（平成14年度）
理　　事　　長　大澤　満（平成14年６月30日まで）
　　森重楯一（平成14年７月１日から）
専　務　理　事　宮崎　勝
常　務　理　事　畑　宏明
総　務　部　長　下村一久
第２調査部長　西田　茂
第３調査課課長　熊谷仁志（発掘担当者）
主　　任　村田　大（発掘担当者）
主　　任　影浦　覚（発掘担当者）
文化財保護主事　大泰司　統（発掘担当者）

3　調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道路は（函館～名寄）は、函館を起点として苫小牧市・札幌市・旭川市を経由し、名寄に至る総延長488kmの路線である。長万部町国縫IC～和寒町和寒IC間の359kmはすでに供用され、七飯～長万部間について平成５年11月から建設工事が進められている。

平成２年４月に、七飯～長万部間について日本道路公団札幌建設局（現：日本道路公団北海道支社）から北海道教育委員会に埋蔵文化財についての事前協議がなされた。協議を受けた北海道教育委員会は、平成２年４月に所在確認調査を実施し、平成５年から北側の長万部町から順次試掘調査を開始した。

渟川左岸遺跡については平成13年４月24・25日に試掘調査が実施された。その結果、用地内南側で縄文時代後期前葉の多量の遺物と共に遺構と見られる落ち込みが確認され、用地内の包蔵地面積8,600㎡（工事区域内4,500㎡）が発掘調査必要範囲とされた。

渟川左岸遺跡の調査は、平成13年度当初の調査計画にはなかった。

当初計画では森町本内川右岸遺跡を調査する予定であったが、同遺跡の工事工程の変更によって、急遽、投入予定人工の見合い分で渟川左岸遺跡を実施することとなった。

平成13年度の調査は、調査範囲内の工事工程の都合から調査区両端の２地点計1,300㎡を調査した。平成14年度は3,630㎡調査を実施し、最終的には4,930㎡を調査し、渟川左岸遺跡の調査を終了した。

整理作業は、多くの遺構が検出され、遺物も約20万点にも及ぶことから平成14・15年度の２ヵ年をかけて整理作業を実施しする。

調査報告書は、平成14年度には北側部分（B地区）を、平成15年度は南側部分（Ａ地区）を作成する予定である。　（熊谷仁志）

4　調査概要

（１）発掘区の設定

発掘区の設定に当たっては日本道路公団北海道支社の「北海道縦貫自動車道本茅部工事平面図（２）1,000分の１図」を使用した。工事予定上り線の中央線上の中心杭であるSTA．444とSTA．445を通る線を基軸のMラインとし、STA．444を基準に４ｍ方眼を設定した。Mラインと並行に南西へ向かってL、K、J…とした。更に、STA．444を通りそれに直行する線を10ラインとし、北西へ向かって11、12、13…とした。この方眼は南端交点をアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する（例：STA．444はM－10）。更に必要に応じて２ｍ方眼に４分割または１ｍ方眼に16分割し小発掘区とした。２ｍ方眼の小発掘区は杭のある側から反時計回りにａ、ｂ、ｃ、ｄを付し（例：M－10－ａ）、１ｍ方眼の小発掘区は南端から南西へ順に１、２、３、４とした（例：M－10－１）。

この方眼の日本測地系による平面直角座標は第ＸⅠ系で以下のとおり。

STA．444（調査区杭番号M－10）　X＝－206064．5983　Y＝19511．8843

STA．445　X＝－205999．8906　Y＝19435．6588

また、測量法の改正に伴い、平成14年４月１日に現行の平面直角座標系（昭和43年建設省告示第3059号）は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第９号）が施行された為、世界測地系による平面直角座標を併記しておく。なお、座標の変換には国土地理院のホームページで公開されている座標変換ソフト「TKY２JGD」を使用した。

この方眼の世界測地系による平面直角座標は第ＸⅠ系で以下のとおり。

STA．444（調査区杭番号M－10）　X＝－205808．1900　Y＝19218．7326

STA．445　X＝－205743．4835　Y＝19142．5088

水準測量は北海道茅部郡森町字石倉町34番地先に所在する、１等水準点第5971号を用いて、各測量に使用した。

1等水準点第5971号　H=9．3115m

（２）調査の方法

調査範囲は濁川によって形成された森町側の高い段丘と、無名沢によって開析された八雲町側の低い段丘からなる部分である。両段丘の間に沢跡が確認され、これを境に森町側の高位段丘を「A地区」、八雲町側の低位段丘を「B地区」と呼称し調査を行った。発掘区では30ラインより南東側が「A地区」北西側が「B地区」となる。

試掘調査の結果から、多量の遺物の出土と遺構の検出が予想されたため、調査予定範囲全てを通常発掘範囲とした。調査に先行し重機により表土、火山灰を除去した。一部、抜根による撹乱が見られたが、遺物包含層は良好に残存していることがわかった。

調査は主に、平成13年度のA地区を影浦が、B地区を袖岡が、平成14年度のA地区を大泰司が、B地区を村田が担当した。

包含層調査

Ⅲ～Ⅴ層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いた人力による手掘り作業により掘り下げた。

遺構調査

包含層調査時に土層の変化により確認された遺構については、その平面長軸と短軸に土層観察用のベルトを残して掘り下げた。

遺物の取上げ

包含層出土の遺物は、発掘区および層単位での一括取上げとした。出土状況に応じて、小発掘区による取り上げ、写真や出土状況図の作成など詳細な記録化に努めた。遺構出土の遺物は、遺構上部の自然堆積層（Ⅲ層・Ⅳ層に相当）に包含されていたものについては、遺構および層位を記録して一括で取上げた。覆土、床面または壙底面出土の遺物は、図面、台帳等に出土位置を記録し、遺構単位で連続番号を付して取上げた。ただし、調査の都合により、覆土から出土した遺物の一部は、層位による一括取上げを行っている。

（３）遺跡の土層

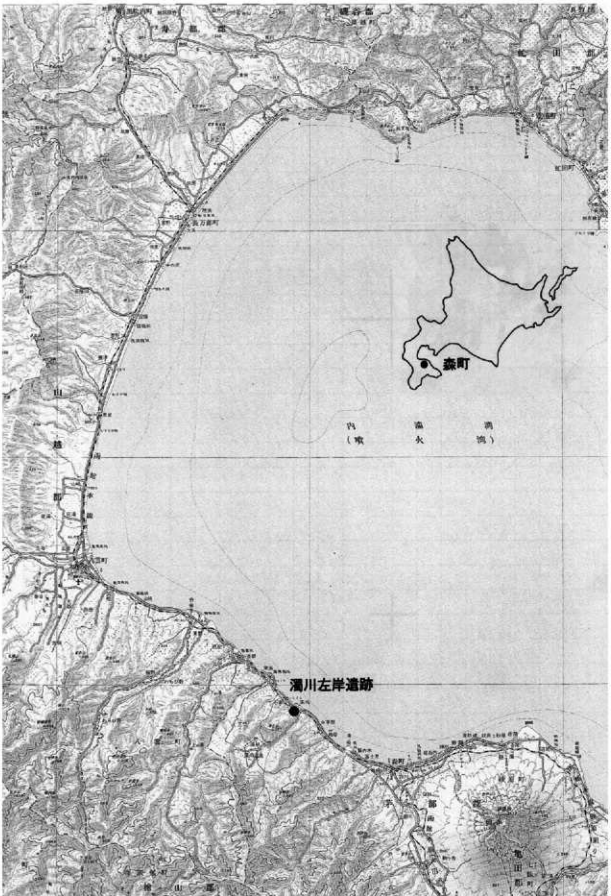
基本層序は平成13年度の調査により決定され、平成14年度もこれを踏襲している。斜面部や沢地形で、層厚に差はあるものの堆積状況に相違はない。Ⅲ層～Ⅴ層が遺物包含層である。以下各層について記す。

Ⅰ層：表土　調査前の現況は、スギやマツなどが植林された山林である。

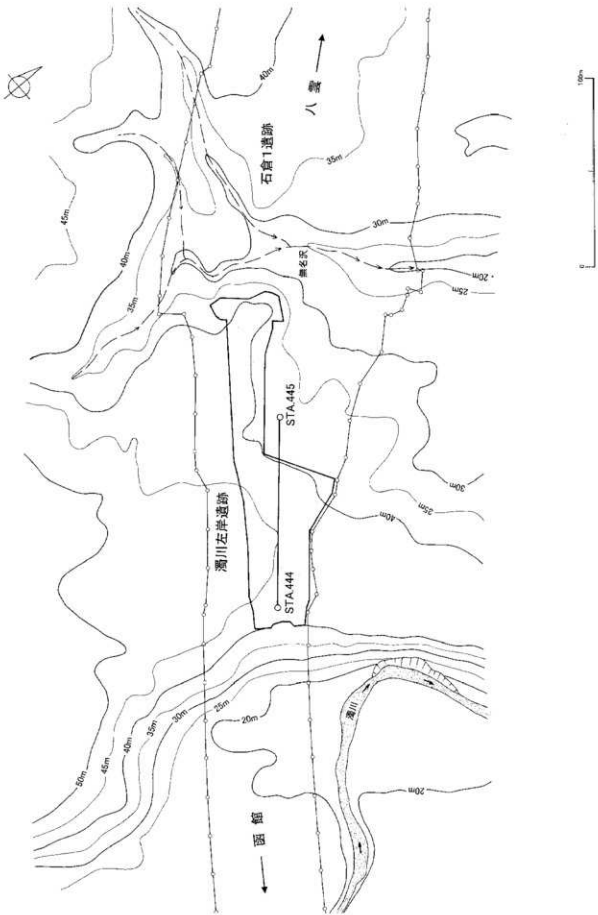
Ⅱ層：駒ケ岳火山灰ｄ層（Ｋｏ－ｄ）　1640年に降下。灰白色を呈し、径３～５mmの軽石。層厚は約80cm。

Ⅲ層：黒褐色土　平坦部、斜面部ともに層厚は約５cm。

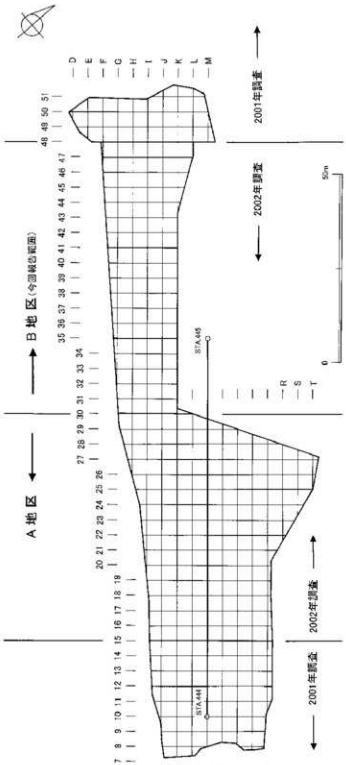
Ⅲ層とⅣ層の間に、白頭山苫小牧火山灰（Ｂ－Ｔｍ）が斑状に認められた。

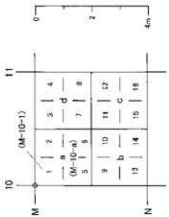


図Ⅰ－１　遺跡の位置（この図は国土地理院発行20万分の１地形図、「室蘭」を複製、加筆したものである）

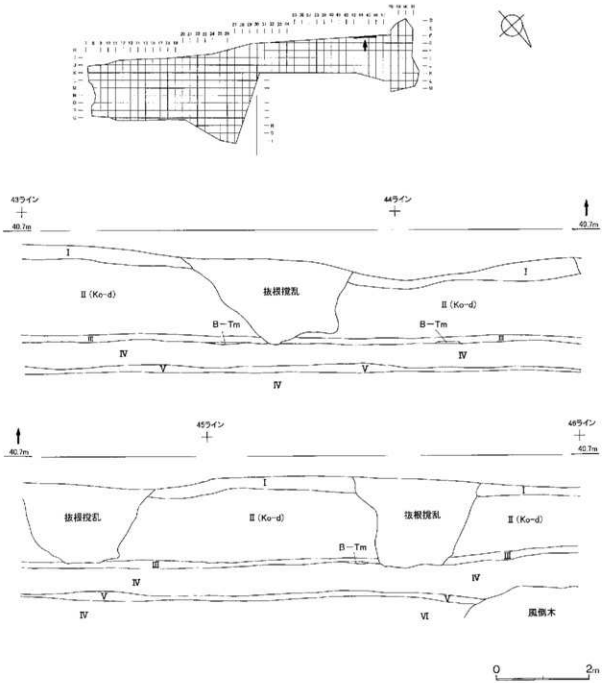


図Ⅰ－２　遺跡周辺の地形と調査区


A地区
B地区(今回検出範囲)
2001年調査
2002年調査
2002年調査
2001年調査
STA445
STA446
50m


(M-10-1)
(M-10-9)
4m

図Ⅰ－3 発掘区設定図



	Ⅰ層：表土・耕作土		・調査前の現況は山林
	Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d層(Ko-d)		・1640年降下　層厚約80cm
遺物包含層	Ⅲ層：黒褐色土	＜ 白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）	・層厚約5cm
	Ⅳ層：黒色土		・主な遺物包含層　層厚約40～50cm
	Ⅴ層：黄褐色土(漸移層)	＜ 駒ケ岳火山灰g層(Ko-g)	・Ko-g由来の橙褐色砂質土含む
	Ⅵ層：黄褐色ローム		・約12,000年前　渡川カルデラの噴火による火砕流堆積物

図Ⅰ－４　基本土層と土層断面

Ⅳ層：黒色土　主な遺物包含層。層厚は約40～50cmであるが、平成13年度調査区のA地区は渟川に向かって緩やかな斜面で黒色土の流れ込みが確認され、約80cmと厚く堆積していた。

Ⅴ層：黄褐色土　漸移層。駒ケ岳火山灰ｇ層（Ｋｏ－ｇ）に由来する橙褐色砂質土を含む。

Ⅵ層：黄褐色ローム層　調査区中央の沢を挟みA地区は黄褐色砂礫層で、人頭大の円礫を包含する水成の二次堆積層である。B地区は約12,000年前の渟川カルデラの噴火による、火砕流堆積物である。

その他、本文中で脆い頁岩を主体とする基盤層をⅦ層と表記したところもある。

（４）整理の方法

現地では野外作業と並行して遺物の水洗、分類、遺物台帳作成、注記作業を行った。注記は小片や微細なものを除いた遺物に、遺跡名略号（ＮＳ）・遺構名または発掘区・遺物番号・層位名を記入した。また、竪穴住居の炉と焼土付近の土壌のフローテーション作業を行っている。冬期の整理作業で、土器の接合・復元、石器・礫の接合、土器、石器等の実測・製図、計測、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。A地区の整理作業は平成15年度も継続される予定である。　（村田　大）

（５）遺物の分類

土器等

土器は縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、続縄文時代をⅥ群、擦文時代をⅦ群と分類した。各群にアルファベットの小文字を組み合わせてより細かいⅠ時期区分を示した。前半をａ類、後半をｂ類、または前葉をａ類、中葉をｂ類、後葉をｃ類としている。

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群

ａ類　貝殻文が施されるもの。

ｂ類　縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等の施されるもの。

（Ⅰ群は今回出土していない）

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群

ａ類　縄文の施された丸底、尖底を特色とするもの。（今回は出土していない）

ｂ類　円筒土器下層式土器に相当するもの。

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群

ａ類　円筒土器上層式土器に相当、もしくはその系譜を引くと考えられるサイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当ないし併行するもの。

ｂ類　榎林式、大安在Ｂ式、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群

ａ類　天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津Ⅶ群、白坂３式、十腰内Ⅰ式に相当ないしは併行するもの。

ｂ類　ウサクマイＣ式、手稲式、舵測式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

ｃ類　堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群

ａ類　大洞Ｂ式、大洞ＢＣ式に相当ないしは併行するもの。

ｂ類　大洞Ｃ１式、大洞Ｃ２式に相当ないしは併行するもの。

ｃ類　大洞Ａ式、大洞Ａ´式に相当ないしは併行するもの。

（Ⅴ群は今回出土していない）

Ⅵ群　続縄文時代に属する土器群

a類　恵山式に相当ないしは併行するもの。

b類　後北式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

c類　北大式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

Ⅶ群　擦文時代に属する土器群

（Ⅶ群は今回出土していない）

土製品　土器を除いた土製の加工品。

（影浦　覚）

石器等

石器は出土した包含層出土の石器を純粋にB地区について分類した。分類・細分に関しては、これまで刊行してきた報告書と比較検討するために、群名とその序列、類名は従来のセンター分類におおよそ準じた。しかし、一部の群名とその名称と細分については遺跡と地区の状況を反映させたため多少の変更をした。そして、台石・石皿の群を設けたため群は増えている。付記すると、A地区は縄文時代中期と後期を主体とする遺跡であり、特に中期の遺物量がB地区より多い。またB地区はA地区より縄文時代前期の遺物量が比率的には目立って多い。従って、同一遺跡でありながら、次年度以降報告となるA地区と今回報告のＢ地区では出土する石器の組成に差があるもると想定でき、かつ現段階の遺物整理結果もその様相を呈している。

＜Ⅰ群＞石鏃・石槍類（形態の名称は　鈴木道之助：1991　に倣った）

Ａ類　石鏃

1．凹基有茎のもの

2．平基有茎のもの（凹基有茎に類似品あり）

3．凸基有茎のもの（「比較的大型で両面全面調整のもの」「茎部の作り出しが不明瞭なもの」「先端が突き錐のように尖るもの」「使用が著しかったためか先端平面形が鈍角のもの」「茎部が小さく舌状に張り出すもの」などにさらに細分）

4．尖基鏃（この範疇に入りうるが、凸基有茎の縁辺が潰れた可能性のものが出土）

5．折損品・未成品

尚、平基有茎・凹基有茎・凸基有茎・折損品の中には両面全面に調整がおよび、特殊なかえし（かえしの先に微妙な段を持つ）のものがある

Ｂ類　石槍又はナイフ

1．凸基有茎のもの（「茎が明瞭なもの（茎部が突起様、あるいは微妙な舌状に作られるものあり）」「茎が不明瞭なもの」にさらに細分）

＜Ⅱ群＞石錐

Ａ類　石錐

1．剌突部分を持つもの

2．その他（使用痕のある剥片について、潰れ痕跡に石錐の可能性があるもの等）

＜Ⅲ群＞つまみ付きナイフ・スクレイパー

Ａ類　つまみ付きナイフ

1．両面調整のもの（「両面全面調整で鋭利な先端部を持つ」ものがある）

2．縦長剥片を用いているもの（「片縁調整のもの」「縁辺全周に調整が及ぶもの」「両縁調整のもの」「一側縁に急角度の刃部を持つもの」「一側縁が両面調整のもの」「端部のみが片面全面調整のもの」にさらに細分）

3．横長剥片を用いているもの

4．極浅い調整が縁辺に施されているもの（未成品の可能性もあるもの）

5．分類不能（つまみ部分のみの残存等）

B類　スクレイパー

まず調整の度合いから、刃部が明瞭なものと不明瞭なものに分けた。

1．相対的に確たる調整するもの（目安として石器幅の8分の1以上の刃幅を、押圧剥離が規則的に連続して形成するもの）その中で、

「急角度の刃部を持つもの」（掻器の可能性があるものを含み、その中には「側縁に曲線的に張り出す刃部を持つもの」「両側縁に刃部・調整を持つもの」がある。）

「箆状石器ないしはそれに類するもの（「両面調整のもの」「箆の角にあたる部分を1か所持つもの」）

「背面観について、側縁に特に曲線的な刃部を持つもの（「両面調整のもの」を含む）」

「上記に当てはまらないものの中で、背面観から見て、側縁に特に曲線的な刃部を持つもの」

「上記に当てはまらないものの中で、両面調整の刃部を持つもの（他の細分に当てはまらないもので、縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して「両側縁に刃部を持つもの」と「片縁に刃部を持つもの」に分けることができる。）」

2．剥片素材の縁辺に極浅い（簡単な押圧剥離の連続、刃幅2mm未満を目安とした。）調整をしたもの（「急角度の刃部を有するもの」「一側縁のみに加工を施すもの」「縦長剥片に極浅い調整のみを施したもの」）

更に細分の1、2にあてはまらないもののうち、縦長剥片の利用頻度が高いという観点からさらに3．4を加えた。

3．縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して両側縁に刃部を持つもの（「両側縁とも確たる調整が巡るもので、端部にも調整が及ぶものを含む」「片縁のみ確たる刃部を持ち、もう片縁は極浅い調整のもの、端部に調整が及ぶものを含む」「背面の一側縁に片面調整があり、それに対となる側縁の腹面側に調整が及ぶもの」がある。）

4．縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して片縁に刃部を持つもの

また、事実記載中、全面調整のものとは、石器の正中線に至るまでの深い調整を両側縁から施す状況を指すものとした。

＜Ⅳ群＞石斧類

A類　石斧（成形・調整方法から分類）

1．全面に研磨が及ぶもの（「敲打後に研磨調整」「打ち欠き後研磨調整」「擦り切り痕跡が明瞭」「擦り切りの可能性があり、打ち欠き・敲打調整後研磨調整」にさらに細分）

2．未成品

B類　石のみ

（石斧類について、刃部形態の分類（佐原真1977に倣った）としては「弱凸強凸刃（円刃と直刃のものを確認）」「弱凸強平刃（円刃のものを確認）」に分けられた。）

＜Ⅴ群＞たたき石

Ａ類　たたき石

１．凹み石とされるもの

２．顕著な打ち欠きを伴う機能部を持つもの（「礫器」とでもいうべき石器で「両面調整」「片面調整」のものがある）

３．亜球礫のほぼ全面に敲打が巡るもの

４．割礫の割面を用いるもの

５．偏平礫・不整な礫の表面に敲打痕を持つもの

「礫の端部を使用するもの」「礫の側縁を使用するもの（偏平打製石器の項目で刃部様と称した機能部を持つものを含む）」「礫の平らな面を用いるもの」「縁辺と端部を使用するもの」「両端と側縁を用いるもの」「縁辺と平らな面を用いるもの」「一端と平らな面を用いるもの」がある。）

＜Ⅵ群＞すり石

Ａ類　すり石　確実に擦痕が観察できるもので「礫の平らな背腹を微妙に用いているもの」「表面を敲打・裏面に擦りのもの」「礫の平らな面を用いるもの」「端部に機能部があるもの」「側縁を使用するもの」がある。

Ｂ類　北海道式石冠

１．全面に敲打で調整する、あるいはその可能性が高いもの

２．短軸で、半割した楕円礫に敲打によって溝を作る、あるいはその可能性が高いもの

３．未成品の可能性が高いもの

Ｃ類　偏平打製石器（機能部に敲打痕を持つものがほとんどだが、従来の分類を踏襲し、すり石に分類。同一遺物について、３つの観点「石器正面観の形状・石器正面観と底面観から見た機能部の形状」から分類・検討をした）

石器の正面観の形状から

「半円形」「楕円形」「礫素材の形状を留めるもの」「素材に打ち欠き調整を施したのみで未成品の可能性が高いもの」に分かれる。

石器の底面観（機能部・機能面の形状）から

「機能面が底面観について明瞭な面を持つもの」「機能面があるものの明瞭とは言い難いもの」「面部分を持たずいわば刃部様の機能部を有するもの（その中で石器の厚さが3.４㎝以上の肉厚で重量感のあるもの（1000ｇ以上を目安とする）がある）」

石器の正面観から見た機能部（底面）の形状から

「直線的なもの」「曲線的なもの」「（図上の）頂部・底部に機能部を有するもの（「頂・底部とも直線的なもの」「頂・底部のうち片方が曲線的でもう片方が直線的なもの」「頂・底部の両方に直線的な機能面を有するもの」に細分）

＜Ⅶ群＞　砥石・石鋸

Ａ類　砥石：砥面と想定し得る機能部が平滑ないしは凹面を形作るものが出土した。

Ｂ類　石鋸：今回出土していない。しかし石鋸の素材としてよく選択される板状に節理する豊浦・虻田に特徴的な安山岩の出土がある。また、出土遺物中に、擦り切りによる石斧があることから今後出土する可能性がある。

＜Ⅷ群＞台石・石皿（破片レベルでは両者の見分けがつかないものがほとんどである。）

Ａ類　石皿

１．楕円形に近い平面形をした顕著な皿部分を有する、典型的な石皿

２．楕円礫を選択し、顕著な擦り面を持つもの

Ｂ類　台石：Ａ類以外の敲打・研磨の台と成り得たと想定できる石器。ただし、破片レベルで石皿との判別は難しく、更には、北海道式石冠を作るための割礫を含む可能性もある。

機能面に残る痕跡から「敲打痕を持つもの」「かすかに擦痕を持つもの」「敲打痕と擦痕の見られるもの」「縁辺に敲打調整を加えるもので、その機能面に敲打痕と擦痕を持つもの」に細分でき、このうちで、表裏面とも確実に使用しているものもある。

＜Ｘ群＞両面調整石器・石核・剥片類

Ａ類　両面調整石器

石器の両面に調整が入り、縁辺に使用痕を断定できないもので、石核の性質を備えている可能性がある、又は他の分類に当てはまらないものをここに分類した。

Ｂ類　石核

打面が顕著で、剥片剥離面ないしはそれに準ずるものが認められるものを当てはめた。

Ｃ類　フレイク

人為的に母材から打ち剥がされたもので、他の石器分類（Ｕフレイク・Ｒフレイクを含む）にあてはまらないものをここに当てはめた。

＜ＸⅠ群＞加工痕・使用痕等の作為がみられる剥片や礫

Ａ類　ピエス・エスキーユ

上下両端に潰れ痕跡があるもの、どちらかの端部から裂けるような剥離痕があるものを選んだ。今回、側縁に調整が連続するものはない。

Ｂ類　Ｕフレイク

潰れている連続して欠けているなどの人為的な使用痕が認められるものを当てはめた。

Ｃ類　Ｒフレイク

連続して剥離された痕跡を持つものを当てはめた。

Ｄ類　加工痕・使用痕（被熱を含む）のある礫・礫片

Ｅ類　礫・礫片（意義づけて運んできた可能性のある原石・軽石・自然の作用による穿孔礫を含む）

＜従来から当センターで群・類名を用いないもの＞

石製品：実用品とは考え難い、装飾品等を含めた石の加工物

【引用文献】

佐原　真　1977　石斧論—横斧から縦斧へ—『考古論集　慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』

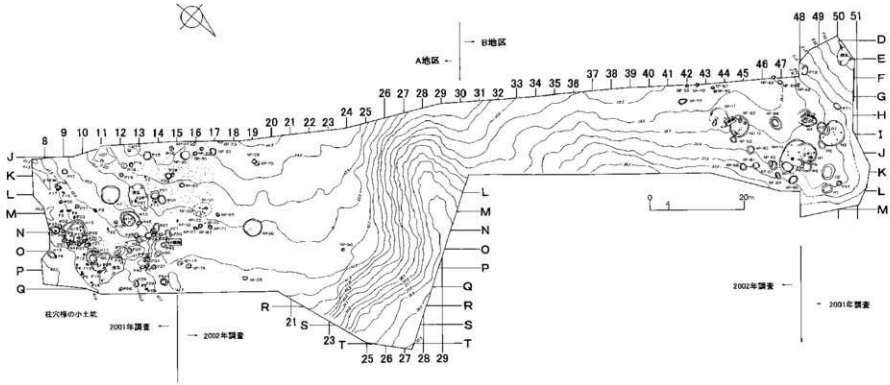
鈴木道之助　1991　石鏃『石器入門事典—縄文—』

（大泰司　統）

（６）調査結果の概要

濁川左岸遺跡は、森町中心部から北西へ約５km、標高約37～45mの濁川左岸段丘上に位置する。調査区は濁川によって形成された南東側の高位段丘（Ａ地区）と無名沢によって開析された北西側の低位段丘（Ｂ地区）および両段丘の間の沢跡からなる。遺構、遺物はおもに調査区両端の濁川と無名沢に面する緩斜面および平坦面から検出されている。

調査は、平成13・14年度の２ヵ年に行われ、平成13年度は、調査対象面積4,500㎡のうち、工事工程の都合から調査区両端にあたるＡ地区850㎡、Ｂ地区450㎡の計1,300㎡について行った。平成14年度は、前年の調査結果から、Ｂ地区北東側の斜面部に遺構の存在が想定されたため430㎡を拡張し、Ａ・Ｂ地区合わせて3,630㎡の調査を行った。最終的な調査面積は4,930㎡となった。なお、拡張部分から



	A地区	B地区
竪穴住居跡（H・NH）	11軒	8軒
土壙（P・NP）	64基	30基
焼土・石組炉（F・NF）	36ヶ所	
柱穴様の小土壙（SP・NSP）	307基	

図Ⅰ－5　遺構位置図

は6基の土壙が検出されている。

遺構は縄文時代のものがほとんどで、A・B地区合わせて、住居跡19軒、土壙94基、焼土（石組炉を含む）36ヶ所、柱穴様の小ピットが307基である。今回報告するB地区からは、住居跡8軒、土壙30基が検出された。以下、B地区について述べる。

住居跡は楕円形を呈し大形のもの（H－3・NH－13）、円形もしくは不整形を呈し石組炉を持つもの（H－1・4・NH－17・19）、小形のもの（H－2・9）がある。楕円形のものは、縄文時代前期後半、Ⅱ群b類土器の時期に、石組炉を持つものは縄文時代後期前葉、Ⅳ群a類土器の時期に属するものと考えられる。

土壙は大まかに平坦面に位置するものと、緩斜面に位置するものとに分かれる。このうち、平坦面に位置するものは径50cm程の小形で円形のものが多い。NP－60からは長さ5cm～10cmほどで、一部接合関係が認められ、同一母岩から剥離されたと思われる頁岩製の石核、二次加工のある剥片、剥片などが82点出土している。これらは縄文時代後期前葉頃のものと考えられる。緩斜面に位置するものは長軸長約1.5m～2mの楕円形を呈し、掘り込みも比較的深いものである。P－1・11・12・14・NP－61・81・82・84・86・88は埋め戻しの覆土で土壙墓の可能性がある。NP－82からは土器とともに北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器が13点出土し、副葬品の組み合わせを示す貴重な資料が得られている。これらは縄文時代中期前半、Ⅲ群a類土器の時期に属するものと思われる。

遺物はA・B地区合わせて約20万点が出土した。このうちB地区は、土器27,860点、石器等4,136点の合計31,996点である。土器はⅣ群a類のものが最も多く、次いでⅡ群b類、Ⅲ群a類が多い。また、続縄文時代恵山式の土器が1個体まとまって出土している。

石器は各種出土しているが、北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器類が比較的多いのが特徴である。また、穿孔のみ施された、ヒスイ製玉類の未製品が1点出土している。

（村田　大）

表Ⅰ－1　出土遺物一覧

土器等	2001遺構土器	2002遺構土器	遺構合計	2001包含層土器	2002包含層土器	包含層合計
道C	57	515	572	651	4658	5309
道e	348	509	857	1397	1466	2863
Ⅳa	119	554	673	469	12845	13314
Ⅵa					59	59
不明土器	7		7			
土製品					2	2
円板状土製品	1		1	1	1	2
焼成粘土塊					1	1
合計	532	1578	2110	6140	19510	23750

石器等	2001遺構石器	2002遺構石器	遺構合計	2001包含層石器	2002包含層石器	包含層合計
石鏃		3	3	2	47	49
石槍又はナイフ		2	2		3	3
石匙		1	1	1	3	4
つまみ付ナイフ				8	16	24
スクレイパー	5	16	21	28	119	147
石核	2	9	11	9	71	80
両面調整石器				8	12	20
ミニチュアスポーン				1	5	6
ウワレイク		13	13	23	68	91
リフレイク	10	27	37	24	127	151
フレイク	21	114	135	277	1602	1879
北海道式石冠	8	3	8	18	18	36
偏平打製石器	14	13	27	30	38	68
石皿		1	1	2	10	12
石棒	20	21	41	20	56	76
石斧片	2	1	3	7	17	24
石のみ状		1	1		1	1
すり石	6		6	4	9	13
たたき石	26	16	42	33	73	106
砥石				3	7	10
敲石	7	2	9	4	4	8
磨石		3	3	5	34	39
自然の穿孔がなされる礫					3	3
被熱・煤付着あり礫				3	10	13
被熱礫	4	5	9	5	5	10
剥片礫	36	43	79	42	87	129
礫	286	70	356	209	104	313
石製品		2	2	2	2	4
合計	446	365	811	768	2557	3325

土器等　27,860点　　石器等　4,136点　　合計　31,996点

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と周辺の地形

遺跡の所在する森町は、内浦湾（噴火湾）に面する渡島半島のほぼ中央に位置し、渡島支庁管内茅部郡に属する。東側は駒ケ岳山頂から押出しの沢を境に砂原町と、南側は宿野辺川を挟んで大野町、七飯町と、南西側は渡島山地を分水嶺として厚沢部町と、西は茂無部川を挟んで八雲町と接し、北は内浦湾（噴火湾）に臨んでいる。

遺跡は森町市街地から北西へ約５kmの石倉地区に所在し、濁川左岸の河岸段丘上に立地している。石倉地区には濁川、石倉川、三次郎川、本内川、茂無部川などの内浦湾（噴火湾）に注ぐ大小の河川があり、これらの河川に面した河岸段丘上や海岸段丘上の平坦面には多くの遺跡が確認されている。

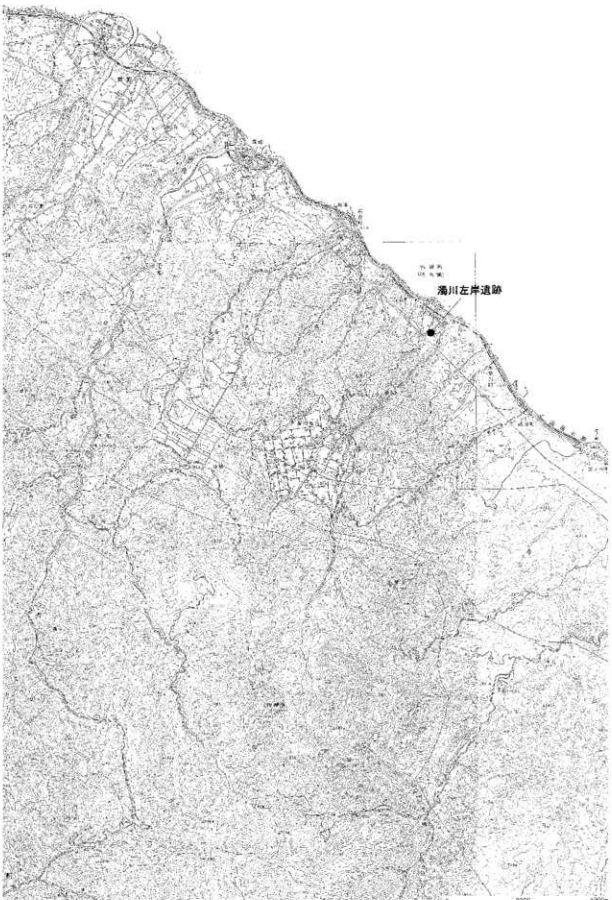
「石倉」地区は元名を「ショウンナイ」と呼ばれ、アイヌ語の「ショ」（滝・裸岩）、「ウン」（…のある所）、「ナイ」（川・沢）で、滝のある沢を意味し、現在の本石倉にそそぐ小川から得た名である。「石倉」は、箱館戦争時、榎本軍の石倉三左衛門の名に由来するそうである。遺跡名にもある「濁川」は、アイヌ語で「ユウンベツ」と呼ばれ、温泉のある川の意で、これを濁川と呼称する経緯は、川水に温泉が流入して濁ったため、和人が意訳改称したものである。

現在、海岸線から濁川の盆地へ至る主なルートは、濁川沿いの「道道濁川温泉線」であるが、明治29年製版、大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図「狗神岳」では、石倉川左岸の河口付近から山越えの道が記されているのみである。また、大正9年製版の同図「上濁川」では、現在の石倉小学校から地熱発電所のある坊主山の南麓を回る山越えの道と濁川沿いの道が記載されている。濁川は急峻な谷地形を形成していることから、川沿いのルートは利便性が良くなかったのであろう。

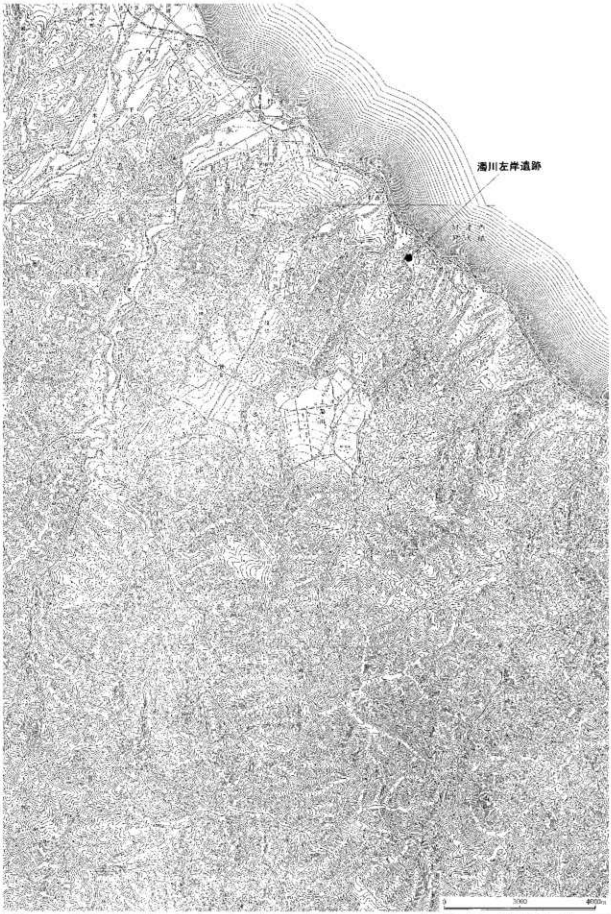
2　周辺の遺跡

平成14年12月現在、34ヶ所の遺跡が登載されている。過去に調査が行われた主なものは、昭和27年から29年にかけて東京大学駒井和愛による尾白内貝塚の調査があり、続縄文時代恵山式の土器、石器、骨角器が出土している。尾白内貝塚は昭和55年と平成４年に町教育委員会で調査が行われている。また、昭和30年代から40年台にかけては熊野喜蔵による姫川１遺跡（旧姫川A遺跡）、姫川２遺跡、森川１遺跡などが調査され、縄文時代前期から中期が主体の遺跡であることが確認されている。昭和38年には函館博物館による森川貝塚の調査で、縄文時代前期の円筒土器下層式、続縄文時代恵山式、擦文式の土器、陶磁器、鉄器、古銭などが出土した。その他、町教育委員会によって、昭和46年に蛯谷遺跡、昭和49年に鳥崎遺跡、昭和51年にオニウシ遺跡、昭和59年・平成5年に御幸町遺跡などが調査され、おもに縄文時代中期から後期の様相が次第に明らかになっている。最近では北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査が増加し、町教育委員会による鷲ノ木4遺跡、栗ヶ丘１遺跡や当センターによる森川3遺跡、倉知川右岸遺跡など継続中のものも含め９遺跡が調査されている。

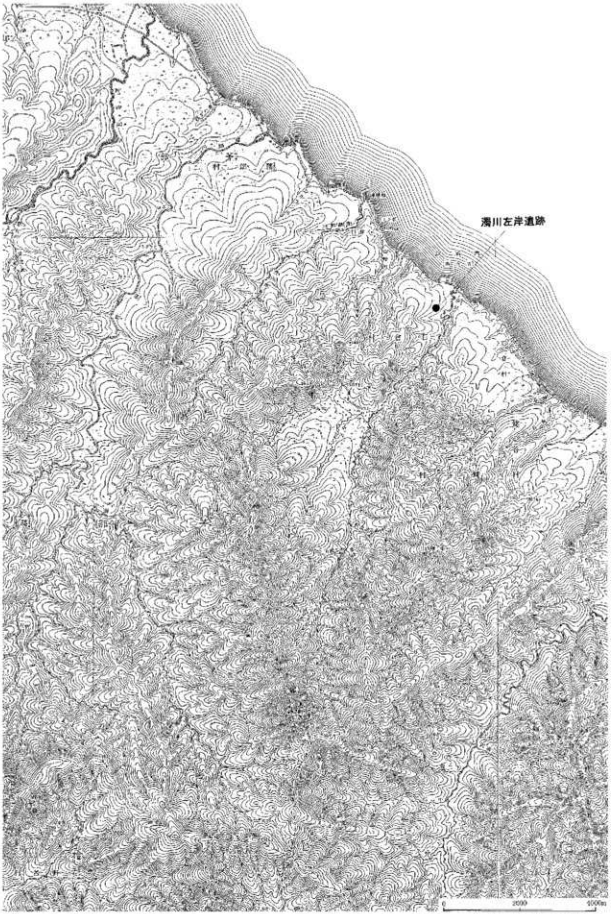
分布は、尾白内川中流域と七飯町との境界である宿野辺川流域に数ヶ所の遺跡がある他は、森町市街地から茂無部川にかけての海岸段丘上と内浦湾（噴火湾）にそそぐ河川沿いに集中している。この地域の時期は、縄文時代中期から後期のものが大半であるが、河川沿いの遺跡は、内陸部に向かって縄文時代後期を主体とするものが増加する傾向が見られる。続縄文時代の遺跡は、森町市街地の低位の海岸段丘上に多い。（村田）



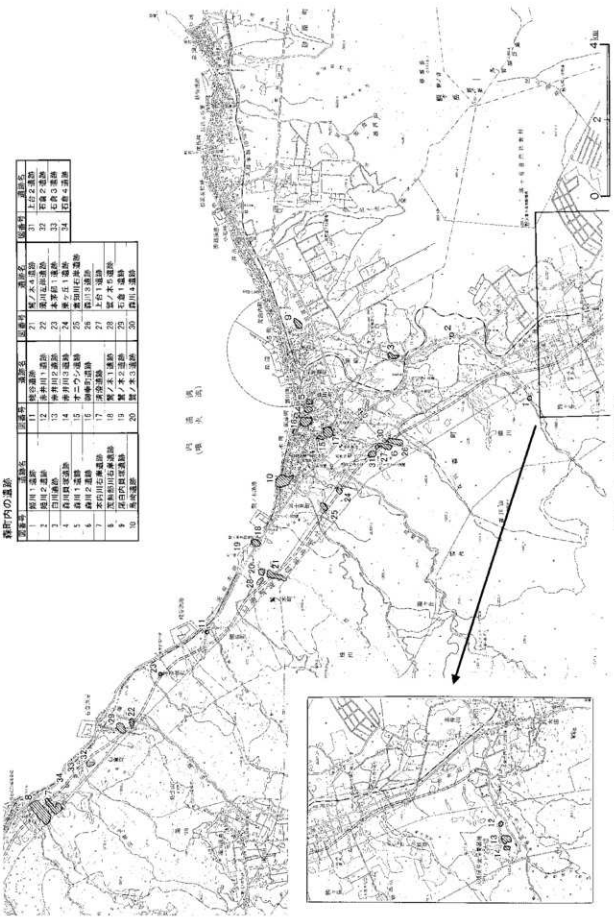
図Ⅱ－１　遺跡周辺の地形（１）（この図は国土地理院発行５万分の１地形図,「駒ケ岳」,「渇川」,「八雲」,を複製、加筆したものである）



図Ⅱ－２　遺跡周辺の地形（２）（この図は大日本帝国陸地測量部５万分の１地形図、大正６年製版「駒ヶ嶽」大正９年製版「上濁川」大正８年製版「八雲」を複製、加筆したものである）



図Ⅱ－３　遺跡周辺の地形（３）（この図は大日本帝国陸地測量部５万分の１地形図、明治29年製版「駒嶺」「狗神岳」「八雲」を複製、加筆したものである）



図Ⅱ－４　周辺の遺跡

表Ⅱ－１　森町の遺跡一覧

図版番号	遺跡名	分類番号	所在地	立地(　)内標高	主な時期	備考
1	鄙川1遺跡	B-15-1	字駒ヶ岳132－1ほか	鹿川右岸の河岸段丘上(167m)	縄文中期(円筒上層)	昭和37年鹿野氏調査　旧鄙川A遺跡
2	鹿川2遺跡	B 15 2	字駒ヶ岳17－6ほか	鹿川右岸の河岸段丘斜面部(112m)	縄文中期(円筒上層)	昭和34年鹿野氏調査　旧鄙川B遺跡
3	白川遺跡	B-15-3	字白川49－14	河岸段丘上(48～50m)	縄文後期・続縄文(北大)	昭和37年鹿野氏調査　貝塚あり
4	森川氏屋敷遺跡	B-15-4	字森川町76ほか	低位海岸段丘上(13～15m)	縄文・続縄文(恵山)・擦文・中世近世	昭和38年函館博物館調査(函館博物館保管)　旧恵川B遺跡を統合
5	森川1遺跡	B-15-5	字森川町69－2ほか	低位海岸段丘上(15～18m)	縄文前期・中期(円筒下層・上層)	昭和40年・46年鹿野氏調査　昭和58年函館博物館調査　竪穴住居跡1　旧森川A・C・D遺跡
6	森川2遺跡	B-15-6	字鶴台34　1ほか	森川左岸台地上(80～100m)	縄文後期	平成14年埋蔵文センター調査
7	本内川右岸遺跡	B-15-7	字石倉町610－7・8	本内川右岸台地上(40～60m)	縄文中期・後期	平成13年道埋文センター調査
8	後無部川右岸遺跡	B-15-8	字石倉町610－2・3	後無部川右岸台地上(40～60m)	縄文中期・後期	
9	尾白内川遺跡	B-15-9	字尾白内926ほか	低位海岸段丘上(10～14m)	縄文晩文(恵山)	昭和26・27・29年東京大学調査(東京大学保管)　平成4年町教委調査
10	貝崎遺跡	B-15-10	字鳥崎31－1ほか	海岸段丘上(15～30m)	縄文後期	昭和49年町教委調査
11	蛯谷遺跡	B-15-11	字蛯谷町146－1ほか	河岸段丘上(30～32m)	縄文中期(円筒上層)・後期	昭和46年町教委調査
12	赤井川1遺跡	B-15-12	字赤井川229	丘陵上(175～195m)	縄文中期(円筒上層)	
13	赤井川2遺跡	B-15-13	字赤井川229	丘陵上(230～235m)	縄文中期	
14	赤井川3遺跡	B 15 14	字赤井川229	丘陵上(210m)	縄文中期	
15	ヒニウシ遺跡	B-15-15	字上台町326－18	海岸段丘上	縄文草期(東釧路II)・中期(円筒上層)	昭和51年町教委調査
16	御幸町遺跡	B-15-16	字御幸町132－2ほか	低位海岸段丘上	縄文中期(円筒上層)	昭和39年・平成5年町教委調査　フラスコ状ピット
17	清澄遺跡	B-15-17	字清澄27, 29－2	海岸段丘上(33～39m)	縄文中期(円筒上層)	昭和25年森高等学校小林・千歳氏調査(函校合蔵品)
18	鷲ノ木1遺跡	B-15-18	字鷲ノ木143　1ほか	海岸段丘上(15～20m)	縄文中期(円筒上層)	
19	鷲ノ木2遺跡	B-15-19	字鷲ノ木453, 無番地		近世	明治2年、榎本武揚、鷲ノ木上陸時に後いた台場跡と伝えられる
20	鷲ノ木3遺跡	B-15-20	字鷲ノ木499－2ほか	河岸段丘上(40～45m)	縄文中期(円筒上層)・続縄文(恵山)	
21	鷲ノ木4遺跡	B 15 21	字鷲ノ木506ほか	河岸段丘上(45～50m)	縄文中期・後期・晩期・続縄文	平成13・14年町教委調査　竪穴住居跡　土壙　配石遺構　グラス玉(続縄文)
22	潟川左岸遺跡	B-15-22	字石倉町401ほか	潟川左岸段丘上(40～50m)	縄文前期・中期・後期　続縄文	平成13・14年道埋文センター調査
23	本茅部1遺跡	B-15-23	字本茅部町205ほか	海岸段丘上(80～85m)	縄文中期(円筒上層)	平成14年道埋文センター調査　土壙　磨製品
24	栗ヶ丘1遺跡	B-15-24	字栗ヶ丘38～44	鳥崎川左岸の河岸段丘上(35～40m)	縄文中期・後期	平成13・14年町教委調査　竪穴住居跡　土壙
25	倉知川右岸遺跡	B-15-25	字栗ヶ丘7、11～1・2	倉知川右岸、小無名沢との間の丘陵上(75～80m)	縄文草期・中期・後期	平成14年道埋文センター調査　竪穴住居跡　土壙　配石遺構
26	森川3遺跡	B-15-26	字森川町317－7ほか	森川右岸、銅山王陵上(100m)	縄文草期・中期・続縄文(恵山)・近世	平成14年道埋文センター調査　竪穴住居跡　土壙　畑跡(近世)
27	上台1遺跡	B-15-27	字上台町33－1ほか	小沢各沢と森川2遺跡の対岸(90m)	縄文後期	
28	鷲ノ木5遺跡	B-15-28	字鷲ノ木503－1ほか	相川の支流、上毛無沢川左岸段丘上(70m)	縄文後期	
29	石倉1遺跡	B-15-29	字石倉町395ほか	潟川の支流(無名沢)の左岸丘陵上(30～40m)	縄文後期・晩期(後北)	平成14年道埋文センター調査　土壙
30	森川4遺跡	B-15-30	字森川町317－18	森川右岸低位面(90m)	縄文中期・後期	
31	上台2遺跡	B-15-31	字上台町326－5	小沢の左岸、段丘上～緩斜面(90～100m)	縄文中期・後期	
32	石倉2遺跡	B-15-32	字石倉町146ほか	石倉川右岸の高位段丘上(尾根状)(65～70m)	縄文中期・後期・晩期	
33	石倉3遺跡	B-15-33	字石倉町482,483,490	小沢の左岸段丘上(65～70m)	縄文後期	
34	石倉4遺跡	B-15-34	字石倉町511,520,521	三次郎川右岸段丘上(60m)	縄文後期	

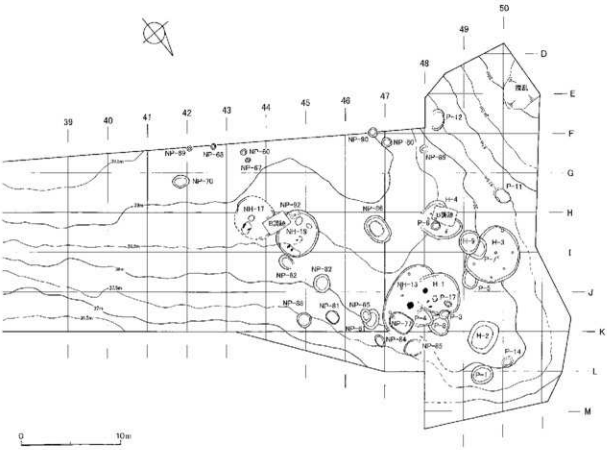
Ⅲ　遺構と遺構出土の遺物

概要

B地区からは住居跡８軒、土壙30基の遺構が検出された。分布は、おもに調査区北西側を流れる無名沢に向かって、舌状に突き出た段丘の平坦面および緩斜面に位置している。

住居跡はいずれも平坦面にあり、平面形が楕円形を呈し大形のもの（Ｈ－３・ＮＨ－13）、平面形が円形もしくは不整形を呈し石組炉を持つもの（Ｈ－１・４・ＮＨ－17・19）、小形のもの（Ｈ－２・９）に分かれる。楕円形のものは縄文時代前期後半のⅡ群ｂ類土器の時期に、円形で石組炉を持つものは後期前葉のⅣ群ａ類土器の時期に、小形のものは中期前半のⅢ群ａ類土器の時期に属すると考えられる。ＮＨ－19の炉は２度の付替えを行っている。

土壙は大まかに平坦面に位置するものと、緩斜面に位置するものに分かれる。前者のうち、F－42・43区のNP－60・67～69は、遺構周辺の遺物出土状況などから、隣接する縄文時代後期前葉の住居跡ＮＨ－17・19と関連があると推測される。NP－60からは接合関係が認められ、同一母岩から剥離されたと思われる頁岩製の石核、剥片など82点が出土している。後者は長軸長約1.5m～２mの楕円形を呈し、掘り込みも比較的深いものが多い。P－１・11・12・14・NP－61・81・82・84・86・88は埋め戻しの覆土で土壙墓の可能性がある。NP－82からは土器とともに北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器が13点出土した。これらは縄文時代中期前半のⅢ群ａ類土器の時期に属すると思われる。（村田）



図Ⅲ－１　B地区遺構位置図

1　住居跡

Ｈ－１　（図Ⅲ－２～４、図版１～３）
位置・立地：Ｉ・Ｊ－47、48　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：（4.80）×（4.50）／4.20×4.00／0.20m
確認・調査：重機によってＫｏ－ｇ火山灰を除去し、Ⅲ層上面を精査した段階において浅いくぼみを検出した。住居跡であることが想定されたため、土層観察用のベルトを設定し掘り下げていった。これと同時に掘り上げ土の検出を目的に落ち窪みの周囲を3～5cmずつ掘り下げていった。調査の結果、掘りこみが浅いが明瞭な壁の立ち上がりと床、石組炉を検出し住居跡と認定した。掘上げ土は検出されなかった。掘り込み面はⅣ層中と考えられる。
覆土：１～８層まで分層した。Ⅳ層黒色土を主体とする。住居の掘り上げ土の流入やⅣ層腐植土などによる自然埋没と考えられる。
形態：平面形はほぼ円形である。掘り込み面のⅣ層中からの床面までの深さは20cm前後と見られる。掘り込みは浅いが壁の立ち上がりは明瞭である。床面はⅤ～Ⅵ層上面にかけてほぼ平坦にし構築している。床面の中央に濁川火砕流に遊離鉄が結合したような層（６層）が検出された。Ⅴ層、Ⅵ層中では検出しない土なので、人為的に持ち込まれ、この住居の床の一部を構成する材料となっていたことが考えられる。
付属遺構：住居の中央よりやや西よりに石組炉（ＨＦ－１）がある。この石組み炉のさらに西側、住居の西端に位置するところに配石とみられる礫の埋設（ＨＰ－１）が検出された。東の方向へ開く「八」の字になっている。炉と配石の長軸方向はN－88°－Ｅである。ＨＰ－１周辺は床面より6～9cm浅く掘り込んでいる。住居の北側に土壙（ＨＰ－２）を検出した。住居跡に伴うものと考えられる。柱穴は検出しなかった。
遺物出土状況：覆土からは遺物が点在して出土した（図Ⅲ－３）。Ⅳ群ａ類土器と礫、礫片を中心として136点の遺物が出土している。覆土下からはⅣ群ａ類、Ⅲ群ａ類土器と剥片石器類、礫石器類が26点出土している。床面からの遺物は礫、礫片が多く、Ⅳ群ａ類1点を含む64点の土器、石器類が出土する。ＨＦ－１とした石組炉からはたたき石1点、台石1点を含む合計15点の礫や礫片によって構成されている。ＨＰ－２からはⅢ群ａ類土器1点、礫、礫片1点、被熱礫1点の合計3点出土している。
時期：住居の形態から縄文時代後期前葉Ⅳ群ａ類の時期の住居跡と考えられる。　（袖岡）
掲載遺物：土器　１・２は覆土、３は覆土下、４は床面出土である。１はⅣ群ａ類。ＬＲ原体を不規則に施文後、粘土帯を２段貼り付けしたもの。粘土帯の間は横方向の調整により無文である。内外面は指頭圧の凹凸が著しい。胎土に海綿骨針および多量の砂礫を含む。2～4はⅢ群ａ類。いずれもサイベ沢Ⅶ式である。２は山形突起部に橋状突起が縦位に貼付され、口唇上には縄の圧痕が認められる。補修孔が２ヶ所穿たれているが、うち１ヶ所は破損面にかかっている。内面は平滑。鈍い光沢を帯びている。３は外反した口唇上に縄線が加えられたもの。４はＲＬの縄同士の結束縄文を地文とする。
（影浦）

石器　覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土中から、スクレイパー１点、石核１点、Ｕフレイク３点、フレイク５点、偏平打製石器が１点、台石が１点、礫・礫片が48点出土し、被熱礫が17点、使用痕のある礫が２点、床面直上からスクレイパーが３点、フレイクが２点、偏平打製石器が１点、台石が１点、礫・礫片が33点、被熱礫が３点、使用痕のある礫が２点出土する。付属遺構ＨＦ－１からた

たき石１点、台石１点、礫13点が出土している。ＨＰ－２から礫・礫片が２点出土している。なお、覆土中からは小礫が７点集中して出土している。未掲載の覆土下部から出土した偏平打製石器は砕片であり、その可能性が高いものである。

５～７はスクレイパーである。５は覆土からの出土で、６・７は床面出土である。５は箆状を呈するもので粘板岩製である。両面調整で腹面には節理面を残す。６は珪質頁岩製で端部に浅い調整を施す。先端部の左側は急な刃部である。７はメノウ製横長剥片の一側縁を用いた削器である。背面に礫面を含む。８は床面出土の偏平打製石器破片である。刃部状の機能部を持つ。安山岩製。９は床面出土の台石である。安山岩製で、表裏に敲打調整の痕と機能を示す擦痕がある。表面は擦痕が顕著で、擦りによって、幅３㎝深さ３㎜の直線的な溝が数条ある。なお覆土中から出土した石核はＮＨ－13覆土出土の石核と接合したため、ＮＨ－13の項目で報告した。（大泰司）

Ｈ－２　（図Ⅲ－５～７、図版４）

位置・立地：Ｊ・Ｋ－49　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：3.28×2.47 / 2.67×1.87 / 0.54m

確認・調査：包含層調査でⅣ層下位～Ⅴ層を掘り下げていたところ、灰黄褐色～暗褐色土の、遺構もしくは古い風倒木痕の可能性がある落ち込みが検出された。トレンチを設定し掘り下げたところ明瞭な床面と壁の立ち上がりを検出し遺構と認定した。

覆土：１～14層まで分けた。Ⅴ、Ⅵ層土を多く含む土が主体で、混ぜ返されたような土である。埋め戻しによるものと考えられる。

形態：平面形は楕円形を呈する。床面は平坦で壁の立ち上りは明瞭である。柱穴のようなものは床、壁、Ｈ－２周辺では検出しなかった。

付属遺構：覆土中に焼土を検出した。埋め戻す過程において火を焚いたことが考えられる。

遺物出土状況：Ｈ－２の東側、覆土中からⅢ群ａ類に属する土器１が１個体出土した（図Ⅲ－５・６）。覆土及び覆土下、覆土中の焼土（ＨＦ－１）から土器、石器類合わせて176点の遺物が出土した。

時期：埋め戻しと考えられる覆土中からⅢ群ａ類、サイベ沢Ⅶ式に相当する土器が出土したことから縄文時代中期前半の遺構であると考えられる。（袖岡）

掲載遺物：土器　すべて覆土出土である。いずれもⅢ群ａ類のサイベ沢Ⅶ式である。１は２本組になっている小形のツノ状突起と、上向きに開いた「Ｃ」字状の突起を２種２対で口縁に持つ。底部がわずかに張り出し、ストレートに開く器形である。胴部下半の器表面は剥落が著しい。口唇上には縄による刻みが加えられている。縄および縄端の圧痕は突起上にも観察される。内面は非常に平滑に調整され、光沢を呈する。胎土には海綿骨針が含まれる。２は環状突起が縦位に付されたもの。摩滅が著しいが突起上には縄を２条加えた痕が認められる。口縁は折り返し風に肥厚し、口唇上にも縄の刻みを連続的に加えている。内面は平滑で、胎土中に繊維を含んでいる。３は羽状縄文を地文とする。山形突起の下に瘤状の貼付を有し、口唇上にも縄文を施文している。４は口唇上に縄で刻みを加えたもの。５は円板状土製品。（影浦）

石器　覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土中からスクレイパー1点、Ｕフレイク１点、フレイク４点、偏平打製石器４点、たたき石２点、礫28点（うち軽石が１点）出土している。床面からの遺物出土はない。ＨＦ－１からたたき石２点、礫10点が出土している。

11が出土位置不明で、13・14がＨＦ－１出土である以外はすべて覆土出土である。６は頁岩製のスクレイパーで、急角度の刃部を持つ掻器である。腹面から調整がおよぶが機能部の作出には、礫面の

残存部を生かしている。７～14の礫石器は安山岩製である。７～10は偏平打製石器である。７～９は両面調整で、側縁と頂部にも調整が及び、直線的な機能部を一か所持つ。７・８は敲打によるものか幅の狭い機能面を持ち、９は比較的厚みのあるもので、刃部様の機能部を持つ。10は偏平礫の側縁を打ち欠いており、偏平打製石器の未成品と考える。11は北海道式石冠の破片である。安山岩製ですり面が残り、その縁辺には細かい打ち欠き痕跡が残る。割礫に敲打で溝を巡らせるタイプと見なされる。12～14はたたき石である。12は不整な礫の平らな面部分を複数箇所、敲打している。13・14は鋭角的な一か所の端部に敲打痕がある。（大泰司）

Ｈ－３　（図Ⅲ－８～11、図版５）

位置・立地：Ｈ・Ｉ・Ｊ－49、50　北側に張り出す台地の西側のへり、無名沢に臨む標高37.5～38mのところに位置する。

規模：5.73×4.85／5.42×4.47／0.42m

確認・調査：重機によってＫｏ－ｄ火山灰を除去した段階において住居跡もしくは沢状の地形両方が想定できる落ち込みを検出した。包含層調査によって周辺を掘り下げていくと、これに重複する２つの遺構（Ｈ－９、Ｐ－５）の存在を確認した。これらにかかる土層観察用のベルトを設定し、これに沿いトレンチを入れたところ、新たに重複する土壙（Ｐ－７）を確認し、Ｈ－３の急な壁と平坦な床面の一部を検出した。調査の結果、Ｈ－９より古く、Ｐ－５、７より新しい住居跡であることが判明した。

覆土：１～11層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。

形態：平面形は不整な楕円形を呈する。住居の北半部は床と壁の立ち上りが明瞭である。南半部は地形が低くなっていることと、木根による攪乱を受けていることから壁の立ち上りは明瞭になる。床面はほぼ平坦である。規模は大きいが掘上げ土は検出されていない。北側の沢に捨てたことが推測される。

付属遺構：柱穴と考えられる小ピットを８ヶ所検出した。

遺物出土状況：木根による攪乱と風倒木痕より８点の土器、石器類が出土した。覆土と覆土下より土器、石器類の遺物が46点した。床面からはⅡ群ｂ類土器が5点、石斧1点、石斧未成品１点、たたき石３点、すり石１点、北海道式石冠２点、礫、礫片９点、被熱礫１点の計23点、合計77点の遺物が出土した。

時期：床面からⅡ群b類土器が出土したことから縄文時代前期後葉に属する住居跡と考えられる。

（袖岡）

掲載遺物：土器　いずれも床面出土のⅡ群ｂ類。円筒土器下層ｄ式である。単軸絡条体を縦位に回転施文させたもの。胎土中に繊維が含まれる。１は底部片、２は胴部片である。（影浦）

石器　覆土別の出土状況は、覆土中からＵフレイク３点、すり石１点、たたき石２点、台石１点、礫19点（うち軽石が１点）、被熱礫４点が出土した。床面からは石斧とその未成品が１点ずつ、北海道式石冠が２点、すり石１点、たたき石３点、礫・礫片10点が出土した。６・７が覆土からの出土であり、他は床面の遺物である。３は粘板岩製の石斧未成品である。両側縁を両面から打ち欠く。４は緑色泥岩製の石斧である。敲打調整後、研磨を施すが、比較的素材の原形が保たれているものと考える。刃部の先端は潰れている。５・６は安山岩製の北海道式石冠片である。５は全面敲打によって成形される。楕円形の機能面には擦痕が残り、長軸方向に対しておおよそ斜め45度の角度で擦痕が走る。６はすり面が残り、その縁辺には細かいうち欠き痕跡が残る。割礫に敲打で溝を巡らせるタイプと見なされる。７～９は安山岩製のたたき石である。７は亜角礫の端部に機能部を持つものである。８はす

り石とたたき石の機能を合わせ持つもので、端部に敲打痕、平らな面部分に敲打痕と擦り跡を持つ。９は不整な棒状礫の平面的な一部に複数の敲打痕跡を持つものである。10は安山岩製の楕円礫を用いたすり石である。平らな面に擦痕がある。（大泰司）

Ｈ－４　（図Ⅲ－12～14、図版６）
位置・立地：Ｇ、Ｈ－47、48　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：4.16×3.72／（3.61）×（1.50）／0.18m
確認・調査：重機によってＫｏ－ｄ火山灰を除去した段階において試掘坑（平成13年4月文化課）の周辺に浅い落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを残し落ち込みの周辺を掘り下げたところ、配石と焼土を検出し、先に調査を行なったＨ－１と同様の住居跡であると認定した。掘り込み面はⅣ層中と考えられる。
覆土：１～３まで分層した。黒褐色を主体とする。Ｈ－１同様、住居の掘り上げ土の流入やⅣ層腐植土などによる自然埋没と考えられる。
形態：この住居の中央より南側の部分は試掘坑によって壊されているが、平面形は不整な楕円形を呈すると考えられる。床面は西側にゆるく傾く。壁の立ち上がりは明瞭である。
付属遺構：床面の南西端に配石（ＨＰ－１）を検出した。板状の礫を用い、埋置に必要な礫の深さだけを掘り込み埋設してある。配石は２ヶ所あったと推定される。住居床の北側にも礫の抜き取り痕がみられるもの（ＨＰ－２）があり、そのすぐそばに焼土（ＨＦ－１）が検出されている。石組炉は構築されていたことが考えられるが、位置的に想定できる床面は試掘時の攪乱を受けており、確認できなかった。住居に伴う土壙を３ヶ所（ＨＰ－３～５）検出した。柱穴は検出しなかった。
遺物出土状況：覆土からはⅣ群ａ類土器を主として45点の土器、石器類が出土している。覆土下からは７点、床面からは配石に使用された礫等を主としてⅣ群ａ類土器1点を含む17点、この遺構の関連遺物と考えられるＨ－４付近遺物としてたたき石２点、台石１点、ＨＰ－２覆土として3点、合計69点の遺物が出土している。
時期：床面から出土したⅣ群ａ類土器から縄文時代後期前葉Ⅳ群ａ類の時期の住居跡と考えられる。
（袖岡）

掲載遺物：土器　１は床面で出土したⅣ群ａ類。口唇直下を横位に結節のある縄線が巡る。縄線の下には細く鋭い沈線が施されている。内面はヘラ状工具による丁寧な横方向の器面調整が加えられ、平滑である。焼成良好で、非常に堅密な土器である。（影浦）
石器　覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土からUフレイク１点、偏平打製石器１点、台石１点、礫・礫片13点、被熱礫１点、床面からフレイク２点、台石４点、礫・礫片４点、被熱礫１点が出土した。ＨＰ－２からは台石が１点出土した。
２は覆土出土の偏平打製石器、３・４はＨ－４付近から出土したたたき石、そして５・６は床面出土の台石である。いずれも安山岩製である。包含層遺物たたき石の項で「礫器」としたものに類似する刃部様の機能部を持つ。３は礫の一端を敲打したものである。敲打痕の周辺には打ち欠き痕跡が巡る。４は棒状礫の両端部に敲打痕持ち、一端から連続する一縁辺にも敲打痕跡を持つものである。５は板状礫の両面にかすかな敲打痕と擦痕を持つものである。６は大型の楕円礫の平面的な部分に微妙な擦痕を持つものである。縁辺の一部には打ち欠きを持つ。（大泰司）

H－ 9　（図Ⅲ－ 15・16、図版７）
位置・立地：H－ 49　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面より西側
規模：2.34× 2.05／（2.05）× 1.85／0.18m
確認・調査：H－ 3の精査によって判明した住居跡である。ベルトの観察により重複するH－ 3、P－ 7より新しい。
覆土：２層に分けた。１層は自然埋没によるものと考えられる。覆土下位とした２層はこの住居の生活面と考えられる。
形態：平面形は円形である。床面は、重複する遺構（P－ 7）の覆土が柔らかいため、西側にやや傾く。壁の立ち上りは明瞭である。
付属遺構：覆土下位より焼土を検出した。
遺物出土状況：覆土（１層）からは19点の土器、石器類が出土している。覆土下位（２層）からはⅢ群ａ類土器１個体１とたたき石のまとまりを主として87点、合計106点の遺物が出土した（図Ⅲ－ 15）。住居の中央よりやや南東寄り、覆土の下位より土器１が１個体出土した。また住居の西端にたたき石２～７がまとまって出土した。遺物や焼土の検出状況から判断するとこの住居跡の生活面は構築したときの床より８～10cm高く、覆土２層に相当する部分と考えられる。
時期：この住居の生活面と考えられるところからサイベ沢Ⅶ式に相当する土器１個体が出土したことから縄文時代中期前半の住居跡と考えられる。　（袖岡）
掲載遺物：土器　１はⅢ群ａ類。覆土下においてまとまった状態で出土した。底部がわずかに張り出し、ストレートに開く器形で、口縁はやや外反する。内面は指頭圧による凹凸とヘラ状工具による器面調整が顕著。口縁は幅１cm内外で若干肥厚する。この肥厚は折り返しによるものかもしれない。山形の小突起には環状の貼付がなされ、そこから粘土紐が２本垂下している。縦位に２本垂下する粘土紐から小突起は全体で４つあったことが推測される。胴部の上半は弧線状の粘土紐で文様帯が構成されている。粘土紐の貼付後に付加条の縄文が施されているが、胴部下を横遺する一条の綾縁文を境として、下半部は無文である。縄文は口唇上にも付されている。　（影浦）
石器　覆土層位別の出土状況は、覆土からフレイクが２点、たたき石が８点、礫が12点出土した。
２～８はたたき石である。いずれも覆土の下位からの出土である。４のみ泥岩で、他は安山岩製である。２～４は礫の一端に敲打痕が残るものである。５～８は棒状礫の両端に敲打痕が残るものである。８は偏平な楕円礫の一端に敲打痕が残り、平らな面部分に擦痕を持つものである。　（大泰司）

NH－ 13　（図Ⅲ－ 17～22、図版11・12）
位置・立地：I・J・K－ 47・48　北側へ舌状に張り出す平坦部の先端付近。
規模：（7.67）／（7.47）×－／－× 0.50m
確認・調査：平成13年度の調査で壁の立ち上がりの一部が確認された。平成14年度の調査で黒色土の落ち込みが認められ、前年の調査区との境である48ラインとそれに直行する土層観察用ベルトを設定した。トレンチ調査を行い、平坦な面と明瞭な立ち上がりが認められたので、住居跡と判断した。炉周辺の土壌をサンプリングし、フロ－ テ－ ション作業を行っている。HF－ １から不明炭化種子片が５点、HF－ ２からウルシ属炭化種子片１点と不明炭化種子片１点が検出された。
覆土：全体で７層に分層した。自然堆積である。覆土上層は時期の新しい遺構の掘揚げ土など（１層として一括）があり、壁付近に崩落土を主体とする暗褐色土が見られる。
形態：平面形は北側から北西側は、NH－ 13より新しいNP－ 77、P－ ４、H－ １が構築され、不明で

あるが、楕円形を呈すると思われる。床はほぼ平坦でⅥ層中に掘り込まれている。北東側の一部で脆い頁岩を主体とするⅦ層が露出している。壁は急に立ち上がるが、斜面下方にあたる北側では明瞭に確認できなかった。

付属遺構：床面に炉が２ヶ所確認された（ＨＦ－１・２）。掘り込みのない地床炉で、いずれも炭化物を少量含み、地山の焼成は良い。

柱穴は８基検出した。ＨＰ－５は浅く柱穴ではない可能性がある。その他は深さ40～60cm程で直立し、先端は杭状である。壁際から50cmほど内側を巡るように位置している。

遺物出土状況：覆土中にⅡ群b類、Ⅲ群a類、Ⅳ群a類の土器とフレイクなどが散見される。床面からはⅡ群ｂ類土器が出土している。

時期：床面出土の遺物から縄文時代前期後半のⅡ群ｂ類、円筒土器下層ｄ式土器の時期である。

（村田）

掲載遺物：土器　２・４・５・８は床面の出土、他は覆土１の出土である。なお、７・８はHP－１で出土した土器片が接合している。１はⅢ群ａ類。覆土１においてまとまって出土したサイベ沢Ⅶ式である。上半部のみの復元である。筒形で垂直に立ち上がり、口縁部付近で少し外反する。口径は30cmである。体部は羽状縄文が施文され、口唇上には縄が連続的に加えられている。口縁は環状の突起を有し、その下に乳頭状の小突起を付してある。口縁部の２分の１を欠くが、この環状突起は全体で４ヶ所あったと推定される。内面は平滑に調整され、鈍い光沢を呈する。２～５はⅡ群ｂ類。いずれも円筒土器下層ｄ式である。２と３は平行縄線を数条巡らせた口縁片。２は体部との境に綾絡文を２段施文している。３は体部に結束羽状縄文と撚糸文によって、いわゆるスダレ状縄文を構成したもの。４、５は胴部片。いずれも胎土に繊維と海綿骨針を含む。４はＬの縄とＲの縄を組み合わせた撚糸文。５は多軸絡条体を回転施文させたもの。６～10はⅢ群ａ類、サイベ沢Ⅶ式である。６は山形突起部に橋状突起が縦位に付されたもの。口唇上に縄線が加えられ、沈線が口縁部を巡る。７はやや肥厚した山形の小突起を有する。口唇上には縄の圧痕が加えられている。８は胎土に砂礫を多く含む。口唇上にはヘラ状工具で調整した痕が観察される。９、10は底部片。いずれも底部が張り出し、底部付近と底面が平滑に調整されたものである。11はⅣ群ａ類。原体の回転方向を不規則に変えて粗く施文したもの。口唇から口縁にかけ粘土帯を貼付している。

（影浦）

石器　覆土別の出土状況は、覆土中から石槍又はナイフが１点、スクレイパーが６点、Uフレイク４点、フレイク６点、偏平打製石器２点、たたき石２点、台石１点、礫･礫片13点、被熱礫６点が出土し、床面からUフレイク２点、フレイク１点、台石４点、礫・礫片10点が出土した。

12は覆土２層から出土した、玄武岩製の石槍又はナイフである。側縁の加工が両面におよんでいる。残存する先端部は鋭利ではない。13～20はスクレイパーである。14が玄武岩製、18がメノウ製であり、他は珪質頁岩製である。床面から15と20が出土した他は覆土の遺物である。特に13・17・19はJ―47―b区に相当する覆土１層からまとめて取上げたものである。13は背面の両側縁から全面調整されるもので刃部に潰れ等が認められないため未成品であろう。14は横長剥片を用いており、背面右側縁に両面調整がなされている。15は背面右側縁にノッチ状の刃部を持つ。16は縦長剥片の両側縁を調整したもので両縁に細かい調整痕が並ぶ。折損している。17は縦長剥片の両側縁に浅い調整を施すものである。打面側の両縁がノッチ状になっておりつまみ付きナイフの装着部分に準じるものであろうか。端部には礫面が残存し、腹面側から調整が及ぶ。18は図示した背面側に礫面を含む。縦長剥片の一側縁に浅い調整をする。19は縦長剥片の端部に全面におよぶ両面調整を施したものである。折損したつまみ付きナイフの可能性もある。両縁とも急角度の刃部を持つ。20は不整な形状をした剥片の縁辺に

極浅い調整を施したもの。21は覆土出土の珪質頁岩製の石核である。H－ 1覆土中出土のものと接合した。図で示した上下から粗く打ち欠いた後に左側縁からの細かい調整が連続する。裏面の下端にも調整痕が残る。

22･23は安山岩製の偏平打製石器である。22は覆土１層から出土し、礫面が残存する面にはかすかに擦痕が残る。機能部には敲打によって形成された面があり、その縁辺には細かい打ち欠き痕が巡る。縁辺には敲打調整が巡る。23は安山岩の板状節理を使用していると思われ、所々にメノウ質が貫入する。刃部様の機能部を打ち欠きによって調整し、そこには敲打に形成されたものか、幅の狭い面がある。機能部の一部が欠損し、そこから割れている。24は床面出土の台石片である。表裏面に顕著な擦痕があり、側縁も擦りによって楕円形に成形された痕がある。濁川火砕流起源の角閃石が顕著な安山岩製である。（大泰司）

NH－ 17　（図Ⅲ－ 23～25、図版13・14・16）

位置・立地：G・H－ 43・44　標高38.5～39mの平坦面

規模：（4.50）／（4.26）×－ ／－ × 0.12m

確認・調査：G－ 43区の風倒木痕の調査中に石組炉が検出されたため、住居跡と判断した。風倒木痕と試掘坑（B調査、平成13年4月）のため、壁は一部が確認されたのみである。炉周辺の土壌をサンプリングしフロ－ テ－ ション作業を行ったが、炭化種子等は検出されなかった。

覆土：２層に分層した。Ⅳ層を主体とする黒色土が大半で、自然堆積である。

形態：平面形は円形を呈する。床面はおおむね平坦であるが、石組炉の東側の立石付近は、床面からなだらかなくぼみとなっている。掘り込みは浅くⅤ層からⅥ層上面に掘り込まれている。壁は急に立ち上がるが、斜面下方に当たる東側では明瞭に確認できなかった。

付属遺構：床面に石組炉が１ヶ所確認された（HF－ １）。浅い掘り込みを持ち、炭化物を微量に含む。地山の焼成は弱い。東側に２個対になる立石がある。礫の形に合うように地面を掘り込み、全体の３分の２程度埋め込んでいる。炉から立石の中心の方向はN－ 72°－ Eである。HPは２基検出したが、柱穴と判断されるものはない。

遺物出土状況：覆土中にⅡ群b類、Ⅲ群a類、Ⅳ群a類の土器とフレイクなどが散見される。石組炉の炉石に礫のほか、偏平打製石器、たたき石、台石が用いられている。

時期：出土遺物と形態から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。（村田）

掲載遺物：土器　１・３～５はペルト内、２は覆土１の出土である。1～３はⅣ群ａ類。１は貼付帯を施したのち、ＲＬの斜行縄文を施したもの。２は斜位の縄線を施文したもの。３は底部片。膨らみを呈しながら立ち上がる器形で、ＬＲ斜行縄文を地文とする。胎土に砂礫を多く含む。４はⅢ群ａ類のサイベ沢Ⅶ式。横走気味の縄文に綾絡文を施したもの。山形の小突起は内傾している。焼成は良好。５はⅡ群ｂ類。円筒土器下層ｄ式である。口頸部文様帯に2本一組の縄線が施される。口唇断面は肥厚してやや丸みを帯びた角形。口唇上にも縄線文が加えられている。円筒下層ｄ$_2$式の可能性がある。（影浦）

石器　覆土別の出土状況は、覆土中から石鏃１点、スクレイパー２点、フレイク３点、偏平打製石器１点、たたき石３点、被熱礫１点が出土し、床面からはフレイク１点、石斧１点、偏平打製石器１点、たたき石２点、台石７点、礫２点、被熱礫３点、使用痕の有る礫２点が出土した。

６は頁岩製の石鏃である。いびつな凸基有茎鏃で土層観察用ペルトの下位、覆土中からの出土である。茎部と基部の境界は不明瞭である。７・８はスクレイパーで覆土からの出土である。７は頁岩製、

８は泥岩製である。７は縦長剥片の両縁に極浅い調整が施され、背面右側縁については両面調整である。折損している。８は泥岩の横長剥片の直線的な一縁に極浅い調整が巡る。９は床面出土の片岩製石斧であり、G－32区のⅢ層から出土した端部側の基部と接合している。全面に研磨が巡り、刃部は折損する。

11・12・14･15は炉石であった。10・11は安山岩製の偏平打製石器である。10は覆土中、11は床面出土である。10は機能部に敲打痕があり、幅の狭い面を形成する。機能部に対して両側縁は石錘状に打ち欠かれる。11は被熱する。平坦な楕円礫の長軸部分が帯状にススや赤色化を免れている。楕円礫の片縁に機能部があり、刃部様の機能部である。縁辺にも打ち欠きによる調整が巡る。12・13はたたき石である。12は床面出土で、被熱した安山岩製のたたき石である。偏平な礫の側縁に敲打痕跡がある。平らな部分についても数か所の敲打痕が認められる。13は安山岩製で、不整な楕円礫の端部に敲打痕を持ち、敲打痕の縁辺は大きく打ち欠きを伴う。14・15・16は床面出土の台石である。いずれも安山岩製であるが、14については濁川火砕流起源のもので、やや発泡しているため軽石の可能性もある。14は炉石だったものである。表裏に調整のために敲打を施したのか、敲打痕の後に、擦痕がつく。15は楕円礫を側縁に沿って縦割りしたものであり、周囲に敲打、割面にかすかな擦痕がある。16は大型の楕円礫が長軸方向に対して縦に割れたもので、全面に敲打痕があり、機能面には擦痕を持つ。

（大泰司）

ＮＨ－19　（図Ⅲ－26～28、図版14～16）

位置・立地：Ｈ・Ｉ－44・45　標高38.5～39mの平坦面。

規模：4.78／4.52×4.08／3.80×0.23m

確認・調査：試掘坑（Ｂ調査、平成13年4月）の断面で、黒色土の落ち込みが確認されたため、この断面を延長する形で土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行った。石組炉が検出されたため住居跡と判断した。炉周辺の土壌をサンプリングしフロ－テ－ション作業を行っている。

覆土：Ⅳ層が主体である。壁付近では崩落したＶ層が多く混じる。

形態：平面形はほぼ円形を呈する。床はおおむね平坦であるが、石組炉の東側の立石付近は、床面からなだらかなくぼみとなっている。掘り込みは浅く、Ｖ層中に掘り込まれているが、一部Ⅵ層の上面が露出している。壁は急に立ち上がる。

付属遺構：床面に石組炉が検出された。浅い掘り込みをもち、炭化物を微量に含む。地山の焼成は弱い。付替えを行っており、土層断面の観察からＨＦ－２、ＨＦ－１、ＨＦ－３の順で使われたと考えられる。石組炉の東側に２個対になる立石がある。礫の形に合うように地面を掘り込み、全体の３分の２程度埋め込んでいる。炉から立石の中心の方向はＮ－82°－Ｅである。柱穴と判断されるものはなく、住居の東側に、浅い皿状のピットが２基検出された。

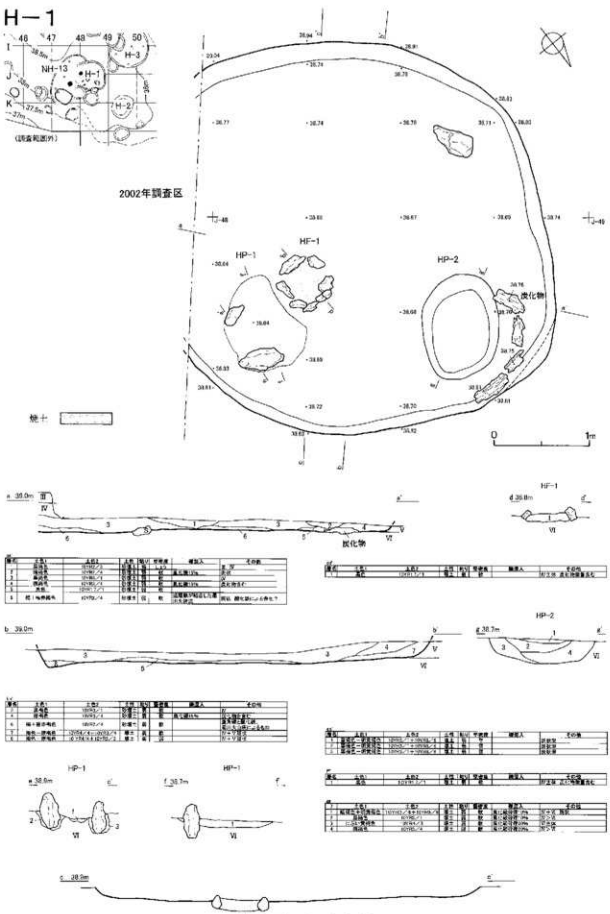
遺物出土状況：東側のくぼみからⅣ群a類の土器がまとまって出土している。

時期：出土遺物から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。　（村田）

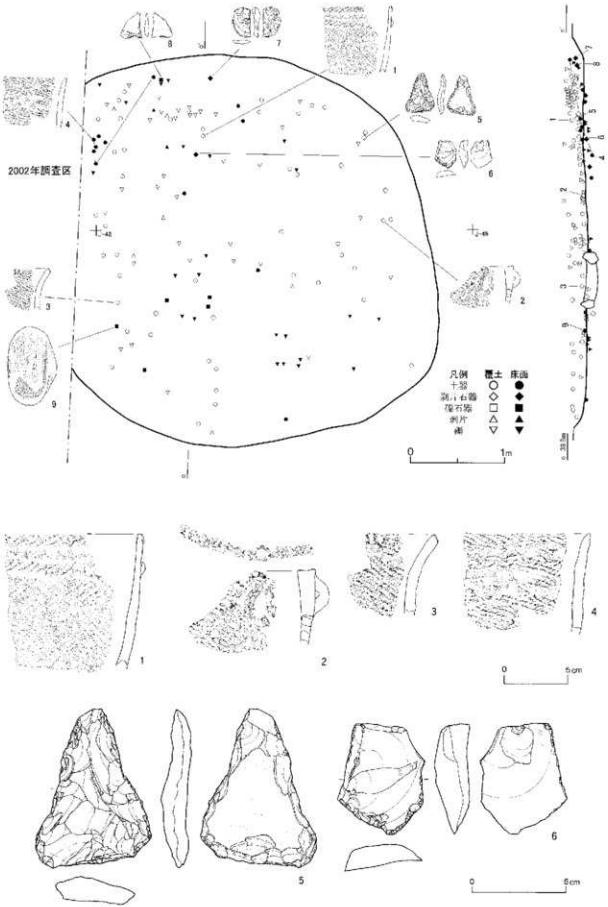
掲載遺物：土器　１はベルト内の出土。２は床面出土の土器片に、覆土１と２で出土した土器片が接合したもの。いずれもⅣ群ａ類で、羽状縄文を体部地文とする。指頭圧による凹凸が顕著。１は折り返し口縁。口唇は丁寧な調整が加えられ、断面は角形である。２は貼付帯をもつもの。３は網目状の撚糸文を重ねて施文したもの。４は表裏面に太い沈線の連弧文が描かれており、胎土に砂礫を多く含んでいる。５は棒状工具の押圧による２個一組の山形突起を持つもの。突起の１つを欠損する。無文の口縁部に太い縄線が2条巡っている。　（影浦）

石器　覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土中から石鏃が１点、スクレイパーが１点、Uフレイクが３点、Rフレイクが１点、フレイクが26点、たたき石１点、石製品１点、礫・礫片４点が出土しており、床面からは石鏃１点、スクレイパー１点、フレイク３点、たたき石２点、台石４点、礫・礫片７点、被熱礫２点、使用痕のある礫１点が出土している。

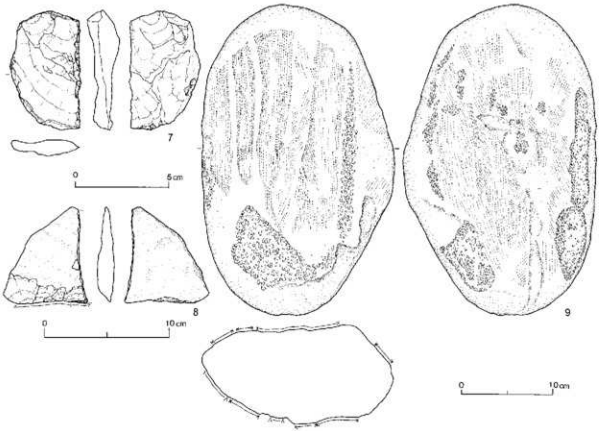
６・７は石鏃である。６は黒曜石製で覆土中、７はメノウ製で床面からの出土である。いずれも凸基有茎鏃だが、６は両面全面調整で、舌状で小型の茎を持つ。７は両面とも縁辺のみの調整で五角形に近い。８は風化した頁岩製の石槍又はナイフである。覆土からの出土である。両面縁辺に調整が巡り、茎部の抉り部分が明瞭である。現存する先端部および側縁は鋭利ではない。９・10は珪質頁岩製である。９は床面出土のスクレイパーで、剥離の両側縁に極浅い調整が巡る。10は覆土出土のUフレイクで、剥片の一縁辺が潰れる。11は覆土から出土した軽石製石製品で全面に研磨が施され、楕円の一縁を直線的に加工した形状である。貫通孔を持つ。12～15は床面出土の安山岩製の礫石器である。12・14・15は被熱している。12・13はたたき石である。12は割礫の一縁に敲打を加えたものである。敲打の度合いは、平らな機能面を有するには至らない。13は棒状礫の側縁と片方の端部に敲打痕を持つものである。断面三角形で、頻度の差こそあるが、三角形の角にあたる３縁辺に敲打痕を持つ。14･15は台石である。14は割礫で、割面に顕著な敲打痕を持つ。それに対応して裏面にあたる端部にも敲打痕を持つ。15は楕円礫の表面に擦痕を持つものである。（大泰司）


H－1
46
47
48
49
50
I
J
K
NH-13
H-1
H-2
H-3
(調査範囲外)
2002年調査区
HF-1
HP-1
HP-2
炭化物
焼土
D
1m
a 39.0m
b 39.0m
c 39.0m
d 39.0m
e 39.0m
f 39.0m
炭化物

図Ⅲ－２　Ｈ－１（１）

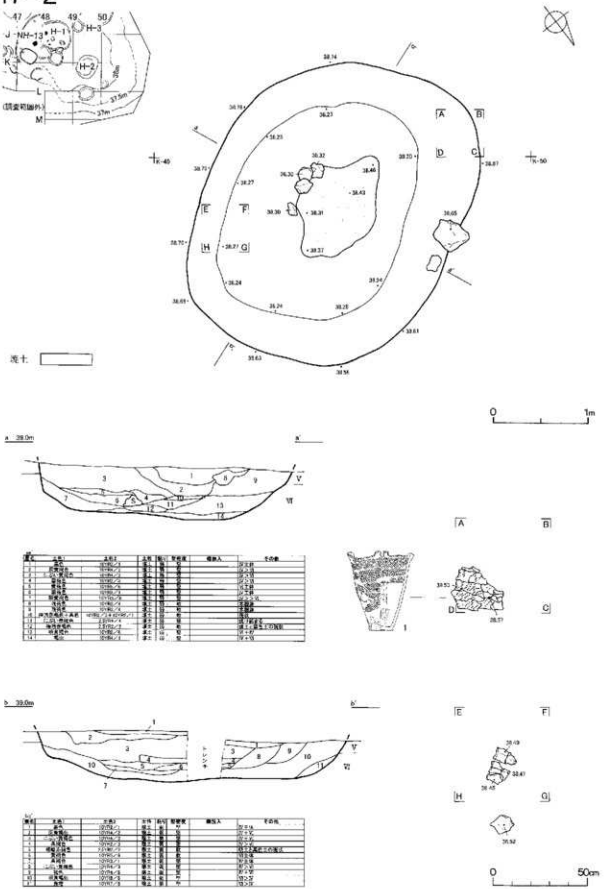


図Ⅲ－３　H－１（２）と遺物（１）

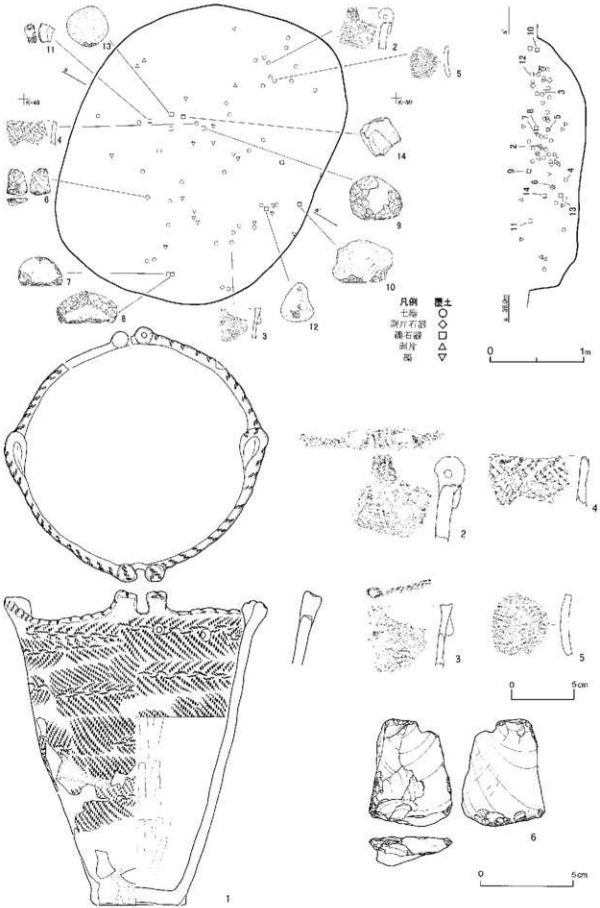


図Ⅲ－４　Ｈ－１の遺物（２）

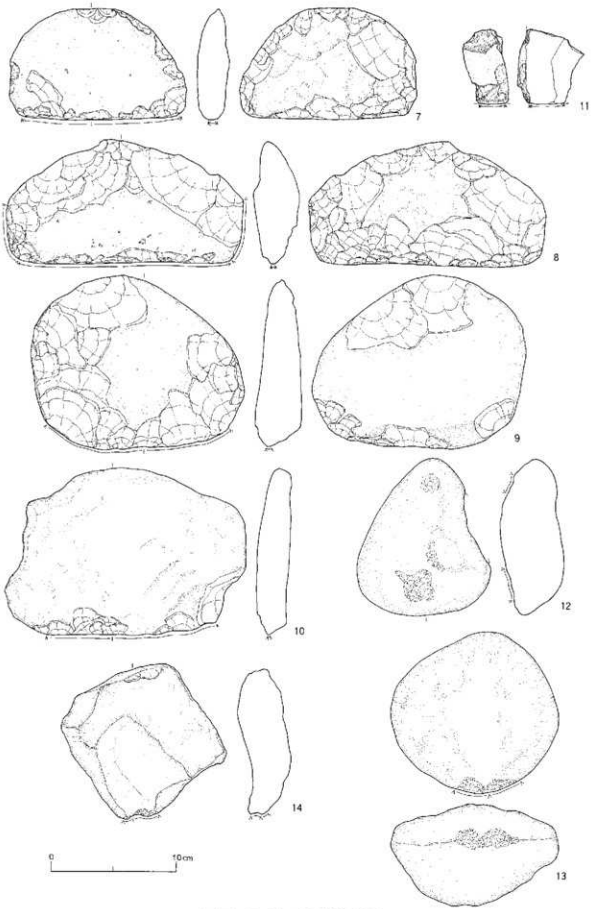
H－2


47
48
49
50
J
NH-13
H-1
H-3
K
H-2
L
(調査範囲外)
M
37.5m
37m
A
B
C
D
E
F
G
H
K-40
K-50
38.14
38.21
38.25
38.32
38.40
38.43
38.37
38.31
38.30
38.27
38.24
38.65
38.61
38.63
38.54
0
1m
a 39.0m
a'
b 39.0m
b'
0
50cm

図Ⅲ－ 5　H－ 2（1）

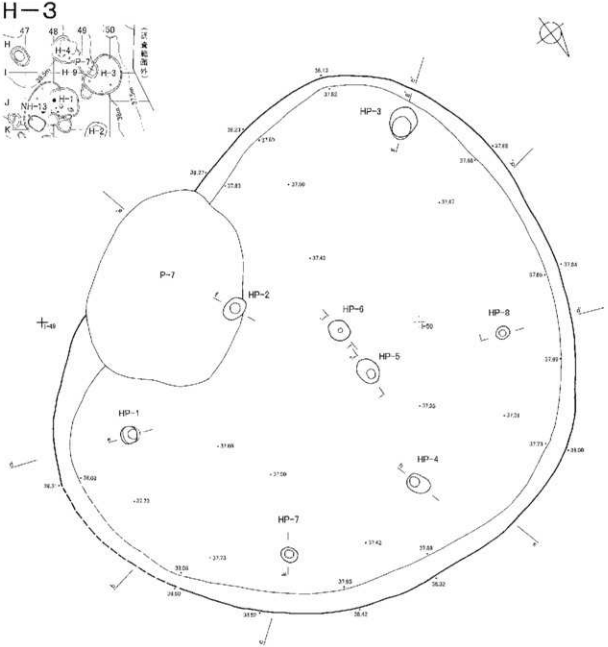


図Ⅲ－６　Ｈ－２（２）と遺物（１）



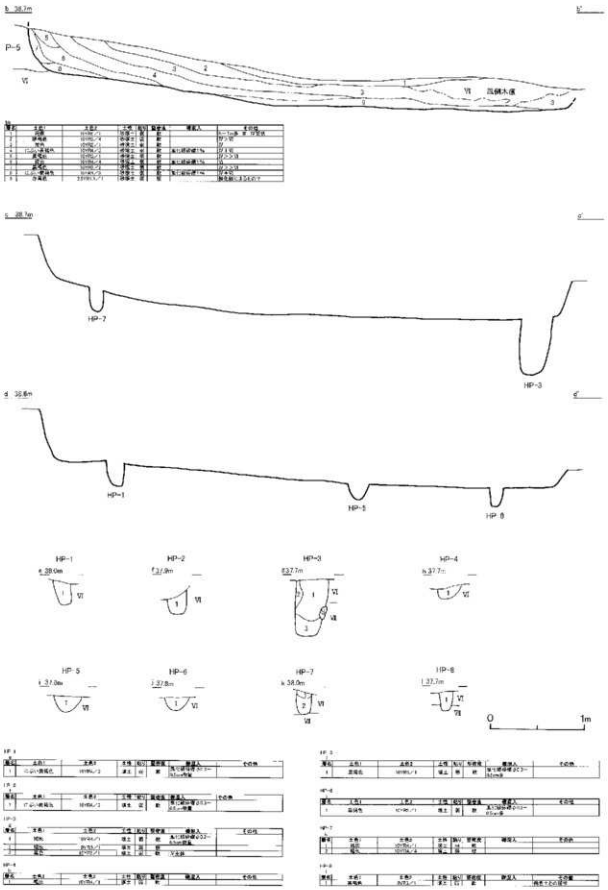
図Ⅲ- 7　H- 2の遺物（2）

H－3

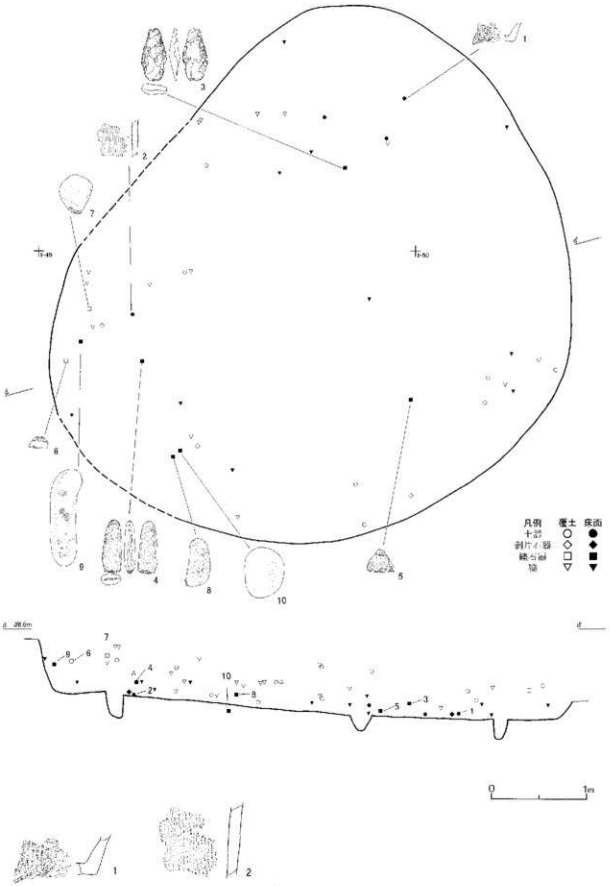


番号	上層	土色	土質	粘性	堆積量	構成人	土の性格
1	表土層	10YR4/1	砂質土	弱	極		表土層 H-7層土
2	表土	10YR4/1	砂質土	弱	中		表
3	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	中		表
4	黒褐色層	10YR2/2	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム
5	黒褐色層	10YR2/2	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム
6	黒褐色層	10YR2/2	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム
7	暗褐色	2.5YR3/1	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム
8	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム
9	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム
10	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム
11	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	多	地山粒子混入	ローム

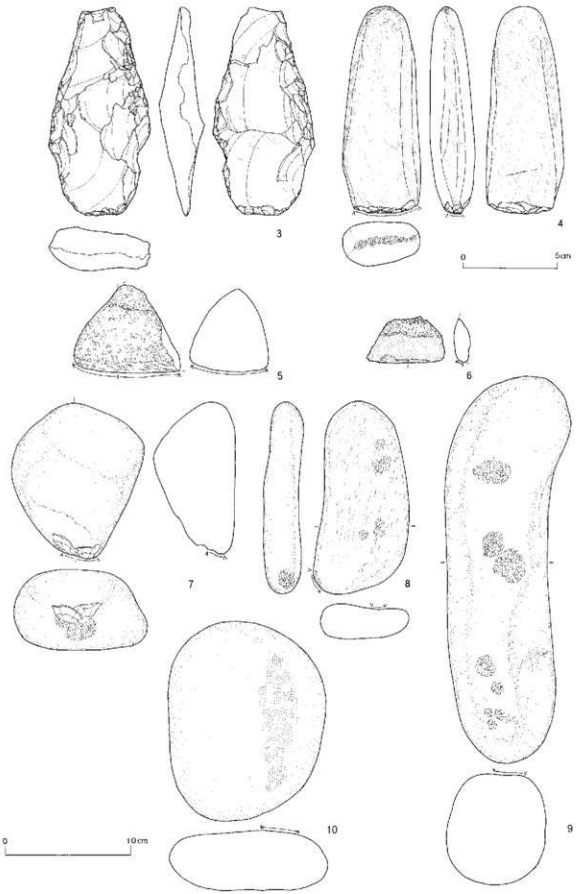
図Ⅲ－ 8　H－ 3（1）



図Ⅲ- 9　H- 3 (2)

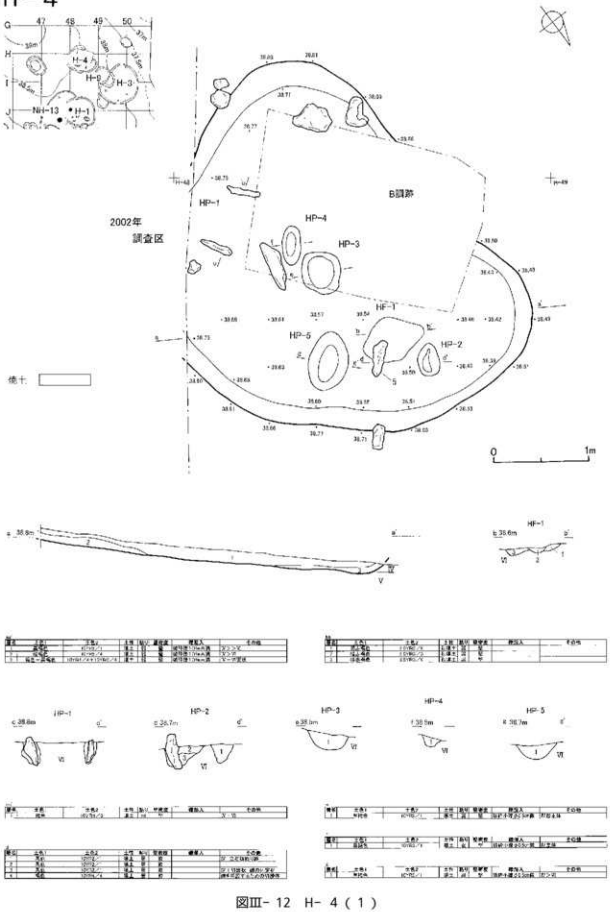


図Ⅲ- 10　H- 3 (3)

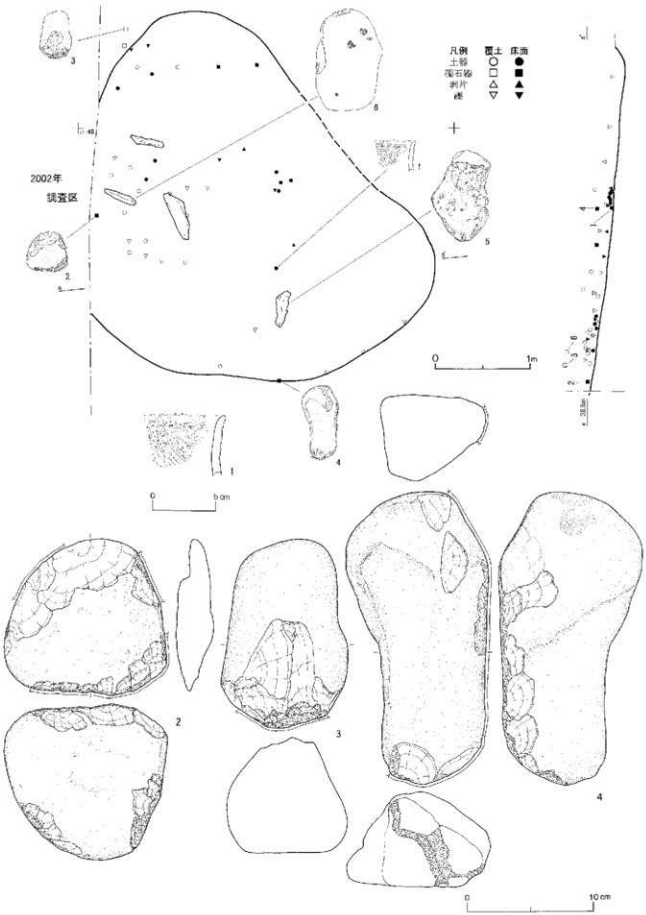


図Ⅲ- 11　H- 3の遺物

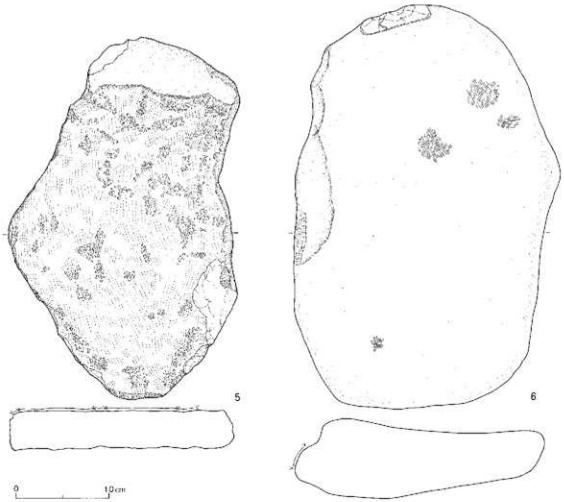
H－4



図Ⅲ－12　H－4（1）

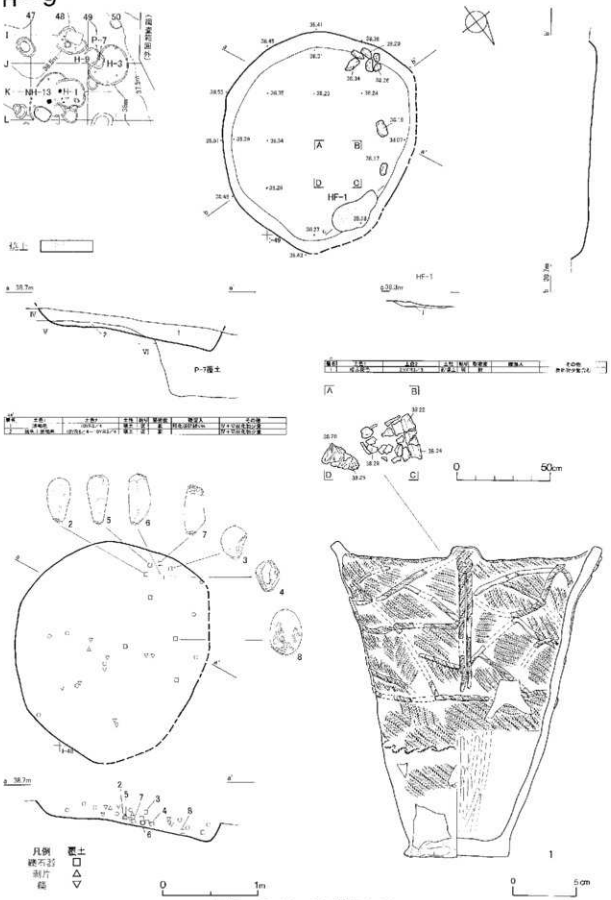


図Ⅲ-13　H-4（2）と遺物（1）

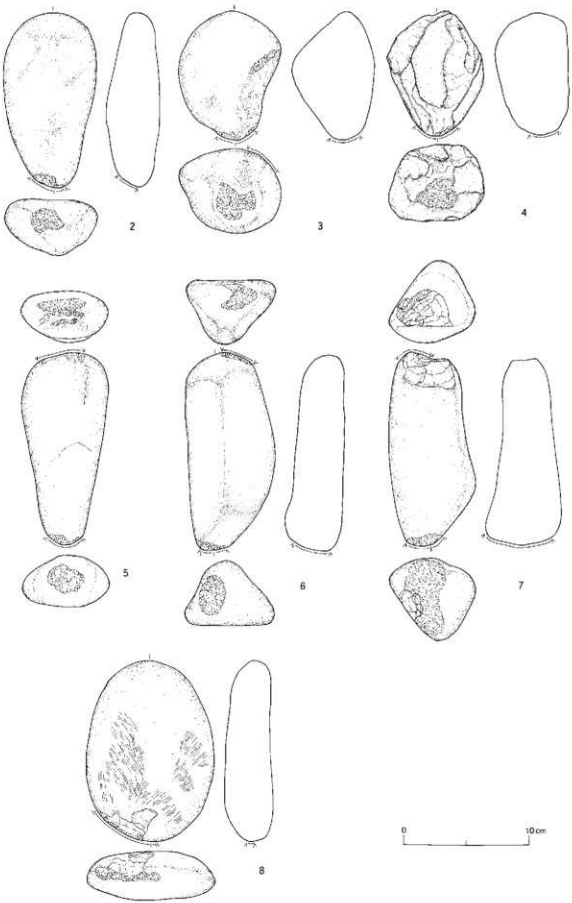


図Ⅲ- 14　H- 4の遺物（２）

H－9

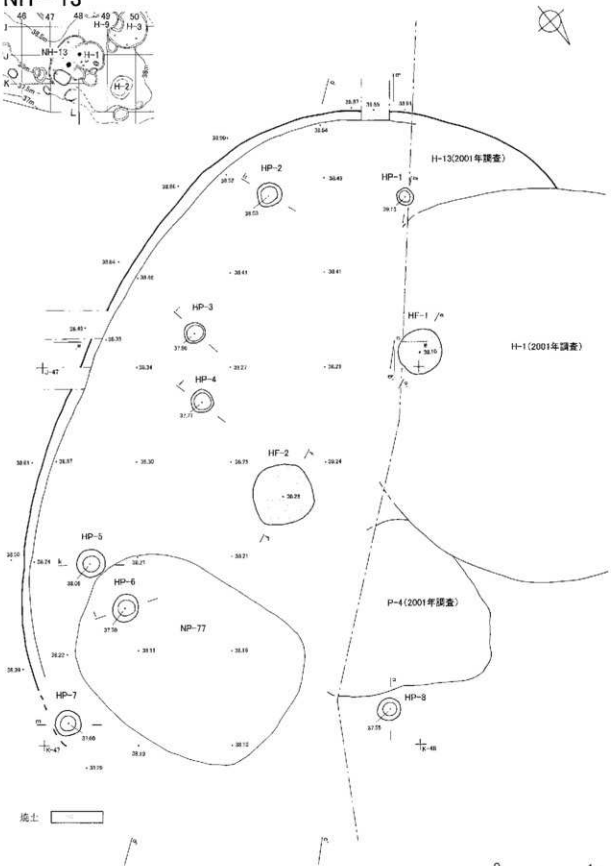


図Ⅲ－15 H－9と遺物（1）

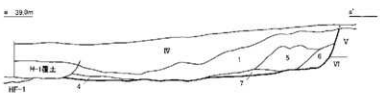


図Ⅲ- 16　H- 9の遺物（２）

NH－13

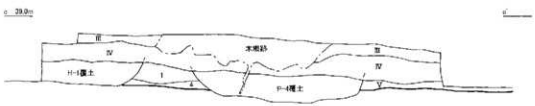


図Ⅲ－17 NH－13（1）



NH-13

層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	7.5YR2/2	埴土	中	軟	
2	黒色	7.5YR1.7/1	埴土	弱	すこんだもの	
3	暗オリーブ褐色	2.5Y4/3	埴土	中	堅	
4	褐色	10YR4/4	埴土	中	堅	
5	褐色	10YR4/4	埴土	中	しまり	
6	明褐色	10YR4/6	埴土	中	軟	
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	埴土	中	軟	

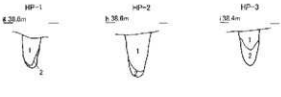


HF-1

層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗黒褐色	5YR2/6	砂質土	弱	軟	炭化物少量
2	褐	5YR5/8	砂質土	弱	軟	被覆したVI

HF-2

層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/4	砂質土	弱	軟	V＞VI炭化物少量
2	暗色	7.5YR4/4	砂質土	強	軟	V＞VI
3	褐	7.5YR6/6	砂質土	弱	軟	被覆したVI



HP-1

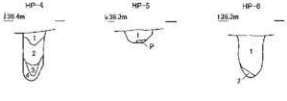
層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/4	砂質土	強	軟	IV層混少量含む5
2	黄褐色	10YR5/6	砂質土	弱	すこんだもの	IV層少量混じる

HP-2・6・7

層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/4	砂質土	弱	軟	V層主体
2	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質土	弱	軟	IV＋V

HP-3

層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/4	砂質土	強	軟	V層主体
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質土	強	しまり	V層主体



HP-4

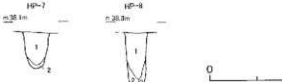
層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色	10YR3/4	砂質土	強	堅	V＞IV
2	褐色	7.5YR4/4	砂質土	弱	軟	IV＋V IVはブロック状
3	暗色	7.5YR4/4	砂質土	弱	軟	V＞IV
4	にぶい褐色	7.5YR5/4	砂質土	強	軟	IV＞V

HP-5

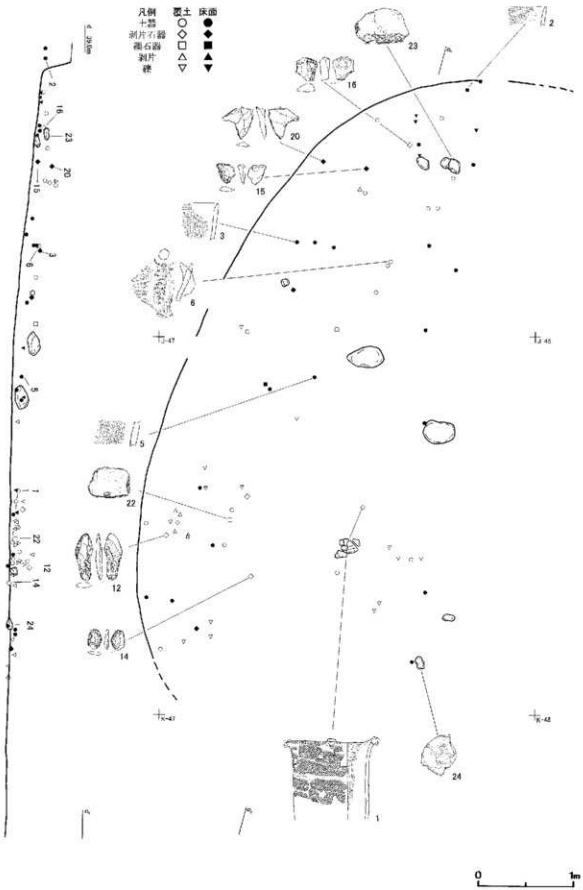
層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色	7.5YR3/4	砂質土	強	軟	IV＋V

HP-6

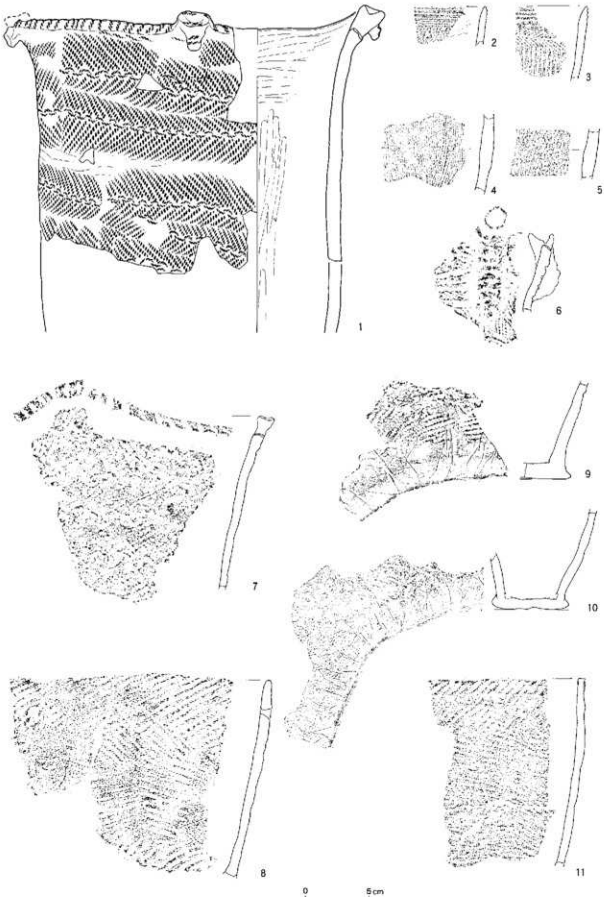
層記	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐暗色	10YR3/4	砂質土	強	堅	V＞IV
2	褐色	10YR4/4	砂質土	弱	軟	IV＋V
3	暗色	7.5YR4/4	砂質土	強	堅	V＞IV



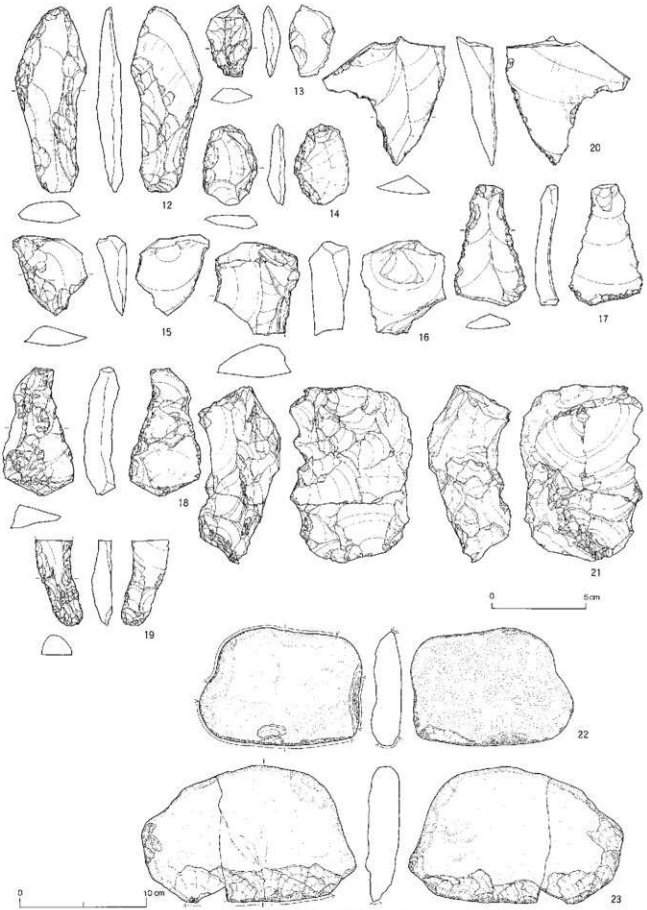
図Ⅲ- 18　NH- 13 (2)



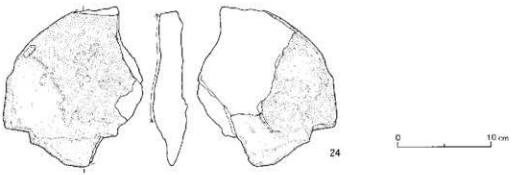
図Ⅲ- 19　NH- 13 (3)



図Ⅲ- 20　NH- 13の遺物（１）

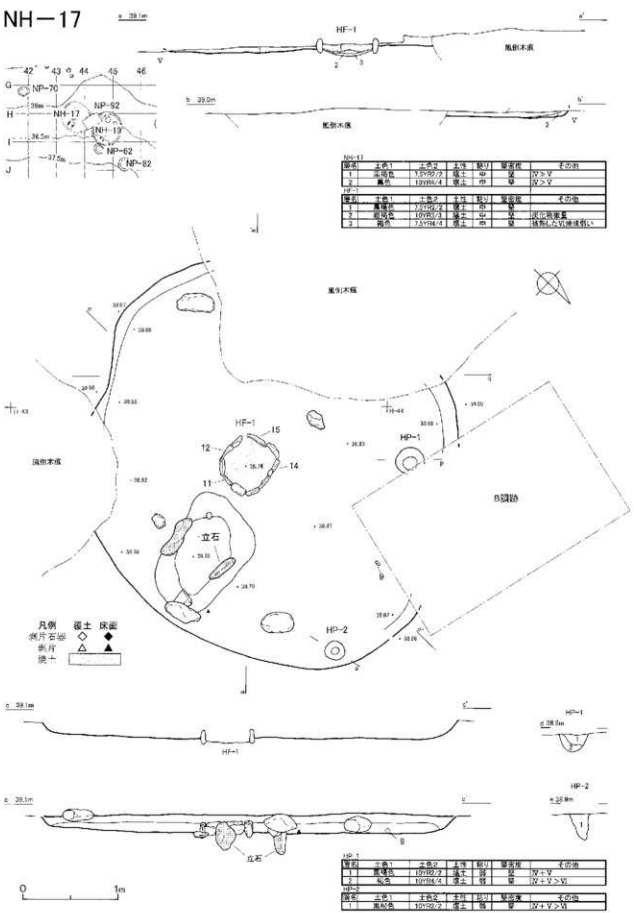


図Ⅲ- 21　NH- 13の遺物（２）



図Ⅲ- 22　NH- 13の遺物（３）

NH－17



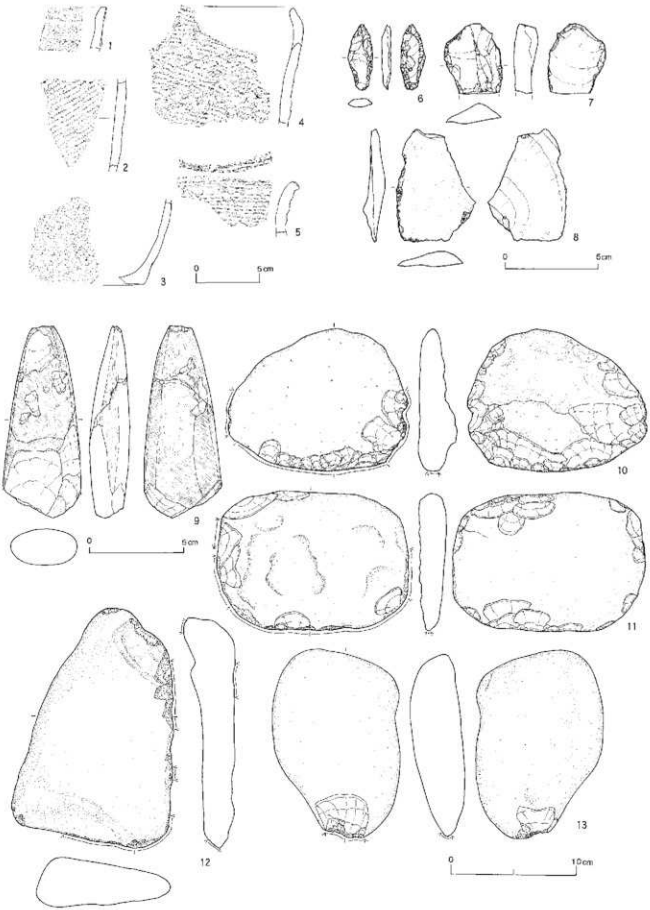
NH-17						
層位	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	赤褐色	1.5YR2/2	埴土	中	堅	IV > V
2	黒色	10YR4/4	埴土	中	堅	IV > V

HF-1						
層位	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	7.5YR2/2	埴土	中	堅	
2	暗褐色	10YR3/3	埴土	中	堅	炭化種子含
3	褐色	7.5YR4/4	埴土	中	堅	硬質化した切株状例い

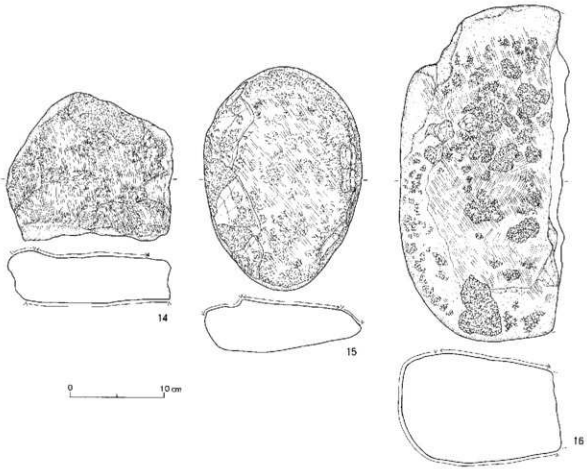
HP-1						
層位	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	10YR2/2	埴土	弱	堅	IV > V
2	褐色	10YR4/4	埴土	弱	堅	IV > V > VI

HP-2						
層位	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	10YR2/2	埴土	強	堅	IV + V > VI

図Ⅲ－23　NH－17

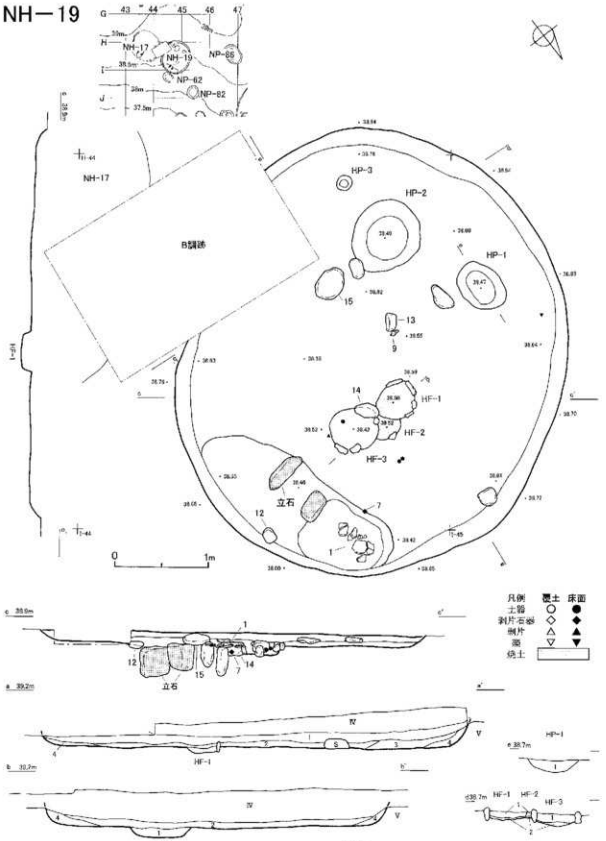


図Ⅲ- 24　NH- 17の遺物（１）



図Ⅲ- 25　NH- 17の遺物（２）

NH－19



層番	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色	10YR2/1	埴土	強	軟	IV≥V
2	暗褐色	10YR3/4	埴土	強	軟	IV＞V　Vは薄板
3	褐灰色	10YR5/2	埴土	強	軟	炭化物微量含む
4	暗褐色	10YR2/4	埴土	弱	硬	IV＝V
5	灰色	10YR4/4	埴土	強	軟	IV＜V＞VI

NH-19

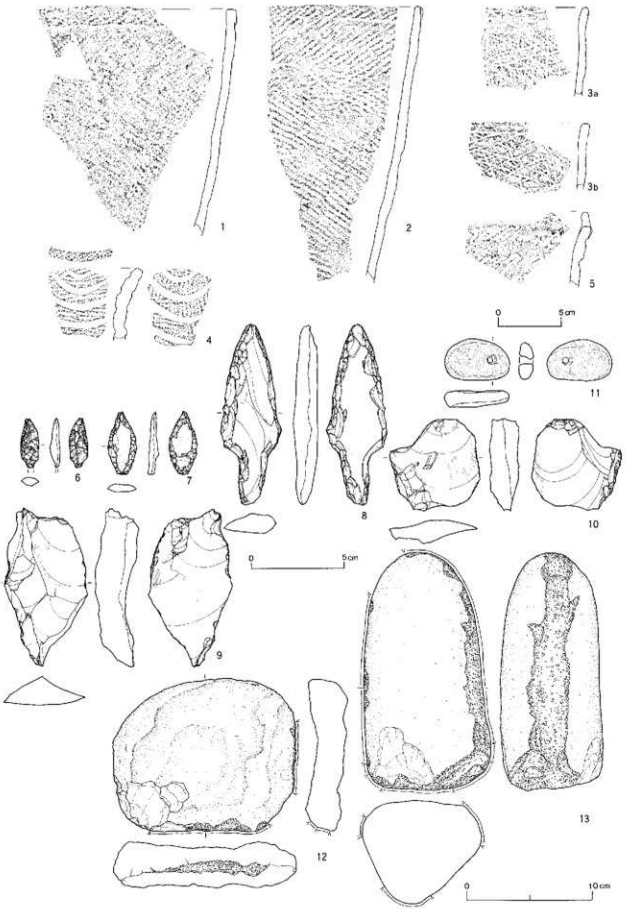
層番	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色	10YR2/1	埴土	強	軟	IV＞V　Vはブロック状

NH-1-2

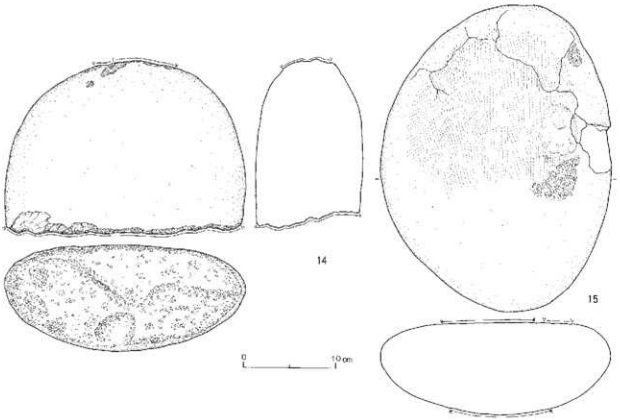
NH-1-3

層番	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐灰色	10YR5/3	埴土	中	軟	炭化物微量
2	褐色	7.5YR4/4	埴土	中	硬	被覆土で炭は弱い

図Ⅲ－26　NH－19



図Ⅲ- 27　NH- 19の遺物（１）



図Ⅲ- 28　NH- 19の遺物（２）

2　土壙

P－ 1（図Ⅲ－ 29・30、図版 8－ 1・2）
位置・立地：L－ 49　標高37.5～38m、台地の北端、平坦面と斜面の境
規模：2.18× 1.71 / 1.89× 1.35 / 0.56m
確認・調査：包含層調査でⅣ層下位において褐色土を主体とする斑状の落ち込みを検出した。土層観察用のベルトを設定し半截したところ平坦な壙底と明瞭な壁の立ち上りを確認したので土壙と認定した。覆土は１～５層に分けた。Ⅵ、Ⅶ層土を主体とし、混ぜ返したような土が堆積している。埋め戻しによるものと考えられる。平面形は円形に近い楕円形を呈する。壙底は平坦である。遺物は台石や礫、礫石器を主とした大型の礫が埋め戻しの覆土中から出土する。これらと土器を含め覆土から15点、壙底からⅢ群ａ類土器1点、たたき石1点、合計17点の遺物が出土した。
時期：調査区の近似する形態を持つ遺構と、遺物の出土状況から縄文時代中期前半の土壙と考えられる。（袖岡）
掲載遺物：土器　いずれも覆土出土のⅢ群ａ類。サイベ沢Ⅶ式である。１は環状の突起を有し、２本一組の縄線が突起下と口唇上に施されている。２は底部片。全体に磨き調整がなされている。（影浦）
石器　層位別の出土状況は覆土から台石３点、礫・礫片が４点出土し、壙底部からはたたき石が１点出土した。３は壙底部出土、安山岩製のたたき石である。長楕円礫の平面的な部分について数か所の敲打痕を持ち、微妙な擦痕を伴う。側縁にも敲打痕があり、折損の原因に関連すると考える。４は覆土出土、安山岩製の台石である。被熱しており数か所はぜた痕跡が残っている。顕著な擦痕が研磨したかのような機能部を形成する。（大泰司）

P－ 3（図Ⅲ－ 30、図版 8－ 3・4）
位置：J－ 48
立地：北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：1.12× 0.80 / 0.81× 0.50 / 0.43m
確認・調査：H－ 1検出のための精査時に、これと重複する黒色土の落ち込みが確認された。土壙であることを想定し半截したところ平坦な壙底と急で明瞭な壁の立ち上りを検出し土壙と認定した。覆土は１～３層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。平面形は不整な楕円形を呈する。遺物は覆土よりⅡ群ｂ類土器６点、Ⅲ群ａ類土器４点、Ⅳ群ａ類土器５点、すり石１点、礫片１点の合計17点出土している。
時期：H－ 1、HP－ 2の規模や覆土の堆積状況が似ていることなどから判断して縄文時代後期に属するものであることが考えられる。（袖岡）
掲載遺物：土器　いずれも覆土出土のもの。１はⅡ群ｂ類。円筒土器下層ｄ式である。２本一組の縄線が横位に巡り、その下に綾絡文と縄文が施されたもの。縄文は破損によりＬＲの斜行縄文か、結束羽状縄文か判別できない。胎土に繊維を含む。２はⅣ群ａ類。粘土帯を貼付後、横位に調整を施し、その上に斜行縄文を施文したもの。口唇上にも調整痕が見られるが、凹凸が目立つ。（影浦）
石器　覆土からすり石１点、礫片１点が出土している。３は覆土出土のすり石である。安山岩の礫面を含む破片で、礫面には擦痕が顕著である。（大泰司）

Ｐ－ ４（図Ⅲ－ 31、図版８－ ５・６）
位置・立地：Ｊ－ 47、48　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：（1.65）×（1.48）／（1.90）×（1.56）／0.40m
確認・調査：Ｈ－ １の精査時に土壙の存在が想定された。落ち込みの長軸方向にベルトを設定し掘り下げたところ明瞭な壙底と壁の立ち上りを検出し土壙と認定した。覆土は１～３層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。平面形や壙底の形については次年度調査区にかかり全様を知り得ないが、不整な楕円形で壙底は2段になっていたことが想定される。遺物は覆土よりⅣ群ａ類土器を中心として土器、石器類が36点、覆土下よりⅡ群b類土器1点、壙底よりⅣ群ａ類土器1点、たたき石1点、合計39点の遺物が出土した。
時期：縄文時代後期前葉に属する土壙であると考えられる。（袖岡）
掲載遺物：土器　１は覆土下で出土したⅡ群ｂ類の胴部片。円筒土器下層ｄ式である。多軸絡条体の回転文を地文とする。胎土中には繊維と海綿骨針が混和している。（影浦）
石器　覆土別の出土状況は覆土中からUフレイク１点、フレイク１点、すり石１点、石製品１点、礫・礫片が９点、被熱礫２点が出土し、壙底部からたたき石が１点出土した。２は珪質頁岩製のUフレイクである。石核時のものか打面が残存し、縁辺に微細な潰れ痕跡がある。３は風化した頁岩製の石製品である。覆土出土のものと、Ｊ—47区Ⅳ層出土のものが接合した。石斧様の形状で、下端は刃部様になっている。縦方向の擦痕が顕著であり、半截竹管状の工具が想定される。中央に孔があり、表裏から回転錐と思われる工具で穿孔してある。孔部から割れており製作時の破損の可能性がある。４は壙底部出土の安山岩製のたたき石片である。端部に敲打痕のある破片であり、他の礫面部分には調整痕はない。５は安山岩製のすり石である。被熱し、欠損している。偏平な楕円礫の一面に擦痕を持つ。６は被熱した安山岩の礫である。使用痕は認めがたいが、覆土中の４点と、Ｊ—48—ｄ区とＪ—47—d区の被熱礫片が１点ずつ、いずれもⅣ層から出土したものが接合した。（大泰司）

Ｐ－ ５（図Ⅲ－ 32、図版８－ ７・８）
位置・立地：Ⅰ－ 49　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：（1.62）×（1.43）／1.54× 1.08／0.64m
確認・調査：包含層調査でⅣ層下位～Ⅴ層上面にかけて暗褐色土の落ち込みが検出された。これに重複するＨ－ 3の存在が推定されていたのでこれらの新旧関係を確認するため、土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。調査の結果、Ｈ－ 3によって壊された土壙と認定した。覆土は6層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。Ｈ－ ３に切られているが平面形は楕円形を呈していたものと考えられる。壙底は平坦、壁の立ち上りは急で明瞭である。
遺物は覆土よりⅡ群ｂ類土器4点、Ⅲ群ａ類土器1点、偏平打製石器1点、すり石1点、礫・礫片1点２点の計9点、覆土下よりⅡ群b類土器２点の合計11点が出土した。
時期：Ｈ－ ３に切られていることからこれより古い縄文時代前期後葉の土壙と考えられる。（袖岡）
掲載遺物：石器　覆土中から偏平打製石器が１点、すり石が１点、礫が２点出土している。
１・２は覆土中から出土した。１は安山岩製の偏平打製石器で機能部は、敲打によるものか、面状を呈する。面は長楕円形で長軸に対して縦方向の擦痕が観察でき、その周囲には細かい打ち欠き痕が巡る。縁辺にも打ち欠きによって半円形に成形する。２は安山岩製のすり石である。表裏面は平らで、擦痕がある。頻度が高いためか研磨されたかの様である。（大泰司）

Ｐ－ 6（図Ⅲ－ 32、図版９－ １・２）
位置・立地：Ｈ－ 48　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：0.88× 0.65 / 0.86× 0.67 / 0.34m
確認・調査：Ｈ－ ４の調査で、試掘坑（平成13年4月文化課）内にある攪乱土を除去し、床面の精査を行っていたところ、灰黄褐色の、Ⅵ層を主体とする堅硬な土を検出した。移植ゴテでは掘れないほどの堅さだったので小さな剣先スコップで土を砕きながら遺物に注意し掘り下げたところ、覆土中からの土器片や礫などの遺物の出土と、平坦な壙底、急で明瞭な壁の立ち上りを検出し土壙と認定した。平面形は円形を呈する。覆土は２層に分けた。検出した覆土１層はⅥ層土を主体とし強い締まりのある土である。２層とした土は、１層より柔らかく、やや締まる程度である。１層は意図的に強い締まりを持たせたものと考えられる。これらは埋め戻しによるものと考えられる。
遺物はⅢ群ａ類土器７点、Ｕフレイク１点、偏平打製石器１点、台石１点、礫・礫片４点で合計14点が出土した。
時期：埋め戻しである覆土中からⅢ群ａ類土器の破片や偏平打製石器、台石、礫類が出土する土壙は、調査区内で他に検出した当該期と考えられる遺構の遺物出土状況や覆土の堆積状況が共通することから縄文時代中期前半、円筒土器上層式サイベ沢Ⅶ式期の土壙であると考えられる。　（袖岡）
掲載遺物：石器　覆土からＵフレイクが１点、偏平打製石器が１点、台石が１点、礫が４点出土している。１はＵフレイクで被熱した頁岩の縁辺に極浅形の調整が巡る。２は安山岩製の偏平打製石器である。機能部は敲打によるものか面状を呈する。面は長楕円形で長軸に対して縦方向の擦痕が観察でき、その周囲には細かい打ち欠き痕が巡る。機能部にたいして両側縁は打ち欠きによって平行に整えられ、且つ、その頂部は半円形を呈する。３は安山岩製の台石である。礫が自然に凹んでいるその底部分について、敲打痕がある。　（大泰司）

Ｐ－ 7（図Ⅲ－ 33、図版９－ ３）
位置・立地：Ｈ、Ｉ－ 49　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面より西側
規模：（2.03）×（1.59）/（1.57）×（1.18）/ 0.70m
確認・調査：Ｈ－ ３・Ｈ－ ９のトレンチ調査によって確認した。断面の観察よりＨ－ ３・Ｈ－ 9より古い遺構であることが判った。覆土は5層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。平面形は角丸方形に近似した楕円形を呈する。壙底は平坦で壁の立ち上りは明瞭である。遺物は覆土中より北海道式石冠２点、礫1点出土している。
時期：Ｈ－ 3より古い縄文時代前期後葉の土壙であると考えられる。　（袖岡）
掲載遺物：石器　覆土中から北海道式石冠が２点、礫が１点出土している。１・２は覆土中から出土した安山岩製の北海道式石冠である。１は一部に礫面を残し、ほぼ全面に浅い敲打調整を加える。２は半割した楕円礫を用いるため礫面がよく残る。いずれも敲打によって浅い溝状の持ち手を作り出す。いずれも楕円形の機能面を持つ。１は長軸方向の浅い擦痕で、周囲の縁辺には敲打痕が残る。２はそれぞれがおおよそ短軸方向を向く２種類の擦り面によって構成される。１より擦りの度合いが強く、縁辺は打ち欠かれたような欠損が連続する。　（大泰司）

Ｐ－ 8（図Ⅲ－ 34、図版９－ ４）
位置・立地：Ｊ－ 48　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：2.14× 1.70 / 1.96× 1.54 / 0.54m

確認・調査：包含層のⅤ層を掘り下げていたところ暗色の落ち込みを検出した。半截したところ平坦な壙底と急で明瞭な壁の立ち上りを検出したので土壙と認定した。平面形は先に調査を行なったP－3・P－4のために一部不明瞭なところもあるが円形である。覆土は1～5層に分けた。3層を除きⅥ層土を多く含む土が主体となる。3層は唯一黒色を呈している。覆土は埋め戻しによるものと考えられる。覆土中からは礫が多く出土した。遺物分布図を見ると凝灰岩を主体とする礫集中が土壙のほぼ中央、土層断面で見ると3層としたところより多く出土している。遺物はⅡ群b類土器10点、Ⅲ群ａ類土器5点、フレイク４点、偏平打製石器１点、台石１点、礫・礫片53点、合計74点が出土した。
時期：埋め戻しである覆土中から礫や偏平打製石器の出土、Ⅲ群ａ類土器片の出土は、調査区内で他に検出した該時期と考えられる遺構の遺物出土状況や覆土の堆積状況が共通することから縄文時代中期前半の土壙であると考えられる。（袖岡）
掲載遺物：土器　いずれも覆土出土のⅢ群ａ類。浅いくぼみを持つ肥厚した突起部に２本一組の縄の刻みが縦位に加えられたサイベ沢Ⅶ式である。１は突起の中央に穿孔がなされ、沈線文が加えられている。地文は結束羽状縄文で、拓本左辺に補修孔を穿とうとした痕が見られるが、貫通していない。内面は平滑。２はより肥厚した口唇上に太い縄の圧痕が連続的に加えられている。（影浦）
石器　覆土中からフレイク４点、偏平打製石器１点、台石１点、礫53点が出土する。覆土中位から同質の凝灰岩楕円礫、大小32点がまとまって出土している。使用痕等は見受けられない。
３・４は覆土出土の礫石器で、いずれも被熱した安山岩製である。３は偏平打製石器で破損が著しい。表面の平面的な部分には表裏とも擦痕が残る。機能部は敲打によるものか面を持つ。形状は敲打調整によって半円形である。４は台石である。不整な礫の平面的な部分に擦痕が残る。（大泰司）

Ｐ－11（図Ⅲ－35･36、図版９－５・６）
位置・立地：Ｇ－49　調査区の西端に近い標高37.5m、無名沢に臨む斜面
規模：1.74× 1.88 / 1.13× 1.10 / 0.58m
確認・調査：包含層のⅤ層を掘り下げていたところ暗褐色土の落ち込みを検出した。半截したところ平坦な壙底と明瞭な壁の立ち上りを検出したので土壙と認定した。覆土は1～８層に分けた。ロ－ム質土を多く含み、混ぜ返されたような土が堆積している。埋め戻しによるものと考えられる。覆土下位には焼土が検出された。ここで焼成を受けたものではなく、埋め戻しの過程において入れられたものと考えられる。平面形は楕円形である。壙底は平坦で、壙口より広くなっておりオ－バ－ハングして立ち上る。遺物は覆土よりⅡ群ｂ類土器２点、Ⅲ群ａ類土器43点（ミニチュア土器１を含む）、すり石１点、たたき石１点、偏平打製石器２点、台石１点、礫･礫片14点、被熱礫３点の計67点出土している。壙底からはⅢ群ａ類土器2点、礫･礫片1点、合計で70点の遺物が出土した。
時期：埋め戻しである覆土中よりⅢ群ａ類土器が多く出土したことから縄文時代中期前半、円筒土器上層式サイベ沢Ⅶ式期の土壙であると考えられる。（袖岡）
掲載遺物：土器　いずれも覆土出土である。１はⅣ群ａ類。小型の土器である。類似の土器が包含層から出土しており、その周囲の土器の出土状況からⅣ群ａ類と判断した。底部はやや張り出し、大きく開く器形である。口径は底径の倍以上ある。口縁は緩やかな波状を呈し、器表面は縦位の調整で平滑である。底部は指頭圧で揚げ底に整形している。２はⅢ群ａ類。サイベ沢Ⅶ式である。結束第２種羽状縄文を地文とし、口唇上は縄の圧痕で連続的な刻みが加えられている。内面は平滑に調整されており、ヘラ状工具による調整痕も認められる。胎土中に径５㎜内外の角礫を多く含む。３はⅡ群ｂ類、円筒土器下層ｄ式の底部。多軸絡条体の回転文を地文とし、やや膨らみをもって、立ち上がる器形で

ある。（影浦）

石器　覆土中からすり石１点、たたき石１点、偏平打製石器２点、台石が１点、礫・礫片が14点、被熱礫３点が出土し、壙底部からは礫片が１点出土する。４・５は安山岩製の偏平打製石器である。４は比較的肉厚で刃部様ないしは礫器様の機能部を持つ。側縁にまで打ち欠き調整がおよぶが頂部は礫面を残す。５は被熱しており,刃部様の機能部を持つが、かすかに敲打によると思われる機能面を含む。欠損しているが、一側縁は直線状に、そして頂部は打ち欠きによって半円状に成形される。６は安山岩製のたたき石片である。棒状礫ないしは小型の楕円礫の比較的平面的な部分に２ヶ所敲打痕跡を持つ。７は安山岩製の台石であり、大型で不整な礫の平坦面のほぼ中央部に擦痕を持つ。擦痕は著しく、研磨を思わせる。（大泰司）

Ｐ－ 12（図Ⅲ－ 37、図版９－ ７・８）

位置・立地：Ｅ－ 48　調査区の西端に近い標高37.5m、無名沢に臨む斜面

規模：2.12× 1.74／（1.31）×（1.20）／0.45m

確認・調査：包含層のＶ層を掘り下げていたところ暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用のベルトを設定し掘り下げたところ平坦な壙底と明瞭な壁の立ち上りを検出し土壙と認定した。覆土は1～6層に分けた。Ⅵ層土を多く含む土が主体である。平面形は南側が調査範囲外にかかり全様を知り得ないが楕円形を呈するものとみられる。遺物は覆土下位より口頸部を損失したⅢ群ａ類土器が1個体、破片数にして15点出土した。このほか北海道式石冠1点、扁平打製石器1点、台石１点、礫3点の形21点出土している。

時期：覆土の下位よりⅢ群ａ類土器（１）が1個体出土し、先に調査した該時期の土壙と覆土の状況や出土する遺物が共通することから縄文時代中期前半、円筒土器上層式サイベ沢Ⅶ式期の土壙であることが考えられる。（袖岡）

掲載遺物：土器　いずれも覆土内出土のⅢ群ａ類、サイベ沢Ⅶ式である。１は口縁部を欠く小型土器。胴が膨らむ器形である。ＬＲ斜行縄文を施したのち、胴部下半に綾絡文を加えたもの。底部付近は横方向に調整され平滑である。内面は縦位の調整で光沢を呈する。２は口縁下に縄線が２条巡るもの。口唇上に縄の圧痕で刻みが加えられ、地文に結束第２種羽状縄文が施されている。（影浦）

石器　覆土中から北海道式石冠１点、たたき石１点、台石１点、礫片３点が出土する。３は安山岩製の北海道式石冠片である。割礫に敲打によって溝をつけるタイプである。楕円形の機能面はよく研磨され、その縁辺には打ち欠き痕が巡る。４は安山岩製のたたき石である。包含層のたたき石の項で礫器としたもので、刃部様の機能部を持つ。縁辺にも打ち欠き調整が見られるが、まばらである。素材の原形を残しており使い込んだ状況とは言い難い。５は台石である。多孔質安山岩の楕円礫について、平らな一面に敲打痕がある。その機能面の長軸に対して斜方向の擦痕が浅く残っており、これはたたき引く様な作業が行われた事を想定する。（大泰司）

Ｐ－ 14（図Ⅲ－ 38）

位置・立地：Ｋ－ 50　台地の北側先端部、標高38m前後

規模：（1.56）×（1.09）／（0.61）×（0.36）／0.61m

確認・調査：包含層Ⅴ～Ⅵ層調査によって、木根による攪乱と誤認し掘り下げ、壊してから土壙であることが判明した。土壙は３分の１程度が残存していた。覆土は1～8層に分けた。３層は焼土を主体とする土である。平面形は円形であったことか推測される。壁の立ち上りは急で明瞭である。壙底は

平坦である。遺物は覆土中よりたたき石1点、偏平打製石器2点、台石1点、礫7点の計11点出土した。
時期：調査区内で他に検出した該時期と考えられる遺構の遺物出土状況や覆土の堆積状況が共通することから縄文時代中期前半の土壙と考えられる。（袖岡）
掲載遺物：石器　覆土中からたたき石１点、偏平打製石器２点、台石１点、礫６点、被熱礫１点が出土している。たたき石、台石としたものは礫にかすかに敲打痕跡を持つものである。１・２は覆土出土で、安山岩製の偏平打製石器である。１は両端に打ち欠き調整がなされる。頂部にも調整が加えられ、直線的な機能部にも打ち欠きがある。ただしむしろ曲線を描く頂部の方が打ち欠きの頻度が高く、包含層出土の側面観が丸みをおびた機能部のものを思わせる。２は被熱しており、機能部には敲打痕が残り、幅の狭い面を形成する。側縁についても打ち欠きと敲打によって両側縁が並行に成形されており、使用されていた可能性が高い。頂部は本来の素材の形状のままで、半円状である。（大泰司）

Ｐ－１７（図Ⅲ－３８）
位置・立地：Ｊ－４８　北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面
規模：（0.90）×（0.69）／（0.75）×（0.69）／（0.24）m
確認・調査：包含層Ⅴ～Ⅵ層の包含層調査で検出した。覆土中からは焼土を検出した。
確認面からみると平面形は不整な円形である。壙底は東側へ傾く。遺物は覆土中より4点の遺物が出土した。
時期：覆土中から焼土を検出しており、調査区で検出されている該時期類似の土壙と共通することから縄文時代中期前半の土壙であることが推測できる。（袖岡）
掲載遺物：石器　覆土中から礫･礫片が２点出土している。掲載遺物はない。（大泰司）

NP－６０　（図Ⅲ－３９～４８、図版17）
位置・立地：Ｆ－４３　標高約39mの平坦面。
規模：0.41／0.26×0.40／0.26×0.17m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層を主体とする黒色土が大半の、自然堆積である。平面形は円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、同一母岩から剥離されたと思われる長さ10cm程の頁岩製のフレイクなどが、北西側と南東側の２ヶ所にまとまって出土した。微細な剥片が出土していないことから、他の場所で剥離され、石器素材として選択されたものが集められたと考えられる。
時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。（村田）
掲載遺物：石器　覆土中から打面が明瞭な剥片（石核片とした）が７点、潰れ痕が明瞭な剥片（Ｕフレイクとした）が13点、連続する剥離を持つがそれを使用痕と断定できない剥片（Ｒフレイクとした）が９点、フレイク53点が出土している。すべて同一母岩のものあるいは非常に近いものと考える。接合作業の結果16点の接合資料を得た。それぞれ打面の転移が頻繁に見受けられる。規則性・法則性を資料から理解することは難しい。ただし、接合資料Ｂについてのみ、母岩が板状節理で、質が均一であるためか、連続して斎一性のある横長剥片を作り出している。73はＢから近いところに接合するものと考えられるが、間を充填する素材部分は発掘では得られていない。

遺物出土状況の特徴としては、土壙の北西側と南東側に遺物が分かれてそれぞれまとまりを形成している事が挙げられる。北西側のまとまりから、接合資料Ａ・Ｆ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｍ・Ｏが、南東側のまとまりから接合資料Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｇ・Ｋ・Ｌ・Ｎ・Ｐが出土している。接合資料が２つの遺物のまとま

りをまたがる事は接合資料Aの６が南東側から出土した以外にはなかった。73についても接合資料Bと同じ南東側からの出土である。　（大泰司）

NP－ 61　（図Ⅲ－ 49・50、図版17）
位置・立地：J－ 46　標高38m付近の緩斜面。
規模：1.33 / 0.94× 0.98 / 0.61× 0.38m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面の土層堆積状況から遺構の重複が予想されたため、これを横断する土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行った。その結果、NP－ 65より新しい遺構である事がわかった。覆土はⅤ層が少量混じるⅣ層が主体の埋め戻しである。平面形は楕円形を呈し、壙底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物出土状況は、壙口部に石皿４点と礫が１点、壙底から偏平打製石器１点と礫が４点出土している。土壙墓の可能性がある。
時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期と考えられる。　（村田）
掲載遺物：石器　覆土中からフレイク１点、偏平打製石器２点、台石３点、礫・礫片３点、被熱礫２点、使用痕のある礫１点が出土した。覆土中の石器を図化した。１・２はいずれも、安山岩製の偏平打製石器である。機能部は敲打によるものか面をなし、その周縁には細かい剥離が目立つ。１は被熱している。割礫の一側縁を使用している。平行する両側縁には敲打痕があり、表面図右側縁に顕著である。機能面は表裏二面ある。２は偏平な礫を使用しており、縁辺の調整はない。３・４は安山岩製の台石片である。３は図化の際，便宜上表面とした側に顕著な擦痕があり、裏面は敲打によって皿状に凹む。４は表裏面ともに敲打痕があり、いずれも皿状に凹む。　（大泰司）

NP－ 62　（図Ⅲ－ 50、図版18）
位置・立地：I－ 44　標高38～39mの平坦面。
規模：（1.42）/（1.02）× 1.28 / 0.93×（0.26）m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層を主体とする自然堆積である。北側は風倒木によって壊されている。壙底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中に散見される程度である。性格は不明。
時期：覆土中および出土遺物から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。　（村田）
掲載遺物：石器　覆土中から石核が１点、石のみが１点、フレイクが２点、礫が１点出土している。１はメノウ製の石核片である。両面から剥片を剥離した痕跡が残る。２は石のみである。F—46区Ⅳ層出土の破片（正面図接合右側）と接合した。片岩製で素材本来の形状を生かし、そのまま研磨する。刃部は折損する。　（大泰司）

NP－ 65　（図Ⅲ－ 51、図版18）
位置・立地：J－ 46　標高38m付近の緩斜面
規模：2.02 / 1.48×（1.70）/ 1.09×（0.78）m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面の土層堆積状況から遺構の重複が予想されたため、これを横断する土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行った。その結果、NP－ 61より古い遺構である事がわかった。覆土はⅣ層の黒色土を主体とする自然堆積で、壁際に崩落したⅤ層が混じる。平面形は楕円形を呈し、壙底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中に散見される程度である。性格は不明。

時期：覆土中および周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期と考えられる。

（村田）

掲載遺物：石器　覆土別に覆土２・３層からフレイクが５点、偏平打製石器が１点出土し、覆土５層から石核が１点出土している。１は頁岩の石核であり、上端に打面が残存する。２は安山岩製の偏平打製石器である。機能部には敲打によるものが面をなし、その周縁には細かい打ち欠き痕が巡る。石器縁辺には敲打調整が巡り、側縁は打ち欠きを併用して直線的に成形する。（大泰司）

NP－ 67　（図Ⅲ－ 51、図版18）

位置・立地：Ｆ－ 43　標高約39mの平坦面。

規模：0.63 / 0.37× 0.58 / 0.3× 0.17m

確認・調査：Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は周辺のＮＰ－ 60、68、69などと同様に、何らかの貯蔵穴と考えられる。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。（村田）

NP－ 68　（図Ⅲ－ 52、図版18）

位置・立地：Ｆ－ 42　標高約39mの平坦面。

規模：0.64 / 0.48× 0.52 / 0.32× 0.15m

確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層を主体とする自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は周辺のＮＰ－ 60、67、69などと同様に、何らかの貯蔵穴と考えられる。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。（村田）

NP－ 69　（図Ⅲ－ 52、図版18）

位置・立地：Ｆ－ 42　標高約39mの平坦面。

規模：0.53 / 0.26× 0.48 / 0.25× 0.15m

確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は周辺のＮＰ－ 60、67、68などと同様に、何らかの貯蔵穴と考えられる。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。（村田）

NP－ 70　（図Ⅲ－ 52、図版19）

位置・立地：Ｇ－ 41・42　標高約39mの平坦面。

規模：1.66 / 1.27× 1.18 / 0.9× 0.25m

確認・調査：Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層とⅤ層が混じる褐色土が主体の自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、壙底は皿状で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中からⅣ群ａ類の土器片が14点出土した。性格は不明。

時期：覆土中および周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、Ⅳ群ａ類土器の時期と考えられる。

（村田）

掲載遺物：土器　１は覆土１出土のⅣ群ａ類。無文地の下に沈線が1条巡る。（影浦）

NP－ 77　（図Ⅲ－ 53、図版19）
位置・立地：J・K－ 47　標高38m付近の平坦面端部。
規模：2.48 / 2.34×　1.87 / 1.27×　0.22m
確認・調査：NH－ 13の調査中、暗褐色土の落ち込みとして確認した。NH－ 13より新しい遺構である。覆土はⅤ・Ⅵ層が混じる暗褐色土を主体とする自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、壙底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中に散見される程度である。性格は不明。
時期：覆土中および周辺の遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期と推測される。　（村田）
掲載遺物：土器　1は覆土１出土のⅡ群ｂ類。地文は結束第１種結束縄文を地文とする。内面調整は平滑で、胎土には繊維を含んでいる。　（影浦）
石器　覆土中からスクレイパー１点、Uフレイク１点、Rフレイク１点、フレイク３点、たたき石１点、礫･礫片３点が出土する。２は玄武岩製の折損したスクレイパーであり,背面左側縁に浅い調整が連続する。背面右側縁には節理面を含むがその縁辺にも調整が及ぶ。３は安山岩製のたたき石である。偏平な礫の一縁辺に敲打による機能部を持つ。機能部周縁には粗い打ち欠きが巡る。　（大泰司）

NP－ 80　（図Ⅲ－ 53、図版19）
位置・立地：F－ 46・47　標高39m付近の平坦面端部。
規模：2.48 / 2.34×　1.87 / 1.27×　0.22m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ層を主体とする自然堆積で、壁および壙底に崩落によるⅤ・Ⅵ層がブロック状に混入している。平面形は円形を呈し、壙底はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中から、Ⅲ群ａ類土器が９点、Ⅳ群ａ類土器が７点とUフレイク１点が出土している。性格は不明。
時期：遺構および周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期と考えられる。（村田）
掲載遺物：石器　覆土中からUフレイクが１点出土している。掲載遺物はない。　（大泰司）

NP－ 81　（図Ⅲ－ 54、図版19）
位置・立地：J－ 45　標高37.5～38m付近の緩斜面。
規模：1.38 / 1.25×　1.15 / 1.0×　0.55m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層を主体とした埋め戻しである。平面形は隅丸方形を呈する。壙底はほぼ平坦で、脆い頁岩を主体とするⅦ層が露出している。Ⅶ層は硬いため、この面で掘削をやめたと考えられる。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。遺物は覆土上層の自然堆積層（Ⅳ層）から礫が２点出土している。土壙墓の可能性がある。
時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期と考えられる。　（村田）
掲載遺物：石器　覆土中から礫３点（うち原石１点）、被熱礫１点が出土している。掲載遺物はない。
（大泰司）

NP－ 82　（図Ⅲ－ 55～57、図版20）
位置・立地：I・J－ 45　標高38m付近の緩斜面。
規模：1.62 / 1.43×　（1.47）/ 1.13×　0.77m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。埋め戻しの覆土である。Ⅳ層を主体とする黒色土（１、2層）、Ⅳ層を主体とし炭化物を含む黒褐色土（３、４層）、Ⅳ・Ⅴ層を主体とし炭化物を

含む黒褐色土（５～８層）、Ⅴ・Ⅵ層を主体とする褐色土（９～12層）の大きく4層に大別でき、遺物の取上げもこの大別で行った。取上げ層位の1層は覆土１・２層、２層は覆土３・４層、３層は５～８層、４層は一部壙底と壁出土の遺物を含み９～12層に相当する。平面形は楕円形を呈し、壙底はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。遺物出土状況は、覆土の上層から中層で、Ⅲ群ａ類土器がまとまって出土している。覆土の中層から壙底にかけて北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石、石皿・台石などの礫石器が13点出土した。また、人頭大の礫２点とこぶし大の礫が27点、軽石が1点出土している。剥片石器は少なく、Ｕフレイク・フレイクが４点とメノウの原石が1点のみである。土壙墓である。

時期：出土遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期である。（村田）

掲載遺物：土器　１～４はⅢ群ａ類、サイベ沢Ⅶ式である。１は覆土１においてまとまって出土した。底部が張り出し、大きく屈曲したのち、垂直に開く器形で、口縁部は大きく外反する。４ヶ所の山形突起を持っており、突起部は特に外にせり出す。口縁部断面形は角形に近く、口唇上には縄の圧痕が斜位に連続的に施されている。縄線および縄端の圧痕が突起上にも観察される。体部には結節斜行縄文が施されている。底部付近の屈曲部分は横方向に調整がなされ、地文が平滑に磨り消されている。内面には指頭圧による凹凸がやや残っている。２は覆土３と覆土４の土器が接合したもの。ＬＲの斜行縄文が地文。底部付近は横方向の調整で磨り消されている。内外面ともに指頭による凹凸が認められるが、内面は平滑に調整されている。胎土に繊維と若干の海綿骨針を含んでいる。３は覆土２で出土した。撚りの異なる２つの原体で羽状縄文が施され、その上に繊維痕の明瞭な浅い沈線を引いている。口唇上には太い縄の圧痕が施されている。４は覆土４と壙底で出土した土器片が接合したもの。ＲＬＲの複節斜行縄文を地文とする。底部断面が張り出す器形で、内面は平滑。胎土中に砂礫を含む。５・６はⅡ群ｂ類、円筒土器下層ｄ式である。いずれも口縁下に細い縄線を複数条巡らせている。胎土には繊維の混和が認められる。５は壁から出土した。撚糸文と結束羽状縄文が組み合わされたものである。６は覆土３の出土。体部に綾絡文と多軸絡条体の回転文を施文している。（影浦）

石器　覆土別に遺物出土状況を見ると、壁面からたたき石が１点、被熱礫が２点出土している。壙底部から叩き石が１点、被熱礫が３点出土している。覆土中からフレイクが３点、北海道式石冠が３点、偏平打製石器が４点、たたき石が２点、台石が１点、石皿が１点、礫・礫片が17点（うち軽石が１点）、被熱礫３点が出土している。７～９は安山岩製の北海道式石冠である。いずれも楕円礫の割礫に敲打で溝を刻むタイプである。明瞭なすり面を持ち、その周縁は所々細かい打ち欠きがある。10～12は偏平打製石器である。10は覆土１と覆土４から出土した破片が接合した。安山岩製で片面には礫面を残す。機能部は敲打によるものか薄い面を呈する側縁も一部打ち欠き調整を持つ。頂点にも敲打痕跡が微妙に残る。11は覆土３、６は覆土４から出土した安山岩製偏平打製石器片である。機能部は刃部様を呈する。12の機能部は敲打によるものか薄い面を呈する。13は安山岩のたたき石である。片面礫器とでも言うべきか、一端部に細かい打ち欠き痕跡がならび、大きな打ち欠きは他の縁辺にも及ぶ。14は覆土４から出土した安山岩製の石皿である。擦痕により皿状の平坦面を持つ。安山岩の特質から、鉱物が欠落したか所が、数か所皿面にあるが、そのひとつの孔には密な螺旋状に条線痕がある。（大泰司）

NP－84　（図Ⅲ－58、図版20）

位置・立地：K－46　標高38m付近の緩斜面。

規模：1.27／1.12×0.84／0.69×0.38m

確認・調査：Ⅴ層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層を主体とした埋め戻しで、

Ⅴ層はブロック状に混入する。平面形は楕円形を呈し、壙底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。土壙墓の可能性がある。
時期：出土遺物はなく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期と推測される。（村田）
掲載遺物：石器　覆土中からUフレイク１点が出土している。掲載遺物はない。（大泰司）

NP－85　（図Ⅲ－58、図版21）
位置・立地：K－47　標高37.5～38m付近の緩斜面。
規模：（1.88）／（1.73）× 1.64／1.47×（0.32）m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅤ層を主体とした褐色土で自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、壙底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土に散見される程度である。性格は不明。
時期：出土遺物が少なく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代前期後半もしくは中期前半の遺構と推測される。（村田）
掲載遺物：石器　覆土中からフレイク２点、石錐１点が出土している。１は頁岩製石錐である。突き刺す機能を持つものと考えられ先端部は折損している。背面には礫面を含む。機能部を形成する縁辺には極浅い調整が巡る。（大泰司）

NP－86　（図Ⅲ－59、図版21）
位置・立地：H－46・47　標高39m付近の平坦面。
規模：3.00／2.57× 2.14／1.83× 0.82m
確認・調査：Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は１層と２層を境に上下に区分される。上層部はⅣ・Ⅴ・Ⅵ層が互層または斑状、ブロック状に混入した土層で、自然流入土や隣接する遺構の掘揚げ土と考えられ、１層として一括した。２層以下は黒色土の流入がみられない埋め戻しの覆土で、一部に壁が崩落したⅤ層の堆積が見られる。平面形は楕円形を呈し、壙底はほぼ平坦である。壁は壙底から急角度で立ち上がり、中ほどから壙口に向かって漏斗状に広がっている。遺物出土状況は、覆土中に散見される程度で、まとまりはない。遺物はⅡ群ｂ類の土器片が最も多いが、周辺にこの時期の住居跡があり、埋め戻す際に遺物が混入したものと考えられる。覆土の堆積状況から土壙墓と考えられる。
時期：周辺の遺物や他の土壙との関連から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期の遺構と推測される。（村田）
掲載遺物：土器　１・２は覆土１の出土、３は壁からの出土である。１～３はⅡ群ｂ類。円筒土器下層ｄ式である。１は口縁部文様帯が鋸歯状をしており、体部地文は単軸絡条体が縦位に回転施文されている。口縁部文様帯の区画帯には綾絡文が加えられている。２は口唇断面が丸みを持つ。口縁下に縄線を４条巡らせ、体部に単軸絡条体の回転文と綾絡文が施されている。３は底部片。やや膨らみを持ちながら立ち上がる器形で、地文は単軸絡条体の回転文である。（影浦）
石器　覆土中からスクレイパー３点、Rフレイク１点、Uフレイク１点、フレイク３点、礫１点、被熱礫２点が出土している。４～６は珪質頁岩製のスクレイパーである。４は破片であり、比較的浅い調整である。５は横長剥片を用いた削器で、比較的浅い調整でL字状の刃部を形作る。６は折損しているが縦長剥片と考えられ、その一側縁に極浅い調整を施したものである。（大泰司）

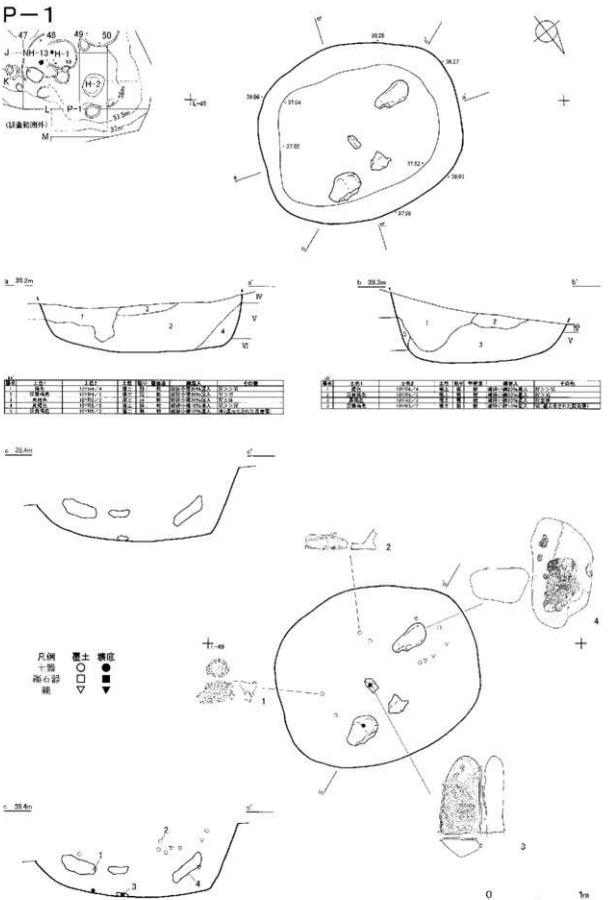
NP－ 88　（図Ⅲ－ 60・61、図版22）
位置・立地：J－ 44・45　標高37.5m付近の緩斜面。
規模：（1.57）／1.2×（1.34）／1.16× 0.82m
確認・調査：Ⅴ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅤ層を主体とする埋め戻しである。覆土２層は炭化物を含む。平面形は円形を呈する。壙底は平坦で脆い頁岩を主体とするⅦ層が全面に露出している。Ⅶ層は硬いため、この面で掘削をやめたと思われるが、斜面上部に位置する南西側は壙底を平坦にするために、若干掘り込んでいる。壁は壙底から急に立ち上がる。遺物出土状況は、壙口部にⅢ群ａ類の土器が１個体、横倒しのつぶれた状態で出土した。石器は同じレベルで、スクレイパー、偏平打製石器、たたき石などが出土している。土壙墓である。
時期：出土遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期である。（村田）
掲載遺物：土器　いずれも覆土１で出土したⅢ群ａ類、サイベ沢Ⅶ式である。４は胴部下半が膨らみ、口縁が開く器形。結束第2種斜行縄文を地文とするが底部付近は横方向の調整で磨り消されている。口縁には２本一組になっている小形のツノ状突起と、上向きに開いた「Ｃ」字状突起が左右に並んだ２種２対の突起を持つ。それぞれの突起下には小突起を結ぶ「Ｙ」字状の橋状把手が縦位に付され、縄の圧痕、環状の貼付が施されている。橋状把手を中心軸として地文の原体による結節のある縄線が連弧文風に展開している。口縁部の断面形は幅広で、その中央に半截竹管状の工具により深い沈線を引いて上下に分割し、それぞれに結節のある縄線文が加えられている。内面は指頭圧による凹凸が顕著であるが、平滑に調整され、鈍い光沢を呈している。胎土中には海綿骨針の混和が顕著である。５は粘土紐の貼付によって文様帯を構成するもの。貼付上に細い縄線を施している。（影浦）
石器　覆土中からスクレイパー１点、Ｒフレイク１点、偏平打製石器１点、たたき石１点、礫５点（うち軽石１点）が出土している。１は珪質頁岩製のスクレイパーである。不整な縦長剥片の両側縁に極浅形調整を施す。背面右側縁は両面調整である。２は安山岩製の偏平打製石器である。敲打によるものか機能面を持ち、周縁に打ち欠き痕・敲打痕が巡る。側縁および周縁にも打ち欠き痕が巡る。表面には敲打による凹みを有する。３は安山岩製のたたき石である。割礫の底面側の割面に敲打痕がある。（大泰司）

NP－ 89　（図Ⅲ－ 62、図版22）
位置・立地：F－ 47・（48）　標高38m付近の西側緩斜面。
規模：（0.61）／（0.39）×（0.74）／（0.47）× 0.44m
確認・調査：2001年調査区との境に設定した土層断面で確認した。覆土はⅣ層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈すると思われるが不明である。壙底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は不明。
時期：出土遺物がなく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。（村田）

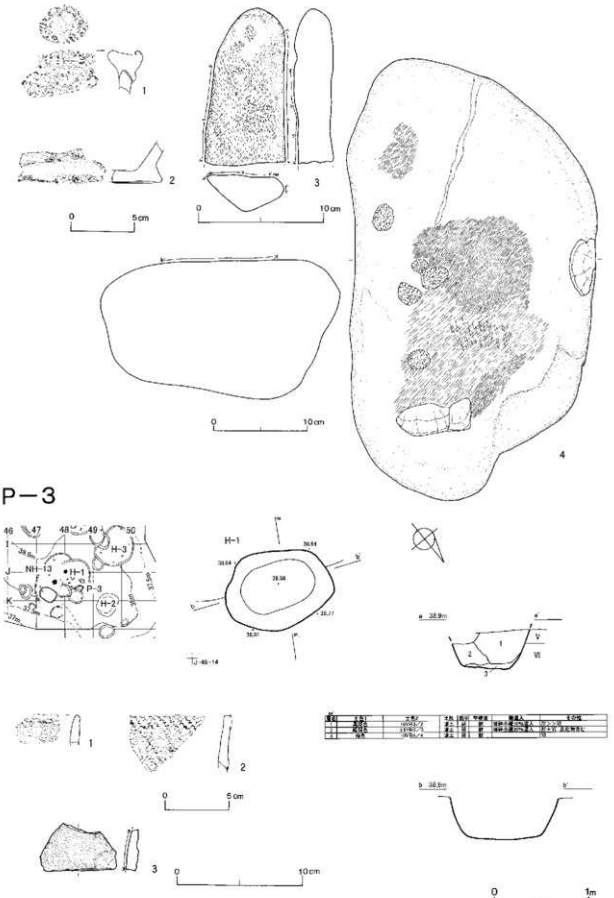
NP－ 90　（図Ⅲ－ 62、図版22）
位置・立地：E・F－ 46　標高39m付近の平坦面端部。
規模：0.94／0.67× 0.81／0.66× 0.31m
確認・調査：Ⅴ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅣ・Ⅴ層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈し、壙底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。棒状の礫が出土している。

性格は不明。
時期：出土遺物が少なく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。（村田）

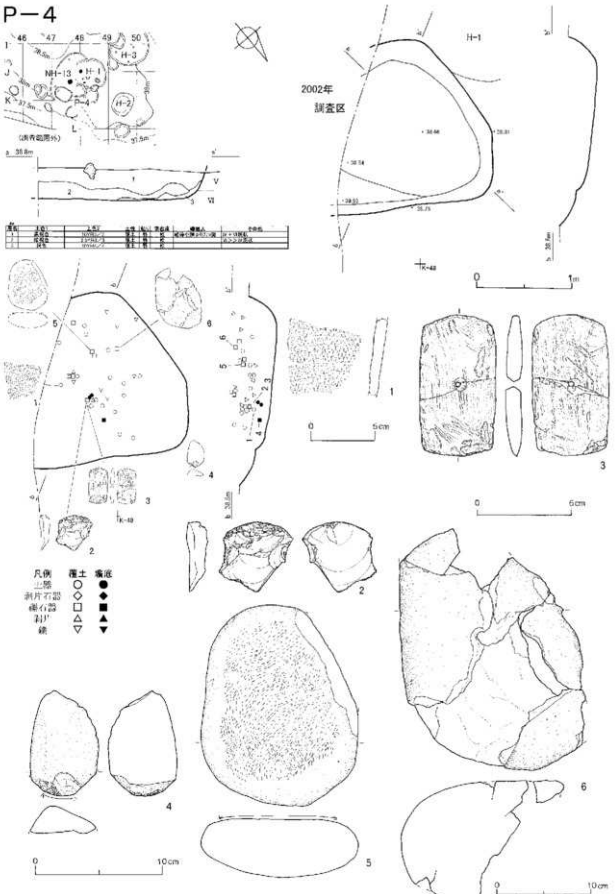
NP－92　（図Ⅲ－62、図版23）
位置・立地：G・H－44　標高38.5m付近の平坦面。
規模：1.16／0.77×0.96／0.8×0.36m
確認・調査：NH－19の調査中に黒褐色土の落ち込みとして確認した。土層断面の観察からNH－19より古い遺構であることがわかった。覆土はⅤ層を主体とする自然堆積である。平面形は不整楕円形を呈し、壙底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土中に散見されるが、壙底付近から偏平打製石器が1点出土している。性格は不明。
時期：出土遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群ａ類土器の時期と考えられる。（村田）
掲載遺物：土器　いずれも覆土２からの出土したⅢ群a類、サイベ沢Ⅶ式の胴部片である。１は貼付が上端に残存している。（影浦）
掲載遺物：石器　覆土中から偏平打製石器が１点、礫が１点出土している。３は安山岩製の偏平打製石器である。機能部には敲打痕があり、幅の狭い平坦面を形成する。側縁を含め、縁辺には打ち欠きによる調整痕が巡る。（大泰司）


P－1
47
48
49
50
J
NH-13
H-1
H-2
K
L
P-1
M
(調査範囲外)
a 38.2m
a'
b 38.3m
b'
c 38.4m
c'
尺例
土器
礫石器
縄
覆土
構底
0
1m

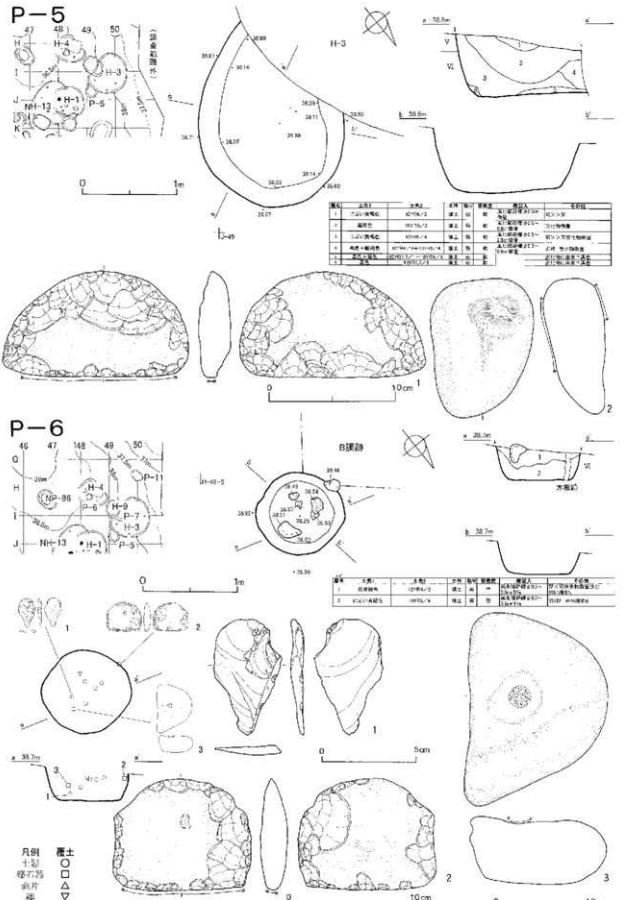
図Ⅲ－29　P－1



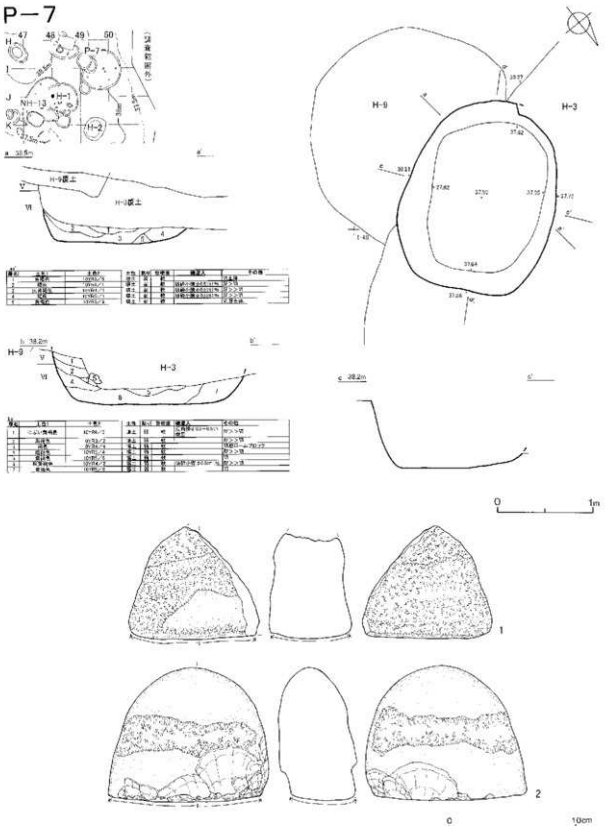
図Ⅲ－ 30　P－ 1の遺物とP－ 3



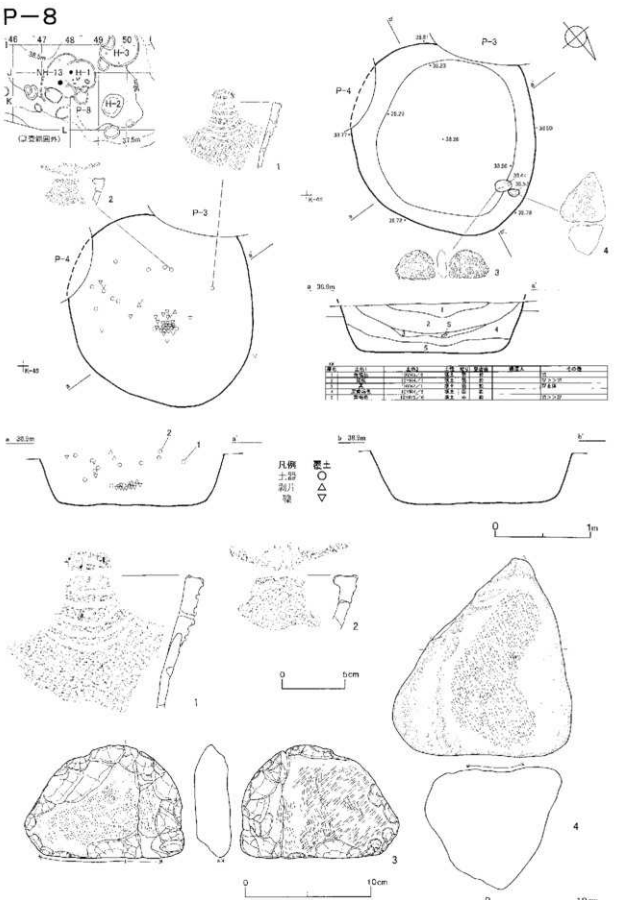
図Ⅲ－31　P－4と遺物



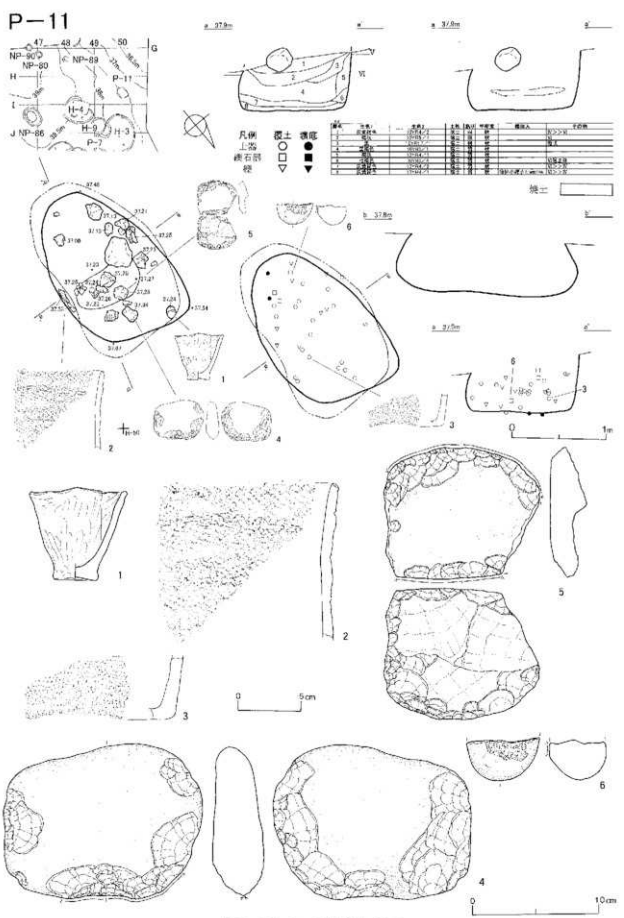
図Ⅲ－32　P－5・6と遺物



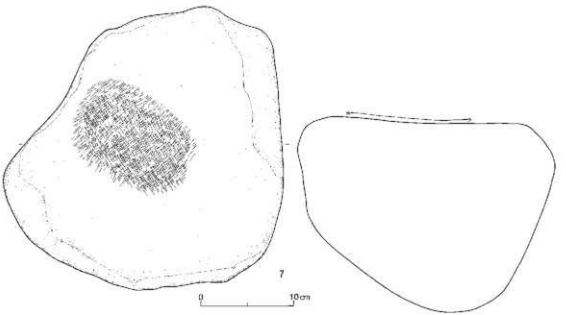
図Ⅲ－33　P－7と遺物


P－8
46
47
48
49
50
H-3
NH-13
H-1
P-8
H-2
(2)調査区外
P-3
P-4
凡例
表土
土器
剥片
礫
0
1m
0
5cm
0
10cm
0
10cm

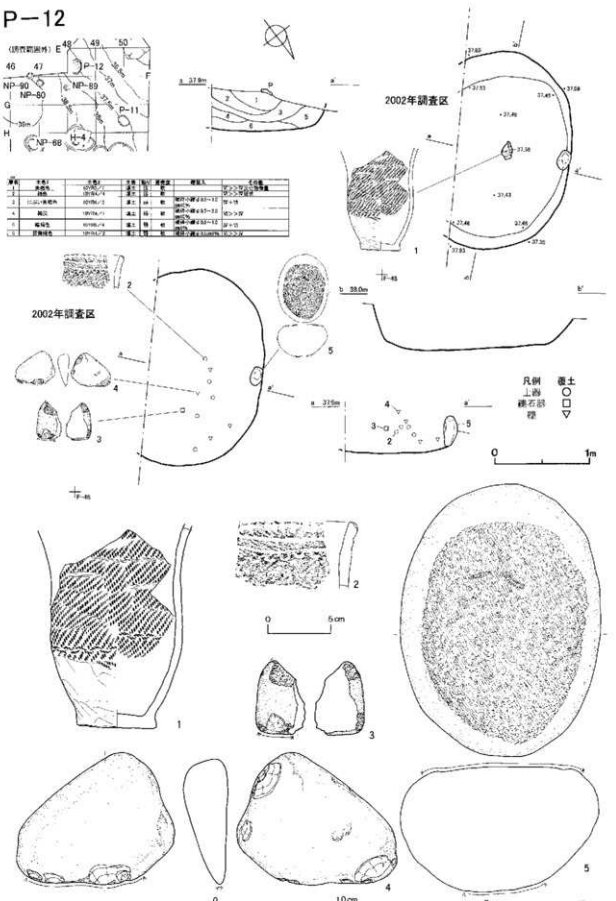
図Ⅲ- 34　P- 8と遺物



図Ⅲ－35　P－11と遺物（1）

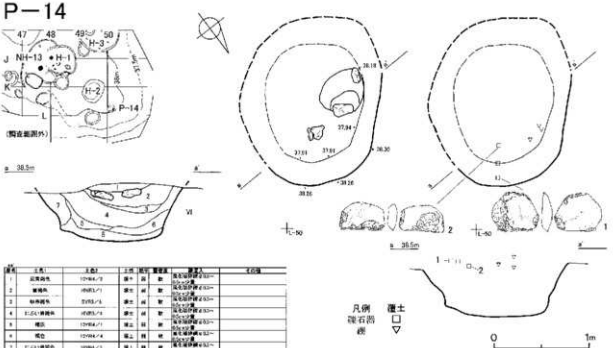


図Ⅲ－36　P－11の遺物（2）

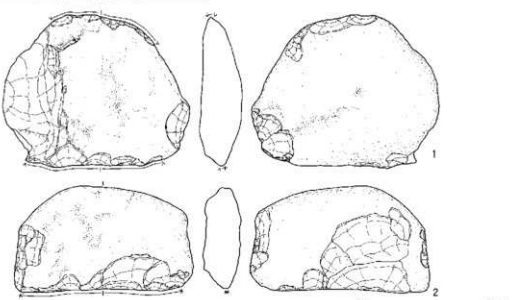


図Ⅲ－37　P－12と遺物（1）

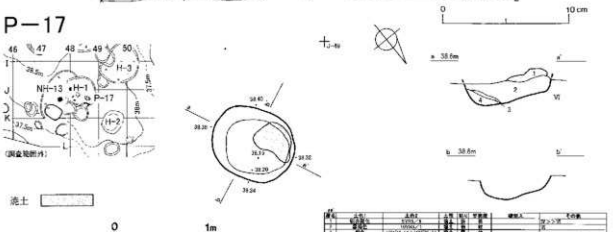
P－14



番号	土色	土色2	土性	粘性	密度	備考入	その他
1	灰黄褐色	10YR4/2	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)ローム粒(φ5mm)炭化物	
2	黒褐色	10YR2/2	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)ローム粒(φ5mm)炭化物	
3	暗赤褐色	2.5YR3/6	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)炭化物	
4	にぶい黄褐色	10YR5/4	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)ローム粒(φ5mm)炭化物	
5	褐色	10YR4/6	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)ローム粒(φ5mm)炭化物	
6	褐色	10YR4/4	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)ローム粒(φ5mm)炭化物	
7	にぶい黄褐色	10YR5/4	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)ローム粒(φ5mm)炭化物	
8	灰黄褐色	10YR4/2	埴土	粘	密	焼土粒(φ5mm)ローム粒(φ5mm)炭化物	

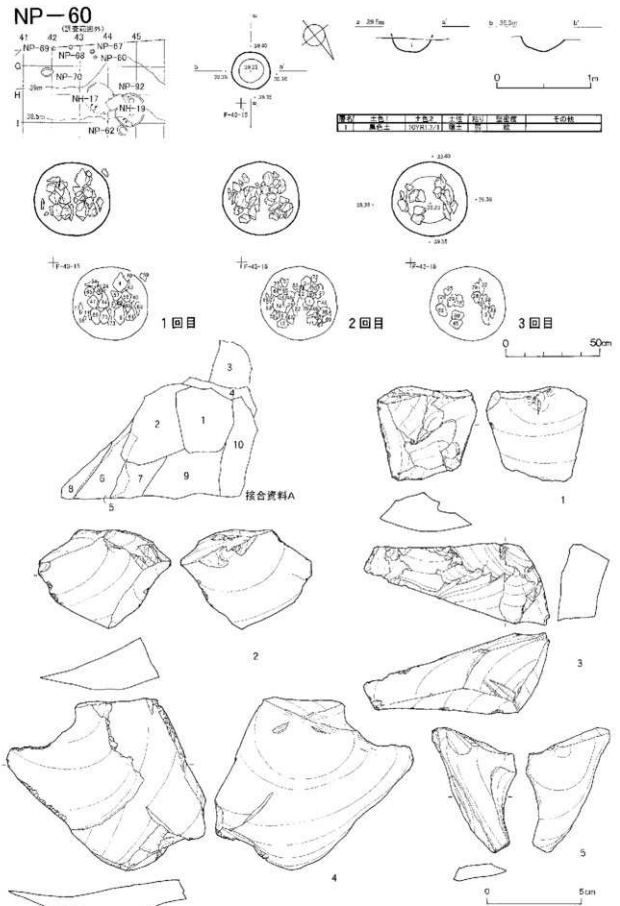


P－17

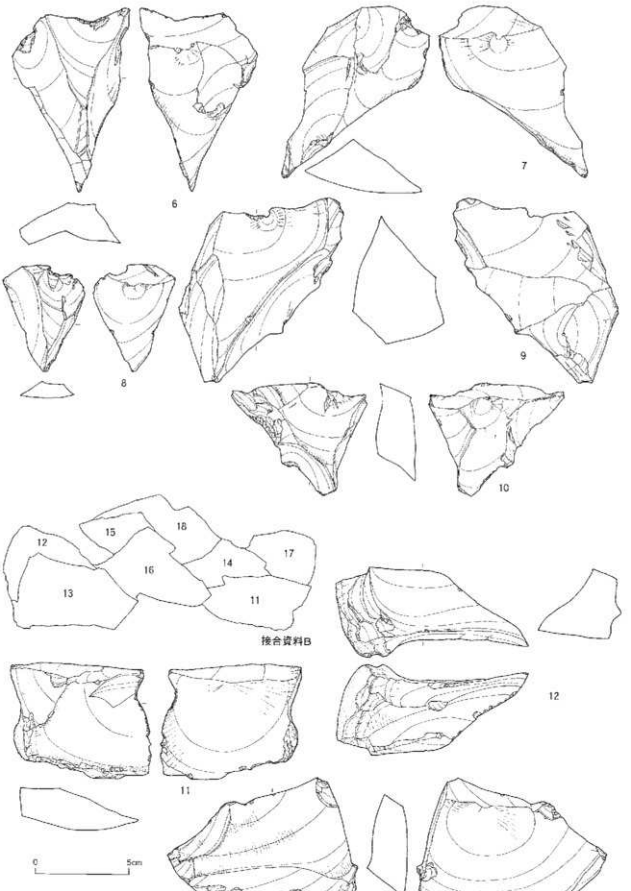


番号	土色	土色2	土性	粘性	密度	備考入	その他
1	褐色	10YR4/6	埴土	粘	密		ローム粒
2	暗褐色	10YR3/3	埴土	粘	密		
3	褐色	10YR3/4	埴土	粘	密		
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	埴土	粘	密		ローム粒

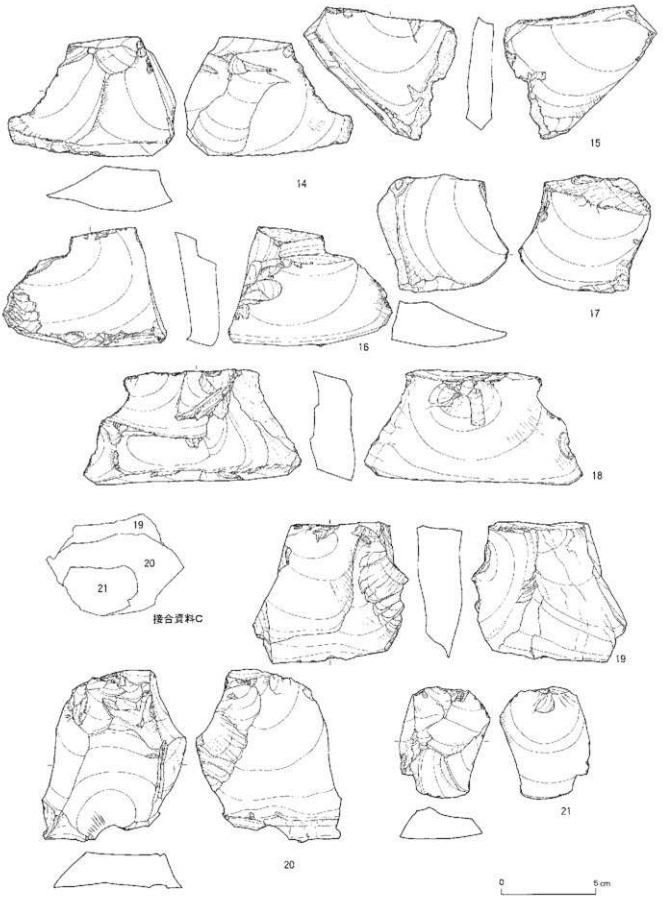
図Ⅲ－38　P－14と遺物、P－17



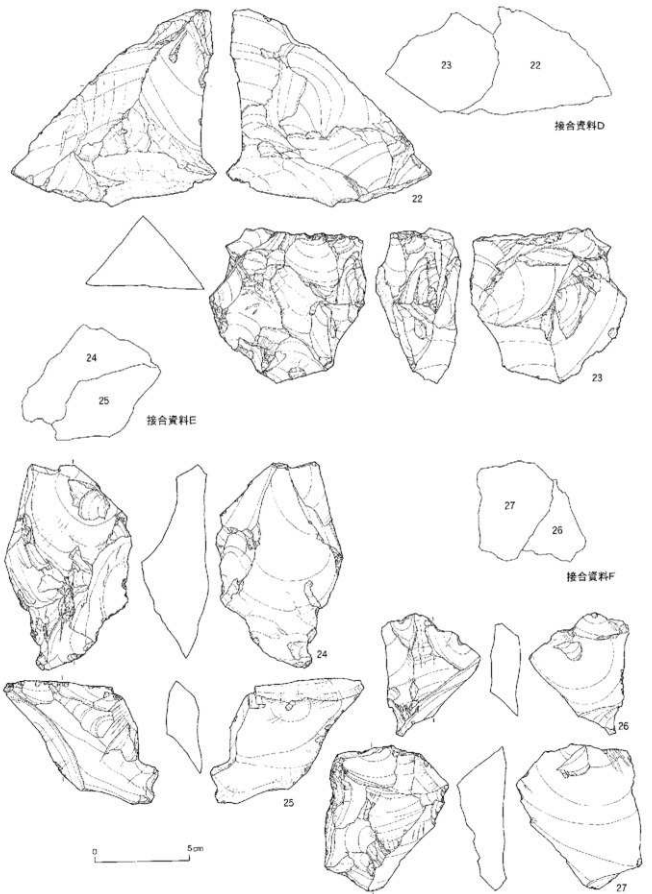
図Ⅲ－ 39　NP－ 60と遺物（１）



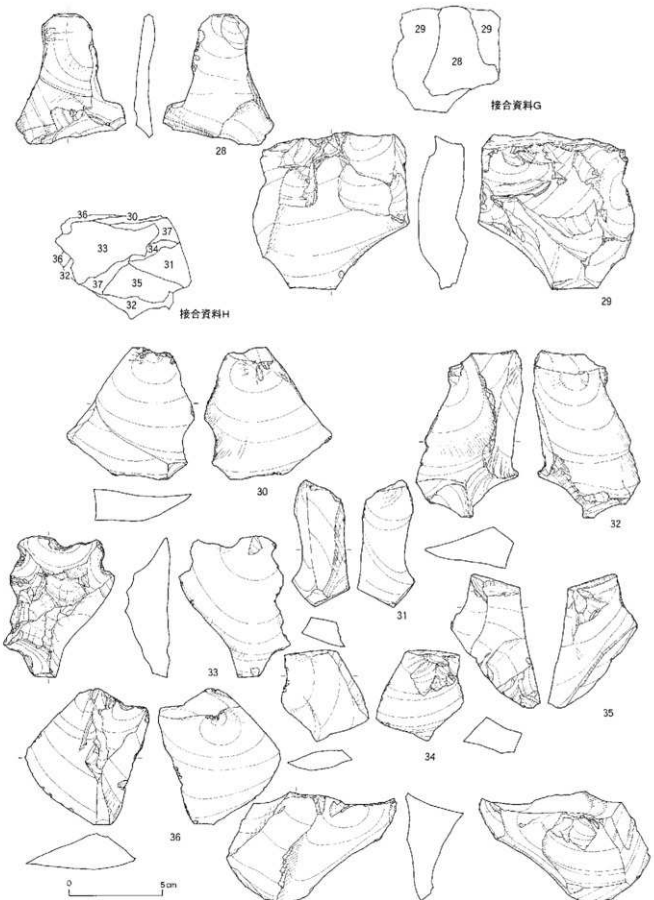
図Ⅲ- 40　NP- 60の遺物（２）



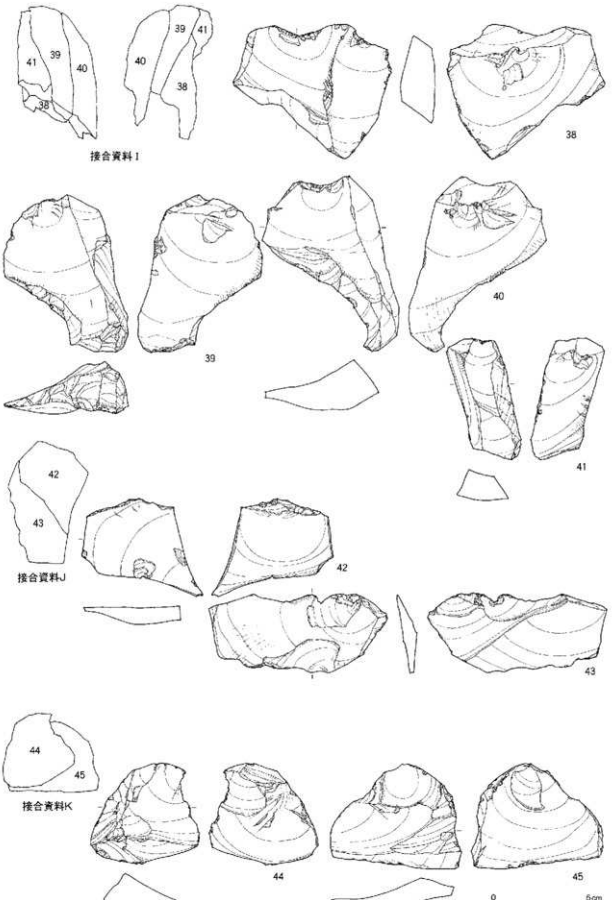
図Ⅲ- 41　NP- 60の遺物（３）



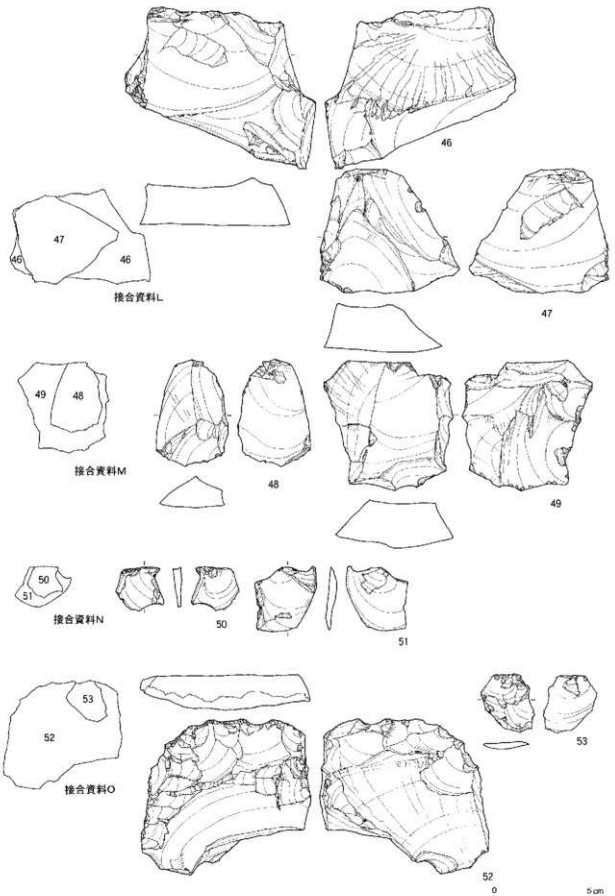
図Ⅲ- 42　NP- 60の遺物（４）



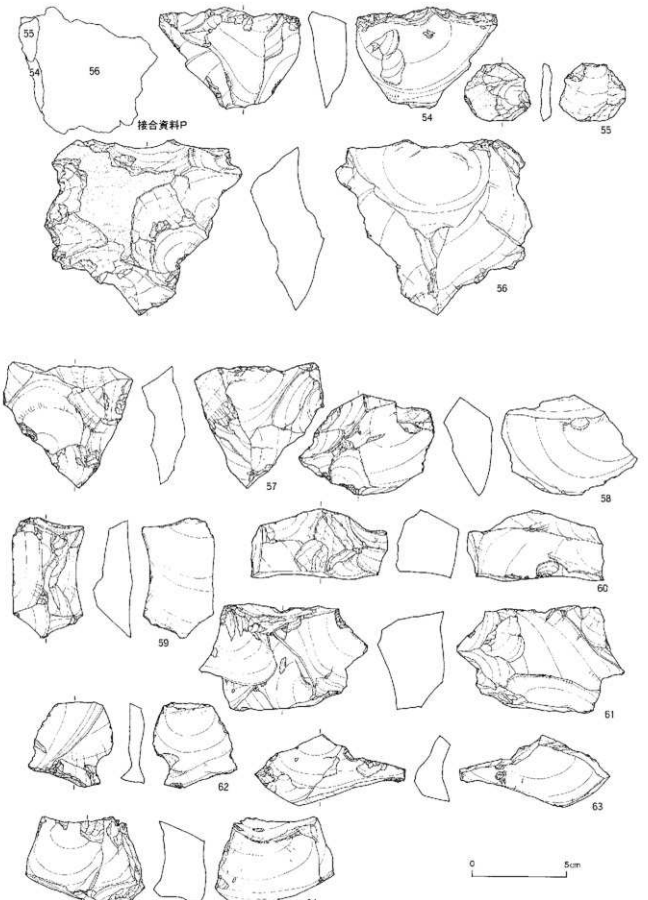
図Ⅲ－43　NP－60の遺物（５）



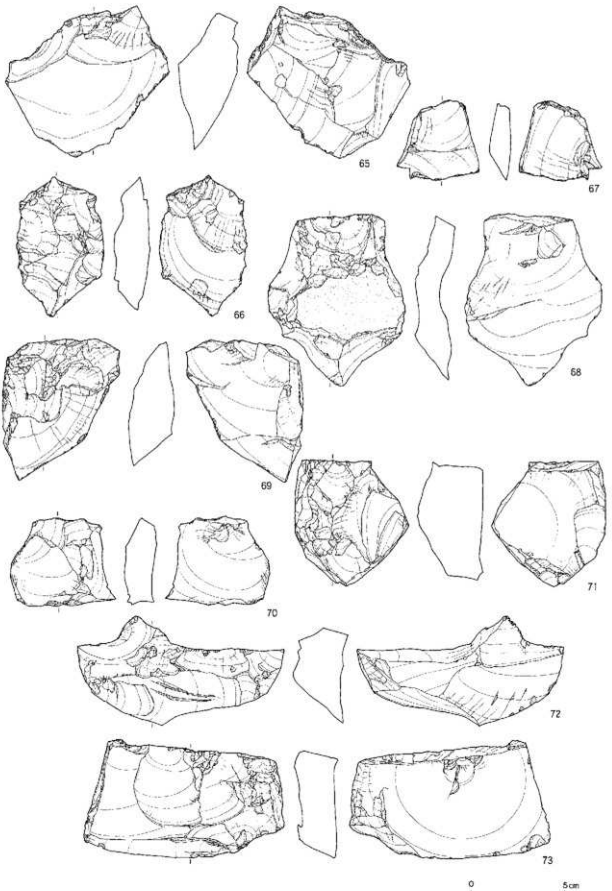
図Ⅲ- 44 NP- 60の遺物（６）



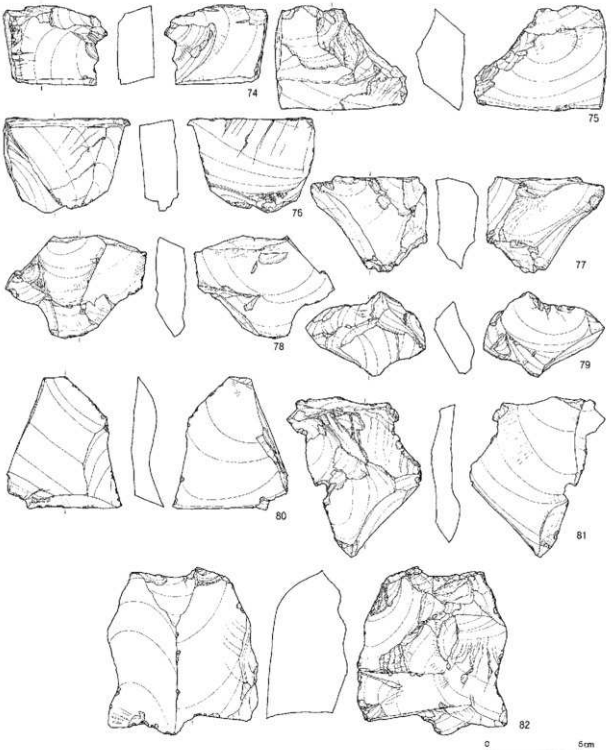
図Ⅲ- 45　NP- 60の遺物（７）



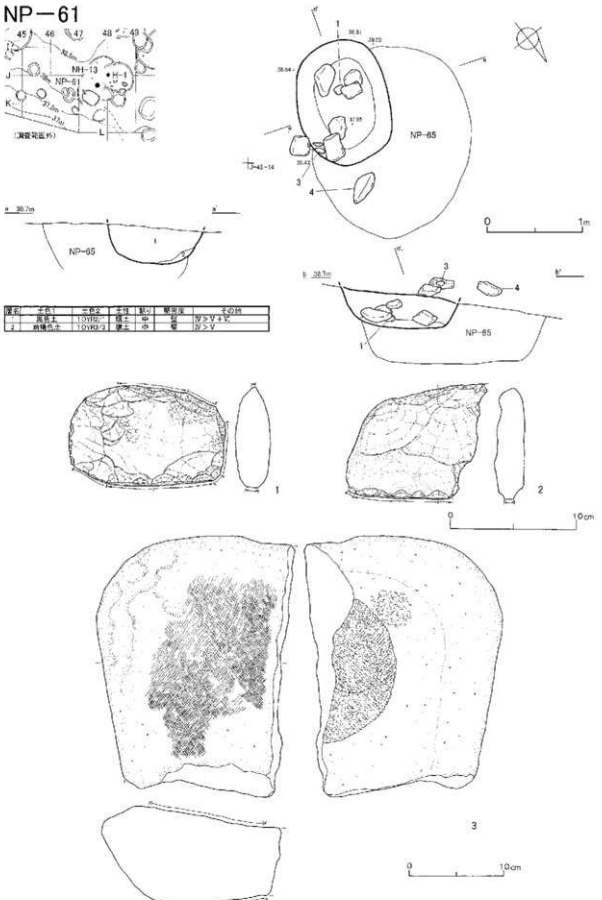
図Ⅲ- 46　NP- 60の遺物（８）



図Ⅲ－47　NP－60の遺物（９）

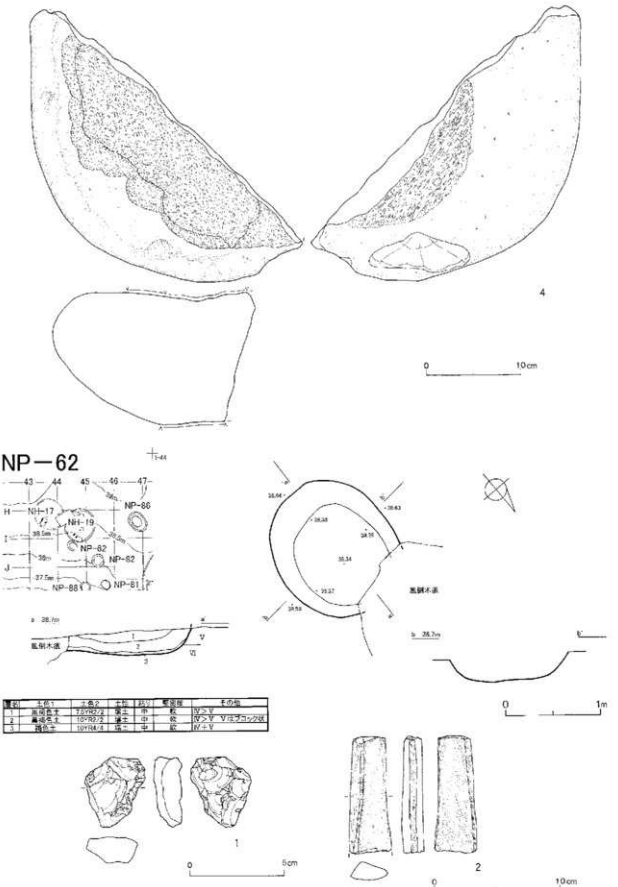


図Ⅲ- 48　NP- 60の遺物（10）



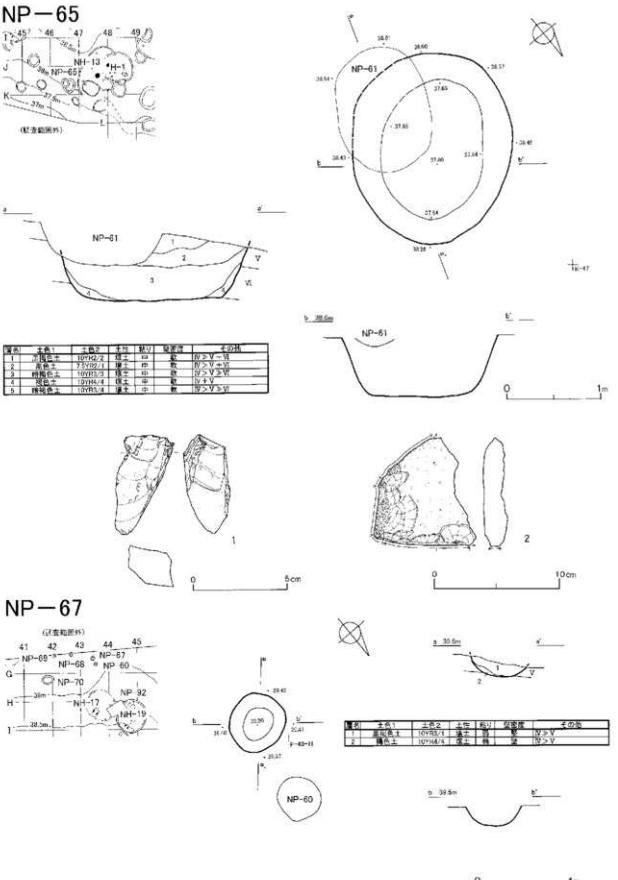
層位	土色	土色	土性	粘い	堅密度	その他
1	黒褐土	10YR/	埴土	中	堅	カ＞V＋マ
2	暗褐色土	10YR/2	壌土	小	軟	カ＞V

図Ⅲ－ 49　NP－ 61と遺物（１）



番号	土色1	土色2	土質	粘ソフト	堅密度	その他
1	黒褐色土	7.5YR2/2	粘土	中	軟	W＜Y
2	暗褐色土	10YR3/3	粘土	中	軟	W＞Y　Yパッチ少量
3	褐色土	10YR4/4	砂土	中	軟	W＜Y

図Ⅲ－50　NP－61の遺物（２）NP－62と遺物

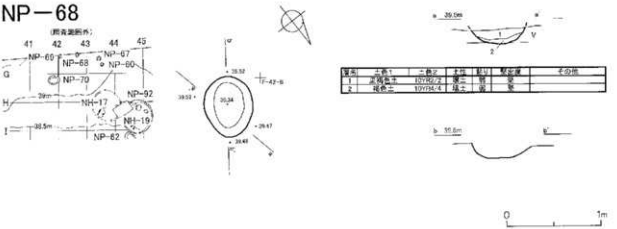


層位	土色1	土色2	土性	粘り	堆積速	その他
1	灰褐色土	10YR2/2	埴土	中	軟	IV＞V＝VI
2	黒色土	7.5YR2/1	埴土	中	軟	IV＞V＝VI
3	暗褐色土	10YR3/3	埴土	中	軟	IV＞V＞VI
4	褐色土	10YR4/4	埴土	中	軟	IV＝V
5	暗褐色土	10YR3/4	埴土	中	軟	IV＞V＞VI

層位	土色1	土色2	土性	粘り	堆積速	その他
1	黒褐色土	10YR3/1	埴土	強	軟	IV＞V
2	褐色土	10YR4/4	埴土	強	硬	IV＞V

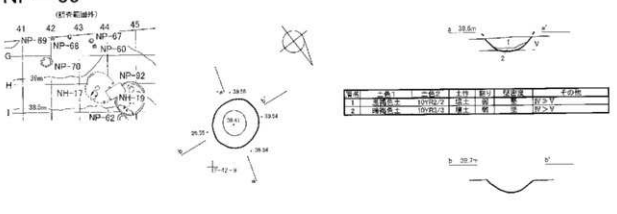
図Ⅲ－ 51　NP－ 65と遺物、NP－ 67

NP－68



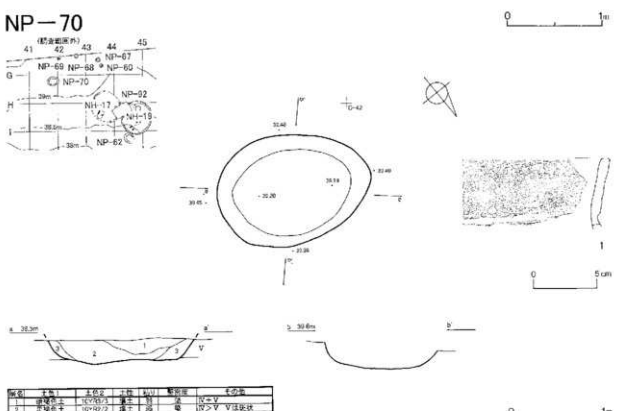
層位	土色1	土色2	土性	粘性	堅密度	その他
1	灰褐色土	10YR2/2	埴土	粘	堅	
2	黒褐色土	10YR2/3	埴土	粘	堅	

NP－69



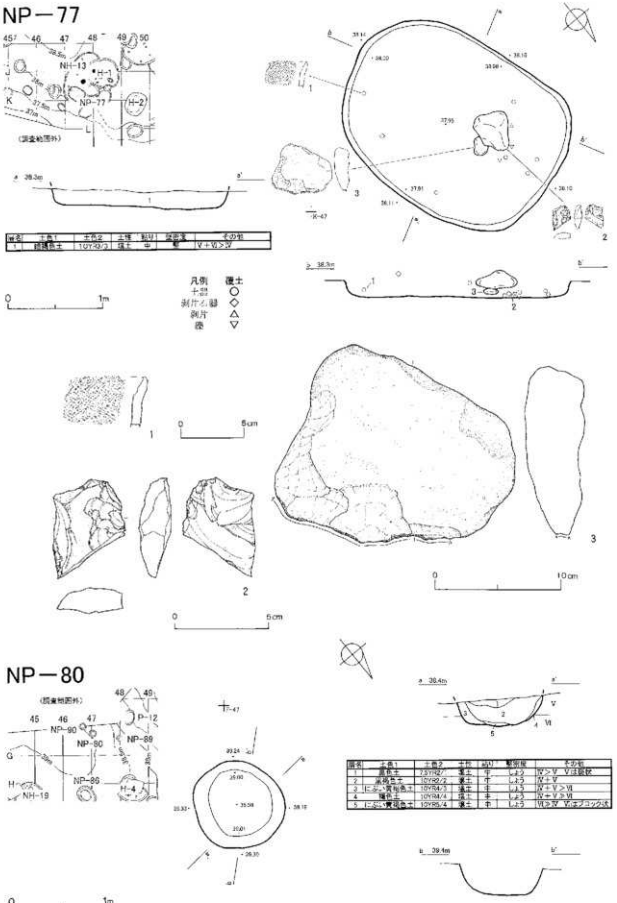
層位	土色1	土色2	土性	粘性	堅密度	その他
1	灰褐色土	10YR2/2	埴土	粘	堅	粘＞V
2	褐灰色土	10YR5/1	埴土	粘	堅	粘＞V

NP－70



層位	土色1	土色2	土性	粘性	堅密度	その他
1	褐灰色土	10YR5/1	埴土	粘	柔	V＞Y
2	灰褐色土	10YR5/2	埴土	粘	堅	V＞Y　V法状状
3	褐灰色土	10YR5/1	埴土	中	堅	V＞Y

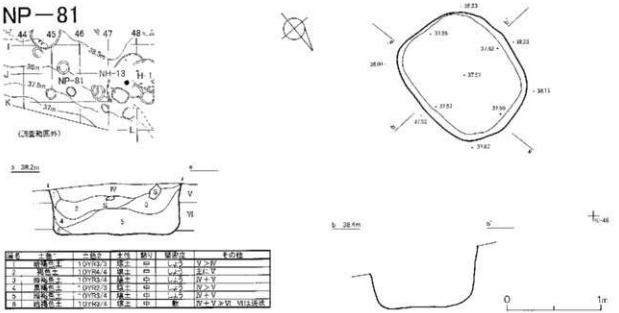
図Ⅲ－52　NP－68・69・70



遺構	土色1	土色2	土性	粘性	堅密度	その他
1	暗褐色土	10YR2/3	埴土	＋	軟	Ⅳ＋Ⅵ＞Ⅴ

遺構	土色1	土色2	土性	粘性	堅密度	その他
1	黒色土	7.5YR2/2	埴土	中	しまり	Ⅳ＞Ⅴ　Ⅴは鉄鉄
2	赤褐色土	10YR2/2	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ
3	にぶい黄褐色土	10YR4/3	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ＋Ⅵ
4	褐色土	10YR4/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ＋Ⅵ
5	にぶい黄褐色土	10YR5/4	埴土	中	しまり	Ⅵ＞Ⅳ　Ⅴはブロックが

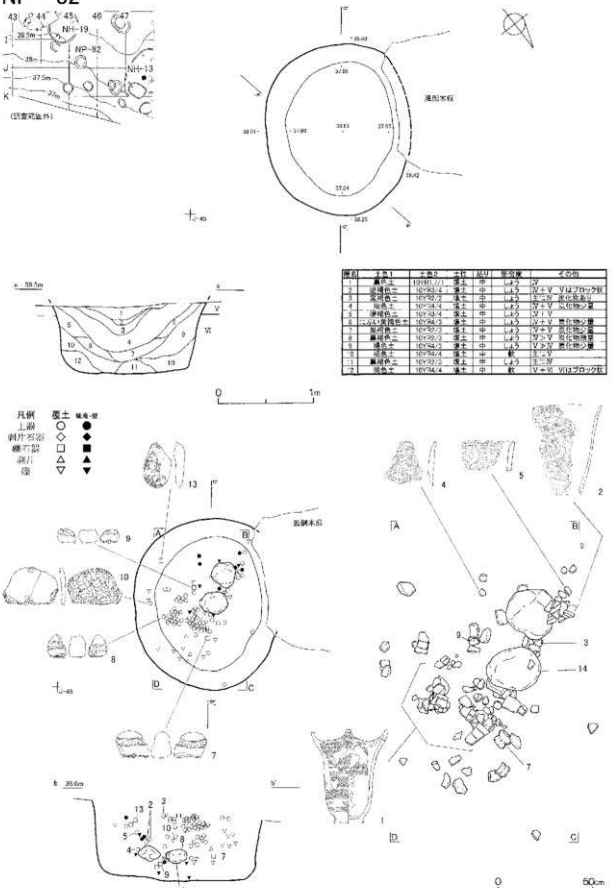
図Ⅲ－53　NP－77と遺物、NP－80



層番	土色	マンセル	土性	粘性	硬軟度	その他
1	暗褐色土	10YR3/3	埴土	中	しまり	Ⅴ>Ⅳ
2	黒色土	10YR4/4	埴土	中	しまり	主にⅤ
3	暗褐色土	10YR3/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ
4	黒褐色土	10YR2/3	埴土	中	しまり	Ⅳ>Ⅴ
5	褐色土	10YR3/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ
6	褐色土	10YR4/4	埴土	中	軟	Ⅳ＋Ⅴ≫Ⅵ、Ⅵは硬質

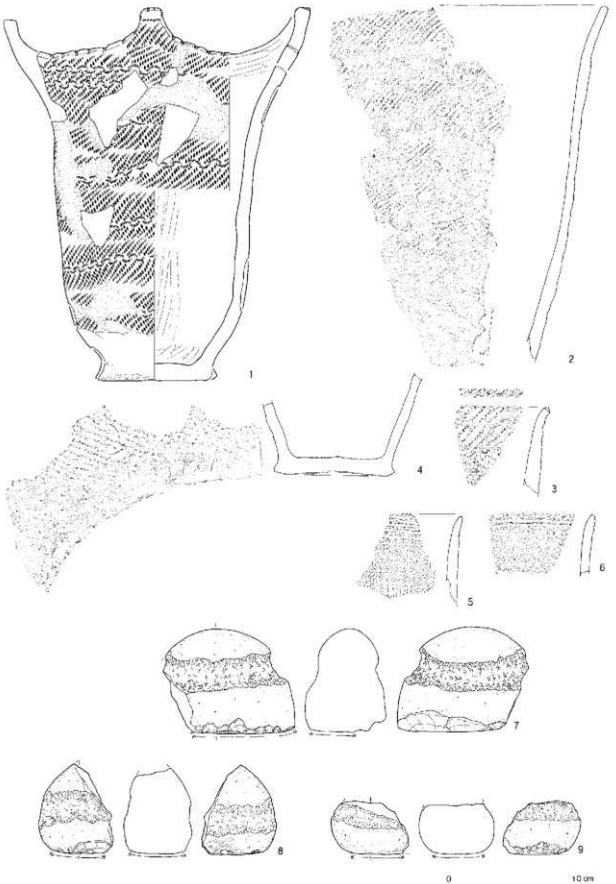
図Ⅲ－54　NP－81

NP－82

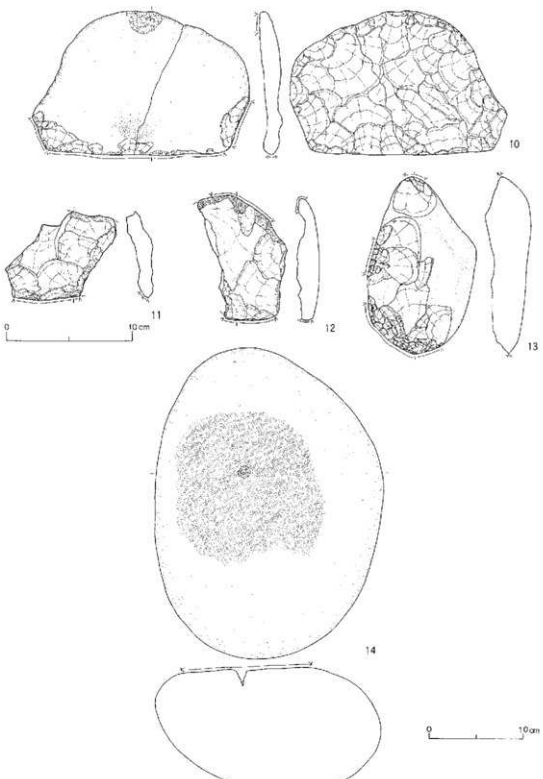


層位	土色1	土色2	土性	出土	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR3/1	埴土	中	しまり	Ⅳ
2	暗褐色土	10YR3/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　Ⅵはブロック状
3	黒褐色土	10YR2/2	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　炭化粒あり
4	褐色土	10YR4/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　炭化物少量
5	暗褐色土	10YR3/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ
6	ふかい黒褐色土	10YR4/3	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　炭化物少量
7	黒褐色土	10YR2/3	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　炭化物少量
8	黒褐色土	10YR2/3	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　炭化物多量
9	褐色土	10YR4/3	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　炭化物少量
10	褐色土	10YR4/4	埴土	中	軟	Ⅳ＋Ⅴ
11	黒褐色土	10YR2/3	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ
12	褐色土	10YR4/4	埴土	中	軟	Ⅳ＋Ⅴ　Ⅵはブロック状

図Ⅲ－55　NP－82

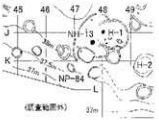


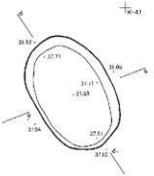
図Ⅲ- 56　NP- 82の遺物（１）

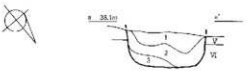


図Ⅲ－ 57　NP－ 82の遺物（２）

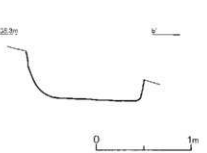
NP－84



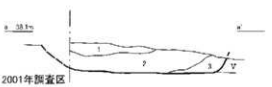


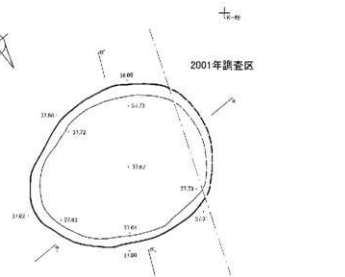


層位	土色1	土色2	土性	粘U	堅密度	その他
1	褐色土	10YR4/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　Ⅴは7ブロック状
2	にぶい黄褐色土	10YR5/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ
3	褐色土	10YR4/4	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ　Ⅳは7ブロック状



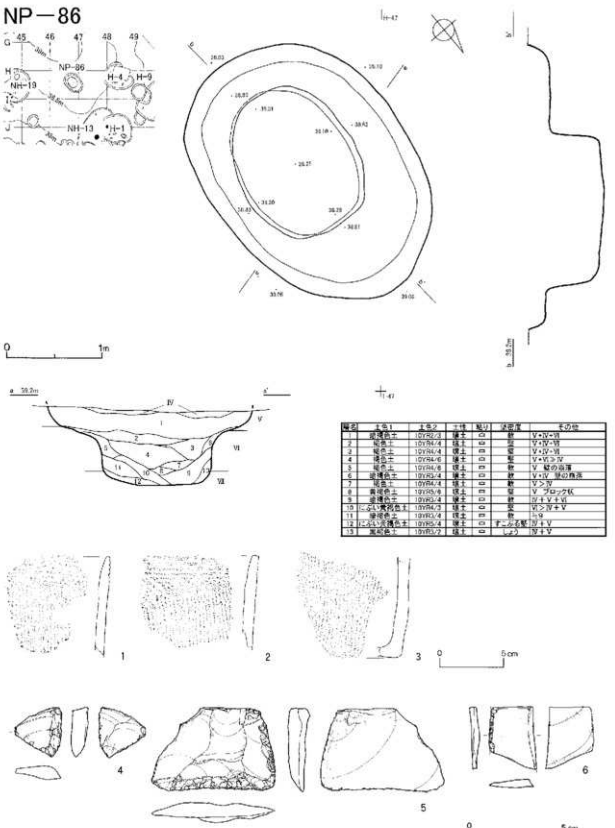
NP－85





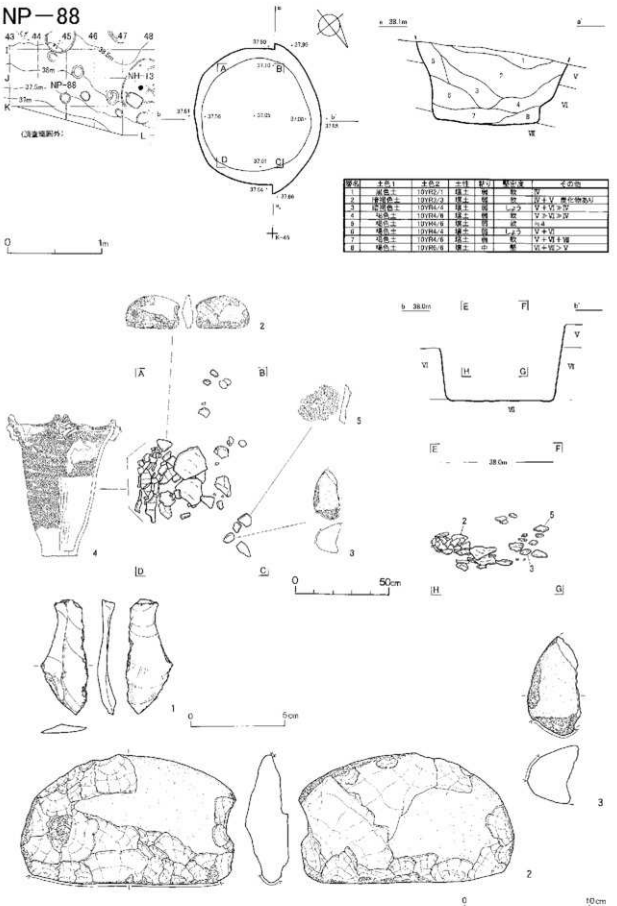
層位	土色1	土色2	土性	粘U	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR2/3	埴土	中	しまり	Ⅳ＋Ⅴ
2	にぶい黄褐色土	10YR4/3	埴土	中	しまり	Ⅴ＞Ⅳ
3	褐色土	10YR4/4	埴土	中	しまり	Ⅴ＋Ⅳ＞Ⅳ

図Ⅲ－58　NP－84、NP－85と遺物



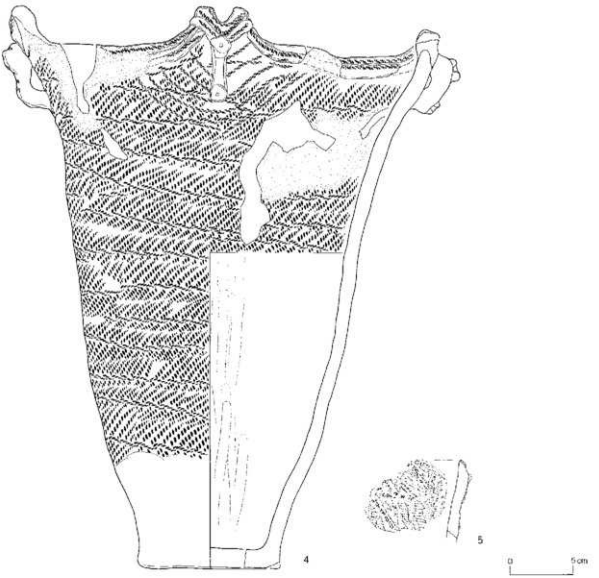
層位	土色1	土色2	土性	粘り	混入度	その他
1	褐灰色土	10YR4/2	埴土	○	軟	Ⅴ+Ⅳ+Ⅶ
2	暗色土	10YR4/4	埴土	○	軟	Ⅴ+Ⅳ+Ⅶ
3	暗色土	10YR4/4	埴土	○	軟	Ⅴ+Ⅳ+Ⅶ
4	暗色土	10YR4/6	埴土	○	軟	Ⅴ+Ⅵ>Ⅳ
5	暗色土	10YR4/6	埴土	○	軟	Ⅴ 軟の斑薄
6	褐灰色土	10YR5/4	埴土	○	軟	Ⅴ+Ⅳ 軟の斑薄
7	暗色土	10YR4/4	埴土	○	軟	Ⅴ>Ⅳ
8	黒褐色土	10YR3/8	埴土	○	軟	Ⅴ ブロック状
9	褐灰色土	10YR5/4	埴土	○	軟	Ⅳ+Ⅴ+Ⅵ
10	にぶい黄褐色土	10YR6/3	埴土	○	硬	Ⅵ>Ⅳ+Ⅴ
11	褐灰色土	10YR5/4	埴土	○	硬	Ⅳ
12	にぶい黄褐色土	10YR5/4	埴土	○	ずっと硬	Ⅳ+Ⅴ
13	黒褐色土	10YR3/2	埴土	○	しまり	Ⅳ+Ⅴ

図Ⅲ－ 59　NP－ 86と遺物

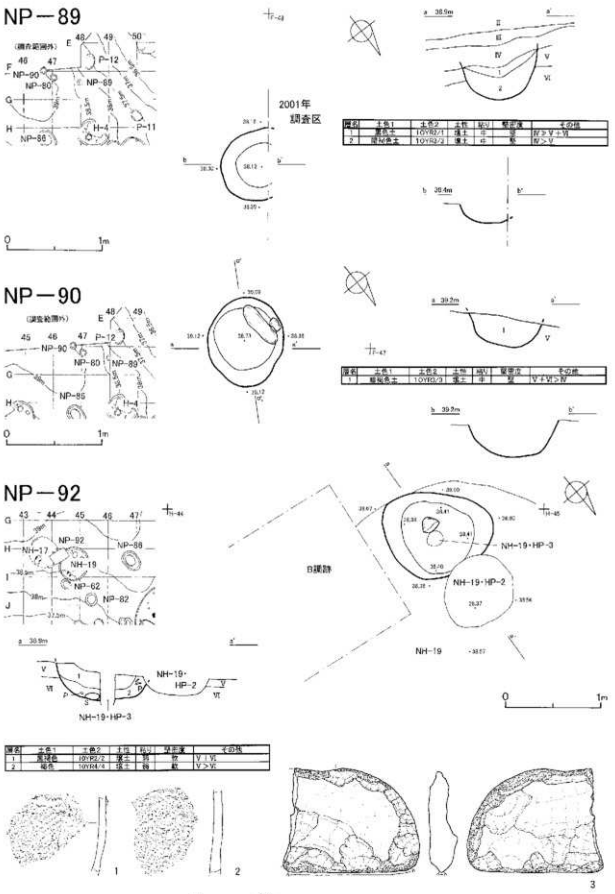


層位	土色1	土色2	土性	硬さ	粘性度	その他
1	黒色土	10YR2/1	埴土	軟	粘	Ⅳ
2	暗褐色土	10YR3/3	埴土	軟	粘	Ⅳ＋Ⅴ 焼土物含む
3	暗褐色土	10YR4/4	埴土	軟	しまる	Ⅴ＋Ⅵ＞Ⅳ
4	黒色土	10YR4/6	埴土	軟	粘	Ⅴ＞Ⅵ＞Ⅳ
5	褐色土	10YR4/6	埴土	硬	粘	～Ⅳ
6	褐色土	10YR4/6	埴土	硬	しまる	Ⅴ＋Ⅵ
7	褐色土	10YR4/6	埴土	軟	粘	Ⅴ＋Ⅵ＋礫
8	褐色土	10YR4/6	埴土	中	粘	Ⅵ＞Ⅳ＞Ⅴ

図Ⅲ－60　NP－88と遺物（１）



図Ⅲ－ 61　NP－ 88の遺物（２）



図Ⅲ－ 62　NP－ 89・90、NP－ 92と遺物

Ⅳ　包含層出土の遺物

１．土器等（図Ⅳ－１～14、図版44～59、表Ⅳ－１～３）

土器等は、今回報告の調査範囲では、包含層から25,750点が出土した。その時期は縄文時代前期後葉から縄文時代中期前葉、縄文時代後期前葉、続縄文時代前期である。うち縄文時代後期前葉（Ⅳ群ａ類）がもっとも多く、17,514点（約68％）出土した。次いで縄文時代前期後葉（Ⅱ群ｂ類）の5,309点（約21％）、縄文時代中期前葉（Ⅲ群ａ類）の2,892点（約11％）と続く。他に少数の出土として続縄文時代前期（Ⅵ群ａ類）59点、土製玉2点、円板状土製品2点、焼成粘土塊1点がある。

Ⅱ群ｂ類はすべて円筒土器下層ｄ式である。その分布状態はＦ－44・45区に分布の濃密な部分があり、地形の低いところへと広がっていく。Ⅲ群ａ類はサイベ沢Ⅶ式である。Ⅰ－43・44区付近、Ｈ－48区、Ｋ－50区、Ｌ－48区において比較的多く出土している。Ⅳ群ａ類は天祐寺式～涌元式相当の土器、トリサキ式、大津Ⅶ群などが出土した。型式に細分できなかったものが多いが、その分布状態をみるとＦ－44・45区とＦ－49区において比較的多い。Ⅱ群ｂ類とⅣ群ａ類に多い出土が認められたＦ－44・45区は標高39m台であり、今回報告のＢ地区の中では標高の高い地点である。分布の濃淡が概ね地形の等高線に沿っていることから、調査範囲外のより高い地点から流れ込んできたものが、たまったのであろう。

Ⅱ群ｂ類（縄文時代前期後葉）（図Ⅳ－１～２－１～34、－14、図版44～46、表Ⅳ－１～３）

すべて円筒土器下層ｄ式である。大半が円筒土器下層ｄ$_1$式であるが、少量円筒土器下層ｄ$_2$式も出土した。

円筒土器下層ｄ$_1$式（１～20）は縄線や絡条体圧痕文で、幅３㎝に満たない狭い文様帯を構成し、体部には単軸絡条体や多軸絡条体を縦位に回転施文しているものが多い。また、口縁部文様帯と体部の境に羽状縄文や綾絡文を1段ないし複数段施文する場合が認められる。１～７は文様帯が鋸歯状のもの。１は復元個体。胴がやや膨らみ、口縁がわずかに外反する筒形の土器である。口縁部は2条一組の平行縄線を3条横環させ、斜位の縄線と組み合わせて文様帯を構成している。口縁部と体部の境には結束第２種羽状縄文を1段巡らせ、地文には単軸絡条体を縦位に回転施文している。内面は全て横方向に調整がなされ、平滑で鈍い光沢を帯びる。２は斜位の縄線を組み合わせて、菱形を構成している。４は結束羽状縄文と撚糸文を組み合わせた、いわゆるスダレ状文を地文とする。５は文様帯と体部の境に結束第1種羽状縄文を巡らせ、地文に多軸絡条体を回転施文したもの。７は絡条体圧痕文で鋸歯状の文様を構成している。８～17は口縁を平行縄線が複数条巡るもの。８はやや太い縄線を4条横走させ、その下に結束第2種羽状縄文を2段施文させたもの。その上に多軸絡条体を回転施文させているようだが、器表面にナデ調整が施されているため不明瞭である。９は2本一組の縄線を2条横走させたもの。文様施文後、器表面をヘラ状の工具で調整している。11は特殊な原体を用いた不整な綾絡文が口縁部と体部の境を巡る。12は縄線の上に単軸絡条体を回転施文したもの。13は縄線間に馬蹄形の圧痕が連続的に加えられたもの。14は緩やかな波状口縁。口唇直下を綾絡文が2段巡り、その下に縄線が2条施される。15は単軸絡条体による網目状撚糸文が体部地文。16と17は地文が多軸絡条体の回転施文である。16ａの左と16ｂの右は接合する。16は口縁から底部まで接合したもの。器高は29㎝ある。17は結束第2種羽状縄文を巡らせている。18は絡条体圧痕文を平行に施文したもの。19・20は文様帯を持たない。19は結束第2種羽状縄文を複数段巡らせている。20は多軸絡条体を回転施文した

もの。

円筒土器下層ｄ$_2$式（21～24）は口縁部文様帯と体部の境に段ないし張り出しを持ち、口縁が外に開く器形である。ｄ$_1$式に比べて波状口縁を呈するものが多く認められる。21ａはいびつな山形口縁。波頂部を境に右側は急角度で下がっている。波頂部からは縦位に隆帯が垂下し、2本一組の平行縄線が複数条巡る。口縁部文様帯と胴部の境にはヘラ状工具による押し引き風の刺突が連続的に加えられている。21ｂは隆帯がみられない。21ｃはこれらの底部と考えられるもの。底面は11.5㎝× 10.0㎝で、やや楕円。22は体部との境を持たないが、口縁部断面のくびれや厚み、いびつな山形口縁を持つことなど、21との類似点を勘案して円筒土器下層ｄ$_2$式のうちに数えた。口唇上には単軸絡条体が回転施文されている。23、24は縄線による鋸歯状の文様を口縁部に展開させるもの。いずれも体部との境の張り出し部分に平行縄線を付している。

24・25は胴部片。24は地文に結束第１種羽状縄文を複数段施している。同一個体片は他に確認されなかったが、2段ごとに施文方向を変えている。26～33は底部片。25～27は結束第１種羽状縄文と撚糸文の組み合わせで、いわゆるスダレ状の文様を体部地文としている。28・29は単軸絡条体の回転施文によるもの。30～33は多軸絡条体の回転施文によるもの。28は底面の9割が残存する。推定底径は11㎝× 9.5㎝で、楕円を呈する。34は当該時期の胴部片を利用した円板状土製品である。

Ⅲ群ａ類（縄文時代中期前葉）（図Ⅳ— 3 ～ 5 ～ 35～63、－ 14、図版47～49、表Ⅳ－ 1～ 3 ）

すべてサイベ沢Ⅶ式である。

36～41は粘土紐の貼付で文様帯を構成するもの。36～38は貼付上に縄線文が加えられたもの。36・37は細い撚糸を2本一組で圧痕している。37は口縁が外反し、厚めの粘土紐を口唇沿いに貼付したものである。幅広の肥厚した口唇の中央に沈線が引かれ、上下二段に分割された口唇上には縄線文を矢羽状に加えている。38は角度の急な山形口縁で、やや肥厚した波頂部が内湾する。39は粘土紐の上に縄文が施されたもの。C字状の突起を有する。40・41は粘土紐の上が無文。40は環状の突起を口縁部に持つ。41は口唇上と口縁に粘土紐を貼付し、その間を短い粘土紐で連続的に繋いでいるもの。38～40は口唇上に縄の刻みが加えられている。

35・42～56は口縁部文様帯を構成しないもの。35・42～46、51・52は結束羽状縄文を地文とする。35は底部が張り出して直線的に立ち上がる深鉢。孔が穿たれた山形突起を持ち、肥厚した口唇上には中空の工具で連続的に円形刺突が加えられている。地文は縦位の結束第2種羽状縄文。内面はヘラ状工具による調整で平滑である。42は2種2対の突起を口縁に有する。２本組になっている小形のツノ状突起（ａ）と、上向きに開いた「Ｃ」字状の突起（ｂ）の組み合わせによるもので、この組み合わせは住居跡ＮＨ－ ２出土の復元土器（図Ⅲ－ 6 － 1 ）と共通である。縄文は貼付上にも施されている。胴部片（ｃ）は内外面とも指頭圧による凹凸が著しい。43は半裁竹管状の工具による刺突が口唇上に連続的に加えられ、左に下がってヘラ状工具による刻みが施されたもの。44は縄線が施された山形突起片。縄線に原体の結節部が観察される。45はボタン状の貼付を有し、縦位に結束羽状縄文が施文されている。46は頸部が屈曲して大きく外反する器形。「Ｃ」字状突起を有し、口唇上に縄の刻みが加えられている。47～50は斜行縄文に綾絡文が付されたもの。47は鋭角な山形口縁。口唇縁辺に粘土紐が貼付され、その肥厚した口唇上には縄で刻みが加えられている。波頂部は粘土紐の接点のためダマ状に丸みを帯びる。50はＲＬ縄文を地文として綾絡文が付されたもの。器表面にナデ調整が施されているため、縄文は一部磨消されている。51～53・56は結束第１種羽状縄文を地文とする。51は折り返し風に肥厚した口縁で、縄の圧痕が加えられている。52は口唇上に押し引き風の刺突が加えられている。小波状を呈し、やや裏面が反り返る。53は山形口縁の上縁辺が波状を呈する。56は山形の突起部

にのみ細い粘土紐が施されているもの。53・56は原体の回転方向を変えて二重に施文して、斜行縄文風にしたものである。口唇上にはヘラ刻みが加えられている。54・55は斜行縄文のもの。いずれも口唇上に縄の刻みが加えられている。54は口縁が大きく外反し、内側に「Ｃ」字状突起を持つ。地文にＲＬ斜行縄文が密に施文され、口縁から胴部下半まで器壁がほぼ一定の厚さである。55は環状のボタン状突起を持つ。

57～59は山形の突起。57は左右両角がツノ状に突き出ており、Ｘ字状に粘土紐が付されている。また上縁辺の中央には溝の入った鈴様の小突起もある。58はやや突き出た突起の下に穿孔が施されているが、破砕面にかかっており、拓本には表れていない。59は上縁辺が肥厚して浅いくぼみを呈する。くぼみの周縁に、2本一組の細い縄で刻みを入れている。

60は魚骨回転文の施された胴部片。原体に用いた魚骨はニシンと推定される。61～63は底部片。61は揚げ底気味のもの。内面は横方向の調整で平滑である。62は全体的に丁寧な調整で鈍い光沢を持つ。焼成の良好な底部片。底面の一部を欠くが、推定7.5×7.0㎝の底径である。63は粗雑な手捏土器の底部。底面は丸底気味で、焼成以前に生じたとみられる細かい亀裂が全体に観察される。胎土の質感からⅢ群ａ類の可能性を想定した。

Ⅳ群ａ類（縄文時代後期前葉）（図Ⅳ－６～12－64～165、－14、図版50～59、表Ⅳ－１～３）

64～69・74～117は天祐寺式～トリサキ式の可能性が考えられるもの。破片のため型式を特定できない資料が多く、文様で分けて掲載した。74～79は横位の粘土帯が複数段のもの。74～76は口縁部の地文を磨消し、その上に粘土帯を貼付している。74・75は貼付が少なくとも3段数えられる。74は縦位と斜位の貼付が重ねられている。77は折り返し口縁の上に貼付したもの。78・79は粘土帯を貼付後、横位に調整したもの。79は調整後、斜行縄文を施文している。74～79に関しては、いずれも口唇上が平滑に調整されており、Ⅳ群ａ類の中でもより古い可能性がある。

64・80～94は口縁部を粘土帯が1段巡るもの。貼付と折り返し口縁の区別が判然としない資料が多く、両者をここにまとめた。64は復元個体。直線的に開く器形で、体部全体にＲＬ原体を縦方向に施文後、口縁部では同一原体を横方向に回転させている。器表面は凹凸が顕著で、輪積みの接ぎ痕も窺われる。内面はヘラ状工具で調整されている。80～86は地文が羽状縄文。原体の回転方向を変えて施文したもので縄文同士が一部重なり合っている。80は口縁を巡る貼付がJ字状に垂下している。85は口縁の調整による表裏面からの粘土のたまりで、口唇が溝状になっている。87・88は縄文原体を縦位に回転施文したもの。88は複節の原体を二重施文している。原体の縄端を結わえたようであり、不整綾縁様の文様が部分的に縦位にみられる。89・90は縄線が施されたもの。89は頸部に無文帯を巡らせ、そこに縄線で三角形を構成している。体部地文は羽状縄文である。口唇は小さい山形突起が2つ並んでいるが、うち1つが欠損している。90は肥厚した口縁から胴部にかけて、斜位に縄線を施し、平行縄線と組み合わせることで台形様にしたもの。91は口縁に横位、体部には縦位の方向で単軸絡条体を回転施文している。体部は一部で横方向にも単軸絡条体を回転させている。92は口縁部に斜行縄文、無文地の体部に網目状撚糸文をそれぞれ施文したもの。93・94は縦の粘土帯を2本貼付し、その上に縄線を押圧したものである。95は粘土帯が斜位。同じく縄線が押圧されている。

65・96～112は粘土帯の貼付や折り返し口縁ではないもの。65・96～99は平行縄線。65は胴部下半を欠く復元個体。胴部が直線的に張り出す器形で、全体に磨耗しているが、地文はＬＲ原体を縦位に回転させたものである。口縁はゆるやかな波状を呈する。96は口唇と平行縄線の間を、刺突がゆるやかな波状をなして連続的に加えられている。97は口縁がやや内湾する器形。口唇部直下を平行縄線が深めに施されている。98は縄文の上に斜位の縄線を付している。99は無文地に2条の平行縄線と縦位

の縄線がある。100・101は単軸絡条体を回転させて網目状撚糸文を施したもの。100は口縁部において単軸絡条体を横位に回転させている。底部内面（100b）は丸みを帯びる。101は横位と斜位に重ねて施文している。102～109は縄文のみのもの。102は羽状縄文。103・104は緩やかな波状口縁を呈する土器で、原体を縦方向に施文したもの。103の波頂部は口唇上に粘土を貼付して山形にした作りである。104はＲＬＲの複節縄文。105～108は斜行縄文。105～107は口唇上にも縄文が施されている。105は凹凸が顕著。106は複節斜行縄文。108は付加条の縄文。109は特殊な原体による施文のもの。複節の原体を二重施文したように見えるが、判然としない。110～112は無文土器。110は垂直に立ち上がり、111・112は頸部がくびれる。112は器表面に凹凸が顕著である。

66～69・113～117は底部片。66は径の小さい底部。胴部との接ぎ部分はくびれを呈する。凹凸が顕著な器表面に、自縄自巻的なＬＲの斜行縄文を施している。底部付近は原体を縦方向に回転施文している。67はＲＬＲ原体による斜行縄文を地文とし、胎土に繊維を含む。68は巻きの緩い単軸絡条体を縦位に回転施文したもの。上部には斜位の施文もみられる。原体を斜位に施文後、縦位に施文を重ねている。69は櫛歯状工具による沈線文が不規則に施されている。113・114は羽状縄文が地文。114は底面の縁に粘土を貼付し、揚げ底状にしたもの。115は底面にも縄文が施されている。116は自縄自巻的な縄文が縦方向に施文されたもの。117は木の葉の葉脈痕が底面に残る。

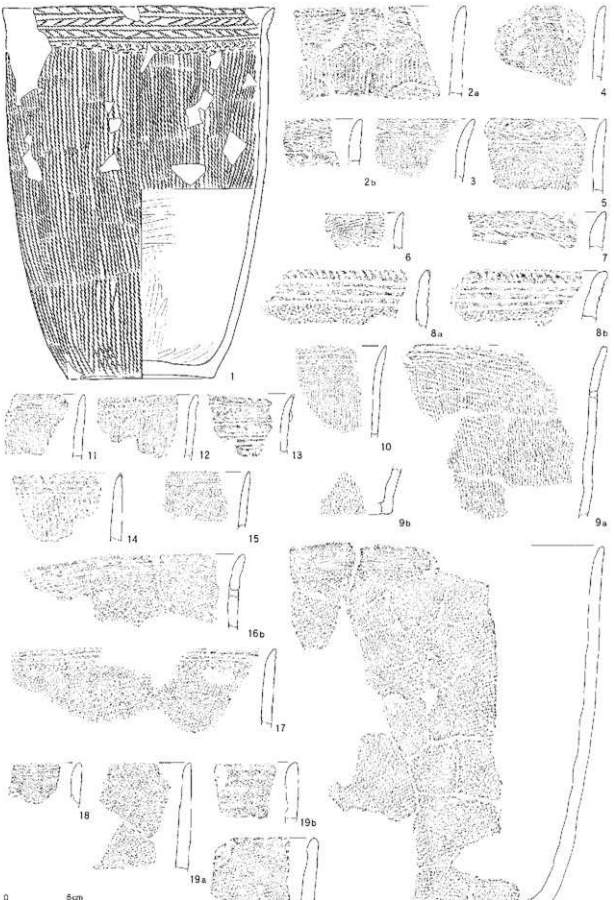
70～73・118～153はトリサキ式と考えられるもの。胴部上半が膨らみを持ち、頸部がくびれて口縁の開いた器形が多い。口縁部は折り返しも多く見られ、8の字状の粘土紐を付すものもある。

118～137は棒状工具の外側で沈線を施したもの。118～123は細い沈線。118～121は沈線が直線的である。118・119は平行沈線が頸部に2条引かれたもの。118は地文の縄文が横位で、外反する口縁部に８の字状の粘土紐が貼付されている。119は無文地である。120・121は縦位および斜位の沈線が組み合わさったもの。121は地文が横位の調整で磨消されている。122は山形の波頂部を持ち、無文地に沈線で菱形を描いたもの。123は横位に展開する連弧文。頸部が屈曲し、胴部が膨らむ器形。124～137は比較的太い沈線のもの。124～128は平行沈線。124・125は平行沈線の間を縦位に短い沈線が施されている。124は粘土帯を横位に貼付し、その上に縄文を施文している。125と127は山形の波頂部に８の字の貼付がくる。127は8の字に貼付後、中空の工具で８の輪の中を刺突している。129～132は斜位に沈線が引かれるもの。129は波頂部から短い隆帯が垂下する。130は弧線気味の沈線を斜位に交差させ、菱形にしたもの。131・132は胴部片。132は沈線が2本一組。133～137は沈線が3本一組のもの。136は3本単位の沈線が重なりあっている。真ん中の沈線が深い。137は胴部片。割れ口の縁辺が磨耗している。三角状の土製品の可能性もある。

70～73・138～142は無文または縄文のみのもの。70～73は無文の復元個体。70～72は全体的にヘラ状工具による調整痕が顕著。表裏面とも胴部下半は縦方向、胴部中央から口縁にかけては横方向の調整である。いずれも胎土に砂粒を含み、よく焼きしまった平底の土器である。70はＦ－ 49区においてまとまって出土した大型のもの。71はＥ－ 48区においてまとまって出土した。全体的な作りが70よりいびつで、やや傾く。72はＦ－ 44区において出土した小型土器。71・72は器高に比して底部が厚めのためか、見た目よりも重さを感じる。73は御猪口型である。指頭の調整痕が顕著な無文の手捏土器。138～142は口縁部片。138～140は縄文地、141・142は無文地である。

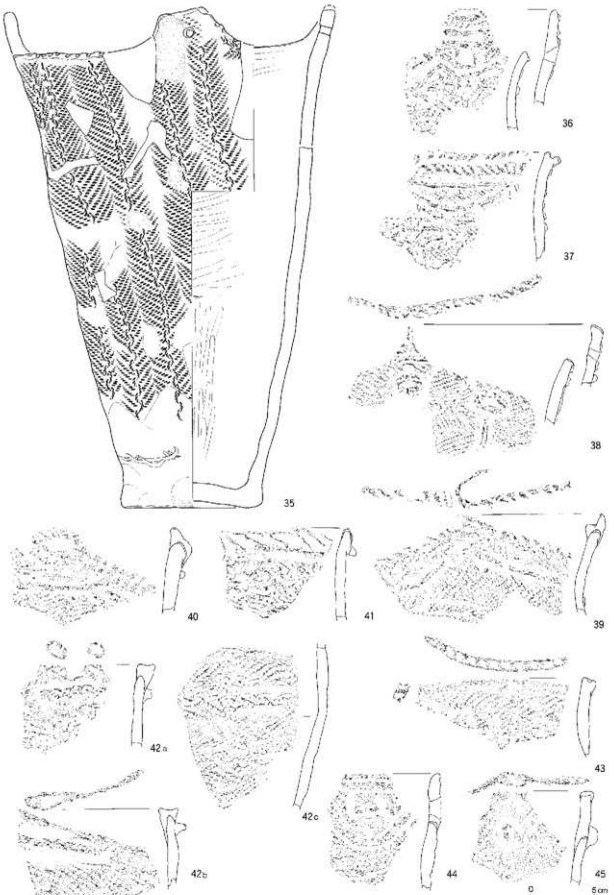
143～150は半截竹管様工具の内側で沈線を施文したもの。143～147はＳ字状に沈線を引いたもの。148は連弧文風である。151・152は櫛歯状工具と沈線を組み合わせて施文したもの。153は沈線がカニのハサミ状に似る。151～153はトリサキ式の中でも比較的新しい段階のものである。

154～165は大津Ⅶ群土器と考えられるもの。平縁のものと緩やかな波状口縁をなすものとがあり、

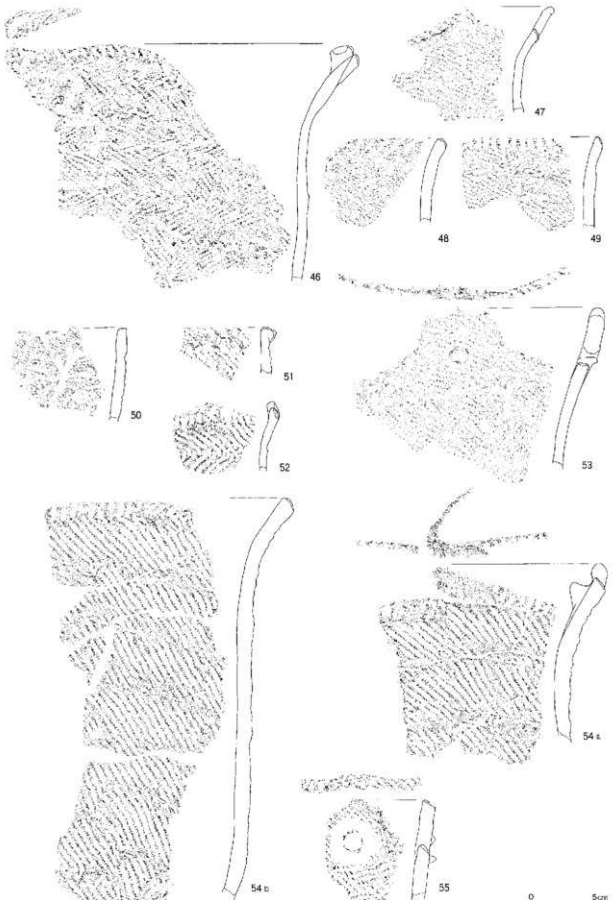


図Ⅳ- 1　包含層出土の土器（１）

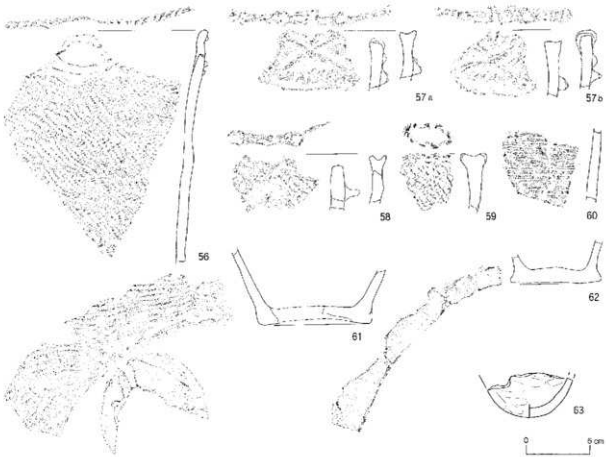
図Ⅳ- 2　包含層出土の土器（２）



図Ⅳ- 3　包含層出土の土器（3）



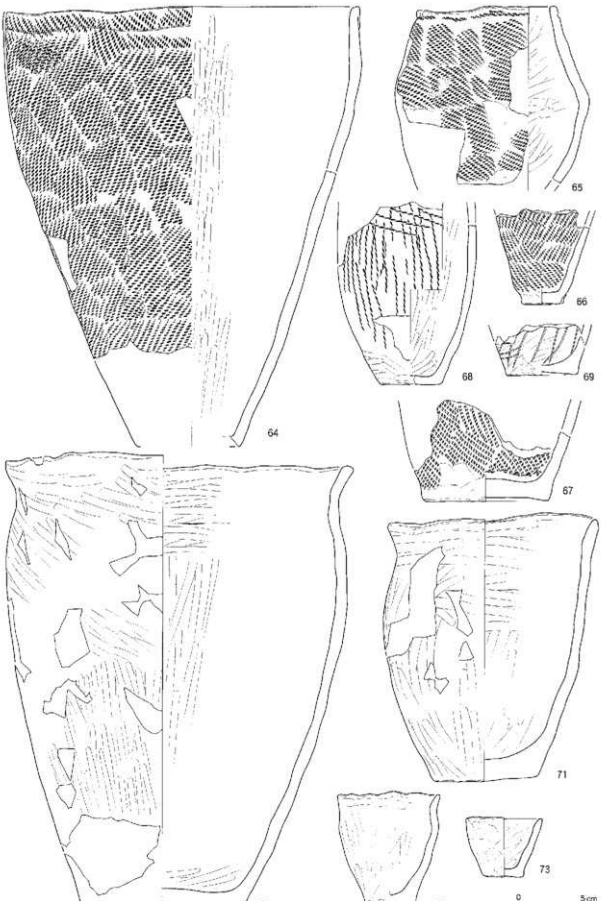
図Ⅳ－４　包含層出土の土器（４）



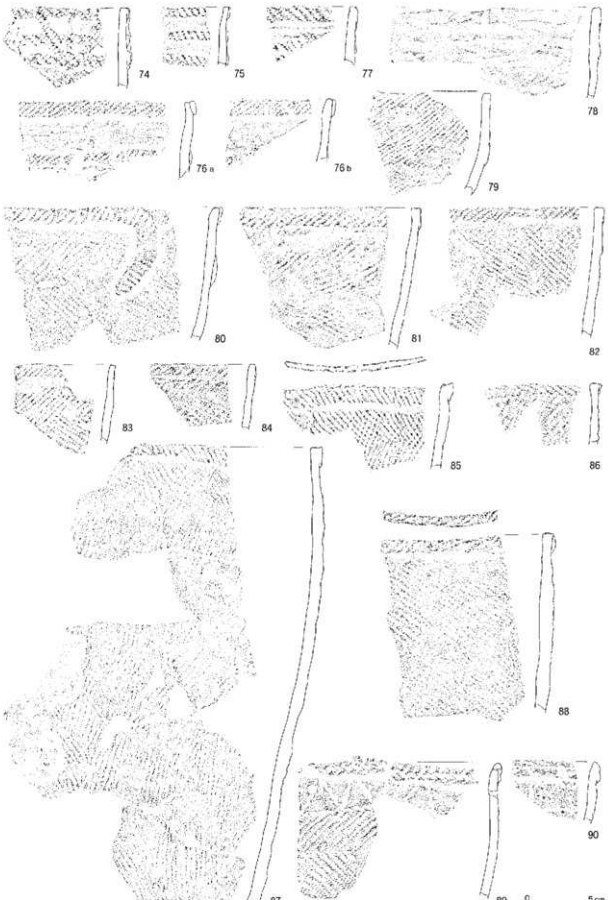
図Ⅳ－ 5　包含層出土の土器（５）

器形は胴部がわずかに張り出して、口縁部が外反するものと胴部が張り出さないものとがみられる。体部文様帯は沈線で区画した中に構成され、磨消縄文の盛行によって、大柄な入組文や「カニのハサミ」状文を展開するものがある。他に連続的な「乙」字文や「く」の字文の施文が顕著に認められる。内面の調整に関しては、すべて横方向（154・156～158）である場合が少なからず見られた。また、胎土に砂粒を含んだ、焼成の良好な土器が多い。

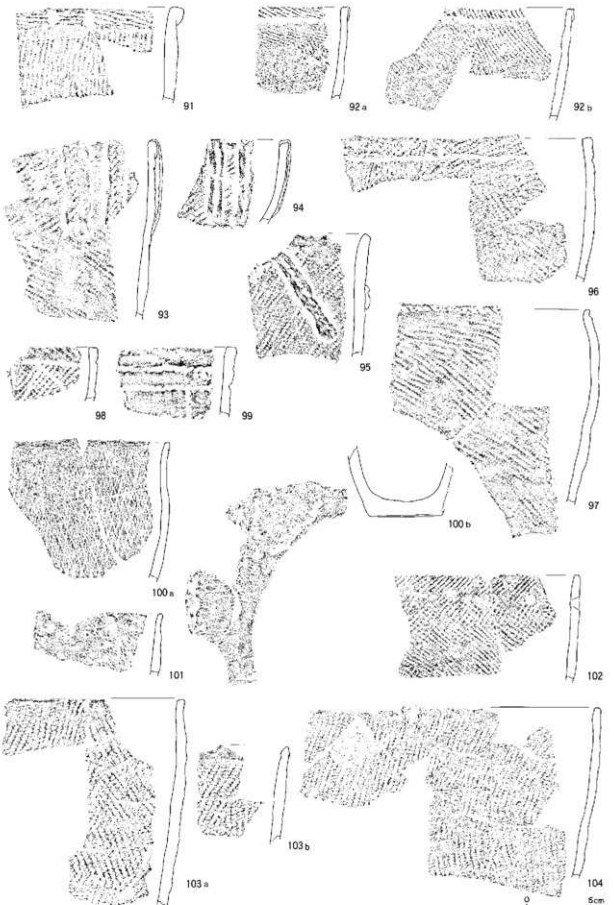
154～159は復元個体。154は胴があまり張り出さない。口縁部には「く」の字文が連続的に施文される。「く」の字と逆「く」の字が向き合うところは、菱形を形成するが、山形を呈している個所もある。頸部には2本の沈線で区画された幅の狭い無文帯が巡り、その下は「乙」字文を横位に展開させている。「乙」字は同じ向きで連続するが、部分的に菱形を形成する。その菱形から矢印様の弁状文が下に伸びており、垂下する弁状文の間は「カニのハサミ」状文が構成されている。「カニのハサミ」の下、底部周縁にも「く」の字文が巡り、さらに底面には沈線が渦巻き様に描き込まれている。155は頸部を沈線が１条巡り、その下を角張った波状文が横環するもの。体部中央には磨消縄文による「丿」字状の入組文と「カニのハサミ」状文が複合して施文されている。「カニのハサミ」状文の下、帯状に沈線で区画された縄文地には「く」の字文が縁飾り的に施されている。地文の縄文は施文方向が不規則である。156は口縁がゆるやかな波状を呈するもの。波頂部口唇に5本の刻みを加えている。口縁部には鋸歯状沈線が3条横環し、頸部を沈線が１条巡る。体部は磨消縄文による入組文が横位に展開し、その下には「カニのハサミ」状文が一部にみられる。157はゆるやかな波状口縁。頸部



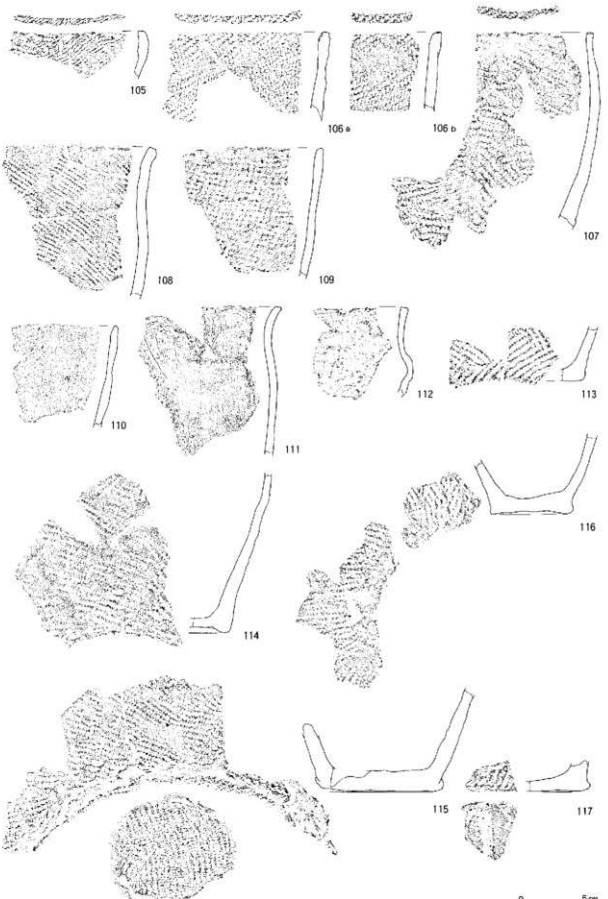
図Ⅳ- 6　包含層出土の土器（６）



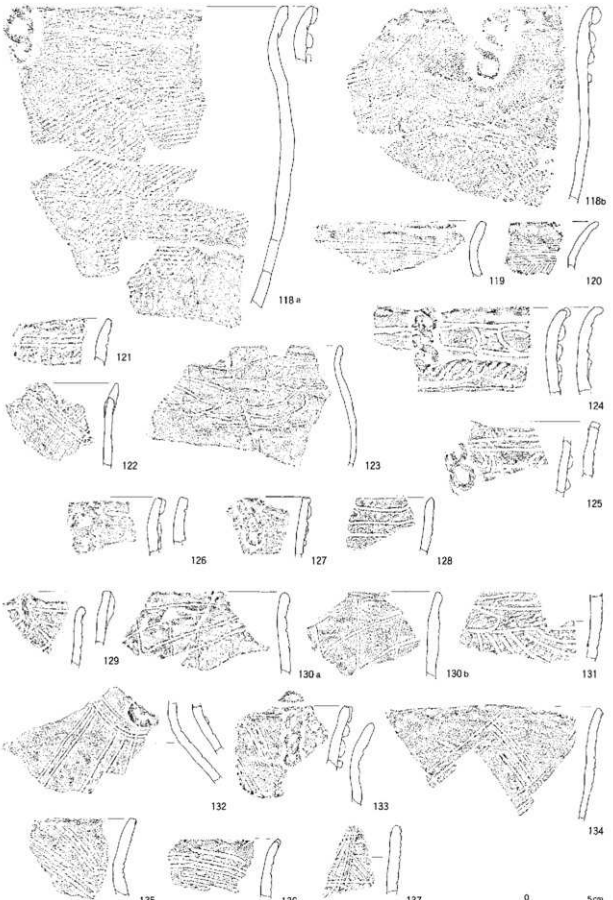
図Ⅳ- 7　包含層出土の土器（７）



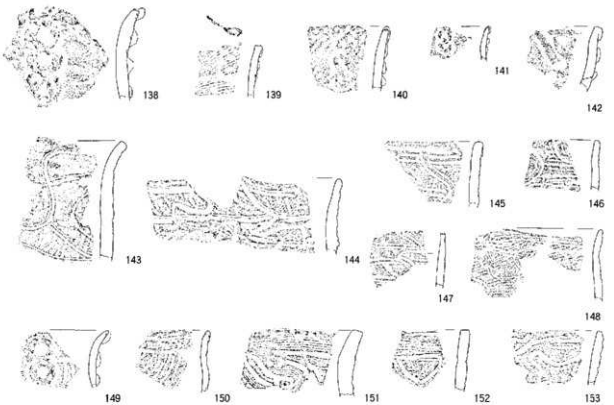
図Ⅳ- 8　包含層出土の土器（8）



図Ⅳ- 9　包含層出土の土器（９）



図Ⅳ- 10　包含層出土の土器（10）



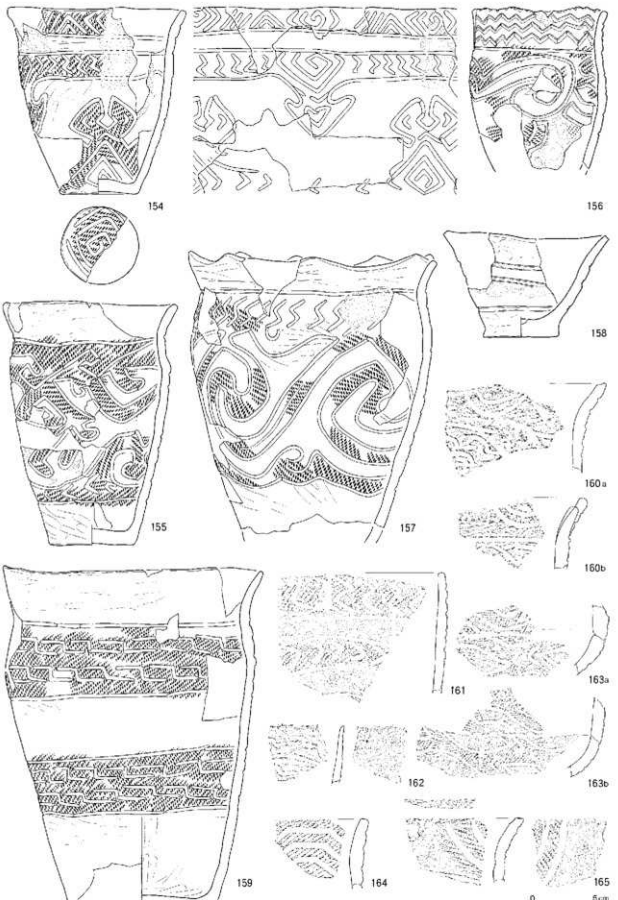
図Ⅳ- 11　包含層出土の土器（11）

を沈線が１条巡り、その下に「乙」字が連続的に施されている。体部中央は２条の沈線で区画された中に、磨消縄文で大柄な「 J 」字状の入組文が渦巻様に描かれ、さらにその下には波状文が施されている。焼成は非常によく、胎土には砂礫を多く含む。158は浅鉢型の土器。直線的に開く器形で、無文地に太い沈線が3条巡り、底部は外側にやや張り出す。胎土と焼成が157に酷似する。159は中型の深鉢。文様は頸部下位と体部の中ほどに沈線で区画された縄文帯が2段あり、それぞれクランク状の「乙」字文を2条横環させている。器表面には炭化物の附着が目立つ。

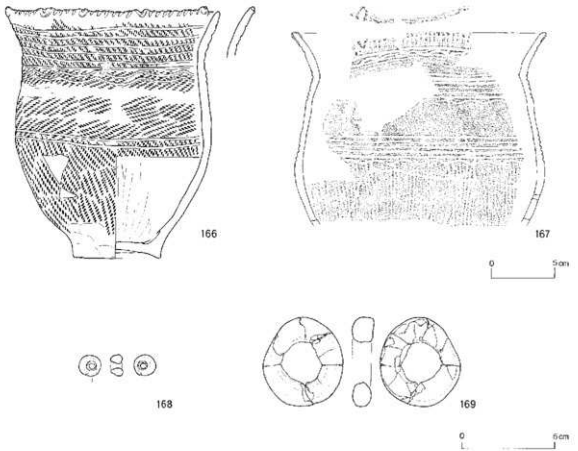
160～162・164・165は口縁部片。160は頸部が屈曲して口縁が外反する。波頂部には連弧文が施されている。161は文様帯と無文帯が交互に横走するもの。文様帯には「乙」字を連続させるものと「く」の字を連続させるものがある。162は裏に連弧文があるもの。163は注口土器の可能性がある胴部片。磨消縄文が多用され、帯状に区画された文様帯の分岐点に「く」の字が施されている。164・165は連弧文。165は表裏面に連弧文があり、その施文範囲にのみ縄文が施されている。

Ⅵ群ａ類（続縄文時代前葉）（図Ⅳ- 13- 166・167、- 14、図版59、表Ⅳ- 1～３）

166・167は続縄文時代前葉の恵山式土器。166はＪ- 42区で一個体まとまって出土した。口縁がゆるやかな波状をなして外側に開き、胴部が膨らむ器形。底部は揚げ底である。口縁部を平行沈線が6条巡り、その下を連続する山形沈線が1条巡る。平行沈線は胴部の張り出し部分にも2条横環し、胴部上半と下半を分かつ。原体の施文方向を上から順に横、縦、斜めと変えているため、口縁は斜位、頸部から胴張り出し部にかけては横位、胴部下半は縦位の帯状縄文が付されている。口唇の外縁には刻線が連続的に加えられるが、全部で10ヶ所を数えるやや肥厚した小波頂部には深く強調的に施されている。内面に残るヘラ状工具の調整痕はすべて横方向。167は横走する複数の平行沈線が無文帯を挟



図Ⅳ- 12　包含層出土の土器（12）

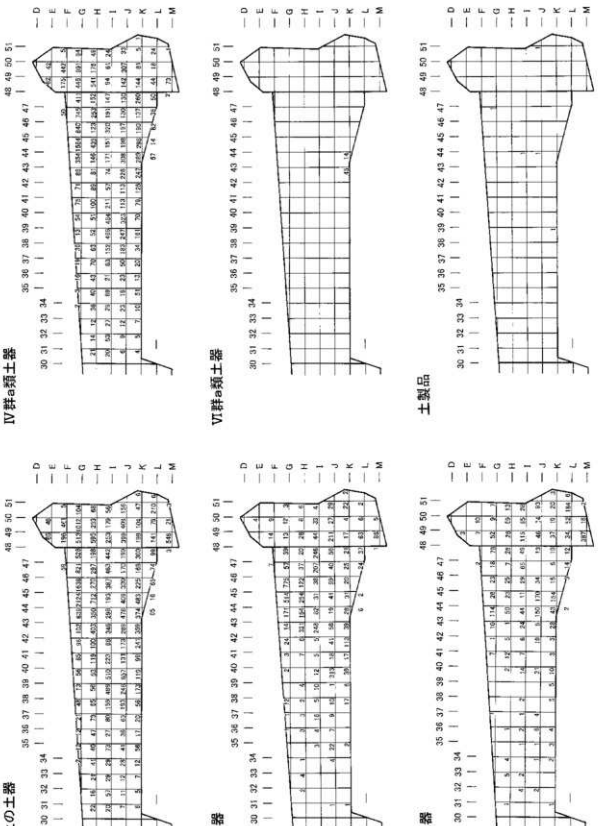


図Ⅳ－ 13　包含層出土の土器等（13）

んで頸部と胴部を巡る。帯状縄文は口縁部を横走する波状文付近には横位に、胴部の波状文より下は縦位に施しており、口唇上にも施してある。166・167とも恵山2式・南川皿群土器相当である。

土製品（図Ⅳ－ 13－ 168・169、－ 14、図版51、表Ⅳ－ 1～ 3 ）

168・169は土製玉。168は小型。灰赤色を呈しており、当センターで蛍光X線分析を行った結果、第二酸化鉄（Fe_2）の付着が確認された。彩色の可能性が高いものである。なお、分析は第 1 調査部第 1 調査課の花岡正光の指導による。169は環状を呈する。全体的にいびつで太さが不均一。二次焼成を受けたため、細かい亀裂がみられ、非常に軽い。（影浦）



図Ⅳ- 14　包含層出土の土器分布図

2　石器等（図Ⅳ－ 15～27、図版60～67、表Ⅳ－ 4 ・ 5 ）

3325点出土した。剥片石器580点、礫石器347点、石製品４点、剥片1879点、礫が515点である。層位的な分布としては、Ⅲ層からⅣ層を手掘りで２回掘り下げた段階までに1723点が出土するのが目立つ。Ⅲ層からⅣ層上位についておおよそ集中すると言える。平面的な分布については遺構が集中する40ラインより北西側に集中的に出土する。濃密に集中するのはそのうちで3か所あるる。特に多いF－40・41区については、調査区外の台地平坦部に遺構が広がる可能性がある。F―48・49区は斜面の縁にあたり、廃棄場的な様相を考える。G－ 42～44区は遺構NH―17・19のすぐ脇にあたり、構築時の掘りあがり、ないしは生活の痕跡を示す可能性がある。50ラインより北西側は遺物の出土量が少ない。剥片石器の剥離調整の程度についてはⅠ章の石器分類に示した。

石鏃（図Ⅳ－ 15－ １～17、―26、図版60、表Ⅳ－ ４ ・ ５ ）

石鏃は49点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から12点とⅣ層の上面から手掘りで２回掘り下げた段階でさらに14点出土しているのが目立つ。素材別に見ると（(　　)内は掲載番号）、頁岩製（２・９、珪質頁岩は５・10～14・17）が27点と最も多くメノウ製（１・３）10点、チャート製（４・15・16）４点、黒曜石製（６～８）３点である。

凹基有茎のもの（14～16）は11点出土した。平基有茎の３点のうち２点（12・13）は凹基有茎に近い。凸基有茎のもの（３～11・17）は17点出土した。比較的大型で両面全面調整のもの（17）や、茎部の作り出しが不明瞭なもの（３）、先端が突き錐のように尖るもの（11）、使用が著しかったためか先端平面形が鈍角のもの（４～６）そのうちで茎部が小さく舌状に張り出すもの（４・５）など、形態は多様である。10の基部付け根にはタール様のものが付着する。掲載遺物以外についてもタール様のものが付着して出土した石鏃は２点ある。それらはすべて凸基有茎だが、後述する特殊なかえしを持つものは含まない。折損品は６点出土する。尖基鏃の範疇に入りうるもの（２）も１点あるが側縁が潰れており凸基有茎のものを製作する際素材の粒子が粗いため縁辺が潰れた可能性が高い。

出土した石鏃のうち特徴のある製品として、両面全面に調整がおよび、特殊なかえしを持つもの（12～17）が挙げられる。両面全面調整で、かえしに微妙な段を持つ。12・14・16に顕著である。平基有茎（12・13）が２点、凹基有茎（14～16）が４点、折損品にも２点含まれる。類似のもので、凸基有茎のものについても17の様に側縁のかえしよりの部分が微妙にノッチ様になるものが２点ある。

石鏃の平面的な分布の特徴としてはG―43区を中心に集中する事が挙げられる。石器全体からみても比較的集中する場所である。G―43区からは未成品が4点出土している。そのうちで、１は未成品である。周囲からは１と同一母岩のものが19点出土している。さらに２点の石鏃未成品が含まれる他に、石核、Rフレイク、スクレイパー、フレイク等が合わせて13点出土している。この石鏃が集中するあたりで、剥片剥離・石器製作がなされたのであろう。

石槍又はナイフ（図Ⅳ－ 15－ 18～22、―26、図版60、表Ⅳ－ ４ ・ ５ ）

石槍又はナイフは７点出土した。すべて頁岩製（18・19は風化した頁岩、20・21は珪質頁岩）である。層位的な出土状況としては、Ⅳ層の上面から手掘りで２回掘り下げた段階で４点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としてはF～I－ 40～47区から１点ずつ出土し、Fラインに比較的多い事が挙げられる。凸基有茎のもの（18～22）が７点出土する。凸基有茎のもののうち茎が明瞭なもの（18・19）が３点、うち１点は茎部のみの残存である。特徴的なものとしては、茎部が突起様、あるいは微妙な舌状に作られるもの（20～22）が３点出土（すべてFラインから）している。うち２点（20・21）は折損を再生したものか、先端の正面観平面形が鈍角である。これらの形状は石鏃４ ・ ５

に近似する。寸法上の規格から別分類とした。22は茎が特に不明瞭なものである。

石錐（図Ⅳ－ 15－ 23・24、—26、図版60、表Ⅳ－ 4 ・ 5 ）

石錐は４点出土している。層位的な出土状況としては、比較的下位の包含層Ⅴ層から２点出土している。平面的な分布の特徴としてはF ~ H－ 40 ~ 49区から散点的に１点ずつ出土する事が挙げられる。突錐の範疇で捉えられるもの（23・24）が２点ある。いずれも頁岩製で、24は珪質頁岩である。残る１点は黒曜石製の石鏃未成品の基部にあたる部分の潰れ痕跡に石錐の可能性がある。

つまみ付きナイフ（図Ⅳ－ 16－ 25 ~ 35、—26、図版61、表Ⅳ－ 4 ・ 5 ）

つまみ付きナイフは24点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅳ層の上面から手掘りで３回掘り下げた段階までで16点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては40ラインから北西側に散点的に出土する事が挙げられ、隣り合うG—47・H—48区に比較的集中している。これらのうち３点は剥片に極めて簡単に調整を施したものである。素材の石質は頁岩製（25 ~ 32・35そのうち25・28・29以外は珪質頁岩）が21点、メノウ製（33・34）が３点である。縦長剥片素材のもの（25 ~ 32）が10点で、明らかに横長剥片を用いているもの（35）は３点ある。それらを除いて、両面調整のものが３点出土しておりそのうちの２点（33・34）はメノウ製で、つまみ部分のみ両面全面調整である。そのうち1点（33）は鋭利な先端部を持つ。つまみを含めた側縁が両面調整のもの（35）が１点ある。極浅い調整が縁辺に施されているもので、未成品の可能性もあるもの（31）は５点ある。折損品でつまみ部分のみの残存するものは３点あった。

縦長剥片素材を使用するもの（25 ~ 32）で、片縁調整のもの（28・29）は２点、縁辺全周に調整が及ぶもの（25）は２点、両縁調整のもの（27・30）は７点あり、そのうちで、一側縁に急角度の刃部を持つもの（27）が１点、端部のみが片面全面調整のもの（25）が１点ある

スクレイパー（図Ⅳ－ 16・17－ 36 ~ 45、—26、図版61 ~ 62、表Ⅳ－ 4 ・ 5 ）

スクレイパーは147点出土している。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から24点とⅣ層の上面から手掘りで２回掘り下げた段階でさらに33点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては37ラインより北西側についてほぼまんべんなく出土する事が挙げられ、隣り合うG—43・44区、F—45区に比較的集中する。ただし細分器種レベルで、特に集中する傾向はない。

用いている石材は頁岩（36 ~ 38・40・41・43 ~ 45、44は風化した頁岩、41・43・45以外は珪質頁岩）が128点と最も多く、メノウ製（39）の13点がそれに続く。流紋岩製のもの（42）もある。剥片素材としては縦長剥片を使用したもの（36 ~ 41）が目立ち、50点の出土である。そのうち片縁のみの加工（37・39・41）が17点で、そのうち端部にも加工が及ぶもの（37）は１点、両縁に加工が及ぶもの（36・38・40・45）は31点でそのうち端部にまで加工が及ぶものは４点、ほぼ縁辺全周に加工が及ぶもの（36）は２点である。尚、剥片素材の形状が不明なもの（42・44）も多いが、明らかに横長剥片を用いているもの（43）は７点である。

剥片素材の縁辺を極浅く調整したもの（39）は44点である。そのうち急角度の刃部を有するものは３点、である。それらのうちで、折損しておらず、極めて簡単に、一側縁のみに加工を施すものは16点である。縦長剥片に極浅い調整を施したものは20点である。

相対的に明確な調整（目安として石器幅の８分の１以上の剥離が規則的に連続するもの）を持つもの（36 ~ 38・40・42・43）を持つスクレイパーないしはその破片は91点である。そのうち石器の正中線に至るまでの深い調整によって刃部を形成するもの（36）は７点で、そのうち両面調整のものは３点である。７点のうち箆状石器が３点ある。

明確な調整を持つ91点は、折損したものを除いて、「急角度の刃部を持つもの」、「箆状石器ないし

はそれに類するもの」「背面観から見て曲線的に張り出す形状の刃部を持つもの」「両面調整の刃部を持つもの」に分けられる。これらの分類に当てはまらないもののうちで、縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して「両側縁に刃部を持つもの」と「片縁に刃部を持つもの」に分けた。

「急角度の刃部を持つもの」は22点出土し、掻器の可能性があるもの（36）は5点である。21点のなかには、背面観からみて側縁に特に曲線的な刃部を持つもの1点、と両側縁に刃部を持つものが2点ある。「箆状石器ないしはそれに類するもの」は9点出土し、そのうち両面調整のものは4点、箆の角にあたる部分が1か所しかないもの（37）は1点である。「背面観からみて、側縁が曲線的に張り出す形状の刃部を持つもの（43）」は上記の2分類に含まれるものを除外してある。9点の出土があり、うち両面調整のものは4点である。「両面調整の刃部を持つもの」は上記の3分類に含まれるものを除外してある。13点の出土があり、両側縁に刃部を持つもの（38）は3点である。この中には両側縁とも両面調整のものはない。

「縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して両側縁に刃部を持つもの」は26点出土した。両側縁とも確たる調整が巡るものは14点で、そのうち端部にも調整が及ぶものは6点である。片縁のみ確たる刃部を持ち、もう片縁は極めて浅い調整のもの（40）は8点ある。そのうち、端部に調整が及ぶものは1点である。背面の一側縁に片面調整があり、対となる側縁の腹面側に調整が及ぶものが4点出土している。「縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して片縁に刃部を持つもの」は13点出土している。

なお、剥片石器および剥片の接合は行ったが、接合しなかったスクレイパー片には、つまみ付きナイフの折損品が混在する可能性もある。そして、スクレイパー片に分類した小型のもののうちには、石鏃未成品の可能性を持つものが2点ある。

両面調整石器（図Ⅳ－17・18－46～50・53・55、—26、図版63・64、表Ⅳ－4・5）

両面調整石器は20点出土した。両面から調整が入り、縁辺に使用痕が断定できないもので、石核の性質を備えている可能性がある、又は他の分類に当てはまらないものをここに分類した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層およびⅢ層上面から6点、Ⅳ層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階で3点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては40ラインより北西側に散点的に分布する事が挙げられ、F—40区、F—48区に比較的集中する。これは包含層出土石器の集中か所とほぼ合致する。素材の石質は頁岩製（46～50・53・55）が17点、メノウ製が3点である。接合資料としては、F－48c区Ⅲ層上面とF—50—b区Ⅲ層の1点ずつが接合したもの（46）、F－48－c区Ⅲ層上面とF－49－a区Ⅳ層、F—48—b区Ⅲ層上面出土遺物がそれぞれ1点ずつ接合したもの（47）がある。J—46区Ⅳ層から同一母岩の両面調整石器片3点とRフレイク5点が出土している。接合した資料を2点図化した（48・49）。K—47区Ⅴ層からフレイク2点、Rフレイク2点、両面調整石器片の可能性が高いものがそれぞれ2点ずつ出土しており、そのうち3点が接合している。

石核（図Ⅳ－17・18－51・52、—26、図版63・64、表Ⅳ－4・5）

石核は80点出土した。打面が顕著で、剥片剥離面ないしはそれに準ずるものが認められるものである。連続して、定型的な素材を剥離したと考えられるものはなかった。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から22点、Ⅳ層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階で35点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては、F—40・41区、および隣り合うG・H－44、I－43区に集中する事が挙げられる。これは包含層出土石器の集中か所とほぼ合致する。素材の石質は頁岩が47点、メノウが26点である。I—44区とF—41区から出土した石核片が1点ずつ接合している。また未掲載のものとして、接合はしなかったがG—44区から同一母岩の可能性が高いフレイク2点と石核1点が出土している。

ピエス・エスキーユ（図Ⅳ－ 18－ 56・57、—26、図版64、表Ⅳ－ 4・5）

ピエス・エスキーユは７点出土した。上下両端に潰れ痕跡があるもの、どちらかの端部から裂けるように剥離が及ぶものを選んだ。側縁に調整が連続するものはない。層位的な出土状況としては、Ⅳ層の上面から手掘りで２、３回掘り下げた段階で３点、Ⅳ層の下位で１点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては37ラインより北西側に散点的に分布する事が挙げられる。素材の石質は頁岩製（56）が３点、メノウ製（57）が４点である。

Ｕフレイク（図Ⅳ—26、表Ⅳ－ 4）

Ｕフレイクは151点出土した。潰れている、連続して欠けている、などの人為的な使用痕が認められるものを当てはめた。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から34点、Ⅳ層の上面から手掘りで２回掘り下げた段階までで44点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては41ラインより北西側からまんべんなく出土する事が挙げられる。その範囲で、まとまって出土するのはFラインである。素材の石質は頁岩が132点、以下多い順番として、メノウが15点、黒曜石が２点と続く。

Ｒフレイク（図Ⅳ－ 17－ 48・55、—26、図版63・64、表Ⅳ－ 4・5）

Ｒフレイクは91点出土した。連続して剥離された痕跡を持つものを当てはめた。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から２４点、Ⅳ層の上面から手掘りで２回掘り下げた段階までで12点出土しているのが目立つ。平面的な分布は43ラインより北西側に集中する事が挙げられる。素材の石質は頁岩が76点、以下多い順番として、メノウが10点、黒曜石とチャートが２点ずつと続く。48と55については接合関係と出土状況から、両面調整石器に関連する資料である。

フレイク（図Ⅳ—26、表Ⅳ－ 4）

フレイクは1879点出土した。人為的に母材から打ち剥がされたもので、ＵフレイクやＲフレイクを始めとして石器分類にあてはまらないものをここに分類した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から466点、Ⅳ層の上面から手掘りで２回掘り下げた段階までで646点出土しているのが目立つ。石質は頁岩製が1459点、以下多い順番として、メノウが385点、チャートが12点、黒曜石９点と続く。

石斧・石のみ（図Ⅳ－ 19－ 58～64、—26、図版64、表Ⅳ－ 4・5）

石斧は24点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から５点、Ⅳ層の上位、手掘りで１，２回掘り下げた段階までで７点出土しておりⅣ層の下位、手掘りで４回掘り下げた段階からⅤ層にかけて３点出土しているのが目立つ。平面的な分布は40ラインより北西側で散点的に出土する事が挙げられる。その範囲で、比較的Fラインよりに集中する。素材の石質は緑色泥岩製（60～62・64）が12点、粘板岩製（58・63）が３点、片岩製（59）が９点である。

成形、調整方法が確認できるものは８点のみで、そのうち刃部の折損しているものが６点で、刃部が残存するものは２点（59・60）ある。また、刃部の破片が２点ある。これらの刃部形態は弱凸強凸刃が３点で、そのうち円刃（59・60）が２点、残部から直刃の可能性があるものが１点ある。他に残部から円刃で弱凸強平刃の可能性があるものが１点ある。

成形、調整方法として、全面に研磨が及ぶものが多い。敲打調整後に研磨したものが２点（59・60）、打ち欠き調整後のもの（63）が１点、擦り切り痕跡が明瞭なもの（58）が１点ある。61は素材本来の形状を生かしたものか簡単に打ち欠き後、全面研磨を施す。62は研磨のみで成形・調整している可能性がある。未成品は４点出土し、ひとつは板状の節理痕を打ち欠いただけのものであった。64は未成品を製作途中でたたき石に転用した可能性がある。

接合関係としては、H—31区とG—42区出土のものが接合し、G—32区と遺構NH—17出土のものがそれぞれ接合した。

石のみの可能性があるものは遺構P—62と接合したF—43区出土破片１点のみである。

北海道式石冠（図Ⅳ－ 20－ 65～71、－ 26・27、図版65、表Ⅳ－ ４・５）

北海道式石冠は36点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から５点、Ⅳ層の上位、手掘りで１，２回掘り下げた段階までで６点出土しておりⅣ層の下位、手掘りで４～５回掘り下げた段階から６点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては、48ラインより北西側に集中する事が挙げられる。またF—43区やH—41区のそれぞれの周辺、隣り合うH—35・I—36区にそれぞれ分布のまとまりがある。縄文時代前・中期の遺物であるためか、分布状況が独特である。素材としている石質はほとんど安山岩である。１点は不明の火成岩製である。

成形方法としてほぼ全面を敲打で成形する、あるいはその可能性が高いもの（65～68）が23点ある。短軸で割った楕円礫に敲打で溝を作る、あるいはその可能性が高いもの（69・70）は11点ある。他に未成品の可能性が高いもの（71）が２点出土した。71は打ち欠き調整後、敲打調整をほぼ全面に施すものである。

全面敲打調整23点のうち形状に規格性があるものとしては、持ち手の溝に対して北海道式石冠を直角に断ち割った際、持ち手頂部の断面形態が真円の弧が描くラインに近いもの（65・66）が８点出土している。そのうち素材の形状を生かし、頂部には敲打が巡らないもの（68）が２点ある。67は正面観が方形に近く、独特である。

偏平打製石器（図Ⅳ－ 21－ 72～80、－ 26・27、図版65、表Ⅳ－ ４・５）

偏平打製石器は69点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層上面から８点、Ⅲ層から２点、Ⅳ層の上位、手掘りで２～３回掘り下げた段階で11点出土しておりⅣ層の下位、手掘りで４～５回掘り下げた段階から８点出土し、Ⅴ層から６点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴は39区の列・42～46ライン・47～51ラインの３か所にまとまっている事が挙げられる。素材の石質は安山岩（72～80）が65点で、そのうち豊浦町,虻田町で多く見られる赤褐色で、板状節理が特徴的な安山岩製のものが２点ある。凝灰岩製が２点、濁川火砕流起源で、発泡性の強い凝灰岩か軽石が判然としない素材のものが１点ある。なお、機能部としたのは、偏平打製石器に特有な、石器の正面観に対する底面部（ものによっては頂部にも）に残る敲打痕ないしは擦り痕のある部分を指す。機能面としたものは作業によって面が形成されるに至っている場合を指すものとした。

完形品の形状が判るものについて、石器そのものの正面観が、半円形のもの（72・73・74・78）が23点、楕円形のもの（79）が５点、礫素材の形状を留めるもの（75）が10点あり、素材を生かした結果、三角形状を呈するもの１点などがある。また素材に打ち欠き調整を施したのみで未成品の可能性が高いもの（76）が３点出土している。

機能部の形状としては、石器正面観から見て直線的なもの（72～74）、曲線的なもの（75・78）、上下に機能部を有するもの（77～80）の３種類に分かれる。底面（機能面）については、石器の底面観について機能部が、明瞭な面を持つもの（73）、機能面があるものの明瞭とは言いがたいもの（74・75）、面部分を持たずいわば刃部様の機能部を有するもの（78）の３通りに分けられ、刃部様のものには、厚さが3.4cm以上の肉厚で重量感のあるもの（1000ｇを目安として、Ⅲ章に掲載したH－ ２－ ９、P－ 11－ ４）などがある。

石器正面観から見た機能部について、直線的なものは49点出土した。それらのうち、明瞭な機能面を持つものは10点（うち６点が半円状）あり、そのほとんどが長軸方向の擦痕（73）を持つが、敲打の方向を反映しているものと考える。１点のみ機能面短軸方向に擦りが確認でき（72）、いわゆるすり石としての機能が明瞭なものがある。底面部の全面に機能面が及ばないものは15点（うち５点が半

円状）出土した。やはり、そのほとんどが長軸方向の擦痕を持ち、それについては、敲打の方向を反映しているものと考える。刃部様の機能部を有するものは25点（うち８点が半円状）出土した。そのうち５点（うち２点が半円状）は厚さのあるタイプである。

石器正面観について機能部が描くラインが曲線的なものは３点出土した。面の明瞭なもの、不明瞭なもの、刃部様のもの（78）がそれぞれ１点ずつ出土している。

石器正面観について頂部と底部にふたつの機能面を持つものは７点出土している。その内訳としては、頂・底部とも直線的な刃部様を呈するものは３点出土、片方が曲線的でもう片方が直線的な刃部様のもの（77・80）は２点、両方が直線的で機能面を有するもの（79）が２点ある。

たたき石（図Ⅳ－ 22・23－ 81～95・100、－ 26・27、図版66、表Ⅳ－ ４・５）

たたき石は106点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から13点、Ⅳ層の上位、手掘りで１～３回掘り下げた段階までで37点出土しているのが目立つ。平面的な分布は36ラインより北西側に分布する事が挙げられ、G—42・43、E・G—49区に比較的集中する。素材の石質は安山岩が大半を占め（83～95・100）、流紋岩製が１点、凝灰岩製が２点、泥岩製（82）が２点出土する。

礫素材の選択としては楕円礫（81・83・89・92・93）が30点と目立つ。その中には、不整なもの10点や偏平なもの１点を含む。他に素材となる礫の形状を指摘できるものとしては、亜角礫（82）８点、偏平礫（85・86）６点、棒状礫（87）６点、球礫（94）３点があり、他は不整な形状の礫である。

機能部の形態としては所謂、凹み石とされるもの（90～93）が５点出土しており、表裏面で凹み部分同士が対応する（90・93）ないしは、凹みと敲打痕が対応（91・92）している。他にある程度定型的なものとしては、顕著な打ち欠きによる調整を持つ「礫器」とでもいうべき石器（81～84）が12点出土している。両面調整のものは１点、他は片面調整である。片面調整のうち、礫の両端に調整がおよぶもの（81）は４点ある。類似のものとして、偏平打製石器の項目で刃部様と称した機能部を側縁に持つもの（84）が１点出土している。

他に、礫の端部のみを使用（85・94）するもの36点、そのうち一箇所のみ用いるもの（94）は23点である。礫の側縁を使用するもの（87～89）は17点でそのうち一辺のみを使用するもの（87・88）は12点である。礫の平坦な面を用いるもの（100）は６点ある。100は機能部についてかすかな擦りの後、敲打が加わっている。縁辺と端部を使用するもの（86）は５点、亜球礫のほぼ全面に敲打が巡るもの（95）は１点である。複合的な機能部を有しているものは、両端と側縁を用いるもの３点、縁辺と面を用いるものは３点、一端と面を用いるものは２点出土した。割礫の割面を用いるもの（例示するならば、91の端部・被熱礫に分類した113の端部のような状態）が７点ある。

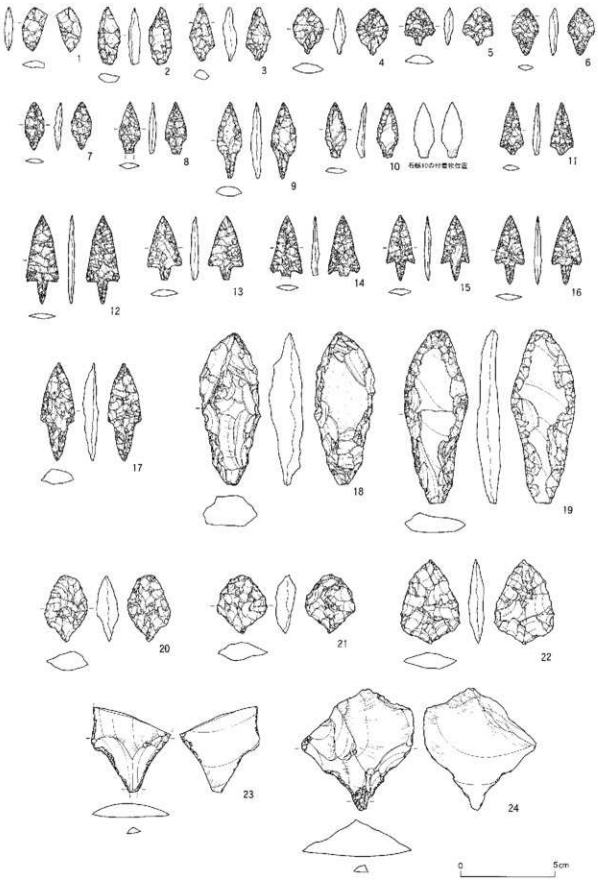
すり石（図Ⅳ－ 23－ 96～99、－ 26・27、図版66、表Ⅳ－ ４・５）

すり石は13点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層から５点、Ⅳ層の下位から２点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴として33ラインより北西側から散点的に出土する事が挙げられる。素材の石質はすべて安山岩である。礫素材の選択としては楕円礫（96～99）が９点でそのうち３点が偏平なものである。他が球礫、亜球礫、不整な礫を選択しているものが１点ずつある。

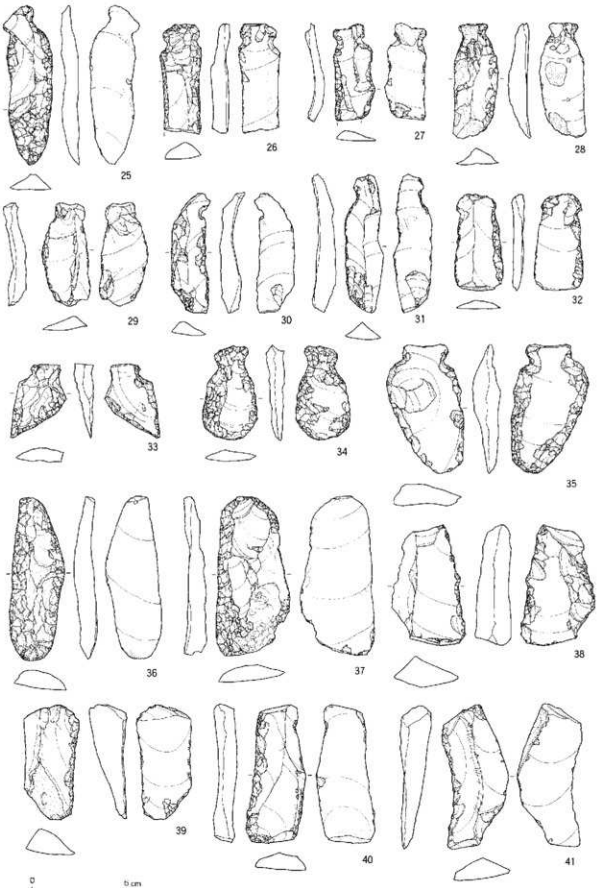
機能部の状態としては表裏の面を微妙に用いているもの（97）が５点である。同一面について敲打後に擦痕を持つもの（96）が２点、礫の平らな一面を用いるもの（98）が２点、、端部に機能部があるものが１点、一側縁を使用するもの（99）は２点ある。96は裏面の擦り面が特に顕著である。99は側縁の他に表裏面にも擦痕が認められる。

砥石（図Ⅳ－ 23－ 101・102、－ 26・27、図版66、表Ⅳ－ ４・５）

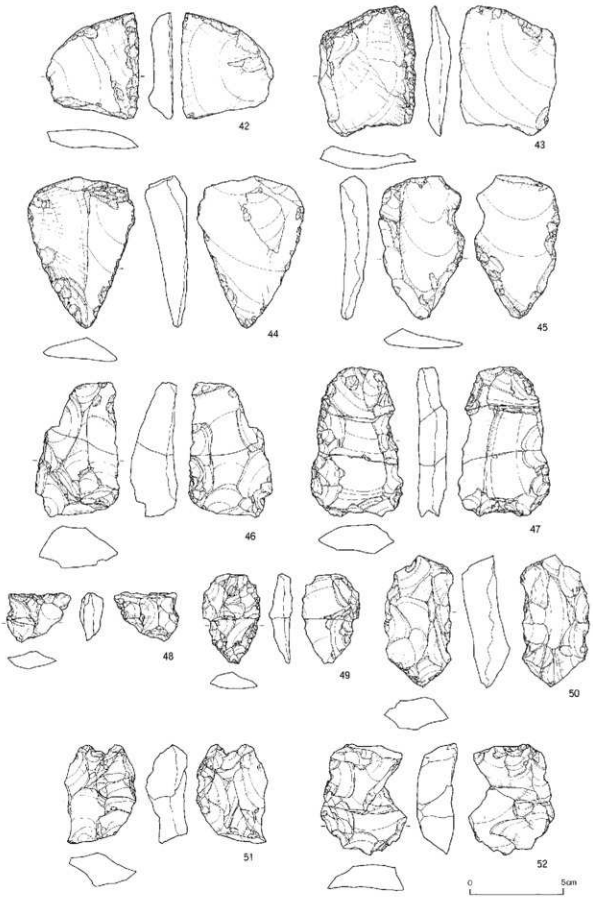
砥石は10点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅲ層上面とⅢ層から２点、Ⅳ層を２回掘り下げ



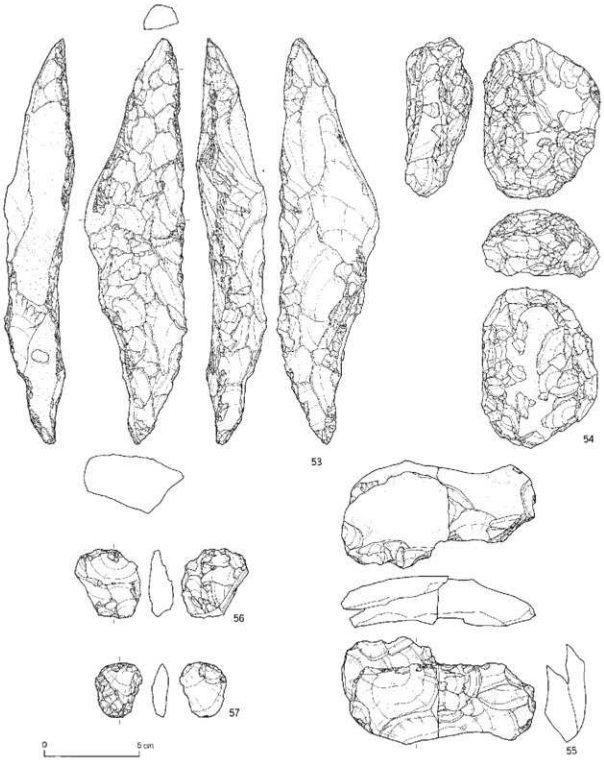
図Ⅳ- 15　包含層出土の石器（１）



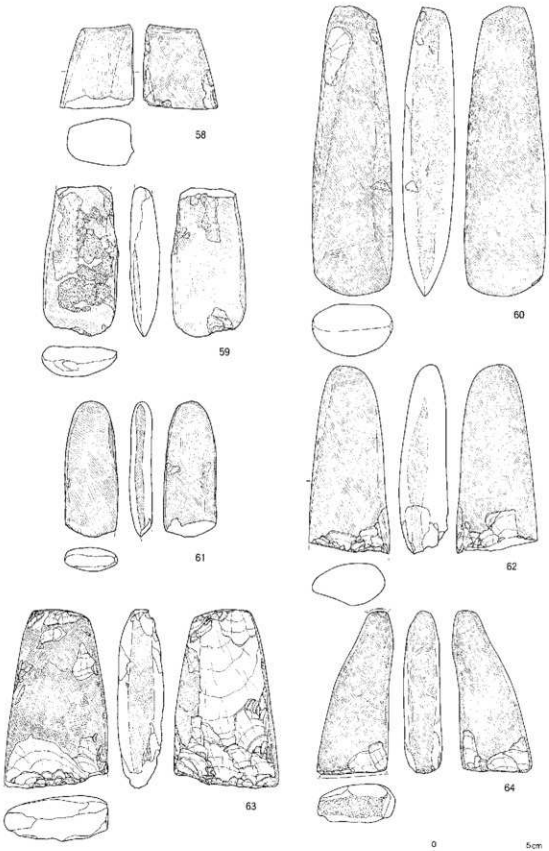
図Ⅳ- 16　包含層出土の石器（２）



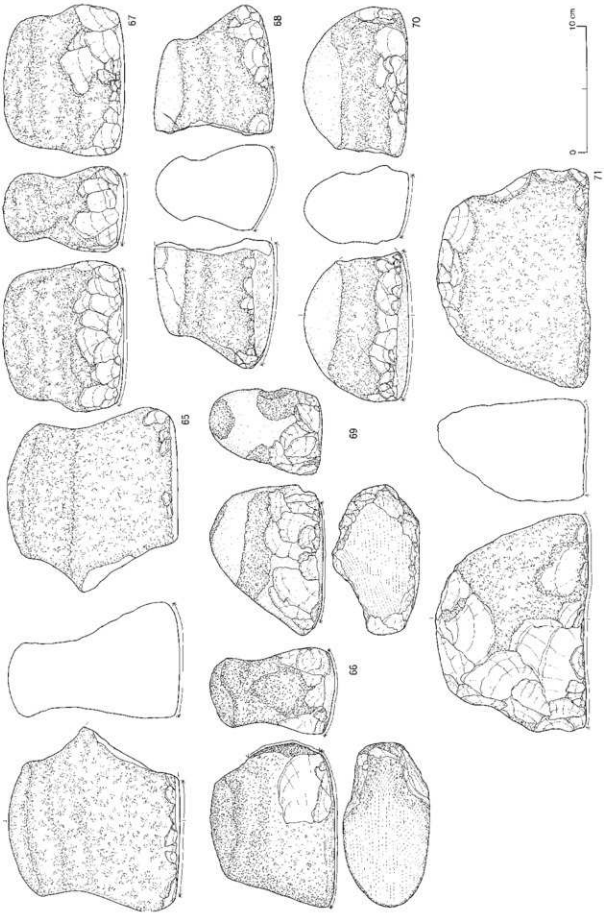
図Ⅳ- 17　包含層出土の石器（３）



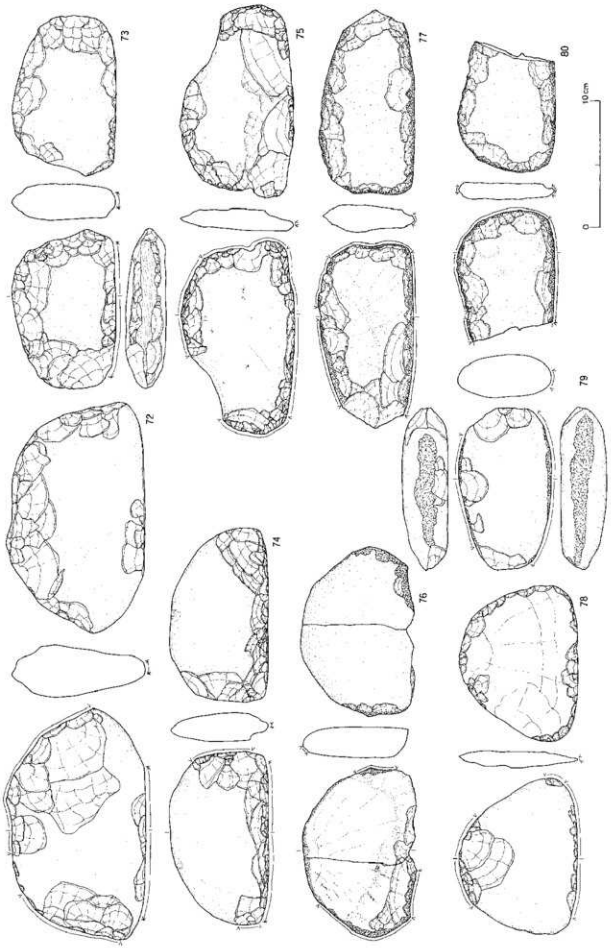
図Ⅳ- 18　包含層出土の石器（４）



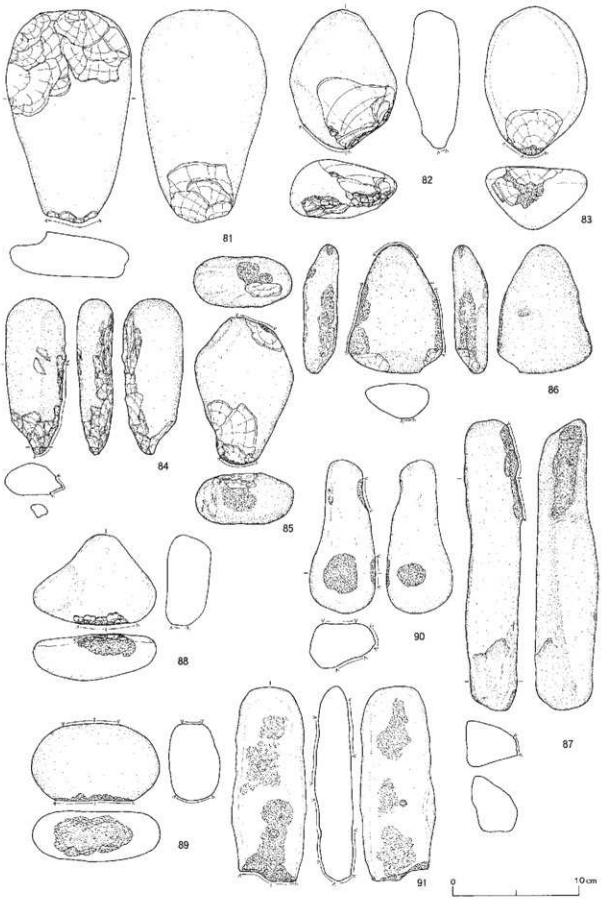
図Ⅳ- 19　包含層出土の石器（５）



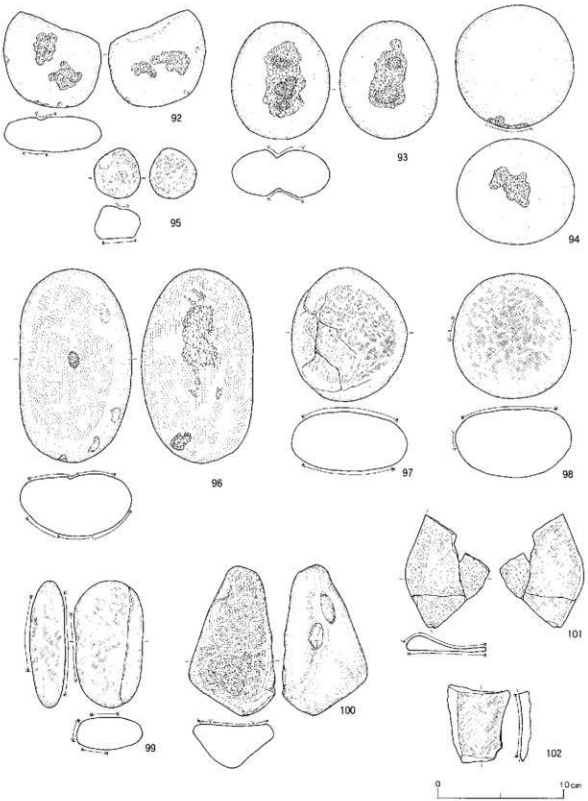
図Ⅳ-20　包含層出土の石器（6）



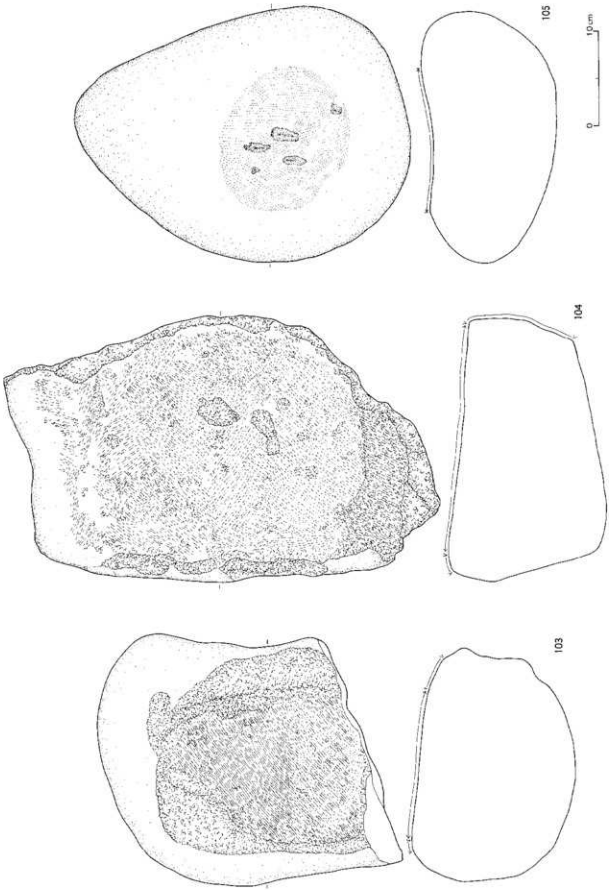
図Ⅳ- 21　包含層出土の石器（７）



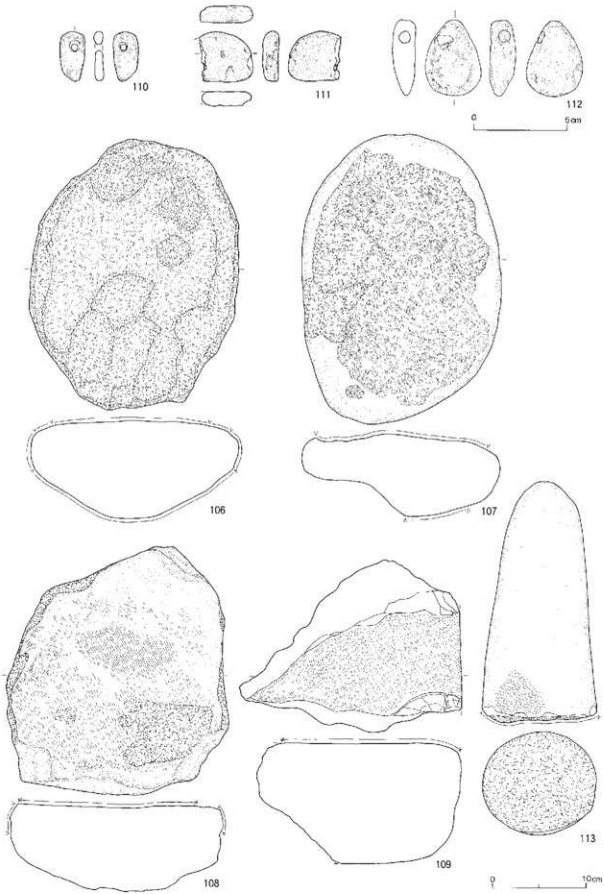
図Ⅳ- 22　包含層出土の石器（８）



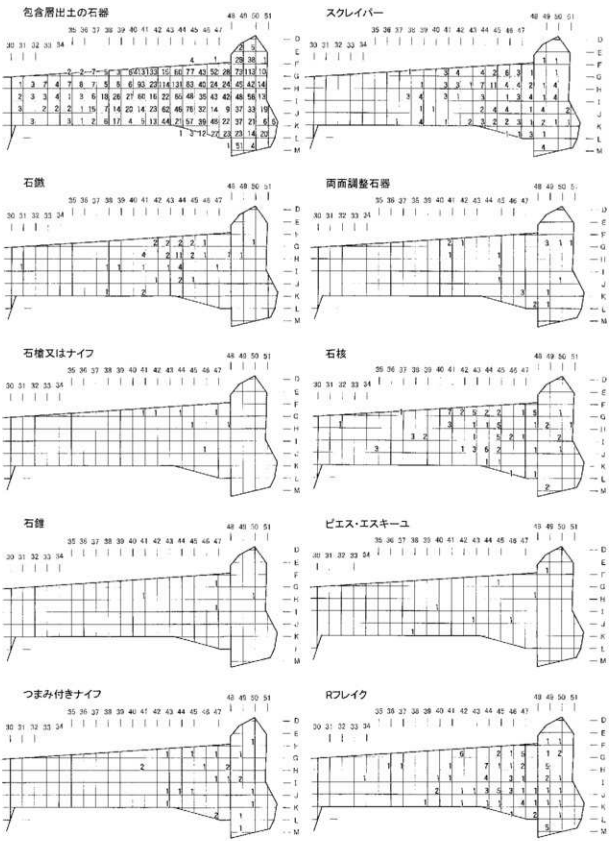
図Ⅳ- 23　包含層出土の石器（９）



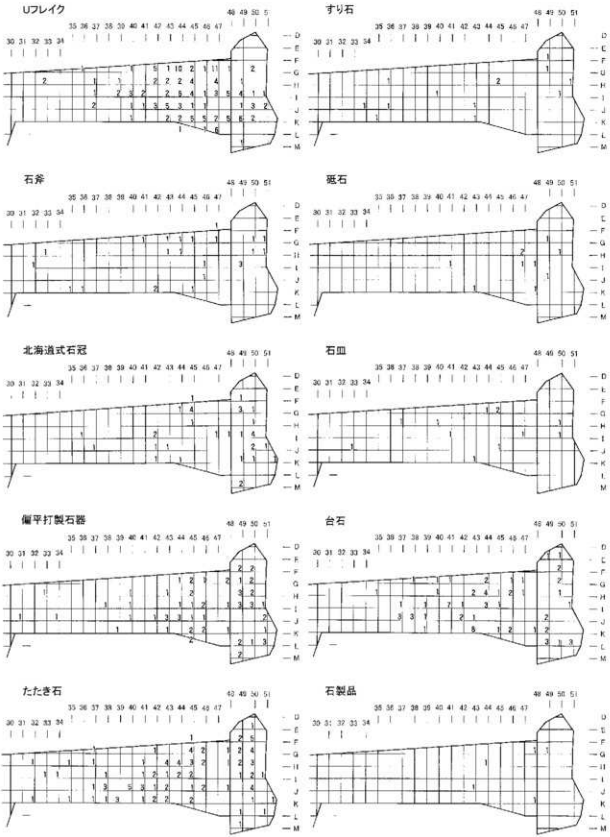
図Ⅳ-24　包含層出土の石器（10）



図Ⅳ- 25　包含層出土の石器等（11）



図Ⅳ- 26　包含層出土の石器分布図（１）



図Ⅳ- 27　包含層出土の石器分布図（２）

た段階で２点、Ⅳ層下位とⅤ層から１点ずつ出土している。平面的な分布の特徴としては40ラインより北西側から散点的に分布する事が挙げられるが、H—47区周辺に比較的偏る。素材の石質は安山岩・凝灰岩・軽石がある。凝灰岩製の３点（101）は接合した。軽石製のものは使用痕が顕著ではない。楕円礫の平坦面の一面を使用したものが２点出土しているが、すり石に類似する使用法と痕跡が認められるものもあり、単純に使用痕が顕著なものと言い換えることも可能である。101、102は機能面が顕著であり、凹面を形作る。

台石・石皿（図Ⅳ− 24・25− 103～109、− 26・27、図版67、表Ⅳ− ４・５）

台石・石皿の類は88点出土した。楕円形をした顕著に凹む、皿部分を有する典型的な石皿の出土は105のみである。加えて、楕円礫を選択し、顕著な擦り面を持つものを石皿として、分類するならば、その定義に当てはまるもの（109）は12点あり、すべて安山岩製である。層位的な出土状況としては、Ⅳ層を１～２回掘り下げた段階で５点出土している。分布の特徴としては35ラインより北西側で散点的に出土する事が挙げられる。

上記の、石皿の定義に当てはまらないものを台石としたが、破片については石皿の可能性が高いものもある。76点出土した。層位的な出土状況としては、Ⅳ層を１～３回掘り下げた段階で29点出土している。分布の特徴としては36ラインより北西側に所々（J—36・37区、H—40区、K—42区、I～K—48区、F—49区）に集中しながらまばらに分布する事が挙げられる。素材の石質はほとんど安山岩である。濁川火砕流起源と考えられる安山岩ないしはそれによく似る軽石製のもの（108）は８点出土している。台石としたものの中には北海道式石冠を作るための剳礫かとも思われるものが６点ある。敲打痕が散点的に見受けられるが根拠に乏しいため、北海道式石冠未成品とはしなかった。機能面としては敲打痕を持つもの25点、かすかに擦痕を持つもの５点、敲打痕と擦痕の見られるもの（103・104・107）は25点である。縁辺に敲打調整を加えるものは４点あり、その機能面に敲打痕と擦痕を持つもの（106・108）が２点ある。表裏面とも確実に使用しているものは２点であった。図化した103・104・106～108は敲打で機能面を調整した後、擦痕を加えているか、あるいは、叩き引くような敲打作業を行っていたものと想定する。103は特に機能面の中央に顕著な擦痕がある。104は擦痕が特に顕著である。106は楕円形に形状を成形している。

使用痕のある礫・被熱礫（図Ⅳ− 25− 113、− 26、図版67、表Ⅳ− ４・５）

使用痕のある礫・被熱礫は152点出土した。使用痕跡の大部分は敲打によるものである。被熱した使用痕の有る礫は13点、被熱礫は129点、加工痕の有る礫は10点出土した。

発掘で得られた礫は肉眼観察によって判断し、自然礫は現地で廃棄してきたが、特徴的な礫は取上げた。363点を取上げたなかで、加工痕はないが素材として選択してきた可能性のある原石は39点、加工痕のない軽石は８点、自然の作用で穿孔された小型の礫は３点ある。

113は顕著に被熱し、剳面が敲打によって平坦に調整される。礫面の一部には擦痕がある。第二の道具である石棒に類似するものの可能性があるため掲載した。

石製品（図Ⅳ− 25− 110～112、− 26・27、図版67、表Ⅳ− ４・５）

石製品は4点出土した。１点は遺構P—４出土遺物と接合した。110・111は軽石製で、偏平に研磨され、縁辺にも研磨が巡る。111は穿孔部分から折損している。いずれも両面から穿孔したものである。112はヒスイ製の玉である。材質は蛍光X線分析により糸魚川産の良質の硬玉である（Ⅴ章—１参照）。正面観が滴状をした素材を選択する正面は礫の粗面により研磨が及んでいないか所が目立つ。素材の右側面から穿孔を行う。孔の中には穿孔時の旋条痕が残る。孔が左側面に到達した時点で止めている。穿ち止めたか所には亀裂が走り、素材のキメの粗さによるものと考える。　（大泰司）

Ⅴ　自然科学的分析

1　濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析

藁科哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光Ｘ線分析で行う元素比法[2,3),4]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例[5]が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。（１）石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。（２）玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリー として、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉は北海道茅部郡森町字石倉町401ほかに位置する濁川左岸遺跡の調査区F－ 47区のⅢ層（Ⅲ層より古い可能性もあり）から出土したヒスイ製石製品（遺物番号34番）１個について産地分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を

消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[4]非破壊で分析を行なう蛍光Ｘ線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダ－に置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光Ｘ線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。また、小型のヒスイ・碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した[5]。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では（１）新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、（２）軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産[6]、（３）鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、（４）岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、（５）長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに（６）西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、（７）兵庫県養父郡大屋町からの原石、（８）北海道旭川市神居町の神居コタン産、（９）岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる（10）長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を図１に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光Ｘ線分析

ヒスイの主成分元素はナトリュウム（Ｎａ）、アルミニュウム（Ａｌ）、珪素（Ｓｉ）などの軽元素[7]で、次いで比較的含有量の多いカルシウム（Ｃａ）、鉄（Ｆｅ）、ストロンチウム（Ｓｒ）である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム（Ｋ）、チタニウム（Ｔｉ）、クロム（Ｃｒ）、マンガン（Ｍｎ）、ルビジウム（Ｒｂ）、イットリウム（Ｙ）、ジルコニウム（Ｚｒ）、ニオビウム（Ｎｂ）、バリウム（Ｂａ）、ランタニウム（Ｌａ）、セリウム（Ｃｅ）の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のＸ線が試料によって散乱されたピ－クを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピ－クを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリュウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出きる方法が確立されるまでは、蛍光Ｘ線分析でＮａ元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろか。各原産地の原石のなかで、確実にＮａ元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Ｎａ元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はＳｒのピ－クがＦｅのピ－クに比べて相当大きく、またＺｒの隣に非常に小さなＮｂのピ－クが見られ、Ｂａのピ－クも大きく、糸魚川産では見られないＬａ、Ｃｅのピ－クが観測されている。このＣｅ

のピ－クは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピ－クが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピ－クが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また 砒素（As）のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は３個しか分析できなかったが良質である。このうち１個は濃い緑色で、他の２個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表１、２に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準（１）とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3 以上を示す場合は判定基準（１）により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準（１）になる。表２の判定基準（２）にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光Ｘ線ピ－クが観測できた個体数を％で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピ－クが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図２はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。● は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入

れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□ はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Fe の値（横軸）2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲ は大佐産の、△ は若桜産の、▽ は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピ－クが見られなかた場合、表２の判定基準（２）に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■ は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより（図３）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図４）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の分析結果

出土玉の比重が3.2以上（アルキメデス法）あり良質硬玉の可能性の範囲に入る。蛍光X線スペクトル（図５）には硬玉の主成分の一つのNa元素が観測されることから、この玉を硬玉製と判定した。また、分析できた含有元素の結果を表２に示した。この硬玉製玉の原産地を明にするために、これら分析値を各原産地の原石の元素比量Sr/Fe対Zr/Srの分布範囲と比較しすると、玉は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示す（図２）。また、Sr/Fe対Ca/Siでも、玉は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示示した（図３）。またNa/Si対Mg/Siの図４では、玉は糸魚川、大佐、若桜、神居コタンの重なる範囲に入っている。これら判定に使用した図と判定基準表１の比重の範囲およびBa元素の有無などの条件を考慮して、全ての条件を満たした玉の産地として、糸魚川・青海産硬玉を使用した玉と同定し、結果を表３に示した。

結　論

今回分析した濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品にはBa元素のピ－クがされず、比重も3.2以上あり良質の硬玉のようである。糸魚川産硬玉が多量に北海道に伝播した時期は縄文時代後期で、多くみられ、使用遺跡を抜粋して示すと例えば北海道千歳市美々遺跡から青森県大石平遺跡、岩手県大日Ⅱ遺跡、山梨県石堂遺跡、岐阜県西田遺跡、愛知県白石遺跡、三重県森添遺跡、大分県二反田遺跡、熊本県ワクド石遺跡、宮崎県学頭遺跡まで日本全国におよび、これら遺跡では糸魚川産ヒスイが尊重される共通の基盤を持っていたと思われ、糸魚川産地から遠くなるにしたがって、希少価値が増すと推測され本遺跡がヒスイの玉類を入手できる力（経済力）が大きかったことが推測される（図１）。

表１　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（１）

原産地名	分析個数	蛍光Ｘ線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00 ~ 3.35	0.01 ~ 0.17	0.01 ~ 0.56	0.15 ~ 30	0.00 ~ 2.94	0.72 ~ 27.6
若桜産	12	3.12 ~ 3.29	0.01 ~ 0.91	0.03 ~ 0.59	3.45 ~ 47	0.00 ~ 0.25	4.33 ~ 48.4
大佐産	20	2.85 ~ 3.17	0.01 ~ 0.07	0.00 ~ 1.01	3.18 ~ 61	0.00 ~ 12.4	3.47 ~ 28.6
長崎産	3	3.16 ~ 3.23	0.01 ~ 0.14	0.17 ~ 0.33	0.02 ~ 0.06	4.30 ~ 16.0	
日高産	22	2.98 ~ 3.29	0.00 ~ 0.01	0.00 ~ 0.02	0.00 ~ 0.37	0.00 ~ 0.063	5.92 ~ 51.6
引佐産	8	3.15 ~ 3.36	0.04 ~ 0.04	0.00 ~ 0.03	0.03 ~ 0.33	0.00 ~ 0.018	36.3 ~ 65.9
大屋産	18	2.96 ~ 3.19	0.03 ~ 0.08	0.04 ~ 0.16	1.08 ~ 79	0.02 ~ 0.48	0.95 ~ 4.81
神居コタン産	9	2.95 ~ 3.19	0.02 ~ 0.49	0.09 ~ 0.17	0.04 ~ 0.22	0.12 ~ 0.85	2.22 ~ 17.3
飛騨産	40	2.85 ~ 3.15	0.01 ~ 0.04	0.00 ~ 0.00	0.02 ~ 0.10	0.00 ~ 1.24	12.7 ~ 28.5
ミャンマ産	26	3.15 ~ 3.36	0.02 ~ 0.14	0.01 ~ 0.26	0.09 ~ 2.5	0.01 ~ 23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND：検出限界以下の濃度

表２　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（２）

原産地名	蛍光Ｘ線法による分析元素（各元素が確認できた個体数の百分率）							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	Tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND：検出限界以下　　tr：検出確認

表３　濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の元素分析値と比量の結果

遺物	分析番号	元素分析値の比量									
		Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Sr/Fe
玉	88308	0.132	0.189	0.14	0.43	2.896	0.05	0.006	0.01	0.013	0.562
JG-1		0.024	0.086	0.06	1.25	3.354	0.3	0.001	0.024	0.001	0.426

遺物	分析番号	元素分析値の比量							試料比重	試料重量
		Zr/Sr	Nb/Sr	Ba/Sr	La/Sr	Ce/Sr	Rb/Sr	Y/Sr		
玉	88308	0.313	0.01	1.07	0.41	0.45	0.17	0.01	3.248	24.12884
JG-1[a)]		0.719	0.10	5.77	0.23	0.29	0.72	0.18		

a):標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

表３　濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の元素分析値と比量の結果

遺物	分析番号	元素分析値の比量					総合判定
		図２判定	図３判定	図４判定	比重＆基準(２)	Ni/Fe判定[a)]	
玉	88308	IT	IT	IT,OS,WK,KM	IT,IN,WK,HK,HD		糸魚川産

IT：糸魚川 WK：若桜 OS：大佐 NG：長崎 HK：日高 IN：引佐 OY：大屋
KM：神居コタン HD：飛騨
a)：Ni/Fe比は日高産地および飛騨産地に同時に帰属された遺物の分類指標
（飛騨産原石、４２個の平均値± 標準偏差）Ni/Fe=0.091± 0.030
（日高産原石、１４個の平均値± 標準偏差）Ni/Fe=0.065± 0.028

参考文献

１）　茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ケ原新潟県糸魚川市教育委員会:63-73

２）　藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18

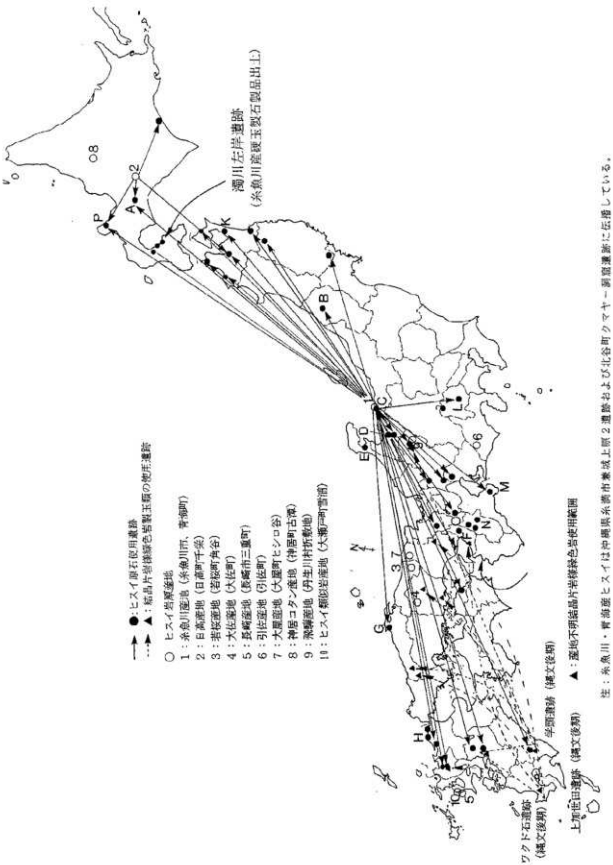
３）　藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』,14:95-109

４）　藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学,16:59-89

５）　Tetsuo Warashina（1992）、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF.　Journal of Archaeological Science 19:357-373

６）　番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　No.18:11-15

７）　河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。　岩石鉱物鉱床学雑誌 22:195− 201



注：糸魚川・青海産ヒスイは中期糸魚川系磨製石斧及上原2遺跡および北谷町クマヤ～新潟遺跡に伝播している。

図1　ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布圖

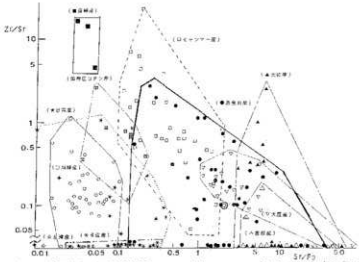


図2　ヒスイ原石の元素比値Zr / Sr対Sr / Feの分布および分布圏

◎：渇川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品

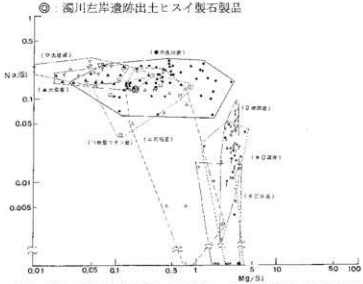


図4　ヒスイ原石の元素比値Na / Si対Mg / Siの分布および分布圏

◎：渇川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品

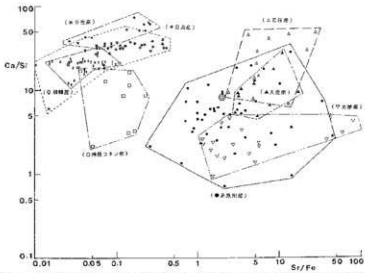


図3　ヒスイ原石の元素比値Ca / Si対Sr / Feの分布および分布圏

◎：渇川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品

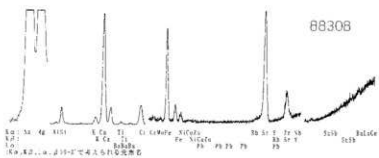


図5　渇川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品（88308）の蛍光X線スペクトル

2　濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子

吉崎昌一／札幌国際大学
椿坂恭代／札幌国際大学

１）遺跡と調査の概要
遺跡の名称：濁川左岸遺跡（Ｂ-15-22）
遺跡の所在：北海道茅部郡森町字石倉町401ほか
調査の機関：財団法人北海道埋蔵文化財センター
調査担当者：熊谷仁志、村田　大、影浦　覚、大泰司　統
調査期間　：平成14年5月7日～8月30日
調査面積　：3、630㎡
遺跡の立地：JR森駅から北西方向に約9km離れた標高37～45mの濁川河岸段丘上に立地する。
遺構の年代：縄文時代前期後半、中期前半、後期前葉
遺構、遺物については本文を参照していただきたい。

２）扱った資料
分析資料として扱った炭化植物は、縄文時代前期後半の竪穴住居跡内の焼土からと、縄文時代後期前葉の竪穴住居内の焼土から土壌を採取し、フローテーション法で処理後、種子の第一次選別を経て送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡で観察並びに撮影を行った．検出された植物種子の出土表は第１表に示しておいた。

３）検出された種子
イネ科　ＧＲＡＭＩＮＥＡＥ（図版-1a、ｂ）
縄文時代後期前葉の竪穴住居跡（NH-19）内の焼土1から1粒出土。穎果はやや扁平な長卵形。背面はやや隆起し、果の約1/2長の胚がある。腹面は平で基部にやや円形のヘソがある。これらの特徴からメヒシバ属　*Digitaria*　Hallerに分類される。しかし、メヒシバ属には形態の類似する種子が多く、種までの分類は困難である。計測値は長さ1.75㎜、幅0.80㎜、厚さ0.60㎜

ニワトコ属　*Sambucus*　L（図版-2a、ｂ）
縄文時代後期前葉の竪穴住居跡（NH-19）内の焼土3から1粒出土。種子は狭楕円形で表面に独特の凹凸があり粗面である。計測値は長さ2.00㎜、幅1.05㎜、厚さ0.80㎜

ウルシ属　*Rhus*　L（図版-3）
縄文時代前期後半の竪穴住居跡（NH-13）内の焼土2から破片1片出土．核果はやや歪んだ扁平形で表面は光沢がなく保存状態はきわめて悪い。ウルシ属種子の特徴を示すが破片のため詳細な分類は出来なかった。破片のため計測は出来なかった。

不明種子1　（図版-4）
縄文時代後期前葉の竪穴住居跡（NH-19）内の焼土3から1粒出土。種子は針形で種子の表面は粗面

である。資料の保存状態が悪いため分類が出来なかった。計測値は長さ4.40㎜、幅1.50㎜、厚さ1.30㎜

以上述べたもの以外に資料の保存状態がきわめて悪く分類出来なかったものを不明2として扱った。

４）若干のコメント

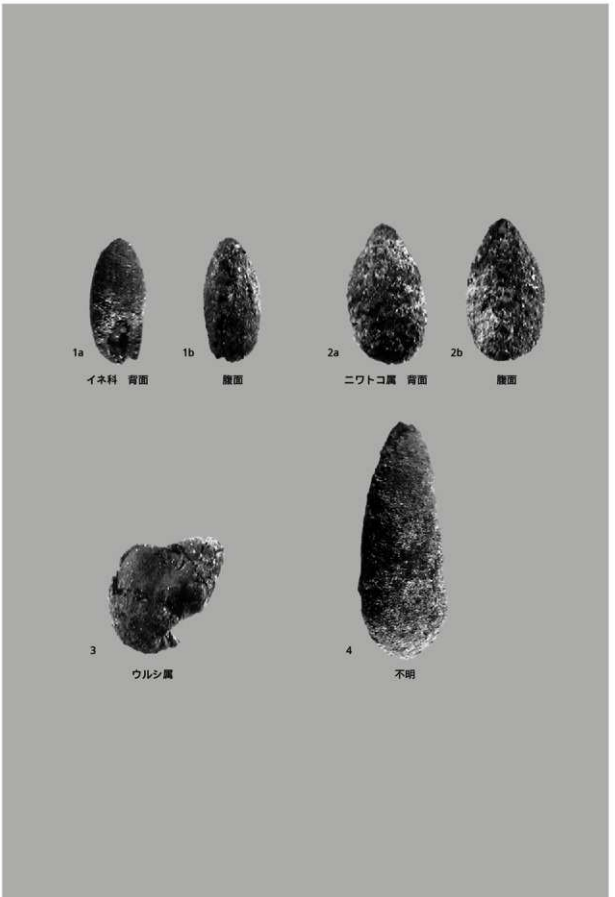
この地域周辺の発掘調査でも同様であったが、種子の検出量はきわめて少ない。土質が保存に向いていないのであろうか。縄文時代後期初頭の遺構からは野生のイネ科種子とニワトコ属の種子が検出されたのみである。縄文時代前期後半の遺構から、ウルシ属の種子破片が1点検出されているが、集落周辺の低木林に存在していたものが持ち込まれたのであろう。北海道産のウルシはヤマウルシ *Rhus triechocarpa* Miq.で塗料としてのウルシ原液には利用できないという。

表１　濁川左岸遺跡炭化種子一覧

試料番号	遺構名	採集場所	時期	重量（kg）	体積（㎤）	浮遊物重量（g）	残渣重量（g）	イネ科（粒）	ニワトコ属（粒）	ウルシ属（片）	不明1（粒）	不明2（片）
NS02-3	NH-13	HF-1 焼土中	縄文時代 前期後半	8.9	7.8	7.65	523.73					5
NS02-4	NH-13	HF-2 焼土中	縄文時代 前期後半	22.1	21.9	51.67	1581.4			1		1
NS02-5	NH-19	HF-1 焼土中	縄文時代 後期前葉	3.5	5.2	41.4	68.41	1				20
NS02-6	NH-19	HF-2 焼土中	縄文時代 後期前葉	10.3	11.7	31.6	155.68					3
NS02-7	NH-19	HF-3 焼土中	縄文時代 後期前葉	2.6	3.2	22.23	35.32		1		1	

表２　フローテーション試料一覧

試料番号		NS02-3	NS02-4	NS02-5	NS02-6	NS02-7
遺構名		NH-13	NH-13	NH-19	NH-19	NH-19
試料名称		HF-1	HF-2	HF-1	HF-2	HF-3
層位		焼土層	焼土層	焼土層	焼土層	焼土層
時期		縄文時代 前期後半	縄文時代 前期後半	縄文時代 後期前葉	縄文時代 後期前葉	縄文時代 後期前葉
重量	（Ｋｇ）	8.9	22.1	3.5	10.3	2.6
体積	（㎤）	7.8	21.9	5.2	11.7	3.2
浮遊重量２ｍｍメッシュ（ｇ）		2.26	15.25	14.05	6.18	6.6
浮遊重量０．４２５ｍｍメッシュ（ｇ）		5.39	36.42	27.35	25.42	15.63
残渣重量（ｇ）		523.73	1581.44	68.41	155.68	35.32
炭化種子（粒）	（２・００ｍｍ）					
炭化種子（粒）	（０．４２５ｍｍ）	1	6	25	3	2
炭化種子（粒）	残渣（１．４１ｍｍ）					
	合計	1	6	25	3	2
焼骨動物依存体（ｇ）	（２・００ｍｍ）		1514.78			
焼骨動物依存体（ｇ）	（２・００ｍｍ）					
焼骨動物依存体（ｇ）	残渣（１．４１ｍｍ）					
	合計		1514.78			
炭化材（ｇ）	（２・００ｍｍ）	0.63	1.62	12.9	3.93	4.23
炭化材（ｇ）	（０．４２５ｍｍ）	0.31	0.99	8.7	2.26	1.71
炭化材（ｇ）	残渣（１．４１ｍｍ）	0.03	0.13	0.27	0.44	0.15
	合計					
その他（ｇ）	（０．４２５ｍｍ）					
その他（ｇ）	（２・００ｍｍ）		9.15			
その他（ｇ）	残渣（１．４１ｍｍ）					
	合計					
その他（ｇ）	上記の個数と種類		軽石１点			
人工遺物（点）	残渣（１．４１ｍｍ）			1	5	
人工遺物（ｇ）	上記の重量			0.02	0.19	



図版　潟川左岸遺跡出土炭化種子

Ⅵ　成果と課題

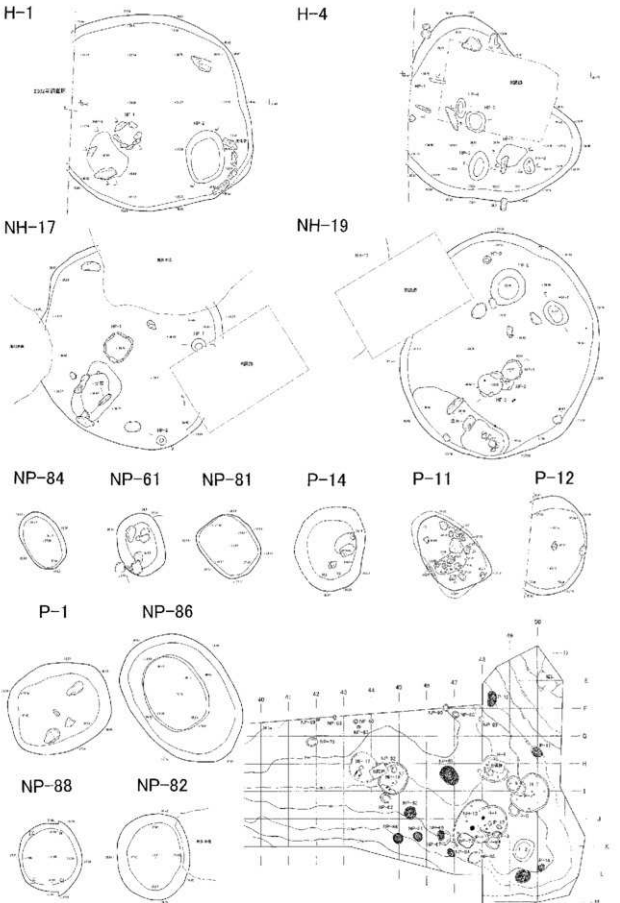
1　遺構

渇川左岸遺跡のB地区は、標高約37m～39mの渇川左岸段丘上に位置し、調査区の北西側を流れる無名沢に開析された、北側へ舌状にのびる台地上に立地する。遺構は主に、標高38m付近を傾斜の転換点とする平坦面と、沢に面する緩斜面から検出されている。平成13・14年の２ヵ年の調査で確認された遺構は、住居跡８軒、土壙30基である。これらは出土遺物などから、縄文時代前期後半のⅡ群ｂ類、中期前半のⅢ群ａ類、後期前葉のⅣ群ａ類土器のいずれかの時期に属するものと考えられる。

８軒の住居跡のうち、Ⅱ群ｂ類に属するものはH－３、NH－13で、平面形が楕円形を呈する大形のものである。北側へ舌状にのびる台地上平坦面の先端部に位置している。Ⅲ群ａ類に属するものはH－２・９で、小形のものである。明瞭な柱穴はなく、覆土中に焼土が検出されている。また、H－２の覆土は埋め戻しであることなどから、これらは通常の住居ではない施設の可能性がある。Ⅳ群ａ類に属するものはH－１・４、NH－17・19で、平面形は直径が４～５mのほぼ円形を呈し、掘り込みは浅く、明瞭な柱穴はない。床面の中央付近に直径0.5mほどの石組の炉を持つ。H－４は試掘坑と撹乱により、全体の様相が明らかではないが、他は石組炉の東側に、礫の３分の２ほどが埋め込まれた、１対の立石がある。石組炉の中心と立石の間を通る線の方向は、東へ72°から88°の間にあり、おおむね東を向いている。A地区で確認された住居跡にも、東側に立石を持つものがある。若干時期は新しいが、八雲町浜松５遺跡（八雲町教育委員会1995）では、この方向に出入り口構造が確認されているが、今回の調査では検出できなかった。

土壙は大まかに平坦面に位置するものと、緩斜面に位置するものに分かれる。前者のうち、F－42・43区に位置するNP－60・67～69は、遺構周辺の遺物出土状況などから、隣接する後期前葉の住居跡NH－17・19と関連があるものと推測される。NP－60からは接合関係が認められ、同一母岩から剥離されたと思われる頁岩製の石核、剥片など82点が出土している。北西側と南東側の２ヶ所にまとまりがあり、接合作業で16点の接合資料を得た。２つのまとまりをまたがる接合資料は１点のみであった。このことから、まとまりごとに剥離作業が行われ、それぞれ袋状のものに入れられていた可能性が高い。後者は長軸約1.5m～２mの平面形が楕円形を呈し、掘り込みも深いものが多い。このうち、土壙墓はP－11、NP－82・86・88の４基である。NP－82は土器とともに北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石など礫石器が13点出土した。NP－88は壙口部からサイベ沢Ⅶ式土器が横倒しのつぶれた状態で出土したほか、スクレイパー、偏平打製石器、たたき石などが伴う。NP－86のような壙口部が漏斗状に広がる形態を持つものは、八雲町野田生４遺跡（北埋調報171）のP－６に類例がある。その他、覆土が埋め戻しであることなどから土壙墓の可能性のあるものは、P－１・12・14、NP－61・81・84の６基である。P－１・12、NP－61は北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石、石皿などの礫石器が出土している。P－14は覆土の中位から焼土が検出されている。土壙墓の可能性があるものを含めたこれら10基の土壙は、平面形が円形を呈するNP－82・88を除き、遺構の長軸がほぼ等高線と平行に構築されている。いずれも中期前半のⅢ群ａ類土器の時期に属すると思われる。A地区が整理作業中のため、遺跡全体の様相は明らかではないが、作業の進捗を踏まえて更に検討してゆきたい。

（村田）



図Ⅵ- 1　縄文時代後期前葉の住居跡と中期前半の土壙

2　土器

濁川左岸遺跡Ｂ地区ではⅡ群ｂ類、Ⅲ群ａ類、Ⅳ群ａ類、Ⅵ群a類が出土した。土製品と焼成粘土塊を加えると包含層からは全部で25,750点を数える。調査区全体が駒ヶ岳火山灰ｄ層（Ｋｏ－ｄ）に覆われていたため、ほとんど人為的な撹乱を受けていない状況であったが、山林の緩斜面に立地するため流れ込みの影響を受けていた。ここでは各群について気のついた事項を簡単に記して、若干のまとめとしておきたい。

Ⅱ群b類は総出土点数の2割、５，309点が出土したが、すべて円筒土器下層d式であった。ほとんどが円筒土器下層ｄ$_1$式であったが、円筒土器下層ｄ$_2$式も少量が出土した。掲載拓影土器（図Ⅳ－２－21～24）のほか、未掲載で6個体相当の破片が確認されており、全部で少なくとも10個体の存在が数えられる。口縁部文様帯がより幅広く、口唇断面が厚みを持つもの。口縁部と体部の境に隆帯を持ち、口縁部断面が外反するものを円筒土器下層ｄ$_2$式として円筒土器下層ｄ$_1$式と分別したが、胴部片などは単軸絡条体を縦位に回転施文するものが両者に見られることなどから区別ができなかった。

Ⅲ群a類は総出土点数の1割、２，863点が出土した。すべてサイベ沢Ⅶ式と考えられる。粘土紐の貼付による文様帯を持つものと持たないものに分けて掲載した。「Ｃ」状の突起を口唇内面に持つもの（図Ⅳ－３－39・42、図Ⅳ－４－46・54）が両者に見られた。ＮＨ－２（図Ⅲ－６－１）やＮＰ－88（図Ⅲ－61－４）出土の復元個体などから2本組になっている小形のツノ状突起と組み合わさる可能性が高いものである。「Ｃ」状突起を持つ土器に、文様帯を持つものと持たないものがある点については、同時に存在したものか、それとも時期差によるものかという問題がある。遺構内の共伴出土例など類例に注意をしていきたい。

Ⅳ群ａ類は総出土点数の7割、17，514点が出土した。天祐寺式～涌元式相当のもの、トリサキ式、大津Ⅶ群がある。破片のため細分ができない土器は粘土帯を貼付されたものともたないものに大別した。これらの中には天祐寺式～トリサキ式が含まれている。このうち貼付が口縁部に複数段施されたものは、口縁部を横方向のナデ調整で磨消したのち、貼付しているものが多く見られた。また口唇上も平滑に調整している場合が多い。これらの特徴を有する土器はⅣ群ａ類の中でも古い段階のものと考えられる。口縁部の貼付ないし折り返しが横位に1段巡るものは、器表面の凹凸が著しく、口唇上も粗い調整のものが多くみられた。縄文は一部重なりあう羽状縄文や、二重に重ねて施文したもの、原体の回転方向が不規則なものが顕著で、特に原体を縦方向に回転施文するものが多く認められた。

トリサキ式は沈線を施したものと無文または縄文のみのものとがある。沈線が施されたものは棒状工具によるものと半截竹管様の工具の内面を用いたものと二種がある。破片資料が多く、器形等から時期差の違いを説明することはできなかった。内面の調整については、復元個体を見る限り、天祐寺式～トリサキ式のものは底面から頸部までを縦位に、口縁部付近では横位に施しているものが多くみられたが、トリサキ式に後続する大津Ⅶ群では全て横位の調整というものも認められた。

Ⅵ群ａ類は総出土点数の１％に満たない59点の出土であった。接合作業の結果、この59点は2個体分であり、復元個体と拓影土器でそれぞれ掲載した（図Ⅳ－13－166・167）。隣接しあうＪ－42・43区の出土であり、いずれも恵山2式、南川Ⅲ群土器である。

（影浦）

３．石器

遺構・包含層の項で説明した石鏃・偏平打製石器・石製品のうち、特徴的なものであると記したものについて類似例を探索するなかで得られたことがらを、いくつか述べておきたい。尚、図Ⅵ－２・３の石器実測図に付された掲載番号はそれぞれの報告書のものである。

石鏃：（図Ⅳ－15－１～17・図Ⅵ－２）「突起様の茎部を持ち、丸みを帯びた形状のもの」・「特殊なかえしを持つもの」・「付着物があるもの」これらについて縄文時代後期前葉の特色と考えられる例があった。

「突起様の茎部を持ち、丸みを帯びた形状のもの」（図Ⅳ－15－４・５・図Ⅵ－２）は「石槍又はナイフ」についても同様の形状（図Ⅳ－15－20～22）のものがある。類例としては、「函館市石倉貝塚」第一貝層出土遺物、「木古内町新道４遺跡・Ｂ地区」、「松前町大津遺跡」包含層出土遺物、「松前町白坂第３地点」包含層出土遺物、「青森県青森市小牧野遺跡」包含層出土遺物、「青森県六ヶ所村大石平遺跡」第６号住居覆土出土遺物（十腰内Ⅰｂ式主体に覆土から出土）、「六ヶ所村大石平Ⅲ遺跡」包含層出土遺物、（十腰内Ⅰ式並行が大半を占める）「六ヶ所村上尾駮（２）遺跡Ⅱ」（1987）包含層出土遺物などがある。石鏃サイズのものについては、先端部を再生したものがほとんどと考える。ただし大石平遺跡第６号住居覆土からまとまって出土した再生された石鏃群について先端を鋭利にする再生例もあり、再生の典型例とは言い難い。素材の厚みが比較的厚い事に起因する現象とも捉え得る。ただし、「白坂第３地点」包含層からの、大型で「石槍又はナイフ」の範疇にはいるサイズのものについて、同様な茎部の形状で、大型で鋭角的な先端を持つものの存在を断定できなかった。

以上の事から、茎部の形状が突起様で、正面観について先端が丸みをおびた形状については、再生の結果このようになったものがまず存在する。ただ同時に、この形状を生かした用途や使用法になにか特色があったものではないかと考える。

出土例はいずれも縄文時代後期前葉を代表する遺跡である。

「特殊なかえしを持つもの」（図Ⅳ－15－12～16・図Ⅵ－２）新道４遺跡B地区において、「有茎凹基のなかでもきわめて特徴的なもので、かえしの部分が2段になっている。出土区もまとまりをみせており、Ⅳ群ａ類に伴うものである。」と記述がある石鏃群もこの範疇に収まるものである。「２段」という定義がやや幅広いが、本遺跡については、薄い剥片を素材とし、両面全面調整を施すもののなかにひとつのまとまりが捉えられた。これには13のように「段」が微妙なものについても近似のものとした。

類例を探索したところ、「八雲町浜松５遺跡」５号住居覆土２出土遺物、「函館市石倉貝塚」第一貝層出土遺物、「松前町大津遺跡」包含層出土遺物、「松前町白坂第２地点・第３地点」包含層出土遺物、「六ヶ所村大石平Ⅲ遺跡」包含層出土遺物、作りは粗雑だが、「六ケ所村上尾駮(2)遺跡Ⅱ」包含層出土遺物などがある。先述の「新道４遺跡」でもＢ地区以外にＣ地区・Ｄ地区・Ｅ地区包含層出土のものがある。このような出土例をもとに推定すると、新道４遺跡Ｂ地区での記述にある通り、縄文時代後期前葉のものと考える。

「付着物があるもの」（図Ⅳ－15－10・図Ⅵ－２）Ｂ地区で出土したタール様の付着物がある石鏃の類例を求めたところ、「松前町白坂第２地点」（1983）包含層出土の凸基・平基でそれぞれ有茎、「上の国町小岱遺跡」包含層出土の凸基有茎、「木古内町新道４遺跡」Ｃ地区の凹基・平基・凸基でそれぞれ有茎、「青森市小牧野遺跡」の凸基有茎、「六ヶ所村上尾駮（２）遺跡Ⅱ」凸基・凹基でそれぞれ有茎、のものが挙げられる。いずれも縄文時代後期前葉の代表的な遺跡で包含層出土遺物である。有茎

のもののみに付着しており、凸基有茎が多い。そして、付着物の位置が示してあるものについて集成を試みところ、茎部付け根に付着する例が目立った。次いで正中線上に付着する例が少数ある。

偏平打製石器（図Ⅳ- 21- 72～80・図Ⅵ- 3）

偏平打製石器は、縄文時代中期、特に円筒土器文化に特徴的な石器である。しかし濁川左岸遺跡において、縄文時代後期前葉NH- 17の石組炉の組み石として、偏平打製石器が出土している。これについて、縄文時代後期前葉の段階まで用いられる石器なのか、縄文時代中期の遺物を採集し炉石として用いたものかについて検討する。

羽賀（1995）のまとめでは「函館市西股遺跡」の成果から、北海道ではノダップⅡ式まで残る事が示されている。縄文時代中期末葉～後期前葉に属する可能性がある資料を探索したところ、数例があった。またそのなかには炉石として用いている例もあった。ここでは擦り石として報告されているもので、偏平打製石器の範疇にはいるものも取り上げるものとした。

「豊浦町高岡１遺跡」WH- 7において縄文時代中期後半の石組炉の炉石として偏平なすり石（偏平打製石器の範疇に入り得る）が出土している。同じ遺跡のWH—18においても縄文時代中期末葉の石組炉の炉石として偏平打製石器が２点、早期の断面三角形のすり石が1点用いられている。「乙部町緑町２遺跡」３号竪穴式住居から涌元式直前の土器に伴う偏平打製石器（ただし包含層の遺物と接合し、同一住居から北海道式石冠の出土もある）。「八雲町浜松５遺跡」11号住居覆土、10号土壙、20号土壙からのものはトリサキ式土器に伴う遺物という可能性が高い。「南茅部町臼尻B遺跡」の住居跡からノダップⅡ式段階での偏平打製石器の例がある。ＨＰ- 206からも形状等は不明であるが、擦り石から炉石への転用例が2点と記載され、覆土中位から偏平打製石器の出土がある。ＨＰ- 214からは５点の偏平打製石器が炉石として用いられる。ＨＰ- 236からは北海道式石冠１点と偏平打製石器３点が炉石に転用されている。ＨＰ- 252では炉石に1点の偏平打製石器が用いられる。ＨＰ- 207、ＨＰ- 258の床面から偏平打製石器が出土している。小笠原（1985）はこの臼尻B遺跡のまとめで、大安在Ｂ式以降が石組炉であり、臼尻Ｂ遺跡における後半ステージの石組炉の炉石に擦り石や石棒を使用する事象を追及する課題のひとつとして考えている。「戸井町釜谷２遺跡Ⅱ」HP39床面出土遺物について、折り返し口縁の土器（天祐寺式直後か）に偏平打製石器が伴っている。「木古内町新道４遺跡」Ｆ地区のＦＰ- ３覆土に大木10式並行ないしはその直後の土器がまとまって出土しており、それに伴って偏平打製石器が出土している。「函館市西股遺跡」のノダップⅡ式段階、５号住居床面から偏平打製石器が出土する。「知内町湯の里１遺跡」において縄文時代中期末葉、住居址１の石組炉から偏平打製石器が２点転用されている。また、同時期の住居址10の床面から偏平打製石器の出土がある。「青森県六ヶ所村弥栄平遺跡」前十腰内土器様式の土器が多く出土する包含層からの偏平打製石器出土がある。「大石平遺跡Ⅱ」において十腰内Ⅰ式期の72号土壙から偏平打製石器に類する擦り石の出土がある。

以上に引用した事例からノダップⅡ式以降、縄文時代中期後半の頃から石組炉が出現し、偏平打製石器や擦り石等の礫石器が炉石として用いられる事例がよくあることが判明した。「浜松５遺跡」においては包含層に中期円筒上層土器は混じらないため、円筒上層式土器の遺物という可能性が低い。ただし、遺跡以外の場所からの採集ということは有り得なくない。今後形態分類作業等から形態上の石器の時期的変遷が追うなどの根拠づけが必要となろう。偏平打製石器が後期前葉までは継続して用いられていた可能性が高く、また炉石の材として中期以前の遺物（北海道式石冠、断面三角形の擦り石等）を採集する動きも同時にあると言う事のみ指摘するにとどめ、今後の更なる検討を要するものとする。

その次なる検討に備え、偏平打製石器の使用法について簡単に考察する。今回出土した遺物につい

て、機能部は敲打痕が顕著なものが多く、擦痕については機能面を長楕円形として捉えた場合、長軸方向に擦痕がつくものがほとんどであった。また、面を形成するにいたる機能部について、その周辺には調整・成形とは無関係と思われる細かい剥離が巡るものが多い。先述の「大石平遺跡Ⅱ」において十腰内Ⅰ式期の72号土壙から出土している偏平打製石器に類する擦り石としたものについても同様の剥離痕跡がある。遺跡から出土した自然礫のうち、人為的な使用、被熱が認められないもの（廃棄できると判断したもの）の中から、偏平な礫を複数選び、その縁辺について「擦り」と「叩き」をそれぞれ行ってみた。その結果、機能部縁辺に細かい剥離痕が発生するのは「叩き」であった。簡単な実験で決定するのは早計かとも思われるが、この結果からは、偏平打製石器について、「叩き」という行為を行っている可能性が指摘できる。擦痕については機能面を長楕円形として捉えた場合、長軸方向に擦痕がつくものがほとんどであり、想定される用法は偏平楕円というその形状から、機能面の長軸方向に叩き擦るものと想定する。持ち方については、藤原（2000）が凹みを持つ偏平打製石器（濁川左岸遺跡の類例としてはＮＰ－ 88－ ２）の形状から推測している持ち方の通りであろう。

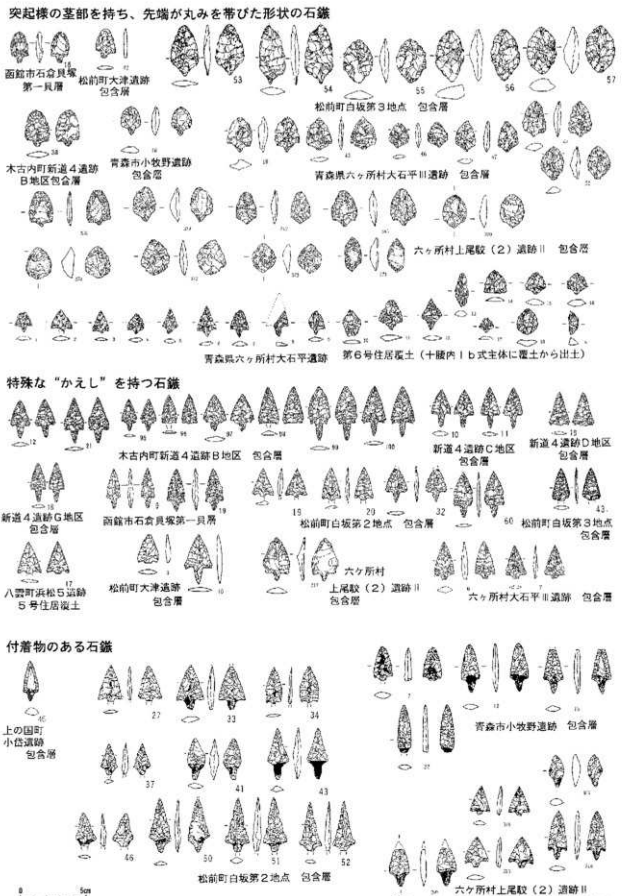
また、たたき石の項目で「礫器」と称した石器についても機能部の形態が類似している事から使用法の類似等の可能性がある。そのように検討するとNH－ 19床面出土石器のうち板状の偏平礫を使用しているたたき石について、やはり偏平打製石器と使用法が類似する可能性がある。このことは偏平打製石器が縄文時代後期前葉まで用いられる事を検討する上でひとつの資料となる。

石製品：「ヒスイ」「孔のある石斧型の石製品」について検討する。

「ヒスイ」（図Ⅳ－ 25－ 112）濁川左岸遺跡B地区において、ヒスイ製玉が出土している。渡島半島での時期が判る出土例を探索した。「八雲町浜松５遺跡」40号配石床面から１点、「八雲町浜松２遺跡」６号配石から16点、７号配石から１点出土している。「栄浜１遺跡」Ａ地区16号土壙の覆土から１点、これについて報告では中期とあるが、周囲から後期的な配石等の検出があるため後期の可能性が高い。「松前町寺町貝塚」出土で縄文時代後期の可能性が高いものが１点、「函館市日吉ストーンサークル」から後期のもの、「木古内町札苅遺跡」出土で晩期のもの14点、知内町の「湯の里４遺跡」からは後～晩期の可能性が高いもの、「湯の里５遺跡」からは後期の可能性が高いものが１点ずつ、「松前町上川遺跡」から晩期のもの２点、「上の国町大岱沢Ａ遺跡」からは中期中葉の可能性が高いもの１点が出土する。「八雲町シラリカ２遺跡」包含層から前期後半のヒスイが報告されているが、例外的である。青柳文吉(1998)のとおり、中期中葉からヒスイの出土例が一般的となる。出土例の多さから、後期前葉の頃に搬入される動きが活発になるものと考える。「八雲町山崎４遺跡」出土の時期不明のもの１点についても時期は不明だが中期中葉～後期前葉の土器が出土している事などを踏まえると、その時期のものと考える。今回出土したヒスイ製玉はⅢ層のものであり、確実な時期の推定はできない。だが周辺の他遺物の出土がⅢ層からⅣ層上位に集中している実態を参考に推定すると、やはり縄文時代中期中葉～後期前葉の可能性がある。隣の青森県は縄文時代後期前葉の土器様式について渡島半島と関連する。青森県後期前葉における、特徴的なヒスイの出土状況を示すものとして、「六ヶ所村上尾駮（２）遺跡Ⅱがある。十腰内Ⅰ式期のヒスイ製玉が４点まとまって出土する。

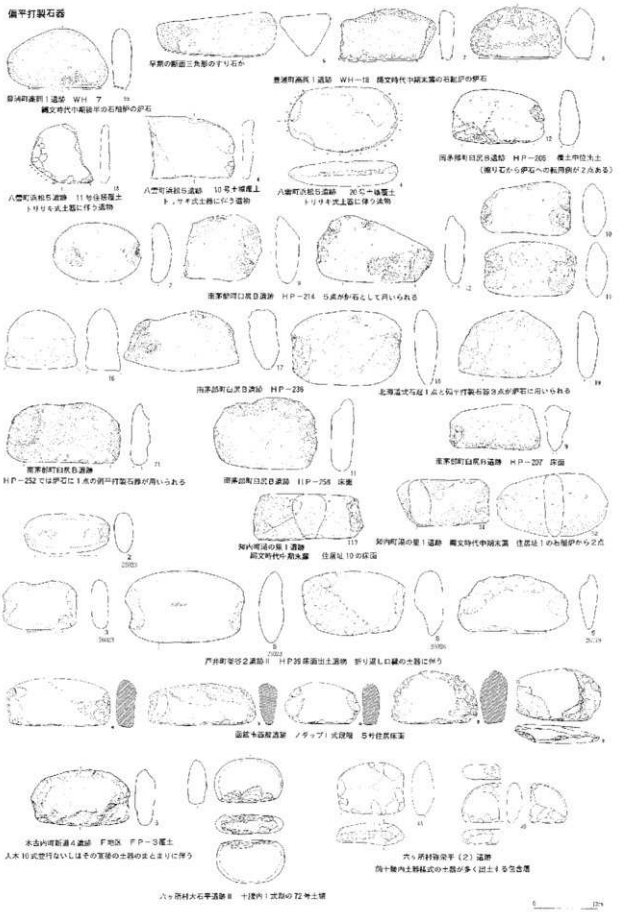
「孔のある石斧型の石製品」（図Ⅲ－ 31　P—4— ３）　縄文時代後期前葉の遺構であるP—4から石斧に類似する形状の、頁岩製石製品が出土している。渡島半島の遺跡について類例を求めたが、近似するものは見つけられなかった。やや類似するものとして正面観が長方形で、薄形のものについては、「八雲町コタン温泉遺跡」包含層出土の頁岩製の石製品1点がある。「八雲町浜松５遺跡」からスレート製のもの２点が出土している。これらの遺物が検出された包含層からは縄文時代後期の遺物が出土している。

（大泰司）



図Ⅵ- 2　石器のまとめ（１）　石鏃

偏平打製石器



図VI－3 石器のまとめ（2） 偏平打製石器

表Ⅲ- 1　遺構規模一覧

遺構名	位置	規模 (m) 長軸		短軸		深さ	平面形	長軸方向	時期	備考
		確認面	床面	確認面	床面					
H－1	I・J － 47・48	(4.80)	(4.50)	4.20	4.00	0.20	円形	N－73°－E	Ⅳ群a類	N－88°－E(9ﾄﾞ－立石)の方向 NH－13より新
H－2	J・K － 49	3.23	2.47	2.67	1.87	0.54	楕円形	N－18°－W	縄文時代前期	壁の崩し後土
H－3	H・I・J － 49・50	5.73	4.85	5.42	4.47	0.42	楕円形	N－6°－W	縄文時代前期	新
H－4	G・H － 47・48	4.16	3.72	(3.61)	(1.50)	0.18	不整楕円形	N－17°－E	Ⅳ群a類	P－6より新
H－9	H － 49	2.34	2.05	(2.05)	1.85	0.18	不整円形	N－42°－E	縄群a類	H－32より新
NH－13	I・J・K － 47・48	(7.67)	(7.44)	—	—	0.50	楕円形	N－60°－E	縄群a類	2001年一部調査
NH－17	G・H	43・44	(4.50)	(4.26)	—	0.12	(円形)	(N－85°－W)	Ⅳ群a類	N－72°－E(9ﾄﾞ－立石)の方向
NH－19	H・I － 44・45	4.78	4.32	4.08	3.80	0.23	円形	N－44°－E	Ⅳ群a類	N－82°－E(9ﾄﾞ－立石)の方向
P－1	I － 49	2.18	1.71	1.89	1.35	0.56	楕円形	N－58°－W	縄群a類	壁の崩し後土
P－3	J － 49	1.12	0.80	0.81	0.50	0.41	楕円形	N－24°－E	Ⅳ群a類	
P－4	J － 47・48	(1.65)	(1.48)	(1.30)	(1.26)	0.40	(不整楕円形)	(N－3°－E)	縄文時代前期～後期	
P－5	I － 49	(1.82)	(1.42)	1.54	1.08	0.64	(楕円形)	(N－35°－E)	縄群a類	H－3より古
P－6	H － 48	0.88	0.65	0.86	0.67	0.34	円形	N－82°－E	縄群a類	壁の崩し後 I－H－4より古
P－7	H・I － 49	(2.03)	(1.59)	(1.57)	(1.18)	(0.70)	楕円形	N－47°－E	縄群b類	H－3より古
P－8	J － 48	2.14	1.70	1.96	1.54	0.54	円形	N－12°－E	縄群a類	P－3より古
P－11	G － 49	1.74	1.88	1.13	1.10	0.38	楕円形	N－0°－E	縄群a類	壁の崩し後土
P－12	K － 48	2.12	1.71	(1.31)	(1.20)	0.45	(楕円形)	N－63°－E	縄群a類	壁の崩し後土
P－14	K － 50	(1.56)	(1.09)	(0.61)	(0.36)	0.61	(楕円形)	N－89°－W	縄群a類	壁の崩し後土
P－17	J － 48	(0.90)	(0.69)	(0.75)	(0.69)	(0.24)	円形	N－24°－W	縄群a類	
NP－60	F － 43	0.41	0.26	0.40	0.26	0.17	円形	N－11°－W	Ⅳ群a類	太形フレイク等
NP－61	I － 46	1.33	0.94	0.98	0.61	0.38	楕円形	N－32°－E	縄群a類	壁の崩し後土 NP－68より新
NP－62	I － 44	(1.42)	(1.02)	1.28	0.93	(0.26)		(N－4°－W)	Ⅳ群a類	
NP－63	J － 46	2.00	1.48	(1.70)	1.09	(0.78)	楕円形	N－42°－E	縄群a類	NP－61より古
NP－67	F － 43	0.83	0.37	0.38	0.3	0.17	円形	N－71°－E	Ⅳ群a類	
NP－68	F － 42	0.64	0.48	0.52	0.32	0.15	楕円形	N－26°－E	Ⅳ群a類	
NP－69	F － 42	0.33	0.26	0.28	0.24	0.15	円形	N－83°－E	Ⅳ群a類	
NP－70	G － 41・42	1.66	1.27	1.18	0.9	0.25	楕円形	N－61°－W	Ⅳ群a類	
NP－77	J・K － 47	2.48	2.34	1.87	1.27	0.22	隅丸方形	N－13°－W	縄群a類	NH－13より新
NP－80	F － 46・47	1.0	0.71	0.94	0.69	0.29	円形	N－22°－W	縄群a類	
NP－81	J － 45	1.38	1.25	1.15	1.0	0.55	隅丸方形	N－7°－E	縄群a類	壁の崩し後土
NP－82	I・J － 45	1.62	1.43	(1.47)	1.13	0.77	楕円形	N－34°－E	縄群a類	壁の崩し後土
NP－84	K － 46	1.27	1.12	0.84	0.59	0.38	楕円形	N－13°－E	縄群a類	壁の崩し後土
NP－85	K － 47	(1.88)	(1.73)	1.64	1.47	(0.37)	—	(N－14°－E)	縄文時代前期～中期	
NP－86	H － 46・47	3.00	2.57	2.14	1.83	0.82	楕円形	N－1°－E	縄群a類	壁の崩し後土
NP－88	J － 44・45	(1.57)	(1.3)	(1.34)	1.16	0.82	円形	(N－33°－E)	縄群a類	壁の崩し後土
NP－89	F － 47・(48)	(0.61)	(0.39)	(0.74)	(0.47)	0.44	—	(N－64°－W)	縄文時代中期～後期	
NP－90	E・F － 46	0.94	0.67	0.81	0.06	0.31	円形	N－37°－E	縄文時代中期～後期	
NP－92	G・H	44	1.16	0.77	0.96	0.8	0.36	不整楕円形	N－62°－W	縄群a類	NH－19より古

表Ⅲ－ 2　遺構出土遺物一覧

H-1

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	分類不明土器	スクレイパー	石核	Uフレイク	フレイク	偏平打製石器	たたき石	台石	軽石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	合計
覆土	6	18	41		1	1	2	5					43	17	2	136
撹土下	1	7	10				1		1		1		6			26
床		10	1	7	3			2	1		1	1	33	3	2	64
HF-1										1	1		13			15
HP-2覆土		1											1	1		3
合計	7	35	52	7	4	1	3	7	2	0	2	1	81	20	4	226

H-2

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	円板状土製品	スクレイパー	Uフレイク	フレイク	北海道式石斧	偏平打製石器	たたき石	台石	軽石	礫・礫片	合計
覆土	1	128	3	1	1	1	3		4	2		1	27	172
撹土下							1							1
不明		1						1			1			3
HF-1		3								2		1	9	15
合計	1	129	3	1	1	1	4	1	4	2	1	1	27	176

H-3

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	Uフレイク	石斧	北海道式石斧	たたき石	すり石	台石	軽石	礫・礫片	被熱礫	合計
撹乱											1		1
風倒木	3						1				1	2	7
覆土	4	3	3	1			2		1		5	4	23
撹土下	1	5		2				1		1	13		23
床	5				2	2	3	1			9	1	23
合計	13	8	3	3	2	2	6	2	1	1	29	7	77

H-4

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	Uフレイク	フレイク	偏平打製石器	たたき石	台石	軽石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土		1	31	1		1		1	1	8	1	45
撹土下		2	1							4		7
床	1	4	1		2			4	1	3	1	17
H-4付近							2	1				3
HP-2覆土			2					1				3
合計	1	7	33	1	2	1	0	8	2	15	2	68

H-9

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	フレイク	たたき石	礫・礫片	合計
覆土	3	2	3	1	1	9	19
撹土下	1	75		1	7	3	87
合計	4	77	3	2	8	12	106

H-13/NH-13

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	石槍又はナイフ	スクレイパー	石核	Uフレイク	フレイク	偏平打製石器	たたき石	台石	原石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土		1	49			1		1							52
撹土1	45	63	205		5		2		2	1	1		7	4	335
覆土2	5	8	3	1			2	4		1			6	2	32
覆土下(2001)	1	1				1		1							4
床	15	30	15		2		2	1			4	1	8	1	80
HF-1		1													1
HP－1覆土		2													2
HP－3覆土	1														1
HP－5覆土		7													7
合計	67	113	273	1	8		6	7	2	2	5	1	21	7	514

NH-17

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	石鏃	スクレイパー	フレイク	石斧	偏平打製石器	たたき石	台石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	合計
覆土1	9	4	11			3								27
ベルト	2		5		1				1					9
ベルト下	5	22	1	1	1			1				1		32
ベルト上	2	5	4											11
ベルト中	3		4						2					9
床						1	1	1	2	7	2	3	2	19
合計	21	31	25	1	2	4	1	2	5	7	2	4	2	107

NH-19

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	石鏃	石槍又はナイフ	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	たたき石	台石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	石製品	合計
東西トレンチ	11	6	18					1	1							37
東西ベルト	13	7	38	1				1	12							72
南北トレンチ	5	2	20						4	1						32
南北ベルト	13	4	35				1	1	4							60
表土	14	1	15						1						1	32
HP-2表土1			12						1							13
表土1	21	7	35		1			1	4			1				70
表土2	6	3	24									3				36
表土3												1				1
不明		1							2		1		20			24
体	5	3	14	1		1			3	2	4	7	2	1		43
合計	90	34	211	2	1	1	1	4	32	3	5	12	22	1	1	420

P-1

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	たたき石	台石	礫・礫片	合計
覆土	1	7		3	4	15
坑底		1	1			2
合計	1	8	1	3	4	17

P-3

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	すり石	礫・礫片	合計
覆土	6	4	5	1	1	17

P-4

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	Uフレイク	フレイク	たたき石	すり石	礫・礫片	被熱礫	石製品	合計
坑底			1								2
覆土	4	2	15	1	1		1	9	2	1	36
覆土下	1										1
合計	5	2	15	1	1	1	1	9	2	1	39

P-5

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	偏平打製石器	すり石	礫・礫片	合計
覆土	4	1	1	1	2	9
覆土下	2					2
合計	6	1	1	1	2	11

P-6

分類・層位	Ⅲa	Uフレイク	偏平打製石器	台石	礫・礫片	合計
覆土	7	1	1	1	4	14

P-7

分類・層位	北海道式石斧	軽石	合計
覆土	2	1	3

P-8

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	フレイク	偏平打製石器	台石	礫・礫片	合計
覆土	10	5	4	1	1	53	74

P-11

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	偏平打製石器	たたき石	すり石	台石	礫・礫片	被熱礫	合計
坑底		2					1		3
覆土	2	43	2	1	1	1	14	3	67
合計	2	45	2	1	1	1	15	3	70

P-12

分類・層位	Ⅲa	北海道式石斧	たたき石	台石	礫・礫片	合計
覆土	15	1	1	1	3	21

P-14

分類・層位	偏平打製石器	たたき石	台石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土	2	1	1	6	1	11

P-17

分類・層位	Ⅳa	礫・礫片	合計
覆土	2	2	4

NNP-60

分類・層位	石核	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	合計
覆土1	3	5	3	19	30
覆土2	4	4	10	34	52
合計	7	9	13	53	82

NP-61

分類・層位	Ⅱb	フレイク	偏平打製石器	台石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	合計
覆土1	4	1	2	3	3	2	1	16

NP-62

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	石核	フレイク	石のみ	加工痕の有る礫	合計
表土				1				1
表土1	1	1	4		2	1	1	10
表土2	3		1					4
合計	4	1	5	1	2	1	1	15

NP-65

分類・層位	Ⅱb	石核	フレイク	偏平打製石器	合計
表土2			4		4
表土3				1	1
表土5	1	1	1		3
合計	1	1	5	1	8

NP-70

分類・層位	Ⅳa	合計
表土1	14	14

NP-77

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	たたき石	礫・礫片	合計
表土1	6	2	1	1	1	3	1	3	18

NP-80

分類・層位	Ⅲa	Ⅳa	Uフレイク	合計
表土1	9	7	1	17

NP-81

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	原石	礫・礫片	被熱礫	合計
表土1	1	5	1	1	1	9
表土2		1		1		2
合計	1	6	1	2	1	11

NP-82

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	フレイク	北海道式石冠	偏平打製石器	たたき石	石皿	台石	原石	軽石	礫・礫片	被熱礫	合計
表土1	5	54										1		61
表土2	2	26	2	1			1					1		33
表土3	6	57	1	1		1				1		2	1	70
表土4	3	12	2	1	3	2	1	1	1		1	13	2	42
壁	2	2					1						2	7
坑底		2					1					3		6
合計	18	153	5	3	3	4	4	1	1	1	1	20	5	219

NP-84

分類・層位	Ⅱb	Uフレイク	合計
表土1	1	1	2

NP-85

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	石錘	フレイ	合計
表土1	7	3	1	2	13

NP-86

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	礫・礫片	被熱礫	合計
表土1	98	7	12	1			2		1	121
表土2	100			1	1	1	1	1	1	106
表土3	37									37
表土4	16			1						17
壁	31									31
床	1									1
合計	283	7	12	3	1	1	3	1	2	313

NP-88

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	スクレイパー	Rフレイク	偏平打製石器	たたき石	軽石	礫・礫片	合計
表土1	8	130	2	1	1	1	1	1	4	149

NP-90

分類・層位	礫・礫片	合計
表土1	1	1

NP-92

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	偏平打製石器	礫・礫片	合計
表土			1		1
表土2	5	21		1	27
合計	5	21	1	1	28

表Ⅲ－３　遺構出土掲載土器一覧（復元土器）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	口縁部片	胴部片	底部片	復元残データ	総点数	時期・形式名	備考
図Ⅲ－6－1	H-2-70覆土×66	9	52	5	H-2－70覆土×5	71	Ⅲa	
図Ⅲ－15－1	H-9-30覆土下×62、H-9-31覆土下×8	6	62	2		70	Ⅲa	
図Ⅲ－20－1	NH-13-8覆土×2、NH-13-10覆土1×10、NH-13-101覆土1×1、NP-6-7覆土×1、F45-25Ⅳ×1、H49a-7×1、L48a-6Ⅳ×1	5	12	—	H49c-10Ⅳ×2、L48a-6Ⅳ×1	20	Ⅲa	
図Ⅲ－35－1	P-11-12覆土×1	1	—	—		1	Ⅳa	
図Ⅲ－37－1	P-12-12覆土×9	—	8	1		9	Ⅲa	
図Ⅲ－56－1	NP-82-2覆土2×1、NP-82-3覆土2×1、NP-82-4覆土2×1、NP-82-5覆土2×2、NP-82-8覆土2×1、NP-82-9覆土2×1、NP-82-10覆土2×1、NP-82-21覆土2×1、NP-82-23覆土2×2、NP-82-51覆土2×2、NP-82-57覆土1×4、NP-82-63覆土3×3、NP-82-64覆土2×3、NP-82-65覆土3×9、NP-82-97覆土1×3、NP-82-58覆土1×1、J44-11Ⅳ×1	8	23	6	NP-82-13覆土2×1、NP-82-57覆土1×2、NP-82-63覆土3×1、NP-82-65覆土3×6、NP-88-1覆土1×1、NP-88-6覆土1×1、NP-88-19覆土1×1、NP-88-21覆土1×1、NP-88-23覆土1×1、J44-11Ⅳ×1	53	Ⅲa	
図Ⅲ－61－4	NP-88-1覆土1×35、NP-88-6覆土1×1、NP-88-8覆土1×1、NP-88-9覆土1×5、NP-88-17覆土1×1、NP-88-19覆土1×16、NP-88-21覆土1×4、NP-88-23覆土1×2、NP-88-15覆土1×1	10	51	5	NP-88-1覆土1×19、NP-88-6覆土1×1、NP-88-9覆土1×2、NP-88-19覆土1×1、NP-88-22覆土1×3、NP-88-23覆土1×2	94	Ⅲa	

表Ⅲ- 4　遺構出土掲載土器一覧（拓影図）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅲ－3－1	H－1-21覆土×1	Ⅳa	－	口縁		1	胎土に海綿骨針と多量の砂礫を含む。
図Ⅲ－3－2	H－1-47覆土×1	Ⅲa	－	口縁		1	内面平滑。鈍い光沢を帯びる。結節孔2か所(うち1つは破損面にかかる)
図Ⅲ－3－3	H－1-112覆土下×2	Ⅲa	2	口縁		2	
図Ⅲ－3－4	H－1-137床×2、H－1-140床×1、H－1-154床×1	Ⅲa	4	口縁		4	
図Ⅲ－6－2	H－2-24覆土×1	Ⅲa	－	口縁		1	環状突起が縦位に付されている。突起上に縄線が2条巡る。内面は平滑。胎土中には繊維を含む。
図Ⅲ－6－3	H－2HF1-84覆土×1	Ⅲa	－	口縁		1	山形突起下に瘤状の貼付。赤褐色を呈する。
図Ⅲ－6－4	H－2－39覆土×1、H－2－40覆土×1	Ⅲa	2	口縁		2	
図Ⅲ－6－5	H－2-19②覆土×1	Ⅲa	－	－		1	円板状土製品
図Ⅲ－10－1	H－3-59床×1	Ⅱb	－	底部		1	
図Ⅲ－10－2	H－3-63床×1	Ⅱb	－	胴部		1	
図Ⅲ－13－1	H－4-30床×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅲ－20－2	NH－13－52②床×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅲ－20－3	NH－13－20覆土2×2	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅲ－20－4	NH－13－57床×1	Ⅱb	－	胴部	NH－13－41床×1、86覆土1×2	4	
図Ⅲ－20－5	NH－13－39床×1	Ⅱb	－	胴部	NH－13－39床×7	8	
図Ⅲ－20－6	NH－13-87覆土1×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅲ－20－7	NH－13HP5-1覆土1×4、NH－13HP-1覆土1×1	Ⅲa	5	口縁	NH－13HP1-1覆土1×1、HP5-1覆土1×1、12覆土1×2、40床×5、66表土2×4、87表土1×1、145-4Ⅳ×2、145-11Ⅳ×1	22	
図Ⅲ－20－8	NH－13-97②覆土1×5	Ⅲa	5	口縁	NH－13-78床×6、97②覆土1×1	12	
図Ⅲ－20－9	NH－13-97②覆土1×3、NH－13-18床×2	Ⅲa	5	底部	NH－13-97②覆土1×2	7	
図Ⅲ－20－10	NH－13-99①覆土1×2	Ⅲa	2	底部		2	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅲ－20－11	NH－13-100覆土1×6	Ⅳa	6	口縁	NH－13-89②覆土1×2、90②覆土×1、100覆土×79、107③覆土1×2、F44-2②Ⅲ×1、J47-10Ⅳ×1、J47-15Ⅳ×14、K47-13Ⅳ×1	107	
図Ⅲ－24－1	NH－17-25ベルト×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅲ－24－2	NH－17－39覆土1×1	Ⅳa	－	脚部		1	
図Ⅲ－24－3	NH－17-42ベルト×1	Ⅳa	－	底部		1	
図Ⅲ－24－4	NH－17-28ベルト下×5	Ⅲa	5	口縁	NH－13HF1－1×1、NH－17-28ベルト下×11、NP82-1覆土2×1、11覆土2×1、56覆土1×1	20	
図Ⅲ－24－5	NH－17-22ベルト上×2	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅲ－27－1	NH－19-106②ベルト×4	Ⅳa	4	口縁		4	
図Ⅲ－27－2	NH－19-1②床×2、NH－19-68覆土1×1、NH－19-71覆土2×2	Ⅳa	5	口縁	NH－19 1②床×7、68覆土1×1	13	
図Ⅲ－27－3a	NH－19-106②ベルト×2	Ⅳa	2	口縁	掲載拓影NH－19-100②ベルト×1と同一個体。NH－19-39覆土2×4、106②ベルト×4	11	内面平滑。焼成良好。網目状撚糸文を重ねて施文。
図Ⅲ－27－3b	NH－19-100②ベルト×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓影NH－19-106②ベルト×2と同一個体。NH－19-39覆土2×4、106②ベルト×4	11	内面平滑。焼成良好。網目状撚糸文を重ねて施文。
図Ⅲ－27－4	NH－19-45覆土2×1	Ⅳa	－	口縁		1	表面に連弧文
図Ⅲ－27－5	NH－19-106②ベルト×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅲ－30－1	P－1-10覆土×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅲ－30－2	P－1-3覆土×1	Ⅲa	－	底部		1	
図Ⅲ－30－1	P－3-3覆土×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅲ－30－2	P－3-2覆土×1	Ⅳa	－	口縁		1	粘土帯を2条貼付し、上に斜行縄文を施文。
図Ⅲ－31－1	P－4-32覆土下×1	Ⅱb	－	脚部		1	
図Ⅲ－34－1	P－8-11覆土×3	Ⅲa	3	口縁		3	
図Ⅲ－34－2	P－8-8覆土×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅲ－35－2	P－11-23覆土×1	Ⅲa	－	口縁	P－11-1覆土×1、14覆土×4、19覆土×2、21覆土×1、24覆土×1、28縁底×1、44覆土×1、45覆土×1、46覆土×1、47覆土×1、49覆土×1	16	胎土に砂粒を多く含む・焼成良好・炭化物付着
図Ⅲ－35－3	P－11-42覆土×1	Ⅱb	－	底部		1	
図Ⅲ－37－2	P－12-9覆土×1	Ⅲa	－	口縁	P-12-4覆土×1	2	摩滅著しい。

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅲ－52－1	NP－70－1覆土1×2	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅲ－53－1	NP－77－3覆土1×2	Ⅱb	2	口縁	NP－77－5覆土1×1	3	
図Ⅲ－56－2	NP－82－90覆土4×5、NP－82－29覆土3×3、NP－82－31覆土3×1	Ⅲa	9	口縁		9	
図Ⅲ－56－3	NP－82－15覆土2×1	Ⅲa	－	口縁		1	胎土に砂礫を多く含む
図Ⅲ－56－4	NP－82－41覆土4×3、NP－82－69底×2	Ⅲa	5	底部		5	焼成良好
図Ⅲ－56－5	NP－82－48壁×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅲ－56－6	NP－82－20覆土3×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅲ－59－1	NP－86－16覆土1×3	Ⅱb	3	口縁	NP－86－1覆土1×5、2覆土2×5、6覆土3×2、8覆土3×1、9覆土4×6、10壁×10、11坑底×1、12覆土1×2、14覆土2×1、15覆土3×3、17覆土2×1、18覆土3×2、20覆土1×2、22②覆土1×11、27覆土2×21	76	
図Ⅲ－59－2	NP－86－6覆土3×1	Ⅱb	－	口縁	NP－86－1覆土1×5、2覆土2×5、6覆土3×11、9覆土4×6、10壁×7、12覆土1×6、15覆土3×1、17覆土2×2、19覆土3×2、20覆土1×5、22②覆土1×26、27覆土2×20	97	
図Ⅲ－59－3	NP－86－10壁×1	Ⅱb	－	底部		1	
図Ⅲ－61－5	NP－88－9覆土1×1、NP－88－21覆土1×1	Ⅲa	2	口縁		2	
図Ⅲ－62－1	NP－92－3②覆土2×1	Ⅲa	－	胴部		1	
図Ⅲ－62－2	NP－92－3②覆土2×1	Ⅲa	－	胴部		1	

表Ⅲ－５　遺構出土掲載石器一覧

掲載図番号	掲載番号	遺構名	調査区	取上番号	器種名	層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図Ⅲ－3	1	H-1	44	44	スクレイパー	覆土	粘板岩	84.0	61.0	14.0	57.1	熱変石器
図Ⅲ－3	2	H-1	132	131	スクレイパー	床	頁岩	58.0	47.0	18.0	26.1	
図Ⅲ－4	7	H-1	122	121	スクレイパー	床	メノウ	64.0	32.0	15.0	27.0	
図Ⅲ－4	8	H-1	120	119	磨平打製石器	床	安山岩	77.0	(57.0)	13.0	(71.6)	
図Ⅲ－6	9	H-1	167	163	剥片	HP-1床	安山岩	33.1	26.7	9.0	7.300.0	
図Ⅲ－6	5	H-2	7	7	スクレイパー	覆土	頁岩	57.0	44.5	9.0	23.7	
図Ⅲ－7	7	H-2	43	43	磨平打製石器	覆土	安山岩	99.0	18.0	26.0	150.0	
図Ⅲ－7	8	H-2	65	64	磨平打製石器	覆土	安山岩	81.0	141.0	26.0	400.0	
図Ⅲ－7	9	H-2	65	64	磨平打製石器	覆土	安山岩	137.0	170.0	37.0	1,050.0	擦熱未製品
図Ⅲ－7	10	H-2	4	4	磨平打製石器	覆土	安山岩	130.0	191.0	26.0	1.1	未製品
図Ⅲ－7	11	H-2	3	3	北海道式石冠	不明	安山岩	109.0	(36.0)	(33.0)	(83.0)	
図Ⅲ－7	12	H-2	21	21	たたき石	覆土	安山岩	124.0	108.0	47.0	1,130.0	
図Ⅲ－7	13	H-2	82	81	たたき石	HP-1	安山岩	79.0	133.0	34.0	1,210.0	
図Ⅲ－7	14	H-2	83	82	たたき石	HP-1	安山岩	122.0	130.0	26.0	840.0	
図Ⅲ－11	3	H-3	56	53	石匙(未成品)	床	粘板岩	111.0	54.0	22.0	103.4	未製品
図Ⅲ－11	4	H-3	45	42	石匙	床	結晶片岩	109.0	41.0	23.0	185.0	
図Ⅲ－11	5	H-3	59	47	北海道式石冠	床	安山岩	(79.0)	(94.0)	62.0	(680.0)	
図Ⅲ－11	6	H-3	60	57	北海道式石冠	覆土	安山岩	(37.0)	(61.0)	(13.0)	(28.5)	
図Ⅲ－11	7	H-3	6	6	たたき石	覆土	安山岩	122.0	105.0	64.0	990.0	
図Ⅲ－11	8	H-3	41	44	たたき石	床	安山岩	151.0	76.0	27.0	500.0	
図Ⅲ－11	9	H-3	44	41	たたき石	床	安山岩	358.0	100.0	87.0	4,000.0	
図Ⅲ－11	10	H-3	48	45	ボリエ	床	安山岩	157.0	125.0	49.0	1,340.0	
図Ⅲ－12	2	H-4	46	46	磨平打製石器	覆土	安山岩	123.0	129.0	30.0	885.0	
図Ⅲ－13	3	H-4	43	43	たたき石	HP-4北	安山岩	149.0	100.0	52.0	1,350.0	
図Ⅲ－13	4	H-4	42	42	たたき石	HP-4北	安山岩	113.0	221.0	68.0	2,430.0	
図Ⅲ－14	5	H-4	53	53	台石	床	安山岩	382.0	247.0	41.0	6,000.0	
図Ⅲ－14	6	H-4	52	52	台石	北	安山岩	429.0	293.0	82.0	10,000.0	
図Ⅲ－16	2	H-5	16	16	たたき石	覆土下	安山岩	137.0	73.0	43.0	570.0	
図Ⅲ－16	3	H-5	31	31	たたき石	覆土下	安山岩	107.0	81.0	45.0	630.0	
図Ⅲ－16	4	H-5	22	22	たたき石	覆土下	安山岩	99.0	77.0	38.0	570.0	
図Ⅲ－18	5	H-5	19	19	たたき石	覆土下	安山岩	151.0	68.0	41.0	590.0	
図Ⅲ－18	6	H-5	22	22	たたき石	覆土下	安山岩	151.0	71.0	54.0	710.0	
図Ⅲ－18	7	H-5	20	20	たたき石	覆土下	安山岩	153.0	89.0	58.0	800.0	
図Ⅲ－18	8	H-5	23	23	たたき石	覆土下	安山岩	141.0	102.0	38.5	790.0	
図Ⅲ－21	12	NH-13	85	85	石錐(たったイノバ)	覆土上	安山岩	90.0	34.0	11.0	41.0	
図Ⅲ－21	13	NH-13	103a	103a	スクレイパー	覆土上	頁岩	38.0	24.0	8.0	7.5	
図Ⅲ－21	14	NH-13	11	11	スクレイパー	覆土上	安山岩	43.0	29.0	7.0	11.6	
図Ⅲ－21	15	NH-13	37	37	スクレイパー	床	頁岩	47.5	39.0	13.5	13.7	
図Ⅲ－21	16	NH-13	20	20	スクレイパー	覆土	頁岩	49.5	40.0	11.0	42.3	
図Ⅲ－21	17	NH-13	103a	103a	スクレイパー	覆土上	頁岩	64.0	38.0	8.5	18.8	
図Ⅲ－21	18	NH-13	89	89	スクレイパー	覆土	メノウ	68.0	38.0	13.5	35.7	
図Ⅲ－21	19	NH-13	103c	103c	スクレイパー	覆土上	頁岩	45.0	23.0	10.0	9.3	
図Ⅲ－21	20	NH-13	38	38	スクレイパー	床	頁岩	68.0	65.0	11.0	38.5	
図Ⅲ－21	21	NH-13	1	1	石匙	覆土	安山岩	81.0	65.5	38.0	246.0	NH-13(1)-(覆土上)掘下層(2)H-1(36)-(覆土)と接合
図Ⅲ－21	22	NH-13	12	13	磨平打製石器	覆土上	安山岩	92.5	127.5	23.5	400.0	
図Ⅲ－21	23	NH-13	34	34	磨平打製石器	覆土上	安山岩	136.0	170.0	21.5	570.0	
図Ⅲ－22	24	NH-13	90	90	台石	床	安山岩	168.0	148.0	37.0	915.0	
図Ⅲ－24	9	NH-17	29	29	石匙	ベルト下	頁岩	35.0	13.0	5.0	2.0	
図Ⅲ－24	7	NH-17	43	43	スクレイパー	ベルト	頁岩	(31.0)	(31.0)	13.0	(12.0)	
図Ⅲ－24	8	NH-17	30	30	スクレイパー	ベルト下	頁岩	40.0	43.0	9.0	15.6	
図Ⅲ－24	9	NH-17	3	3	石匙	床	頁岩	102.0	41.0	21.0	127.4	G22-12(覆)と接合
図Ⅲ－24	10	NH-17	31	31	磨平打製石器	ベルト下	安山岩	112.0	142.0	29.0	590.0	
図Ⅲ－24	11	NH-17	11	11	磨平打製石器	床	安山岩	119.0	132.0	21.0	370.0	擦石
図Ⅲ－24	12	NH-17	13	13	たたき石	床	安山岩	160.0	128.0	34.0	1,040.0	擦石
図Ⅲ－24	13	NH-17	44	44	たたき石	ベルト	安山岩	140.0	110.0	43.0	880.0	
図Ⅲ－25	14	NH-17	17	17	台石	床	安山岩	157.0	177.0	53.5	1,300.0	擦石
図Ⅲ－25	15	NH-17	15	15	台石	床	安山岩	237.0	169.0	54.0	2,980.0	擦石
図Ⅲ－25	16	NH-17	7	7	台石	床	安山岩	356.0	(181.0)	112	(10,000.0)	
図Ⅲ－27	8	NH-19	107	107	石錘	直径ベルト	頁岩	(26.0)	16.0	5.5	1.3	
図Ⅲ－27	7	NH-19	2	2	石錘	床	メノウ	30.5	15.5	5.5	2.5	
図Ⅲ－27	9	NH-19	69	69	石錐(たったイノバ)	覆土上	頁岩	36.0	33.0	13.0	15.3	
図Ⅲ－27	8	NH-19	24	24	スクレイパー	床	頁岩	64.0	45.0	20.0	46.0	
図Ⅲ－27	10	NH-19	101	101	スクレイパー	直径ベルト	頁岩	48.5	48.0	11.0	26.2	
図Ⅲ－27	11	NH-19	60	60	石匙	覆土	粘板岩	32.0	25.0	5.0	3.1	
図Ⅲ－27	12	NH-19	3	3	たたき石	床	安山岩	122.0	147.0	31.0	910.0	
図Ⅲ－27	13	NH-19	10	10	たたき石	床	安山岩	180.0	101.0	82.0	2,170.0	
図Ⅲ－28	14	NH-19	17	17	台石N	床	安山岩	184.0	208.0	114.0	6,020.0	擦石
図Ⅲ－28	15	NH-19	8	8	台石	床	安山岩	320.0	248.0	96.0	10,500.0	
図Ⅲ－30	2	P-1	15	15	たたき石	覆土	安山岩	(175.5)	63.5	31.5	(335.0)	
図Ⅲ－30	4	P-1	12	12	敲石	覆土	安山岩	461.0	268.0	141.0	28,500.0	
図Ⅲ－30	3	P-3	4	4	ボリエ	覆土	頁岩	37.0	40.0	15.0	20.0	
図Ⅲ－31	2	P-4	16	11	ボフレイク	覆土	頁岩	37.0	39.0	13.0	5.0	
図Ⅲ－31	3	P-4	13	11	石錐片	覆土	頁岩	74.5	40.5	5.8	15.3	J4/b2(B)と接合
図Ⅲ－31	4	P-4	24	24	たたき石	覆土	安山岩	(83.0)	(59.0)	(21.0)	(95.0)	
図Ⅲ－31	5	P-4	27	21	ボリエ	床	安山岩	153.0	(129.0)	46.0	(1,340.0)	
図Ⅲ－31	1	P-4	3	3	剥離礫	覆土	頁岩	(24.0)	(187.0)	(31.0)	(5,210.0)	P-4 12-26+30 J4/P1-J4/b2(B)と接合
図Ⅲ－32	1	P-5	8	8	磨平打製石器	覆土	安山岩	63.0	147.0	21.0	450.0	
図Ⅲ－32	2	P-5	5	5	ボリエ	覆土	安山岩	109.0	82.0	46.0	590.0	
図Ⅲ－32	1	P-6	3	3	ボフレイク	覆土	頁岩	31.0	36.5	5.5	5.7	
図Ⅲ－32	2	P-6	8	8	磨平打製石器	覆土	安山岩	86.0	113.0	21.5	200.0	
図Ⅲ－32	3	P-6	6	6	台石	覆土	安山岩	151.0	205.0	67.5	3,250.0	
図Ⅲ－33	1	P-7	2	2	北海道式石冠	覆土	安山岩	(69.0)	(104.0)	35.0	(780.0)	
図Ⅲ－33	2	P-7	7	7	北海道式石冠	覆土	安山岩	106.0	126.0	61.0	1,200.0	
図Ⅲ－34	3	P-8	16	49	磨平打製石器	覆土	安山岩	90.0	129.0	27.0	420.0	五分刻
図Ⅲ－34	4	P-8	49	45	台石	覆土	安山岩	210.0	189.0	124.0	(4,980.0)	擦熱
図Ⅲ－35	4	P-11	2	2	磨平打製石器	覆土	安山岩	122.0	157.0	41.0	1,130.0	
図Ⅲ－35	5	P-11	33	32	磨平打製石器	覆土	安山岩	130.0	123.0	28.0	420.0	
図Ⅲ－35	6	P-11	7	7	台石	覆土	安山岩	(34.0)	(39.0)	41.0	(86.4)	
図Ⅲ－36	1	P-11	12	12	台石	覆土	安山岩	300.0	296.0	199.0	23,500.0	
図Ⅲ－37	3	P-12	3	3	北海道式石冠	覆土	安山岩	(78.0)	(39.0)	(40.0)	(126.0)	
図Ⅲ－37	4	P-12	6	6	たたき石	覆土	安山岩	104.0	126.0	34.0	560.0	
図Ⅲ－37	5	P-12	11	11	台石	覆土	安山岩	290.0	212.0	131.0	10,300.0	
図Ⅲ－38	2	P-14	5	5	磨平打製石器	覆土	安山岩	130.0	140.0	32.0	780.0	
図Ⅲ－38	3	P-14	11	11	磨平打製石器	覆土	安山岩	84.0	142.0	23.0	510.0	擦痕
図Ⅲ－39	1	NP-06	28	28	ボフレイク	覆土上	頁岩	43.5	52.8	20.0	41.0	現在資料A 遺物集中由南側 2個共鍛ジ形ア
図Ⅲ－39	2	NP-06	40	40	ボフレイク	覆土上	頁岩	72.0	70.0	24.0	81.6	現在資料A 遺物集中由南側 2個共鍛ジ形ア
図Ⅲ－39	3	NP-06	50	68	ボフレイク	覆土上	頁岩	43.4	36.5	22.5	19.7	現在資料A 遺物集中由南側 3個共鍛ジ形ア
図Ⅲ－39	1	NP-06	1	1	ボフレイク	覆土上	頁岩	91.0	120.0	16.0	139.3	現在資料A 遺物集中由南側 1個共鍛ジ形ア

発掘調査番号	発掘番号	遺構名	遺物番号	取上方法	種類名	層位	石材	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図第一29	5	NP-60	68	89	フレイク	縄文2	黒曜	38.0	44.5	7.0	22.2	接合資料A 遺物集中地区東 3日目東リテイ
図第一40	6	NP-60	30	30	ドフレイク	縄文1	石英	57.0	62.2	19.0	90.2	接合資料A 遺物集中地区東 1日目東リテイ
図第一40	7	NP-60	25	25	フレイク	縄文1	黒曜	60.5	78.5	28.0	152.4	接合資料A 遺物集中地区東 1日目東リテイ
図第一40	8	NP-60	28	28	フレイク	縄文1	石英	28.5	43.5	8.5	20.8	接合資料A 遺物集中地区東 1日目東リテイ
図第一40	9	NP-60	1	1	ドフレイク	縄文1	黒曜	56.0	67.5	17.5	70.0	接合資料A 遺物集中地区東 1日目東リテイ
図第一40	10	NP-60	3	5	ドフレイク	縄文1	石英	59.5	72.5	21.0	72.6	接合資料A 遺物集中地区東 1日目東リテイ
図第一40	11	NP-60	1	1	石鏃	縄文1	安山	31.0	24.5	20.0	10.7	接合資料A 遺物集中地区東 1日目東リテイ
図第一40	12	NP-60	53	53	フレイク	縄文2	黒曜	47.5	100.5	38.0	170.5	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一40	13	NP-60	63	63	フレイク	縄文2	黒曜	55.5	100.5	21.0	125.3	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	14	NP-60	14	14	ドフレイク	縄文2	黒曜	43.0	88.0	21.0	128.6	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	15	NP-60	56	56	フレイク	縄文2	黒曜	70.0	81.0	12.5	84.0	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	16	NP-60	77	77	フレイク	縄文2	黒曜	53.0	88.5	16.0	106.1	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	17	NP-60	23	23	フレイク	縄文2	黒曜	52.0	69.5	22.5	114.7	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	18	NP-60	57	57	フレイク	縄文2	黒曜	51.0	115.0	22.5	169.1	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	19	NP-60	54	54	フレイク	縄文2	黒曜	74.5	81.5	22.5	161.5	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	20	NP-60	61	61	フレイク	縄文2	安山	31.0	75.5	17.5	142.8	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一41	21	NP-60	58	58	フレイク	縄文2	黒曜	56.0	47.0	11.0	40.1	接合資料B 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一42	22	NP-60	51	51	フレイク	縄文2	石英	104.5	108.5	36.5	305.0	接合資料C 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一42	23	NP-60	13	13	ドフレイク	縄文1	黒曜	82.0	93.0	44.0	250.6	接合資料C 遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一42	24	NP-60	10	10	石鏃	縄文1	黒曜	136.0	67.5	34.0	127.8	接合資料C 遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一42	25	NP-60	51	51	ドフレイク	縄文2	石英	56.0	81.0	17.0	78.8	接合資料E 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一42	26	NP-60	71	71	フレイク	縄文2	黒曜	50.0	52.5	18.0	44.4	接合資料F 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一42	27	NP-60	42	42	ドフレイク	縄文2	黒曜	76.5	68.3	25.5	115.4	接合資料F 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一43	28	NP-60	50	50	フレイク	縄文2	石英	58.7	58.0	8.5	21.3	接合資料G 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一43	29	NP-60	78	78	フレイク	縄文2	黒曜	53.0	63.5	20.0	176.4	接合資料G 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一43	30	NP-60	34	34	フレイク	縄文2	石英	70.0	68.0	16.0	63.6	接合資料H 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一43	31	NP-60	44	44	フレイク	縄文2	黒曜	51.0	36.5	12.0	33.2	接合資料H 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一43	32	NP-60	72	72	フレイク	縄文2	石英	88.5	56.5	21.0	79.8	接合資料H 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一43	33	NP-60	37	37	ドフレイク	縄文2	黒曜	45.5	39.0	22.5	23.3	接合資料H 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一43	34	NP-60	29	29	フレイク	縄文1	黒曜	48.3	46.5	10.0	23.8	接合資料H 遺物集中中央側 1日目東リテイ
図第一43	35	NP-60	27	27	フレイク	縄文1	石英	70.5	47.0	16.0	42.6	接合資料H 遺物集中中央側 1日目東リテイ
図第一43	36	NP-60	35	35	ドフレイク	縄文2	黒曜	72.5	65.5	19.0	72.4	接合資料H 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一43	37	NP-60	45	45	石鏃	縄文2	黒曜	58.5	50.0	20.0	122.7	接合資料H 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一44	38	NP-60	70	70	フレイク	縄文2	石英	71.0	88.0	18.0	99.0	接合資料I 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一44	39	NP-60	39	39	ドフレイク	縄文2	黒曜	54.0	66.0	26.0	96.2	接合資料J 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一44	40	NP-60	11	11	フレイク	縄文1	黒曜	30.4	72.5	25.0	93.8	接合資料J 遺物集中中央側 1日目東リテイ
図第一44	41	NP-60	74	74	フレイク	縄文2	黒曜	54.0	29.5	19.0	34.6	接合資料J 遺物集中中央側 2日目東リテイ
図第一44	42	NP-60	28	28	フレイク	縄文1	石英	51.5	64.0	9.0	27.1	接合資料L 遺物集中中央側 1日目東リテイ
図第一44	43	NP-60	4	4	ドフレイク	縄文1	黒曜	41.7	59.0	7.0	20.8	接合資料L 遺物集中中央側 1日目東リテイ
図第一44	44	NP-60	60	60	フレイク	縄文2	黒曜	53.0	57.5	20.0	41.0	接合資料K 遺物集中北西側 2日目東リテイ
図第一44	45	NP-60	75	75	フレイク	縄文2	黒曜	55.0	65.5	12.5	43.1	接合資料K 遺物集中北西側 2日目東リテイ
図第一45	46	NP-60	46	46	ドフレイク	縄文2	黒曜	85.5	101.0	25.0	252.6	接合資料O 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一45	47	NP-60	16	16	フレイク	縄文1	黒曜	36.0	74.0	25.0	122.4	接合資料M 遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一45	48	NP-60	37	37	ドフレイク	縄文2	石英	56.5	38.5	15.5	27.8	接合資料M 遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一45	49	NP-60	36	36	ドフレイク	縄文2	黒曜	86.5	68.5	22.0	119.3	接合資料M 遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一45	50	NP-60	図第一31	図第一31	フレイク	縄文2	黒曜	25.0	25.0	4.0	2.2	接合資料N 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一45	51	NP-60	図第一31	図第一31	ドフレイク	縄文2	黒曜	24.0	23.0	4.0	4.9	接合資料N 遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一45	52	NP-60	75	75	ドフレイク	縄文2	黒曜	82.0	88.7	16.0	137.0	接合資料O 遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一45	53	NP-60	50	50	フレイク	縄文2	黒曜	30.5	28.0	2.0	2.2	接合資料P 遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一46	54	NP-60	15	15	フレイク	縄文1	石英	53.5	75.5	18.5	71.4	接合資料P 遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一46	55	NP-60	22	22	フレイク	縄文1	黒曜	50.0	28.0	3.5	8.2	接合資料P 遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一46	56	NP-60	22	22	石鏃	縄文1	石英	92.5	104.0	20.0	253.6	接合資料P 遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一46	57	NP-60	2	2	フレイク	縄文1	黒曜	56.0	68.0	16.0	79.7	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一46	58	NP-60	3	3	ドフレイク	縄文1	黒曜	50.0	71.5	25.0	65.1	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一46	59	NP-60	10	10	ドフレイク	縄文1	石英	63.5	38.0	20.0	44.3	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一46	60	NP-60	8	8	フレイク	縄文1	黒曜	51.5	72.5	21.5	85.6	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一46	61	NP-60	6	6	フレイク	縄文1	石英	57.0	89.0	34.5	157.6	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一46	62	NP-60	41	41	フレイク	縄文2	黒曜	43.0	46.5	12.0	13.3	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一46	63	NP-60	9	9	ドフレイク	縄文1	黒曜	35.5	60.0	16.0	34.5	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一46	64	NP-60	12	12	フレイク	縄文1	石英	51.5	63.0	27.0	82.7	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一47	65	NP-60	20	20	フレイク	縄文1	黒曜	76.5	98.5	31.0	172.3	遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一47	66	NP-60	31	31	ドフレイク	縄文2	石英	74.0	46.5	18.0	54.1	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一47	67	NP-60	33	33	フレイク	縄文2	黒曜	42.0	44.0	11.0	23.2	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一47	68	NP-60	17	17	フレイク	縄文1	黒曜	90.5	72.5	16.0	109.2	遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一47	69	NP-60	15	15	フレイク	縄文1	石英	75.0	69.0	23.0	109.3	遺物集中北東側 1日目東リテイ
図第一47	70	NP-60	42	42	ドフレイク	縄文2	黒曜	46.5	39.5	16.0	42.8	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一47	71	NP-60	32	32	石鏃	縄文2	石英	50.5	66.0	34.0	144.2	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一47	72	NP-60	40	40	石鏃	縄文2	石英	57.5	109.5	25.0	126.8	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一47	73	NP-60	24	24	石鏃	縄文1	黒曜	62.0	108.5	22.0	182.5	遺物集中南西側 1日目東リテイ
図第一48	74	NP-60	47	47	石鏃	縄文2	石英	42.0	55.0	15.0	55.0	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一48	75	NP-60	48	48	フレイク	縄文2	黒曜	50.0	70.0	25.0	100.8	遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一48	76	NP-60	54	54	フレイク	縄文2	黒曜	50.0	67.0	12.0	66.5	遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一48	77	NP-60	62	62	フレイク	縄文2	石英	50.5	67.0	21.0	68.3	遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一48	78	NP-60	59	59	フレイク	縄文2	黒曜	54.0	74.2	15.5	56.9	遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一48	79	NP-60	73	73	フレイク	縄文2	石英	44.5	63.5	16.0	41.0	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一48	80	NP-60	76	76	フレイク	縄文2	黒曜	56.0	60.0	12.0	51.5	遺物集中南西側 2日目東リテイ
図第一48	81	NP-60	65	65	フレイク	縄文2	石英	34.4	71.7	12.5	59.4	遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一48	82	NP-60	66	66	フレイク	縄文2	石英	48.5	78.7	41.0	275.0	遺物集中北東側 2日目東リテイ
図第一49	1	NP-61	10	13	無平打製石鏃	縄文1	安山岩	31.0	122.0	21.0	39.0	
図第一49	2	NP-61	12	12	無平打製石鏃	縄文1	安山岩	38.0	76.0	31.0	27.1	
図第一49	3	NP-61	4	4	石匙	縄文1	安山岩	278.0	171.0	36.0	(6,200.0)	
図第一50	4	NP-61	9	5	分銅形	縄文1	安山岩	(290.0)	(287.0)	133.0	(15,500.0)	
図第一50	1	NP-62	1	1	石鏃	縄文1	ガラス	37.0	32.0	14.0	12.2	
図第一50	2	NP-62	4	4	石匙の先	縄文1	石英	43.0	22.5	11.0	(26.0)<43>[38.1N]	土器合
図第一51	1	NP-65	2	2	石鏃	縄文3	安山岩	33.0	22.0	17.5	22.5	
図第一51	2	NP-65	2	2	無平打製石鏃	縄文3	安山岩	56.0	79.0	14.0	170.2	
図第一53	3	NP-77	15	15	スクレイパー片	縄文1	玉髄系	53.0	38.5	15.5	25.1	
図第一53	4	NP-77	12	12	たたき石	縄文1	安山岩	115.0	119.0	46.0	750.2	
図第一59	7	NP-92	90	92	北海道式石鏃	縄文4	安山岩	82.0	(104.0)	64.0	640.0	
図第一59	8	NP-92	78	78	北海道式石鏃	縄文1	安山岩	(71.0)	(38.0)	34.0	(300.0)	
図第一59	9	NP-92	34	34	北海道式石鏃	縄文4	安山岩	(47.0)	(61.0)	61.0	(220.0)	
図第一57	10	NP-92	53	53	無平打製石鏃	縄文1	安山岩	113.0	71.0	12.0	500.0	NP-93[縄文4]と接合
図第一57	11	NP-92	11	11	無平打製石鏃	縄文1	安山岩	(70.0)	(67.0)	11.0	(50.0)	
図第一57	12	NP-92	86	86	無平打製石鏃	縄文4	安山岩	93.0	71.0	19.0	(110.0)	
図第一57	13	NP-92	26	26	たたき石	縄文2	安山岩	135.0	89.0	38.0	540.0	加工痕あり
図第一57	14	NP-92	88	88	石皿	縄文4	安山岩	300.0	242.0	123.0	(6,000.0)	
図第一58	1	NP-92	3	2	石鏃片	縄文1	石英	34.0	33.0	7.5	15.4	
図第一59	2	NP-96	4	3	スクレイパー片	縄文1	黒曜	24.5	25.0	5.5	5.6	
図第一59	3	NP-96	1	7	スクレイパー	縄文4	黒曜	44.0	65.0	7.0	25.2	
図第一59	4	NP-96	24	24	スクレイパー	縄文1	黒曜	33.0	25.5	4.0	4.5	
図第一60	1	NP-98	25	25	スクレイパー	縄文1	石英	61.0	25.0	4.5	7.4	
図第一60	2	NP-98	2	2	無平打製石鏃	縄文1	安山岩	102.0	173.0	34.0	850.5	
図第一60	3	NP-98	1	1	たたき石	縄文1	安山岩	78.0	42.0	44.0	145.0	
図第一62	3	NP-92	4	4	無平打製石鏃	縄文1	安山岩	(92.0)	(108.0)	21.0	(245.0)	

表Ⅳ－１　包含層出土土器一覧

層位	Ⅱ群b類土器	Ⅲ群a類土器	Ⅳ群a類土器	Ⅵ群a類土器	焼成粘土塊	土製品	合計
Ⅲ層	547	374	4,299	59	0	2	5,281
Ⅳ層	3,297	2,017	11,094	0	0	1	16,409
Ⅴ層	389	115	440	0	0	0	944
表採・撹乱・木根痕・自調跡	30	149	154	0	1	1	335
風倒木	1,005	199	1,454	0	0	0	2,658
不明・排土	41	9	73	0	0	0	123
合計	5,309	2,863	17,514	59	1	4	25,750

表Ⅳ- 2　包含層出土掲載土器一覧（復元土器）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	口縁部片	胴部片	底部片	復元残データ	総点数	時期・形式名	備考
図Ⅳ－1－1	G42-27Ⅴ×141	15	114	12	G42-27Ⅴ×1	142	Ⅱb	
図Ⅳ－3－35	I50-7木根×53	5	44	4	I50-7木根×1	54	Ⅲa	復方向に施された第2種羽状縄文は全部で17段を数える。
図Ⅳ－5－63	J47-3②Ⅲ×3	0	0	3		3	Ⅲa	
図Ⅳ－6－64	F48c-11Ⅲ×7、F48d-2Ⅲ×1、F48d-8Ⅲ×1、F48d-15Ⅳ×2、F48d-20②Ⅲ×1、F49a-3Ⅳ×1、F49a-15Ⅳ×2、F49a-17Ⅳ×2、F49b-3Ⅳ×2、F49b-6Ⅳ×1、F49b-11Ⅳ×6、F49b-15Ⅳ×1、G48a-5Ⅲ×8、I48d-5②Ⅲ×2	4	35	0	F48c-18Ⅳ×1	40	Ⅳa	
図Ⅳ－6－65	H38-12①Ⅳ×2、H38-22①Ⅳ×1、H38-29①Ⅳ×1、H38-31①木根×1、H39-21①Ⅳ×1、H39-24①Ⅳ×1、H39-28①Ⅴ×2	5	4	0	H38-14①Ⅳ×1、H39-4②Ⅳ×1、H39-5①Ⅳ×1、H39-13①Ⅳ×1、H39-24①Ⅳ×1、H39-26①Ⅴ×1、I39-5①Ⅳ×1、I39-17①Ⅳ1	17	Ⅳa	
図Ⅳ－6－66	G47-28Ⅳ×3	0	2	1	G47-28Ⅳ×1	4	Ⅳa	
図Ⅳ－6－67	J42-16②Ⅳ×9	0	3	6		9	Ⅳa	
図Ⅳ－6－68	G47-3②Ⅲ×1、G47-28Ⅳ×9	0	8	2		10	Ⅳa	
図Ⅳ－6－69	J42-10Ⅳ×1、J42-2Ⅳ×1	0	0	2		2	Ⅳa	
図Ⅳ－6－70	F49b-3Ⅳ×1、F49c-8Ⅳ×2、F49c-9Ⅳ×2、F49c-11Ⅳ×10、F49c-12Ⅳ×63、F49c-14Ⅳ×18、F49c-16Ⅳ×23、F49c-17Ⅳ×1、F49d-11Ⅳ×1	19	94	8	F43-25Ⅲ×1、F43-40Ⅳ×2、F43-50Ⅳ×1、F44-9Ⅳ×1、F44-16Ⅳ×1、F44-18Ⅳ×1、F44-26Ⅳ×1、F44-34風倒木×1、F49c-8Ⅳ×5、F49c-11Ⅳ×4、F49c-12Ⅳ×1、F49c-14Ⅳ×2、F49c-16Ⅳ×3、G43-64Ⅳ×1、I41-9Ⅳ×1	147	Ⅳa	
図Ⅳ－6－71	E48a-2Ⅲ×1、E48b-7Ⅲ×21、E48b-8Ⅳ×4、E48b-9Ⅳ×6、E48b-11Ⅳ×3	6	28	1		35	Ⅳa	
図Ⅳ－6－72	F43-25②Ⅲ×1、F44-26②Ⅳ×4、F44-42Ⅳ×3	5	1	2		8	Ⅳa	
図Ⅳ－6－73	J43-9Ⅲ×2	1	1	0		2	Ⅳa	
図Ⅳ－12－154	G40-34Ⅳ×1、H40-1Ⅲ×3、H40-7Ⅳ×3、H40-26②Ⅳ×4、H40-34Ⅳ×3、I40-1Ⅲ×3	2	13	2	H40-7Ⅳ×1、I40-3②Ⅳ×1	19	Ⅳa	
図Ⅳ－12－155	G41-10Ⅳ×1、G41-21Ⅳ×6、H39-1Ⅲ×2、H-39-5②Ⅳ×5、H39-8②Ⅳ×1、H39-9②Ⅳ×2、H39-13②Ⅳ×1、H40-39Ⅳ×1、I39-2Ⅲ×1、I39-5②Ⅳ×1、I39-8②Ⅳ×3、I39-17②Ⅳ×3、J38-1Ⅲ×1、J38-5Ⅳ×1	9	19	1	H39-1Ⅲ×1、I39-17②Ⅳ×1	31	Ⅳa	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	口縁部片	胴部片	底部片	復元残データ	総点数	時期・形式名	備考
図Ⅳ－12－156	F39-3Ⅳ×1、F39-5Ⅳ×2、F39-8Ⅳ×1、F40-1Ⅳ×1	2	3	0	F39-3Ⅳ×5、F39-5Ⅳ×1、F40-10Ⅳ×2	13	Ⅳa	
図Ⅳ－12－157	F40-2Ⅲ×19、F40-10Ⅳ×1、F40-26Ⅳ×1、F41-36Ⅳ×1、G40-1Ⅲ×1、G41-25Ⅳ×4、H39-1Ⅲ×3、H40-1Ⅲ×5、H40-7Ⅳ×8	9	34	0	G41-25Ⅳ×2、H39-1Ⅲ×1、H40-7Ⅳ×5	51	Ⅳa	
図Ⅳ－12－158	F49a-1Ⅲ上×1、F49a-5Ⅳ×1、F49a-6Ⅲ上×1、I47-22Ⅲ×1	0	1	3		4	Ⅳa	
図Ⅳ－12－159	F44-2②Ⅲ×4、F44-9②Ⅳ×2、F44-18②風倒×1、F44-34②風倒×9、F44-42②Ⅳ×6、F44-68風倒×1、F45-32②風倒×1、G43-28Ⅳ×1、G43-40Ⅳ×1、G44-3②Ⅲ×10、G44-14②Ⅳ×2、G44-17②Ⅳ×1、G44-21②Ⅳ×1、G45-3②Ⅳ×1、H44-2②Ⅲ×1、I44-12②Ⅳ×1、I44-1②Ⅳ×4、I44-38Ⅳ×4	9	39	3		51	Ⅳa	
図Ⅳ－13－166	J42-10Ⅲ×44	6	33	5	J42-10Ⅲ×1	45	Ⅵa	

表Ⅳ- 3　包含層出土掲載土器一覧（拓影図）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ－1－2a	H43-48Ⅳ×3、F43-54Ⅳ×1	Ⅱb	4	口縁	掲載拓影H43-1Ⅲ×1と同一個体。F41-21Ⅳ×2、F41-23Ⅳ×1、F43-23Ⅲ×1、F43-33Ⅳ×1、F43-38Ⅳ×12、F43-48Ⅳ×14、F43-54Ⅳ×3、F43-59Ⅳ×4、F43-62Ⅳ×1、F44-74Ⅳ×1、NP－86-22①覆土1×3	48	
図Ⅳ－1－2b	H43-1Ⅲ×1	Ⅱb	－	口縁	掲載拓影H43-48Ⅳ×3・F43-54Ⅳ×1と同一個体。F41-21Ⅳ×2、F41-23Ⅳ×1、F43-23Ⅲ×1、F43-33Ⅳ×1、F43-38Ⅳ×12、F43-48Ⅳ×14、F43-54Ⅳ×3、F43-59Ⅳ×4、F43-62Ⅳ×1、F44-74Ⅳ×1、NP－86-22①覆土1×3	48	
図Ⅳ－1－3	F45-24Ⅳ×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅳ－1－4	G44-10Ⅳ×1	Ⅱb	－	口縁	I43-40Ⅳ×1、I44-1Ⅲ×1、I44-19×1、I44-39Ⅳ×1、I45-47Ⅲ×1	6	
図Ⅳ－1－5	F43-59Ⅳ×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅳ－1－6	J41-14Ⅲ×2	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅳ－1－7	G44-18Ⅳ×1、G44-64Ⅴ×1	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅳ－1－8a	I47-5Ⅳ×1、I47-10Ⅳ×1	Ⅱb	2	口縁	掲載拓影J43-51Ⅴ×1・I47-16①Ⅴ×1と同一個体。I47-16①Ⅴ×1、I47-10Ⅳ×2	7	
図Ⅳ－1－8b	J43-51Ⅴ×1、I47-16①Ⅴ×1	Ⅱb	2	口縁	掲載拓影I47-5Ⅳ×1・I47-10Ⅳ×1と同一個体。I47-16①Ⅴ×1、I47-10Ⅳ×2	7	
図Ⅳ－1－9a	I45-14Ⅳ×4、I45-1Ⅳ×1、I45-38×1	Ⅱb	6	口縁	掲載拓影I45-28Ⅳ×1と同一個体。G44-1Ⅲ×1、G44-15Ⅳ×2、G45-1Ⅳ×3、G45-11Ⅲ×1、G45-16Ⅳ×5、G45-17①Ⅳ×1、G45-23①Ⅳ×5、G45-30Ⅳ×1、I44-36Ⅳ×1、I44-39Ⅳ×1、I45-1Ⅳ×2、I45-14Ⅳ×2、I45-16Ⅳ×1、I45-18Ⅳ×15、I45-24Ⅳ×1、I45-43Ⅳ×2、I45-47Ⅳ×1、K47-14Ⅳ×1	63	文様施文後、ヘラ状工具で着表面を調整している。
図Ⅳ－1－9b	I45-28Ⅳ×1	Ⅱb	－	底部	掲載拓影I45-14Ⅳ×4・I45-1Ⅳ×1・I45-38×1と同一個体。G44-1Ⅲ×1、G44-15Ⅳ×2、G45-1Ⅳ×3、G45-11Ⅲ×1、G45-16Ⅳ×5、G45-17Ⅳ×1、G45-23Ⅳ×5、G45-30Ⅳ×1、I44-36Ⅳ×1、I44-39Ⅳ×1、I45-1Ⅳ×2、I45-14Ⅳ×12、I45-16Ⅳ×1、I45-18Ⅳ×15、I45-24Ⅳ×1、I45-43Ⅳ×2、I45-47Ⅳ×1、K47-14Ⅳ×1	63	
図Ⅳ－1－10	L48c-4風倒木×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅳ－1－11	J50 d-3Ⅳ×1	Ⅱb	－	口縁	J50d-2Ⅲ×1	2	
図Ⅳ－1－12	K48c-8Ⅳ×1、K48c-9Ⅳ×1	Ⅱb	2	口縁	K48c-10Ⅳ×2、L48d-2×1	5	
図Ⅳ－1－13	J46-31Ⅴ×1	Ⅱb	－	口縁		1	2本1組の縄紋を口縁に巡らせ、縄線間に馬蹄形の縄圧痕を連続的に施している。

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本機データ	総点数	備考
図Ⅳ－1－14	L48d-5Ⅳ×3	Ⅱb	3	口縁	K47b-2Ⅲ×1、K48b-8Ⅳ×1、K48b-9Ⅳ×4、K48c-10Ⅳ×1、L48-1Ⅳ×1、L48a-4Ⅳ×1、L48a-5Ⅳ×2、L48a-8黒側木×1、L48a-16Ⅳ×10、L48a-18Ⅳ×1、L48b-3Ⅳ×2、L48d-2Ⅳ×1、L48d-3風倒木×1、L48d-5Ⅳ×4	34	
図Ⅳ－1－15	K49c-5Ⅳ×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅳ－1－16a	H42-13Ⅳ×18、I42-9Ⅳ×2	Ⅱb	20	口縁	掲載拓影H42-13Ⅳ×3と同一個体。H42-8Ⅳ×1、H42-13Ⅳ×105、H47-13Ⅳ×1、I42-9Ⅳ×5、I42-19Ⅳ×2、未注記×3	140	
図Ⅳ－1－16b	H42-13Ⅳ×3	Ⅱb	3	口縁	掲載拓影H42-13Ⅳ×18+I42-9①Ⅳ×2と同一個体。H42-9Ⅳ×1、H42-13Ⅳ×105、H47-13Ⅳ×1、I42-9Ⅳ×5、I42-19Ⅳ×2、未注記×3	140	
図Ⅳ－1－17	F37-1Ⅳ×2、G42-13Ⅳ×2	Ⅱb	4	口縁	F37-1Ⅳ×2、G42-4①Ⅲ×4、G42-9①Ⅳ×7、G42-13Ⅳ×1、G42-20Ⅳ×1、G42-30①風倒木×6、G43-48Ⅳ×1、H36-6Ⅳ×1、H39-12Ⅳ×1	28	
図Ⅳ－1－18	H43-61Ⅳ×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅳ－1－19a	G44-74Ⅳ×1、G43-91①風倒木×1、F44-58風倒木×1	Ⅱb	3	口縁	掲載拓影J44-45Ⅴ×1と同一個体。F44-43①Ⅳ×1、G43-20Ⅳ×1、G43-48Ⅳ×5、G43-83風倒木×3、G43-91①風倒木×1、G44-10Ⅳ×2、G44-18①Ⅳ×2、G44-69風倒木×1、H44-16B調査トレンチ×1、J37-16Ⅳ×1	22	
図Ⅳ－1－19b	J44-45Ⅴ×1	Ⅱb	－	口縁	掲載拓影G44-74Ⅳ×1+G43-91①風倒木×1+F44-58風倒木×1と同一個体。F44-43①Ⅳ×1、G43-20Ⅳ×1、G43-48Ⅳ×5、G43-83風倒木×3、G43-91①風倒木×1、G44-10Ⅳ×2、G44-18①Ⅳ×2、G44-69風倒木×1、H44-16B調査トレンチ×1、J37-16Ⅳ×1	22	
図Ⅳ－1－20	G45-16Ⅳ×1	Ⅱb	－	口縁		1	
図Ⅳ－2－21a	I48d-14Ⅳ×2、I48a-13Ⅳ×3	Ⅱb	5	口縁	掲載拓影F48c-14Ⅳ×1+F49a-9Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×5と同一個体。NH－1-2層土×1、NH－3-16覆土×1、NP－5-2覆土×2、G48d-9Ⅲ×1、G49b-4Ⅲ上×1、H48c-14Ⅳ×1、H49b-10Ⅳ×1、I48a-9Ⅳ×1、I48a-13Ⅳ×2、I48b-4Ⅳ×1、I48d-3Ⅲ×2、I48d-7Ⅳ×4、I48d-10木根×1、I48d-12Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×1、I49a-11Ⅳ×1、I49b-3Ⅳ×1、I49d-19Ⅳ×1、J47c-1Ⅳ×1、J48a-7Ⅳ×1、K48b-8Ⅳ×1	39	
図Ⅳ－2－21b	F48c-14Ⅳ×1、F49a-9Ⅳ×1	Ⅱb	2	口縁	掲載拓影I48d-14Ⅳ×2+I48a-13Ⅳ×3、I48d-14Ⅳ×5と同一個体。NH－1-2覆土×1、NH－3-16覆土×1、NP－5-2覆土×2、G48d-9Ⅲ×1、G49b-4Ⅲ上×1、H48c-14Ⅳ×1、H49b-10Ⅳ×1、I48a-9Ⅳ×1、I48a-13Ⅳ×2、I48b-4Ⅳ×1、I48d-3Ⅲ×2、I48d-7Ⅳ×4、I48d-10木根×1、I48d-12Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×1、I49a-11Ⅳ×1、I49b-3Ⅳ×1、I49d-19Ⅳ×1、J47c-1Ⅳ×1、J48a-7Ⅳ×1、K48b-8Ⅳ×1	39	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ－2－21c	I48d-14Ⅳ×5	Ⅱb	5	底部	掲載拓影F48c-14Ⅳ×1-F49a-9Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×2-I48ha-13Ⅳ×3と同一個体、NH-1-2覆土×1、NH-3-16覆土×1、NP-5-2覆土×2、G48d-9Ⅲ×1、G49b-4Ⅲ上×1、H48c-14Ⅳ×1、H49b-10Ⅳ×1、I48a-9Ⅳ×1、I48a-13Ⅳ×2、I48b-4Ⅳ×1、I48d-3Ⅲ×2、I48d-7Ⅳ×4、I48d-10木根×1、I48d-12Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×1、I49a-11Ⅳ×1、I49b-3Ⅳ×1、I49d-19Ⅳ×1、J47c-1Ⅳ×1、J48a-7Ⅳ×1、K48b-8Ⅳ×1	39	
図Ⅳ－2－22	I48b-6Ⅲ×2	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅳ－2－23	F43-11Ⅳ×2、F43-20Ⅳ×1	Ⅱb	3	口縁		3	
図Ⅳ－2－24	J42-23Ⅳ×1、J42-33Ⅳ×4	Ⅱb	5	胴部	G42-4Ⅲ×1、G42-9Ⅳ×1、G42-13Ⅳ×1、I40-13Ⅳ×1、I42-33Ⅳ×1、I42-34Ⅳ×1、I42-38Ⅳ×1	12	
図Ⅳ－2－25	F43-48Ⅳ×3、H43-40①Ⅳ×1、F43-38Ⅳ×1、F43-59Ⅳ×1	Ⅱb	6	胴部		6	
図Ⅳ－2－26	F44-24Ⅳ×4、F44-43①Ⅳ×7	Ⅱb	11	底部	F44-24Ⅳ×2、F44-43①Ⅳ×8、G42-27Ⅳ×1	22	
図Ⅳ－2－27	I48d-14Ⅳ×1	Ⅱb	－	底部	H48c-18木根×1、I48d-7Ⅳ×7、I48d-8Ⅳ×1、I48d-12Ⅳ×3、I48d-13Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×11	25	
図Ⅳ－2－28	F45-40風倒木×9、F45-24Ⅳ×1	Ⅱb	10	底部	F44-40風倒木×1、F45-19風倒木×2、F45-24Ⅳ×20、F45-40風倒木×33、F46-9Ⅳ×1、H47-45Ⅴ×1、K48a-5Ⅳ×1、K48a-6Ⅳ×3、K48b-1Ⅲ上×1、K48b-7Ⅳ×4、K48b-8Ⅳ×8、K48b-9Ⅳ×1、K48c-5Ⅲ上×1、L48d-5Ⅳ×1	88	
図Ⅳ－2－29	F45-42風倒木×1	Ⅱb	－	底部		1	
図Ⅳ－2－30	J47-1Ⅲ×1	Ⅱb	－	底部		1	
図Ⅳ－2－31	G42-13Ⅳ×1	Ⅱb	－	底部		1	
図Ⅳ－2－32	F44-7Ⅳ×1、F44-41×1	Ⅱb	2	底部	G38-15木根×1、H44c-1Ⅳ×1	4	
図Ⅳ－2－33	G44-64Ⅴ×1、G44-72Ⅴ×1	Ⅱb	2	底部		2	
図Ⅳ－2－34	I50c-11②木根×1	Ⅱb	－	円板状土製品		1	
図Ⅳ－3－36	L48a-6Ⅳ×3、L48b-5Ⅳ×1	Ⅲa	4	口縁	K49c-3Ⅲ×1、L48a-3Ⅳ×1、L48a-6Ⅳ×2、L48a-14Ⅳ×2、L48a-19Ⅳ×1、L48b-2Ⅳ×13、L48b-4Ⅳ×12、L48b-5Ⅳ×20、L48b-9Ⅳ×3、L48c-1Ⅳ×1、L48c-2Ⅳ×8、L48d-1Ⅳ×7、L48d-4Ⅳ×3、L50d-1Ⅳ×1、K50c-2Ⅲ×1、未注記×2	82	
図Ⅳ－3－37	I43-57Ⅳ×5	Ⅲa	5	口縁		5	
図Ⅳ－3－38	L48b-5Ⅳ×7	Ⅲa	7	口縁		7	
図Ⅳ－3－39	F46-55風倒木×3	Ⅲa	3	口縁		3	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本難データ	総点数	備考
図Ⅳ－3－40	I47-6Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－3－41	F47-36Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－3－42a	K50d-7Ⅳ×2	Ⅲa	2	口縁	掲載拓影K50d-7Ⅳ×1+K50d-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×3と同一個体。G48-8Ⅲ×1、G50b-11Ⅴ×1、J50b-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×8、K50-5風倒木×2、K50a-1Ⅲ×1、K50c-1Ⅲ×1、K50d-7Ⅳ×10、K50d-8Ⅳ×2、L49d-2Ⅳ×1	35	
図Ⅳ－3－42b	K50d-7Ⅳ×1、K50d-2Ⅲ×1	Ⅲa	2	口縁	掲載拓影K50d-7Ⅳ×2、K50-3風倒木×3と同一個体。G48-8Ⅲ×1、G50b-11Ⅴ×1、J50b-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×8、K50-5風倒木×2、K50a-1Ⅲ×1、K50c-1Ⅲ×1、K50d-7Ⅳ×10、K50d-8Ⅳ×2、L49d-2Ⅳ×1	35	
図Ⅳ－3－42c	K50-3風倒木×3	Ⅲa	3	胴部	掲載拓影K50d-7Ⅳ×2、K50d-7Ⅳ×1+K50d-2Ⅲ×1と同一個体。G48-8Ⅲ×1、G50b-11Ⅴ×1、J50b-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×8、K50-5風倒木×2、K50a-1Ⅲ×1、K50c-1Ⅲ×1、K50d-7Ⅳ×10、K50d-8Ⅳ×2、L49d-2Ⅳ×1	35	
図Ⅳ－3－43	J44-41①Ⅳ×1、J44-56木根×1	Ⅲa	2	口縁	J44-46Ⅴ×3、J44－52撹乱×21	26	
図Ⅳ－3－44	G43-11Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－3－45	H47-57風倒木×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－4－46	L48b-2Ⅳ×7	Ⅲa	7	口縁	L48a-14Ⅳ×2、L48b-2Ⅳ×9、L48b-4Ⅳ×4、L48b-5Ⅳ×5、L48c-2Ⅳ×1、L48d-1×1、L48d-4Ⅳ×1	30	
図Ⅳ－4－47	J44-41Ⅳ×3、I45-25Ⅳ×1	Ⅲa	4	口縁		4	
図Ⅳ－4－48	H44-9Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－4－49	J44-11Ⅳ×1、J44-20②Ⅳ×1	Ⅲa	2	口縁		2	
図Ⅳ－4－50	K46-2Ⅲ×4	Ⅲa	4	口縁		4	
図Ⅳ－4－51	L49d-2Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－4－52	J34-7Ⅳ×3	Ⅲa	3	口縁	J39-3Ⅳ×1	4	
図Ⅳ－4－53	J50a-2Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－4－54a	I47-11Ⅳ×4	Ⅲa	4	口縁	掲載拓影I47-11Ⅳ×5+NH－13-87盛土1×1と同一個体。NH－13-87層土×3、NH－13-88①盛土×4、NH－13-101①盛土×2、NH－13-107①層土×1、I47-11Ⅳ×2、J42-24Ⅳ×1、J45-11Ⅲ×1、J47-15Ⅳ×1	25	
図Ⅳ－4－54b	I47-11Ⅳ×5、NH13-87盛土1×1	Ⅲa	6	口縁	掲載拓影I47-11Ⅳ×4と同一個体。NH－13-87盛土×3、NH－13-88①盛土×4、NH－13-101①盛土×2、NH－13-107①盛土×1、I47-11Ⅳ×2、J42-24Ⅳ×1、J45-11Ⅲ×1、J47-15Ⅳ×1	25	
図Ⅳ－4－55	H49d-7Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－5－56	H49a-2Ⅲ×2	Ⅲa	2	口縁		2	
図Ⅳ－5－57a	L48d-4Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁	掲載拓影L48 a-14Ⅳ×1と同一個体。	2	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本既データ	総点数	備考
図Ⅳ－5－57b	L48a-14Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁	掲載拓影L48d-4Ⅳ×1と同一個体。	2	
図Ⅳ－5－58	K50d-8Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－5－59	I45-26Ⅳ×1	Ⅲa	－	口縁		1	
図Ⅳ－5－60	I45-3Ⅳ×3	Ⅲa	3	胴部		3	
図Ⅳ－5－61	F47-4Ⅲ×1、F47-14Ⅳ×1、F46-23Ⅳ×1	Ⅳa	3	底部		3	
図Ⅳ－5－62	L48b-2Ⅳ×4	Ⅲa	4	底部		4	
図Ⅳ－7－74	I42-10Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓影同一番号資料(図Ⅳ-7-83・図Ⅳ-8-95・図Ⅳ-8-99)とは別個体。F47-30Ⅴ×1、J43-38Ⅳ×1	3	
図Ⅳ－7－75	I47-7Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－7－76a	I44-18②Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁	掲載拓影K47-26Ⅴ×1と同一個体。J43-26Ⅳ×1	4	
図Ⅳ－7－76b	K47-26Ⅴ×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓影I44-18②Ⅳ×2と同一個体。J43-26Ⅳ×1	4	
図Ⅳ－7－77	J45-8②Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－7－78	K47-3②Ⅲ×3	Ⅳa	－	口縁		3	
図Ⅳ－7－79	I40-3②Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－7－80	G48a-6Ⅲ上×1、G48a-8Ⅲ×2、G48a-5Ⅲ×1	Ⅳa	4	口縁	F49b-11Ⅳ×1、F49b－15Ⅳ×1、F49c-2Ⅳ×1、F49c-3Ⅳ×1、G48a-8Ⅲ×1、H44b-7Ⅳ×1、I43-9Ⅳ×1、J43-3Ⅲ×1	12	
図Ⅳ－7－81	F49b-13Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－7－82	I48a-8Ⅳ×1、I49a-29Ⅳ×3	Ⅳa	4	口縁	I48c-5Ⅲ×1、I49a-2Ⅲ×4、I49a-5Ⅳ×10、I49a-8Ⅳ×25、I49a-9Ⅳ×1、I49a-12Ⅳ×9、I49a-13Ⅳ×2、I49a-14Ⅳ×1、I49a-24Ⅳ×4、I49a-29Ⅳ×27、I49d-2Ⅳ×1、I49d-3Ⅳ×3、I49d-18Ⅳ×2、I50a-4Ⅳ×2	96	
図Ⅳ－7－83	I42-10②Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓影同一番号資料(図Ⅳ-7-74・図Ⅳ-8-95・図Ⅳ-8-99)とは別個体。	1	
図Ⅳ－7－84	J43-9Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－7－85	G36-5Ⅳ×1、H39-13②Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ－7－86	K47-15②Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ－7－87	J43-26Ⅳ×12	Ⅳa	12	口縁	H39-9②Ⅳ×1、H39-21②Ⅳ×1、H39-22Ⅲ×2、H39-24②Ⅳ×3、I42-21Ⅳ×1、J43-21Ⅳ×1、J43-26Ⅳ×3、J47-15②Ⅳ×1、K43-5Ⅳ×7	32	
図Ⅳ－7－88	G49a-8Ⅳ×4	Ⅳa	4	口縁		4	
図Ⅳ－7－89	J44-31②Ⅳ×1、J46-21Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁	J44-10②Ⅲ×1、J44-41②Ⅳ×1	4	
図Ⅳ－7－90	F49d-3Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－8－91	H31-11Ⅲ×1、H33-12風倒木×1、L50c-2Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁	NH13-99②表土×2、G37-4Ⅳ×1、I42-1Ⅲ×1、I44-41Ⅳ×1、I44-60表採×1、I48c-3Ⅲ×1、J39-14Ⅳ×1、J44-21Ⅳ×1、J44-31Ⅳ×1、J44-53撹乱×1	14	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ－8－92a	H39-13②Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓影H38-12②Ⅳ×1+H38-5Ⅳ×1+H39-22Ⅲ×1と同一個体。H31-8Ⅲ×2、H38-4Ⅳ×1、H38-18Ⅳ×1、H39-17②Ⅳ×1、H39-23Ⅳ×1、J38-2Ⅳ×1、J42-2Ⅲ×1	12	
図Ⅳ－8－92b	H38-12②Ⅳ×1、H38-5Ⅳ×1、H39-22Ⅲ×1	Ⅳa	3	口縁	掲載拓影H39-13②Ⅳ×1と同一個体。H31-8Ⅲ×2、H38-4Ⅳ×1、H38-18Ⅳ×1、H39-17②Ⅳ×1、H39-23Ⅳ×1、J38-2Ⅳ×1、J42-2Ⅲ×1	12	
図Ⅳ－8－93	F49c-6Ⅲ×2、F49c-9Ⅳ×2、F49c-14Ⅳ×1	Ⅳa	5	口縁	F48b-2Ⅲ×1、F48b－3Ⅲ上×1、F48c－1Ⅲ上×2、F48c-4Ⅲ上×26、F48c－11Ⅲ×2、F48d-2Ⅲ×1、F49a-1Ⅲ上×1、F49a-5Ⅳ×1、F49a-11Ⅳ×2、F49a－15Ⅳ×1、F49b－3Ⅳ×1、F49b-4Ⅲ上×2、F49b－11Ⅳ×2、F49c-5Ⅳ×1、F49c-8Ⅳ×2、F49c-9Ⅳ×2、F49c11Ⅳ×2、F49d－6Ⅳ×1、F49d－7根乱×1、F49d-8Ⅳ×1、F49d－9Ⅳ×1、F50a-1Ⅳ×2、F50b-2Ⅳ×1、G48a-1Ⅲ上×1、G48a－5Ⅲ×5、G48a－9Ⅳ×1、G48c－5Ⅲ×1、G48d-2Ⅲ×1、G48d－10Ⅲ×1、G48d-16Ⅳ×1、G49a-1Ⅲ上×1、G49a-3Ⅲ×1、G49a-5Ⅳ×1、G49a-6Ⅳ×2、G49a-8Ⅳ×1、G49a-5Ⅳ×2、G49d-10Ⅴ×1、G49d-12Ⅴ×1、H39-9②Ⅳ×1、H39-9②Ⅳ×2、I39-6②Ⅳ×1、I39-17②Ⅳ×1、J42-9Ⅲ×2、J42-17Ⅳ×1	91	
図Ⅳ－8－94	I43-9Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ－8－95	I42-10Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁	I43-9Ⅳ×1、J43-9Ⅳ×1。掲載拓影同一番号資料(図Ⅳ-7-74・図Ⅳ-7-63・図Ⅳ-8-99)とは別個体。	3	
図Ⅳ－8－96	F47-4Ⅲ×1、G47-3②Ⅲ×1、F46-10②Ⅳ×1、F46-23Ⅳ×1	Ⅳa	4	口縁	F44-4Ⅲ×1、F46-10Ⅳ×10、F46-15Ⅳ×7、F46-23Ⅳ×2、F46-35Ⅴ×2、F46-49Ⅳ×1、F46-56底部×1、F47-4Ⅲ×2、F47-14Ⅳ×1、F47-30Ⅴ×1、未注記×1	33	
図Ⅳ－8－97	H38-31木根×2、H39-24Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁	H38-9Ⅳ×1、H38-12②Ⅳ×1、H38-14②Ⅳ×1、H38-22②Ⅳ×5、H38-31②木根×5、H39-24②Ⅳ×1、H39-26②Ⅴ×1、I38-2Ⅳ×2、I38-5Ⅳ×5、I38-9Ⅳ×1、I38-13Ⅳ×2、I38-16風倒木×1、I38-19木根×1、I39-5②Ⅳ×1、J38-5Ⅳ×1、J38-8Ⅳ×1、J38-14Ⅳ×2、J38-17Ⅳ×21、J38-20木根×4	60	
図Ⅳ－8－98	G43-34Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－8－99	I42-10Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓影同一番号資料(図Ⅳ-7-74・図Ⅳ-7-63・図Ⅳ-8-95)とは別個体。	1	
図Ⅳ－8－100a	J44-36Ⅳ×1、J44-2②Ⅲ×1、K43-5Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁	掲載拓影J43-23Ⅳ×1+J43-31Ⅳ×1と同一個体。	5	
図Ⅳ－8－100b	J43-23Ⅳ×1、J43-31Ⅳ×1	Ⅳa	2	底部	掲載拓影J44-36Ⅳ×1+J44-2Ⅲ×1+K43-5Ⅳ×1と同一個体。	5	
図Ⅳ－8－101	H38-23Ⅳ×2、J39-19Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁	H38-23Ⅳ×3	6	
図Ⅳ－8－102	J43-26Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ－8－103a	I46-22Ⅲ×5	Ⅳa	5	口縁	同一番号の掲載拓影I46-22Ⅲ×2と同一個体。I45-44Ⅴ×1、I45-49Ⅲ×2、I46-22Ⅲ×8、I47-22Ⅲ×1	19	
図Ⅳ－8－103b	I46-22Ⅲ×2	Ⅳa	2	口縁	同一番号の掲載拓影I46-22Ⅲ×5と同一個体。I45-44Ⅴ×1、I45-49Ⅲ×2、I46-22Ⅲ×8、I47-22Ⅲ×1	19	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・際位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ－8－104	H48c－2Ⅲ×1、H48c－24Ⅳ×1、I49a－18Ⅳ×4、I49a－29Ⅳ×4	Ⅳa	10	口縁	G49a－6Ⅳ×1、H48c－12Ⅳ×1、H48c－24Ⅳ×2、I49a－2Ⅲ×1、I49a－8Ⅳ×1、I49a－13Ⅳ×1、I49a－25Ⅳ×1、I49d－18Ⅳ×2	20	
図Ⅳ－9－105	F41－12不明×2	Ⅳa	2	口縁	F41－19Ⅳ×1、H42－28Ⅳ×1、未注記×1	5	
図Ⅳ－9－106a	G49c－12Ⅲ上×1、G49c－14Ⅳ×1、G49c－16Ⅳ×1、G49c－22Ⅳ×1	Ⅳa	4	口縁	掲載拓影K46－7Ⅲ×1と同一個体、G48a－20Ⅲ×1、G48a－22Ⅲ×1、G49b－14Ⅳ×1、G49c－14Ⅳ×2、G49c－16Ⅳ×1、H49b－14Ⅳ×4、K48a－3Ⅳ×1、K49a－2Ⅳ×1、K50d－9Ⅲ×1	18	
図Ⅳ－9－106b	K46－7Ⅲ×1	Ⅳa	—	口縁	掲載拓影G49c－12Ⅲ上×1+G49c－14Ⅳ×1+G49c－16Ⅳ×1+G49c－22Ⅳ×1と同一個体、G48a－20Ⅲ×1、G48a－22Ⅲ×1、G49b－14Ⅳ×1、G49c－14Ⅳ×2、G49c－16Ⅳ×1、H49b－14Ⅳ×4、K48a－3Ⅳ×1、K49a－2Ⅳ×1、K50d－9Ⅲ×1	18	
図Ⅳ－9－107	H39－24Ⅳ×4、H39－26Ⅴ×3	Ⅳa	7	口縁	H39－13②Ⅳ×1、H39－17②Ⅳ×1、H39－26Ⅴ×1	10	
図Ⅳ－9－108	I41－26Ⅳ×1、I41－30Ⅳ×1、I41－21Ⅳ×1、I42－35Ⅳ×1	Ⅳa	4	口縁	I39－8②Ⅳ×1、I39－17②Ⅳ×1、I40－1Ⅳ×1、I40－3②Ⅳ×4、I40－6②Ⅳ×3、I41－3②Ⅲ×1、J40－4Ⅳ×1、J40－14Ⅳ×1、J41－11Ⅲ×1、J42－17Ⅳ×1、J46－3②Ⅲ×1	20	
図Ⅳ－9－109	I49d－25Ⅳ×1、I49a－10Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁	NH3－12覆土×1、F49b－14Ⅳ×1、I48c－13Ⅲ×2、I49a－6Ⅳ×1、I49a－10Ⅳ×6、I49a－22Ⅲ×1、I49a－28Ⅳ×1、I49a－29Ⅳ×1、I49a－30Ⅳ×1、I49b－9Ⅳ×1、I49d－4Ⅳ×2、I49d－5Ⅳ×1、I49d－10Ⅳ×1、I49d－15Ⅳ×3、I49d－22Ⅲ×1、I49d－23Ⅲ×1、I49c－2Ⅳ×1、I49c－3Ⅳ×2、I49c－4Ⅳ×1、I50b－3Ⅳ×7、I50b－4Ⅲ×2、I50b－5Ⅳ×1、I50b－6Ⅳ×2	43	
図Ⅳ－9－110	I39－5②Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ－9－111	J44－31②Ⅳ×1、J44－21②Ⅳ×1、J44－12②Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁		3	
図Ⅳ－9－112	H37－11Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁	G37－15木根×1、I37－16Ⅳ×1、H37－1Ⅳ×1、H37－2Ⅳ×3、H37－11Ⅳ×5、H37－14Ⅳ×6、H37－20Ⅳ×5	24	
図Ⅳ－9－113	I44－4Ⅲ×1、I44－27Ⅳ×1	Ⅳa	2	底部		2	
図Ⅳ－9－114	J42－6Ⅲ×3	Ⅲa	3	底部		3	
図Ⅳ－9－115	F49c－11Ⅳ×2、F49c－15Ⅳ×1、F49c－16Ⅳ×1、F49c－23Ⅳ×1	Ⅳa	5	底部	E48c－2Ⅲ上×1、F49c－5Ⅳ×2、F49c－9Ⅳ×1、F49c－14Ⅳ×1、F49c－14Ⅳ×1、F49c－23Ⅳ×1、H45－14Ⅳ×1、J46－3②Ⅲ×4	17	
図Ⅳ－9－116	J42－54Ⅳ×5、J42－16①Ⅳ×1	Ⅳa	6	底部		6	
図Ⅳ－9－117	H40－26②Ⅳ×1	Ⅳa	—	底部	G40－31Ⅳ×1	2	
図Ⅳ－10－118a	H34－1Ⅲ×1、H34－3Ⅳ×12、H34－7Ⅳ×3	Ⅳa	16	口縁	掲載拓影H34－3Ⅳ×2+H34－7Ⅳ×4+未注記×3と同一個体、G33－1Ⅳ×2、G33－4Ⅳ×1、G34－6Ⅳ×1、H31－2Ⅳ×1、H32－4Ⅳ×2、H33－12底側K×1、H34－1Ⅲ×3、H34－3Ⅳ×4、H34－7Ⅳ×1	41	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ－10－118b	H34-3Ⅳ×2、H34-7Ⅳ×4、未注記×3	Ⅳa	9	口縁	掲載拓影H34-1Ⅲ×1+H34-3Ⅳ×12+H34-7Ⅳ×3と同一個体。G33-1Ⅳ×2、G33-4Ⅳ×1、G34-6Ⅳ×1、H31-2Ⅳ×1、H32-4Ⅳ×2、H33-12風倒木×1、H34-1Ⅲ×3、H34-3Ⅳ×4、H34-7Ⅳ×1	41	
図Ⅳ－10－119	F46-10②Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－120	F46-28Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－121	G46-2Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－122	F44-42Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－123	F45-3②風倒木×3、F45-6②風倒木×1	Ⅳa	4	口縁	F45-9②Ⅲ×2、F46-46Ⅴ×1	7	
図Ⅳ－10－124	H43-12Ⅳ×1、H43-21Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁	G43-69Ⅳ×1、H42-14②Ⅳ×1、未注記×2	6	
図Ⅳ－10－125	F48d-14Ⅳ×1、F48a-7Ⅲ×1	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ－10－126	G46-2Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－127	F45-43風倒木×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－128	J36-5Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－129	F48d-13Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－130a	G48a-7Ⅲ×1、G48a-9Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁	掲載拓影G49a-6Ⅳ×1と同一個体。	3	
図Ⅳ－10－130b	G49a-6Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓影G48a-7Ⅲ×1＋G48a-9Ⅳ×1と同一個体。	3	
図Ⅳ－10－131	F45-6②風倒木×2	Ⅳa	2	胴部		2	
図Ⅳ－10－132	F46-49Ⅳ×1	Ⅳa	－	底部		1	
図Ⅳ－10－133	F44-34②風倒木×1	Ⅳa	－	口縁	同一番掲載拓影土器F44-34②風倒木×1（図Ⅳ-11-149・図Ⅳ-12-165）と別個体。	1	
図Ⅳ－10－134	F44-26②Ⅳ×1、I46-22Ⅲ×1	Ⅳa	2	口縁	F44-34②風倒木×1、F45-32②風倒木×1、I45-49Ⅲ×1	5	
図Ⅳ－10－135	F44-68風倒木×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－136	J44-31②Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－10－137	K49b-3Ⅳ×1	Ⅳa	－	眼部		1	土製品の可能性有。
図Ⅳ－11－138	F45-9②Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－11－139	G44-3②Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁	同一番掲載拓影土器G44-3②Ⅲ×1（図Ⅳ-11-140）と別個体。	1	
図Ⅳ－11－140	G44-3②Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁	同一番掲載拓影土器G44-3②Ⅲ×1（図Ⅳ-11-139）と別個体。	1	
図Ⅳ－11－141	F47-4Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－11－142	F49d-11Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－11－143	F45-39風倒木×3	Ⅳa	－	口縁		3	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ－11－144	F45-6②風倒木×3	Ⅳa	3	口縁	F44-9②Ⅳ×1、F44-34②風倒木×1、F45-1Ⅳ×2、F45-6風倒木×1、F45-9②Ⅲ×3、F45-15②風倒木×1、F45-26②Ⅳ×2、F45-32②風倒木×1、F45-39風倒木×1、F45-43風倒木×2、F46-23Ⅳ×1、G41-4Ⅲ×1、G41-27Ⅲ×1、G44-3②Ⅲ×1、I45-15Ⅳ×1	23	
図Ⅳ－11－145	J48b-9Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－11－146	F44-60②風倒木×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－11－147	G45-12Ⅲ×1	Ⅳa	－	頸部		1	
図Ⅳ－11－148	F45－9②Ⅲ×1、F47-4Ⅲ×1、F47-19　Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁		3	
図Ⅳ－11－149	F44-34②風倒木×1	Ⅳa	－	口縁	同一番号堆載拓形土器F44-34②風倒木×1（図Ⅳ-10-133・図Ⅳ-12-165）と別個体。	1	
図Ⅳ－11－150	F40-8Ⅳ×1、F40-10Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ－11－151	G41-24Ⅴ×5	Ⅳa	5	口縁	F40-10Ⅳ×1、F40-23Ⅳ×2、F42-13②Ⅳ×1	9	
図Ⅳ－11－152	J34-9木根×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－11－153	F43-35②Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－12－160a	J35-2Ⅲ×1、I37-6Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁	掲載拓形J34-11Ⅲ×1と同一個体。	3	
図Ⅳ－12－160b	J34-11Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁	掲載拓形J35-2Ⅲ×1＋I37-6Ⅳ×1と同一個体。	3	
図Ⅳ－12－161	F37-2②Ⅳ×5、F37-9Ⅳ×1	Ⅳa	6	口縁		6	
図Ⅳ－12－162	F41-40Ⅳ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－12－163a	I43-12Ⅳ×1、H43-12Ⅳ×1	Ⅳa	2	頸部	掲載拓形I43-27Ⅳ×2＋I43-2Ⅲ×1と同一個体。F44-9Ⅳ×1、F44-68風倒木×2、G40-10Ⅳ×1、G43-28Ⅳ×1、I42-10②Ⅳ×1、I43-2Ⅲ×3、I43-27Ⅳ×2	16	
図Ⅳ－12－163b	I43-27Ⅳ×2、I43-2Ⅲ×1	Ⅳa	3	頸部	掲載拓形I43-12Ⅳ×1＋H43-12Ⅳ×1と同一個体。F44-9②Ⅳ×1、F44-68風倒木×2、G40-10Ⅳ×1、G43-28Ⅳ×1、I42-10②Ⅳ×1、I43-2Ⅲ×3、I43-27Ⅳ×2	16	
図Ⅳ－12－164	J45-3Ⅲ×1	Ⅳa	－	口縁		1	
図Ⅳ－12－165	F44-34②風倒木×1	Ⅳa	－	口縁	同一番号堆載拓形土器F44-34②風倒木×1（図Ⅳ-10-133・図Ⅳ-11-149）と別個体。	1	
図Ⅳ－13－167	J43-2Ⅲ×14	Ⅵa	14	口縁		14	
図Ⅳ－13－168	H43-57Ⅳ×1	土製品	－	－		1	玉
図Ⅳ－13－169	F46-47Ⅲ×1	土製品	－	－		1	玉

表Ⅳ－４　包含層出土石器一覧

	自然	自然上面	Ⅳ層	Ⅳ層(1面目)	Ⅳ層(2面目)	Ⅳ層(3面目)	Ⅳ層(4面目)	Ⅳ層(5面目)	Ⅳ層(6面目)	Ⅳ層下位	Ⅴ層	風倒木	撹乱・B区	手掘土砂	合計
石鏃	12		4	8	6	2	3	4			2	8			49
石槍又はナイフ				3	1	2									7
石錐	1		1								2				4
つまみがナイフ	2		7	3	5	1	2		1		1	2			24
スクレイパー	24	1	25	20	13	8	10	9	5	4	8	14	2	4	147
ピエス・エスキーユ			2		2	1		1				1			7
石核(剥片)	14		3	21	6	3	2		1			1			51
石核(メノウ)	8		5	3	5		4	1				3			29
蛇紋岩製石斧	3	3	8		3						2			1	20
Ⅰ2フレイク(メノウ)	2		2		2							4			10
Ⅰ2フレイク(チャート)	2														2
Ⅰ2フレイク(安山)	1														1
Ⅰ2フレイク(頁岩)	18	1	27	6	3	2	4	4		1	8	2		2	76
Ⅰ2フレイク(流紋石)				1		1									2
Ⅰ2フレイク(メノウ)	2		3	3		1	2	3				1			15
Ⅰ2フレイク(安山岩)			1												1
Ⅰ2フレイク(チャート)				1											1
Ⅰ2フレイク(頁岩)	31		21	18	22	10	6	3	4		8	2	2	3	132
Ⅰ2フレイク(流紋石)	1		1												2
フレイク(頁岩)	377	13	237	187	356	71	26	19	1	9	58	69	11	27	1459
フレイク(メノウ)	88	2	71	40	61	34	26	13	2	4	11	52	1	2	392
フレイク(安山岩)	1		1					1				2	1		6
フレイク(流紋)	1														1
フレイク(凝灰)	1		2							2	1	1			7
フレイク(チャート)			1	1								3		2	12
フレイク(黒曜石)	5		1		1	1		1							9
石刀	5		9	3	4		1				1	1			24
石のみ				1											1
北海道式石斧	4	1	17	3	3		4	2				2			36
磨製打製石斧	3	2	23		8	3	5	3			7	8	4		69
たたき石	13	2	23	15	19	10	4	5		3	5	8	5	1	106
すり石	3		1	1		1	2				1	1	1		13
敲石	1	1	3		2	1				1	1				10
石皿			4	4	1			2						1	12
台石	4		19	11	8	10	2	1		1	7	7	5	1	76
礫(自然の擦痕礫)	1			1		1									3
礫(被熱・使用痕あり)	2		7	1		1				2					13
剥片礫	19	1	33	30	15	8	7	3			4	3	3	2	129
礫(使用痕有)		1	4	1	1		1	1					1		10
礫(敲石)	1		3		2							1			8
礫(磨石)	7	1	5	5	4	3	1	1		1	5	1	1		39
礫	61	10	119	25	16	13	5	4	2	1	17	21	9	5	313
石製品	1	1	1	1											4
合計	700	40	696	417	563	192	117	85	19	26	148	215	44	59	3325

表Ⅳ－５　包含層出土掻載石器一覧

掻載関連番号	通番	器種名	材質記	産物期	層位	写真	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
図IV－15	1	石錐	G41	10	第四層	メノウ	23.0	13.5	4.0	0.8	未成品
図IV－15	2	石匙	H37	3	層(1)	黄瑪	30.0	17.0	6.2	1.7	石器類(凸縁有)
図IV－15	3	石錐	F45b	1	IV	メノウ	(26.0)	13.0	6.3	(2.1)	石器未完
図IV－15	4	石錐	G40	2	層	チャート	20.0	19.0	6.5	1.9	石器類 先端部損失 重量部が変質状に強り出す
図IV－15	5	石錐	F41	8a	層	珪質頁岩	20.0	16.5	5.0	1.2	石器未完 先端部損失 重量部が変質状に強り出す
図IV－15	6	石錐	G46a	12	IV	凝灰石	20.0	14.0	4.1	1.3	石器未完
図IV－15	7	石錐	G40	16	IV(5)	珪質頁岩	20.5	10.5	3.5	0.8	石器未完
図IV－15	8	石錐	G43	4	層	凝灰石	(27.5)	11.5	3.0	(0.8)	石器未完
図IV－15	9	石錐	H38	16	IV(1)	黄瑪	40.5	13.0	6.0	2.2	石器未完
図IV－15	10	石錐	J43	1b	ローム	珪質頁岩	28.5	11.5	4.3	1.4	石器未完 付属物(チャール)あり
図IV－15	11	石錐	J37	1	IV(2)	珪質頁岩	20.0	8.5	4.0	1.0	石器未完
図IV－15	12	石錐	G42	6	層	珪質頁岩	47.0	18.0	3.0	1.8	石器未完 特殊なアグを持つ
図IV－15	13	石錐	H42	4	層	珪質頁岩	34.0	15.0	4.2	3.5	石器未完 特殊なアグを持つ
図IV－15	14	石錐	J44	1b	IV(2)	珪質頁岩	37.0	17.0	3.0	1.3	石器未完 特殊なアグを持つ
図IV－15	15	石錐	F41	8a	層	チャート	35.0	15.0	3.0	1.2	石器未完 特殊なアグを持つ
図IV－15	16	石錐	F44	10	IV(1)	黄瑪	38.0	18.0	3.5	1.3	石器未完 特殊なアグを持つ
図IV－15	17	石錐	G40	3	層	珪質頁岩	31.5	18.0	8.0	3.7	石器未完 特殊なアグを持つ
図IV－15	18	石錐または石ナイフ	G44	25	IV(3)	風化した黄瑪	60.0	33.0	17.5	23.3	石器未完
図IV－15	19	石錐または石ナイフ	G47	12	IV(1)	風化した黄瑪	52.0	34.5	11.5	32.1	石器未完
図IV－15	20	石錐または石ナイフ	F43	31	IV(3)	珪質頁岩	35.0	22.5	11.5	6.3	石器未完 先端が特異で重量が変形状に強り出す
図IV－15	21	石錐または石ナイフ	F40	11	IV(1)	珪質頁岩	31.0	25.0	10.0	4.5	石器未完 先端が特異で重量が変形状に強り出す
図IV－15	22	石錐または石ナイフ	F41	37	IV(1)	黄瑪	45.0	31.5	8.0	9.0	石器未完 重力が不明瞭
図IV－15	23	石錐	G49d	1	V	黄瑪	45.0	42.0	9.0	12.4	石器類
図IV－15	24	石錐	G46	4	層	珪質頁岩	65.0	60.0	25.7	50.7	石器
図IV－16	25	つまみ付きナイフ	L48a	3	風化土	黄瑪	84.0	26.5	8.7	15.4	縦方向に調整が及ぶ
図IV－16	26	つまみ付きナイフ	H2	22	IV(2)	珪質頁岩	(54.0)	22.0	9.0	(13.0)	先端欠損
図IV－16	27	つまみ付きナイフ	K48b	4	IV	珪質頁岩	(52.5)	22.0	4.7	(6.5)	先端欠損
図IV－16	28	つまみ付きナイフ	G45	13	層	黄瑪	51.0	24.0	9.0	11.9	先端欠損
図IV－16	29	つまみ付きナイフ	H48b	6	IV	黄瑪	53.5	26.3	7.0	15.3	先端欠損
図IV－16	30	つまみ付きナイフ	G47	18	IV(2)	珪質頁岩	53.0	27.0	9.1	13.5	先端欠損
図IV－16	31	つまみ付きナイフ	H48d	2	IV	珪質頁岩	73.0	20.0	10.0	16.5	横ないし縦方向に調整 先端欠損
図IV－16	32	つまみ付きナイフ	H46	29	IV(3)	珪質頁岩	51.0	26.0	4.5	9.0	縦側のすべれた剥離面に調整を持つもの
図IV－16	33	つまみ付きナイフ	F42	14	IV(4)	メノウ	28.0	25.5	9.0	8.0	先端欠損
図IV－16	34	つまみ付きナイフ	F45d	12	IV	メノウ	50.5	26.5	9.4	8.8	両面調整
図IV－16	35	つまみ付きナイフ	K44	12	IV(2)	珪質頁岩	68.0	41.0	10.0	32.5	両面調整
図IV－16	36	スクレパー	H49a	10	IV	珪質頁岩	36.0	28.0	11.0	24.7	片面全面調整 薄手
図IV－16	37	スクレパー	H44	75	IV(2)	珪質頁岩	84.0	35.5	10.4	37.7	両縁ないし縦に剥離するもの
図IV－16	38	スクレパー	H45	15	IV(2)	珪質頁岩	64.0	39.0	19.0	37.1	両面調整の刃部
図IV－16	39	スクレパー	G49b	9	IV	メノウ	46.5	26.0	12.0	26.5	先端部の稜線を表側面
図IV－16	40	スクレパー	H48a	11	IV	珪質頁岩	30.0	21.0	8.0	28.9	両縁調整
図IV－17	41	スクレパー	G49a	7	IV	黄瑪	74.0	35.5	11.0	39.7	両縁調整
図IV－17	42	スクレパー	H48c	11	IV	凝灰石	35.0	49.0	12.5	32.7	両縁調整
図IV－17	43	スクレパー	J50a	4	黒褐層	黄瑪	69.0	52.0	9.0	35.6	両縁調整 一部に自然面残存
図IV－17	44	スクレパー	G48d	11	IV	風化した黄瑪	80.0	37.0	17.0	68.6	両縁調整
図IV－17	45	スクレパー	J48a	1	層	黄瑪	76.0	50.0	10.0	35.7	両縁調整
図IV－17	46	両面調整石器	F45c	2	表土層	珪質頁岩	72.0	45.0	24.0	61.7	F45b(1)は(1)(刃以上最短)(2)上部(1)(2)は板状上面形状に強く影響 中央部はF45c(1)型上面(1)(2)は板状上面形状に強く影響
図IV－17	47	両面調整石器	F49a	13	IV	珪質頁岩	75.0	49.0	15.0	62.4	F49b(1)型上面(1)は中央部はF45c(1)型上面(1)は板状上面形状に強く影響
図IV－17	48	ドレッパー	J46	24	IV	黄瑪	24.0	34.5	9.5	5.8	第一グリット内でドレッパーとの分類有
図IV－17	49	両面調整石器	J46	24	IV	黄瑪	47.5	30.5	11.5	9.6	第一グリット内でドレッパーと共に両面調整石器片がある確率
図IV－17	50	両面調整石器	J46	24	IV	珪質頁岩	70.0	36.0	19.0	48.3	図面中実線部 縦間隔が広めがちい
図IV－17	51	石核	J44	3d	IV(2)	黄瑪	63.0	38.0	23.0	53.7	F41～F47間(1)(2)は第二次的剥離面と剥離面
図IV－17	52	石核	G46a	10	IV	黄瑪	58.0	45.0	13.0	53.8	第一グリット内で点在する
図IV－17	53	石核	J48d	11	IV	黄瑪	213.0	55.0	29.0	313.0	打面の形状がある
図IV－18	54	石核	L48d	5	IV	メノウ	82.0	85.0	35.0	190.0	打面の転換がある
図IV－18	55	両面調整石器	K47	30	V	黄瑪	103.0	37.0	25.0	107.1	K47～50(1)(ブレイク・ドレイク・両面調整)を表示は各グリット上の3、両面調整型敲打点2、ブレイク×1の3点が横並
図IV－18	56	ピエス・エスキーユ	F44	35	高橋木	珪質頁岩	37.0	35.0	13.0	15.7	下部に潰れ痕有
図IV－18	57	ピエス・エスキーユ	L48a	2	IV	メノウ	29.0	25.0	9.0	7.4	上下端に潰れ痕有
図IV－19	58	石斧有	F46	39	V	結晶質	145.0	39.0	21.0	99.8	第1グリット内で点在する
図IV－19	59	石斧	H48b	16	IV	凝灰石	79.0	40.0	16.0	78.1	両小端の片 円形 敲打痕整地中更形跡
図IV－19	60	石斧	L46	4	IV(1)	緑色岩質	152.0	43.0	27.0	300.0	横方向の片 円形 敲打痕整地中更形跡
図IV－19	61	剥片	F49d	5	IV	緑色岩質	71.0	78.0	12.0	43.5	縦方向の剥片を生じ、強風に打ち欠いた後に全面研磨
図IV－19	62	剥離片	H51	3	IV(1)	緑色岩質	100.0	48.0	23.0	112.5	94は一次的剥離 一部研磨
図IV－19	63	石斧	J41	16	層	粘板質	86.0	42.0	20.0	103.5	打ち欠き潰痕あ、研磨 一部後に打ち欠きによって再生か
図IV－19	64	石斧	J41	17	層	緑色岩質	105.0	55.0	24.0	161.9	表裏共ともたまたまに研磨か
図IV－20	65	北海道式石器	L35	19	IV(5)	安山岩	125.0	147.0	91.0	2115	全体が整形して表裏・縁有
図IV－20	66	北海道式石器	F43c	14	IV	安山岩	98.0	179.0	56.0	1080.0	全体を整形して表裏・縁有
図IV－20	67	北海道式石器	G45b	3	IV	安山岩	98.0	139.0	68.0	1120.0	全体を整形して表裏・縁有
図IV－20	68	北海道式石器	H41	13	IV(2)	安山岩	91.0	103.0	37.0	1180.0	全体を整形して表裏・縁有
図IV－20	69	北海道式石器	F45a	10	IV	安山岩	89.0	118.0	67.0	840.0	両面縁を加工された後、打ち欠きの痕を部分的に残がず
図IV－20	70	北海道式石器	H44	1	IV	安山岩	83.0	118.0	60.0	618.0	両面縁を加工された後、打ち欠きの痕を部分的に残がず
図IV－20	71	北海道式石器	L44	30	IV(1)	安山岩	121.0	174.0	91.0	2180.9	未成品 打ち欠き痕全面残存
図IV－21	72	信平打製石器	J28	21	大の谷	安山岩	116.0	193.0	41.5	1100.6	厚みに沿っていける縁切面 表裏ともに石刃剥離に調整 両側縁に沿いたまり打ち欠き・おおよそ平円形
図IV－21	73	信平打製石器	F49d	10	IV	安山岩	97.0	126.0	28.0	430.0	平円状 周辺によるものの一種類面を持つ 縁部は表裏共に打ち
図IV－21	74	信平打製石器	H48c	12	IV	安山岩	74.0	137.0	22.0	350.5	平面的の使用は縦型型を持つけた先端による刃部の使用部を持
図IV－21	75	信平打製石器	L48d	2	IV	安山岩	90.0	170.0	16.0	323.0	一部後の表裏共に調整されて 両側縁は打ち欠きで再接的な刃部は 不明な平円形
図IV－21	76	信平打製石器	J47	6	IV	安山岩	90.0	134.0	24.0	375.0	表面は 打ち欠きによって刃部様相形成が進行 裏面 平
図IV－21	77	信平打製石器	H47	34	IV(5)	安山岩	75.0	146.0	21.0	390.0	上下に縁部は平坦 上部は表面で剥離 裏面 両側縁に打ち欠きによる調整痕残存 表面
図IV－21	78	信平打製石器	H45	35	IV	安山岩	94.0	123.0	13.0	190.0	平たい素材を用いて 調整的な縁部面と平円状の縁辺に打ち欠き調整が行なわ
図IV－21	79	信平打製石器	L48a	14	IV	安山岩	12.5	127.5	24.0	550.0	一部に縁部面 両面が打ち欠きによって平たさを
図IV－21	80	信平打製石器	J42	33	IV(3)	安山岩	71.0	103.0	13.0	150.0	下部に縁部面 表裏共ある程度打ち欠き調整 長幅面
図IV－22	81	たたき石	G34	2	IV(4)	安山岩	167.0	100.0	34.0	750.0	両側 天然石の敲打部
図IV－22	82	たたき石	J51	2	大の谷	凝灰	105.0	84.0	42.0	300.0	両側 天然石の敲打部
図IV－22	83	たたき石	H40	11-2	IV(2)	安山岩	117.0	81.0	50.0	600.0	両側 天然石の敲打部
図IV－22	84	たたき石	H40d	1	IV	安山岩	123.0	48.0	25.0	205.0	両側 天然石の敲打部

埋蔵遺跡番号	埋蔵番号	遺構名	調査区	遺物No.	層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
宮IV－22	85	たたき石	F48c	11	IV	安山岩	119.0	78.0	40.0	380.0	側面は磨耗のみ使用
宮IV－22	86	たたき石	E48b	7	表	安山岩	120.0	74.0	27.0	230.0	特に使用痕跡なし
宮IV－22	87	たたき石	J38	24	竪穴住	安山岩	220.0	46.0	42.0	635.0	側面部分を使用
宮IV－22	88	たたき石	F48d	1	竪上面	安山岩	71.0	97.0	34.0	250.0	側面部分を使用
宮IV－22	89	たたき石	F48e	10	表	安山岩	97.0	101.0	40.0	330.0	側面部分を使用
宮IV－22	90	たたき石	E49c	1	IV	安山岩	121.0	53.0	30.0	260.0	角石
宮IV－22	91	たたき石	E48a	3	竪上面	安山岩	150.0	60.0	30.0	400.0	角石
宮IV－23	92	たたき石	H48b	9	IV	安山岩	78.0	77.0	28.0	190.0	角石
宮IV－23	93	たたき石	J48c	2	IV	安山岩	90.0	78.0	36.0	370.0	角石
宮IV－23	94	たたき石	F49	1	木根抜	安山岩	90.0	53.0	33.0	190.0	側の研磨のみ使用
宮IV－23	95	たたき石	K48a	2	IV	安山岩	40.0	27.0	26.2	48.4	主要部の表面に敲打痕
宮IV－23	96	すり石	I33	11	風倒木	安山岩	150.0	88.0	48.0	320.0	表裏共にすり痕打の後、丁寧な研磨
宮IV－23	97	すり石	H49a	13	IV	安山岩	106.0	92.0	47.0	560.0	表裏共を使用
宮IV－23	98	すり石	G50c	2・1	木の根	安山岩	84.0	99.0	54.0	730.0	平らな面を使用
宮IV－23	99	すり石	G51	1	表	安山岩	106.0	55.0	25.0	230.0	一部研磨を使用
宮IV－23	100	たたき石	G46d	1	表	安山岩	119.0	97.0	32.0	290.0	側面部分を使用
宮IV－23	101	砥石	I48d	5	IV	変質	(89.0)	(97.0)	(12.0)	(51.1)	破損・G46-34(V)×I-H47-43(IV'×1の合計2点が接合
宮IV－23	102	敲石	G48	3	表	安山岩	(59.0)	(50.0)	(8.0)	(28.8)	
宮IV－24	103	台石	F45	45	IV	安山岩	(324.0)	293.0	165.0	(20000.0)	
宮IV－24	104	台石	J48d	14	木の根	安山岩	414.0	252.0	163.0	35000.0	
宮IV－24	105	石皿	H49a	12	IV	安山岩	255.5	203.0	139.0	18000.0	
宮IV－25	106	台石	F33	1	IV	安山岩	232.0	222.0	105.0	10000.0	トレンチ
宮IV－25	107	台石	H40	23	IV(2)	安山岩	302.0	211.0	86.0	7000.0	
宮IV－25	108	台石	H39d	7	木の根	粗粒安山岩	264.0	225.5	89.0	6900.0	
宮IV－25	109	石皿片	F43	66	IV	安山岩	(182.0)	(255.5)	(127.0)	(4500.0)	破損
宮IV－25	110	砥石	J42	13	IV(1)	粗石	26.0	13.5	5.0	2.9	粗石を擦りによって砥石化
宮IV－25	111	砥石	F45c	1	表上	粗石	27.0	(28.0)	(10.0)	2.6	粗石を擦りによって砥石化
宮IV－25	112	ヒスイ製勾玉	H47	34	表	ヒスイ	40.0	20.0	13.0	24.1	表裏共に磨のヒスイ
宮IV－25	113	岩版	J42	39	IV(3)	泥岩	255.0	121.0	19.0	4500.0	抜型・石棒に類するものか

引用・参考文献

青柳文吉　1988　「北海道のひすい製玉について」『北海道考古学』第24輯

森浩一編　1998　『古代翡翠文化の謎』　新人物往来社

石岡憲雄　1994「撚糸文」『縄文文化の研究』5　雄山閣

石川　徹　1967「札幌郡手稲町砂山出土の土器について」『北海道考古学』第３輯

今井富士夫・磯崎正彦　1968　「十腰内遺跡」　岩木山

大鳥直行ほか　1979『知内川中流域の縄文時代遺跡』知内町教育委員会

大沼忠春　1981「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66－４

大沼忠春　1982「続縄文時代型式の編年」『縄文土器大成』5　講談社

大沼忠春　1986「道南の縄文前期土器群の編年について（２）」『北海道考古学』第22輯

大沼忠春　1989「続縄文土器様式」『縄文土器大観』4　小学館

葛西　勵　1979「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥羽古代文化』第11号

児玉大成　1999「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』第11号

鈴木克彦　1999「北海道渡島・桧山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学』第35輯

鈴木克彦　2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣

高瀬克範　1998「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』第34輯

高橋正勝　1974「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」『北海道の文化・31』

高橋正勝　1994「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4　雄山閣

高橋正勝・小笠原忠久　1980「4 縄文文化前期･中期」『北海道考古学講座』

千代　肇　1984考古学ライブラリー25『続縄文文化』　ニュー・サイエンス社

千代　肇　1994「道南地方の土器」『縄文文化の研究』6　雄山閣

富樫泰時　1981「東北地方」『縄文土器大成２』講談社

成田滋彦　1994「青森県の土器」『縄文文化の研究４』　雄山閣

成田滋彦　1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観４』小学館

羽賀憲二　1995「北海道式石冠」『縄文文化の研究７』雄山閣

羽賀憲二　1998「道央部における縄文時代後期初頭の土器―「仮称手稲砂山式土器」について―」『時の絆道を辿る』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編

藤原秀樹　2002「半円状扁平打製石器について」『山越3遺跡・山越4遺跡』北埋調報166

三宅徹也　1974「青森県における円筒下層式土器群の地域的展開」『北奥古代文化』第6号

村越　潔　1976「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』

村越　潔　1984『増補　円筒土器文化』雄山閣考古学選書10

三浦孝一　1984「第二編 先史時代」『改訂八雲町史 上巻』八雲町

吉崎昌一　1965「１　北海道」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房

青森県教育委員会　1983『弥栄平遺跡（２）』

青森県教育委員会　1984『青森県六ヶ所村大石平遺跡』

青森県教育委員会　1985『青森県六ヶ所村大石平Ⅱ遺跡』

青森県教育委員会　1986『青森県六ヶ所村大石平Ⅲ遺跡』

青森県教育委員会　1987『上尾駮（２）遺跡Ⅱ』

青森市教育委員会　1995『小牧野遺跡』

乙部町教育委員会　1976『元和』

乙部町教育委員会　1989『緑町2遺跡』

上磯町教育委員会　1992『三ツ石２遺跡』

上磯町教育委員会　1992『石倉野３遺跡』

上ノ国町教育委員会　1985『小岱遺跡』

白老町教育委員会　1992『アヨロ遺跡』
戸井町教育委員会　1988『釜谷２遺跡Ⅱ』
松前町教育委員会　1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
松前町教育委員会　1976『松前町原口遺跡発掘調査報告書』
松前町教育委員会　1978『鬼沢Ｂ遺跡・櫛石遺跡調査報告』
松前町教育委員会　1983『白坂』)
南茅部教育委員会　1986『臼尻B遺跡　vol．Ⅵ』
南茅部教育委員会　1985『臼尻B遺跡　vol．Ⅴ』
南茅部町埋蔵文化財調査団　1993『八木Ａ遺跡・ハマナス野遺跡』
森町教育委員会　1975『鳥崎遺跡』
森町教育委員会　1994『御幸町』
森町　1980　『森町史』
函館市教育委員会　1988『寺町貝塚』
函館市教育委員会　1999『函館市石倉貝塚』
八雲町教育委員会　1980『山崎遺跡発掘調査報告書』
八雲町教育委員会　1982『栄浜1遺跡発掘調査概報』
八雲町教育委員会　1983『栄浜』
八雲町教育委員会　1986『栄浜1遺跡』
八雲町教育委員会　1987『栄浜1遺跡』
八雲町教育委員会　1988『山越5・6遺跡発掘調査報告書』
八雲町教育委員会　1989『浜松2遺跡』
八雲町教育委員会　1990『八雲3遺跡発掘調査報告書』
八雲町教育委員会　1991『浜松2遺跡』
八雲町教育委員会　1992『コタン温泉遺跡』
八雲町教育委員会　1995ａ『浜松5遺跡』
八雲町教育委員会　1995ｂ『栄浜1遺跡』
八雲町教育委員会　1997『大新遺跡』
八雲町教育委員会　1998ａ『大新遺跡』
八雲町教育委員会　1998ｂ『旭丘1遺跡』
八雲町教育委員会　1998ｃ『栄浜1遺跡Ⅳ』
北海道第四期研究会　1974『西股』
㈶北海道埋蔵文化財センター1986『知内町湯の里３遺跡』北埋調報32
㈶北海道埋蔵文化財センター1986『矢不来２遺跡』北埋調報37
㈶北海道埋蔵文化財センター1987『木古内町建川２・新道４遺跡』北埋調報43
㈶北海道埋蔵文化財センター1988『木古内町新道４遺跡』北埋調報52
㈶北海道埋蔵文化財センター2000『八雲町シラリカ２遺跡』北埋調報142
㈶北海道埋蔵文化財センター2001『八雲町ポンシラリカ1遺跡・黒岩３遺跡』北埋調報155
㈶北海道埋蔵文化財センター2001『八雲町山崎４遺跡』北埋調報162
㈶北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町山崎５遺跡』北埋調報165
㈶北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町山越３遺跡・山越４遺跡』北埋調報166
㈶北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町野田生２遺跡』北埋調報167
㈶北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町野田生４遺跡』北埋調報171
㈶北海道埋蔵文化財センター2002『八雲町栄浜1遺跡』北埋調報175

写 真 图 版

1　住居跡確認（南西から）

2　住居跡確認（南東から）

図版 2

1　H－１東西セクション（北西から）

2　H－１南北セクション（北東から）

3　H－１遺物出土状況（南東から）

1　HF- 1・HP- 1セクション（北から）

2　HF- 1セクション（北から）

3　HP- 1セクション（南から）

4　HP- 2セクション（北西から）

5　H- 1完掘（北西から）

図版 4

1　H－２東西セクション（南東から）

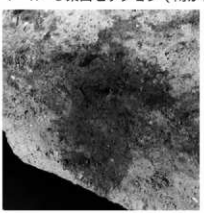
2　H－２南北セクション（東から）

3　HF－１確認（南東から）

4　HF－１セクション（南から）

5　H－２完掘（南東から）

1　H- 3東西セクション（南から）



2　HP- 1セクション（南から）3　HP- 7セクション（南から）4　HP- 8セクション（西から）

5　H- 3完掘（北東から）

図版 6

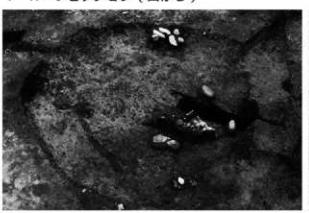
1　H- 4セクション（北から）

2　HF- 1セクション（南西から）

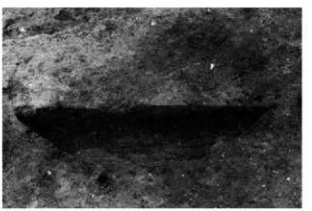
3　HP- 2セクション（東から）

4　H- 4出土状況（北東から）

1　H- 9セクション（西から）



2　H- 9遺物出土状況（東から）



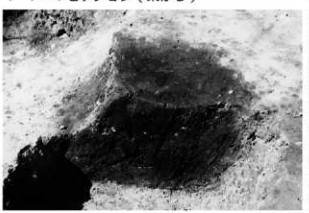
3　HF- 1セクション（北西から）

4　H- 9完掘（東から）

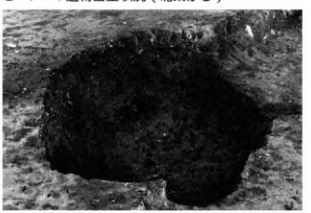
図版 8

1　P－１セクション（東から）

2　P－１遺物出土状況（北東から）

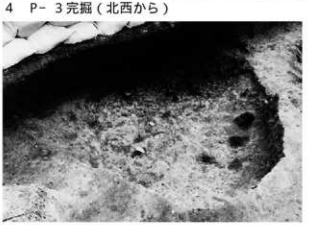


3　P－３セクション（東から）



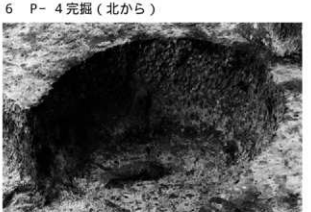
4　P－３完掘（北西から）

5　P－４セクション（北西から）



6　P－４完掘（北から）

7　P－５セクション（南から）



8　P－５完掘（南から）

1　P－ 6 セクション (南から)

2　P－ 6 遺物出土状況 (西から)

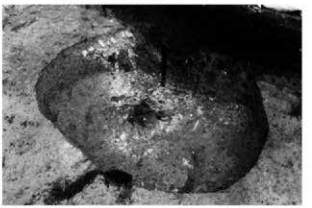
3　P－ 7 セクション (東から)

4　P－ 8 完掘 (南東から)

5　P－ 11セクション (南西から)

6　P－ 11遺物出土状況 (西から)

7　P－ 12セクション (南西から)



8　P－ 12完掘 (北西から)

1　火山灰除去作業（東から）

2　B地区完掘（北東から）

1　NH- 13東西セクション（南西から）

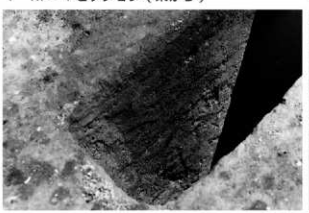
2　NH- 13南北セクション（南東から）

3　NH- 13覆土1層遺物出土状況（北東から）

図版12

1　HF－１セクション（東から）

2　HF－２セクション（東から）

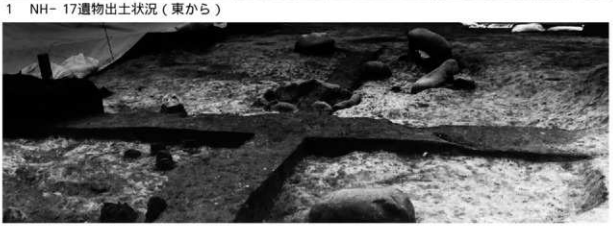


3　HP－２セクション（西から）

4　HP－３セクション（西から）

5　NH－13完掘（西から）

1　NH- 17遺物出土状況（東から）



2　NH- 17東西セクション（南から）

3　HF- 1検出状況（北東から）

4　HF- 1セクション（北西から）

図版14

1　NH- 17完掘（南から）

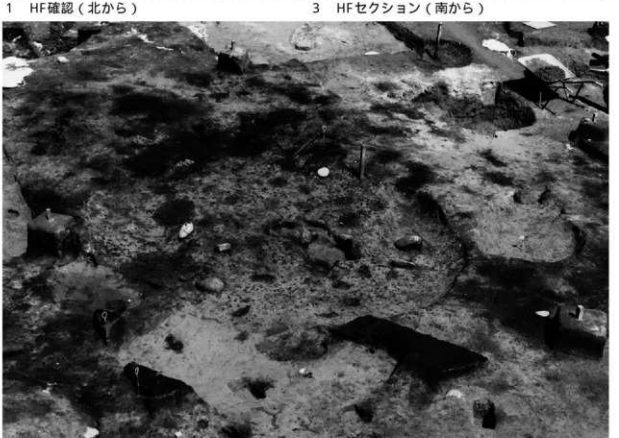
2　NH- 19東西セクション（南から）

3　NH- 19南北セクション（南西から）

1　HF確認（北から）

2　HF確認（西から）

3　HFセクション（南から）



4　NH- 19完掘（東から）

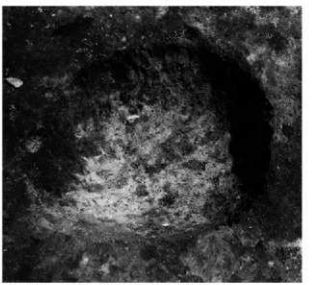
図版16

1　NH- 17（手前）・19（奥）調査状況（南から）

1　NP- 60遺物出土状況（南西から）

2　NP- 60遺物出土状況（南西から）

3　NP- 60遺物出土状況（南西から）



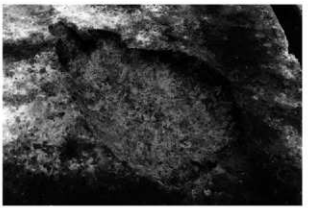
4　NP- 60遺物出土状況（南西から）

5　NP- 61セクション（南から）

6　NP- 61遺物出土状況（東から）

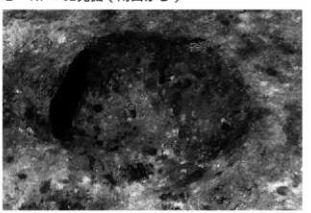
図版18

1　NP− 62セクション（西から）

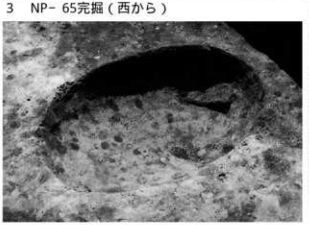


2　NP− 62完掘（南西から）

3　NP− 65完掘（西から）



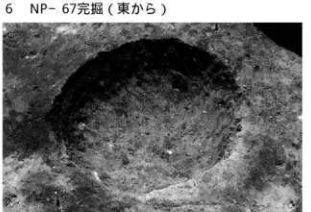
4　NP− 68完掘（北から）



5　NP− 67セクション（東から）

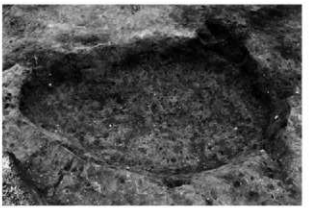
6　NP− 67完掘（東から）

7　NP− 69セクション（西から）



8　NP− 69完掘（北から）

1　NP- 70セクション（南西から）



2　NP- 70完掘（南西から）

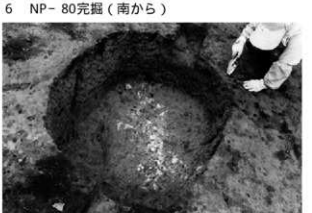
3　NP- 77セクション（東から）

4　NP- 77遺物出土状況（南東から）

5　NP- 77完掘（南東から）

6　NP- 80完掘（南から）

7　NP- 81セクション（南西から）



8　NP- 81完掘（南から）

図版20

1　NP－ 82確認（西から）

2　NP－ 82セクション（南西から）

3　NP－ 82遺物出土状況（西から）

4　NP－ 82完掘（西から）

5　NP－ 84セクション（南から）

6　NP－ 84完掘（北から）

1　NP- 85セクション（南から）

2　NP- 85完掘（西から）

3　NP- 86セクション（南から）

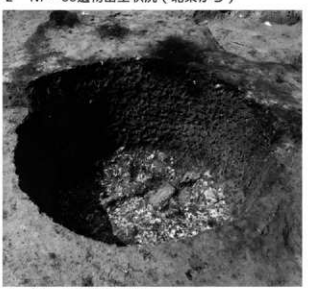
4　NP- 86完掘（東から）

図版22

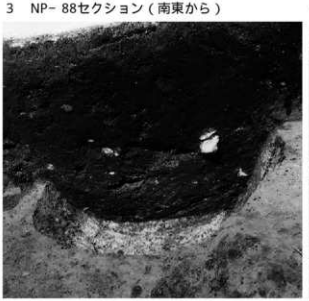
1　NP－ 88確認（北東から）

2　NP－ 88遺物出土状況（北東から）

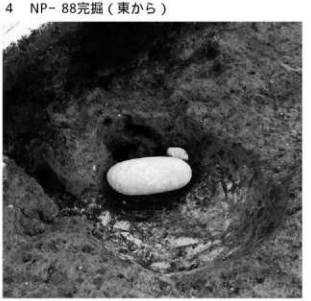
3　NP－ 88セクション（南東から）



4　NP－ 88完掘（東から）



5　NP－ 89セクション（東から）



6　NP－ 90完掘（北東から）

1　NP- 92セクション（東から）

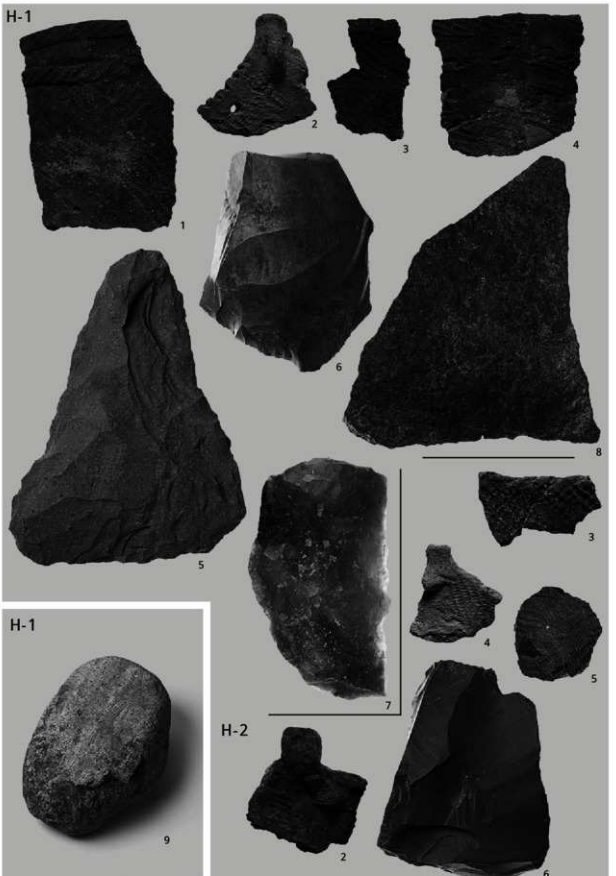
2　NP- 92完掘（東から）

3　恵山式土器出土状況（北から）

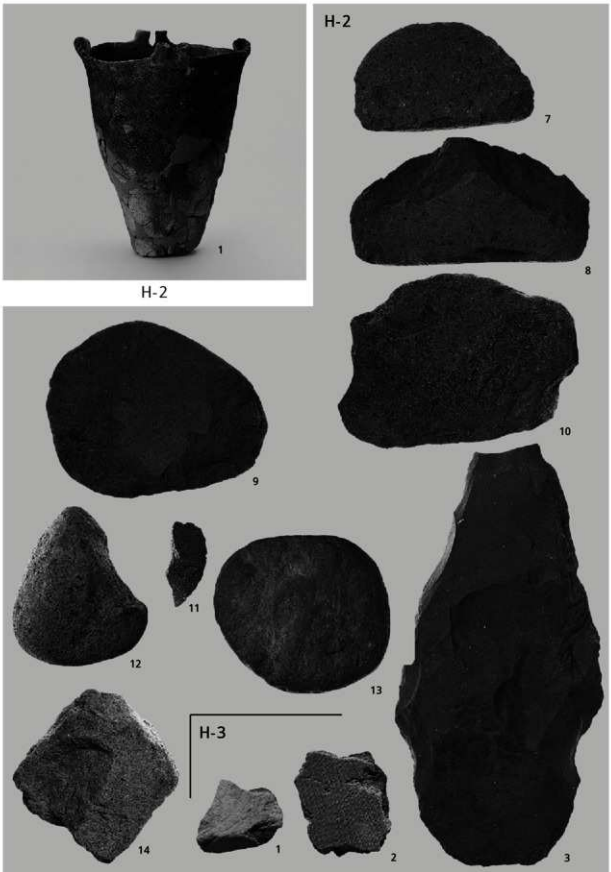
4　円筒下層ｄ式土器出土状況（北から）

5　フレイク出土状況（F- 40区）（北から）

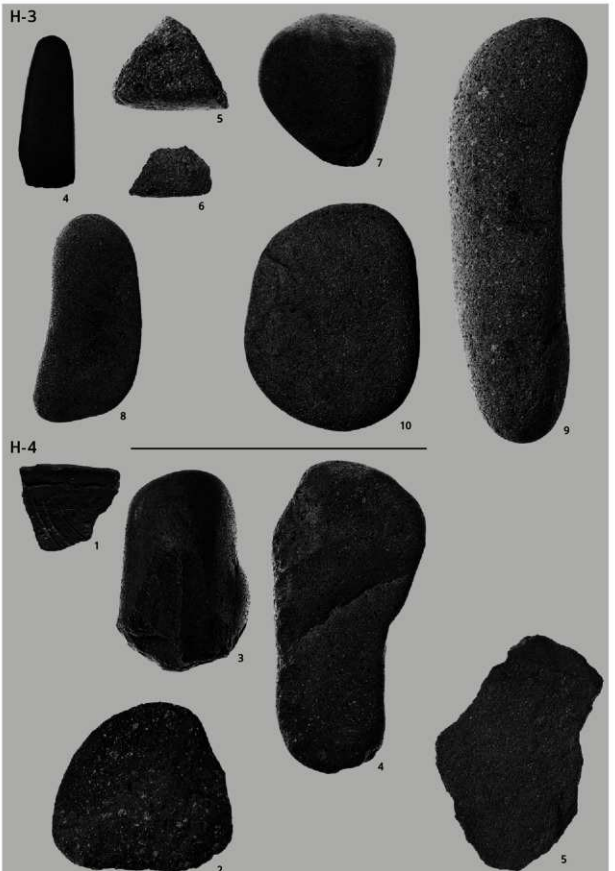
6　ヒスイ製玉出土状況（F- 47区）（西から）



遺構出土の遺物（１）



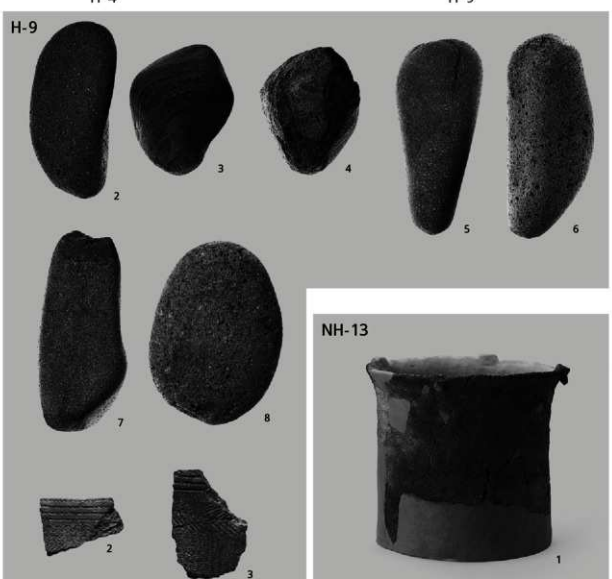
遺構出土の遺物（２）



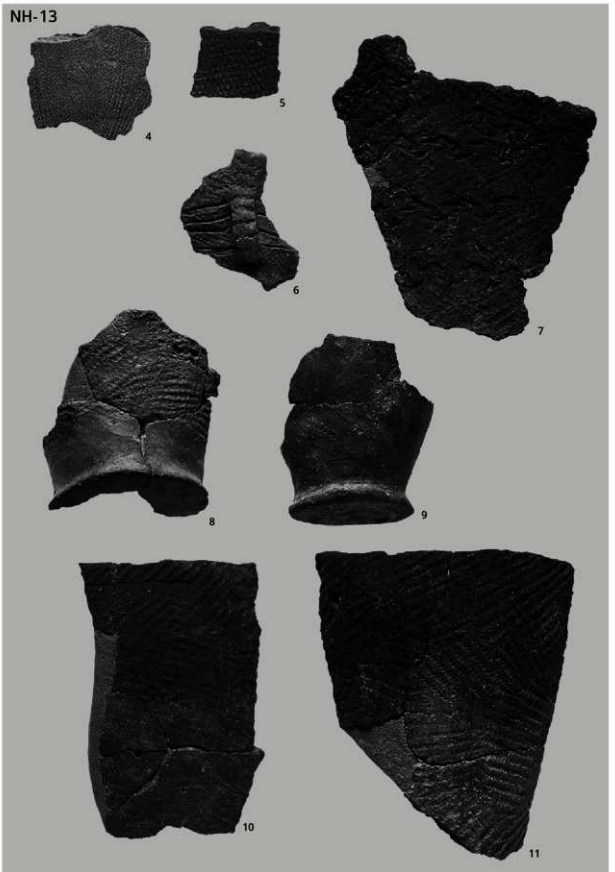
遺構出土の遺物（３）

H-4

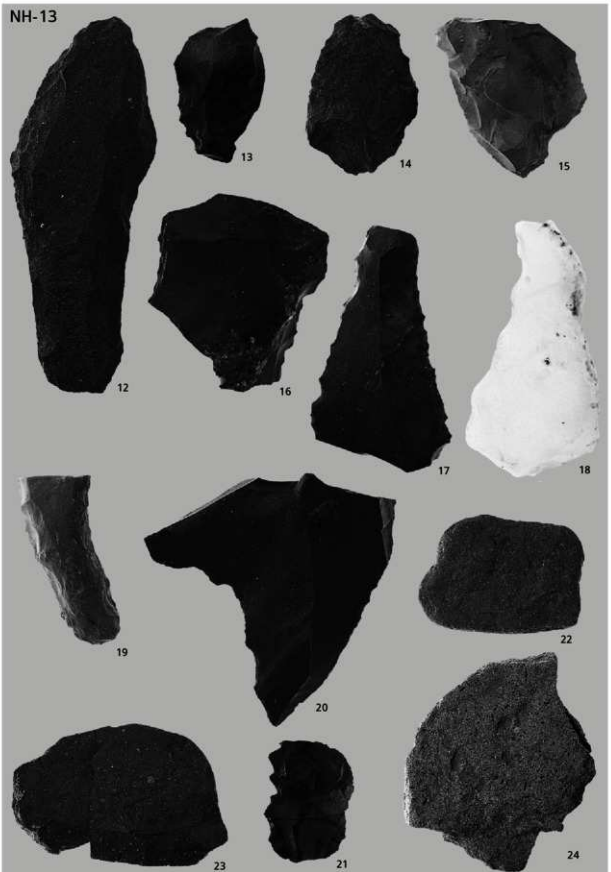
H-9



遺構出土の遺物（４）

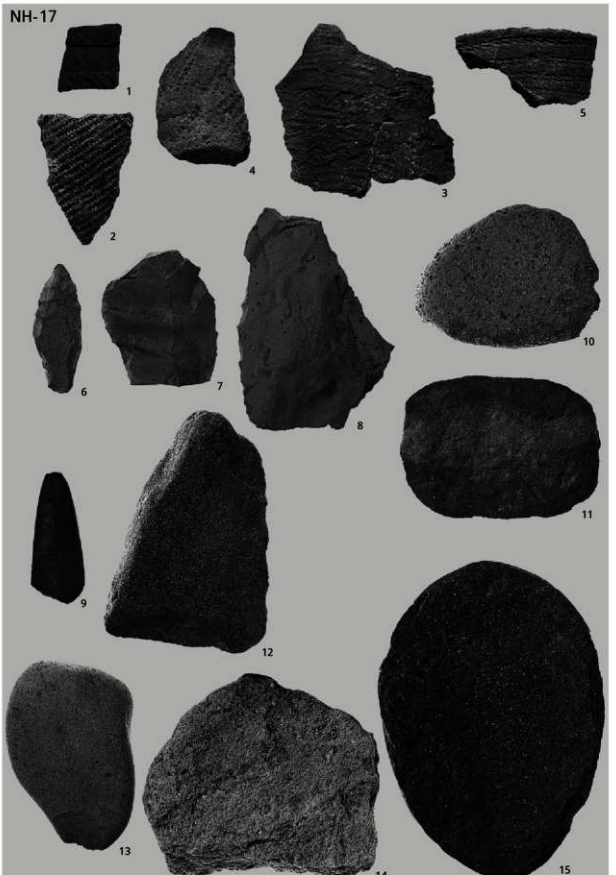


遺構出土の遺物（５）

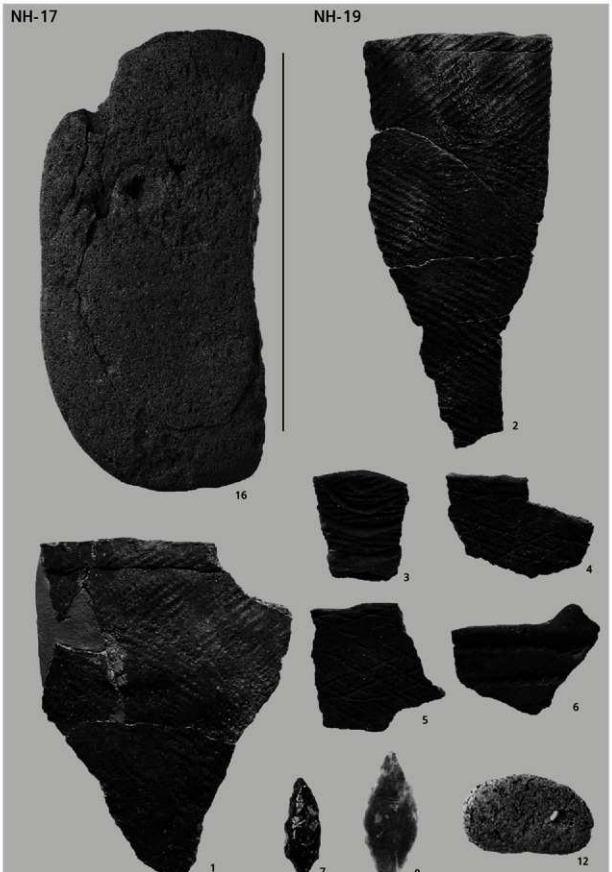


遺構出土の遺物（６）

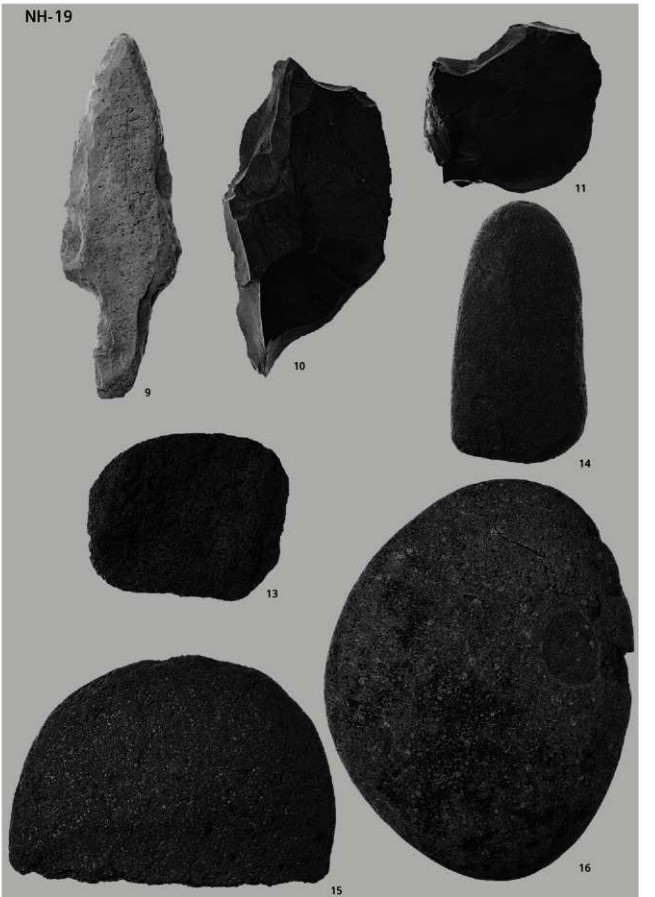
図版30



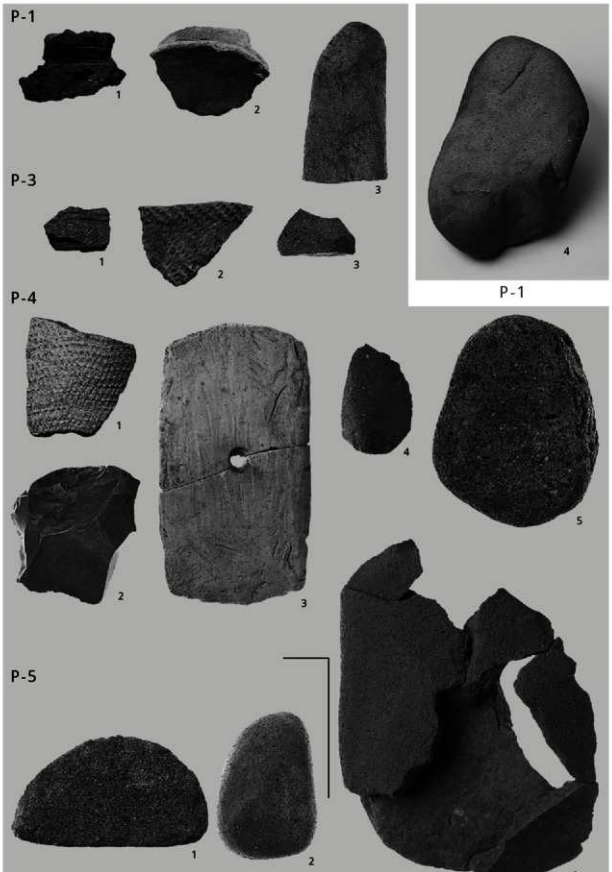
遺構出土の遺物（７）



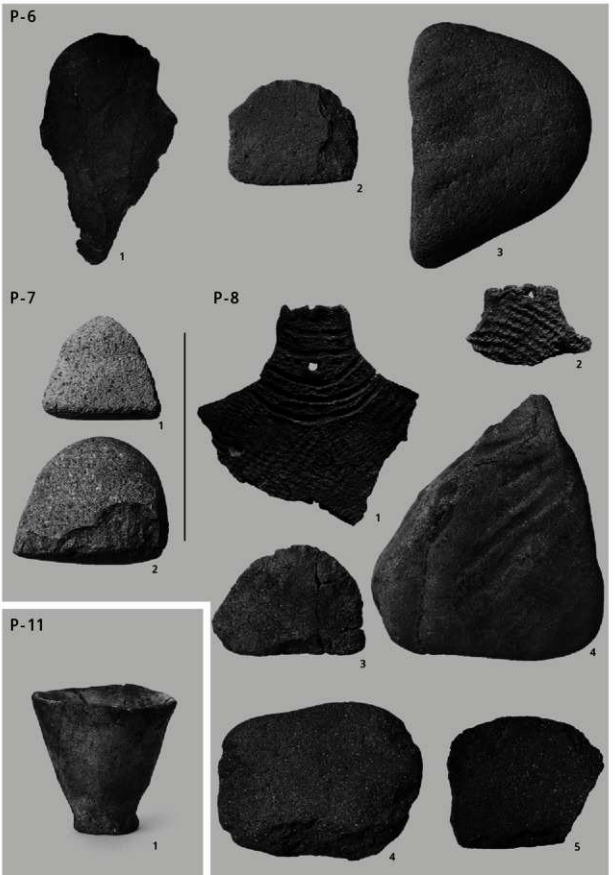
遺構出土の遺物（８）



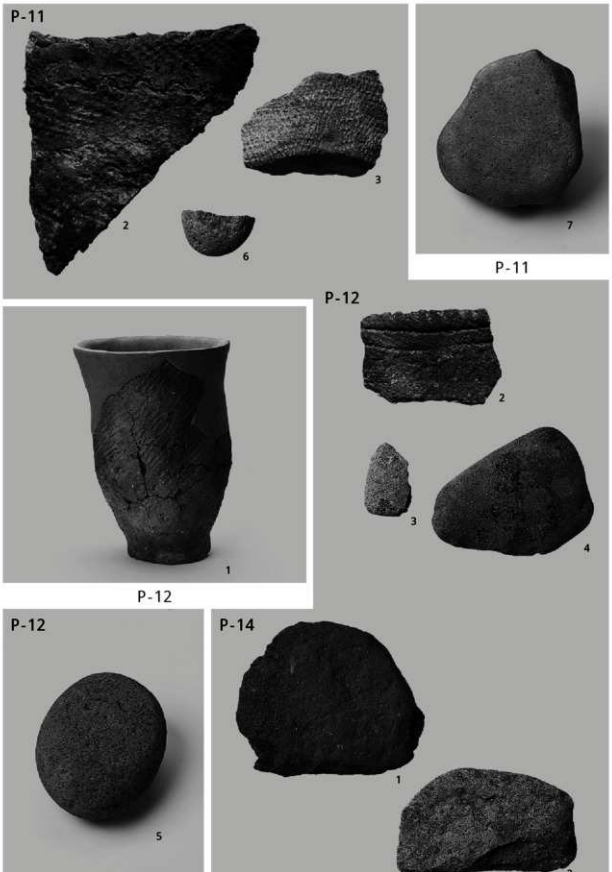
遺構出土の遺物（９）



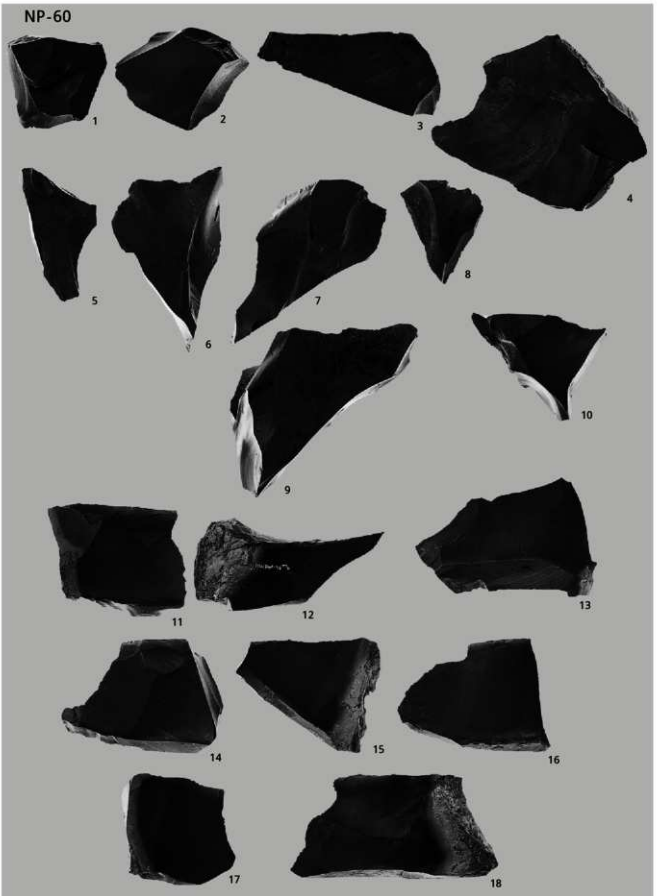
遺構出土の遺物（10）



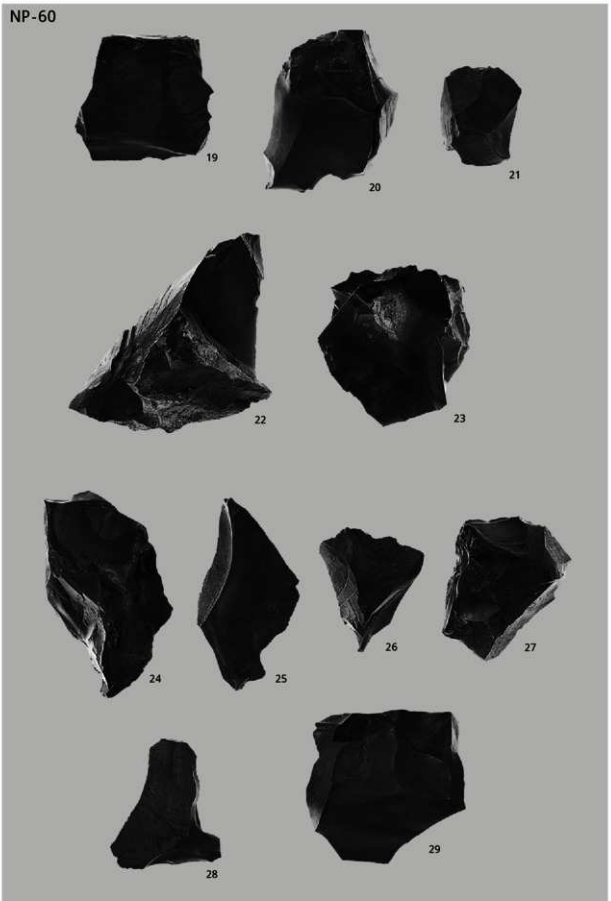
遺構出土の遺物（11）



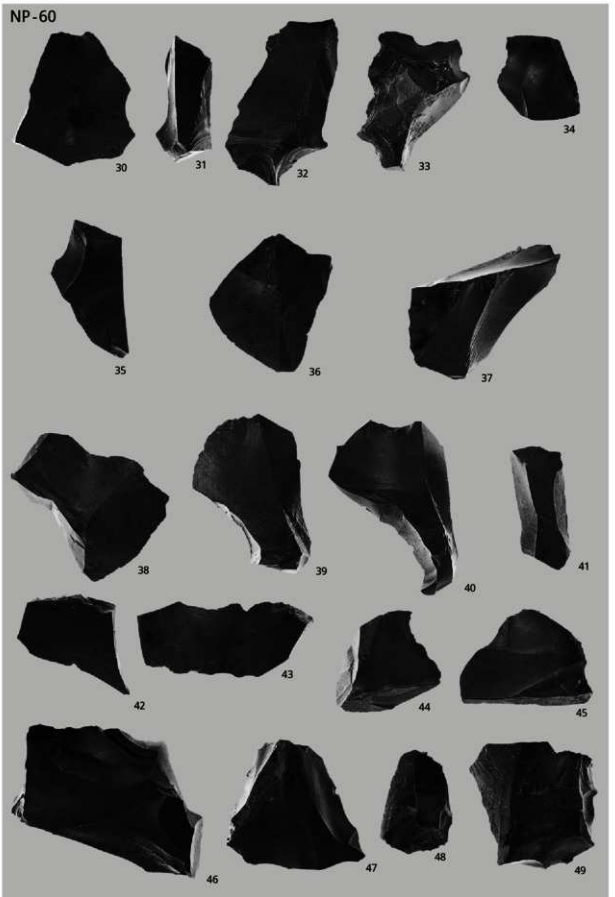
遺構出土の遺物（12）



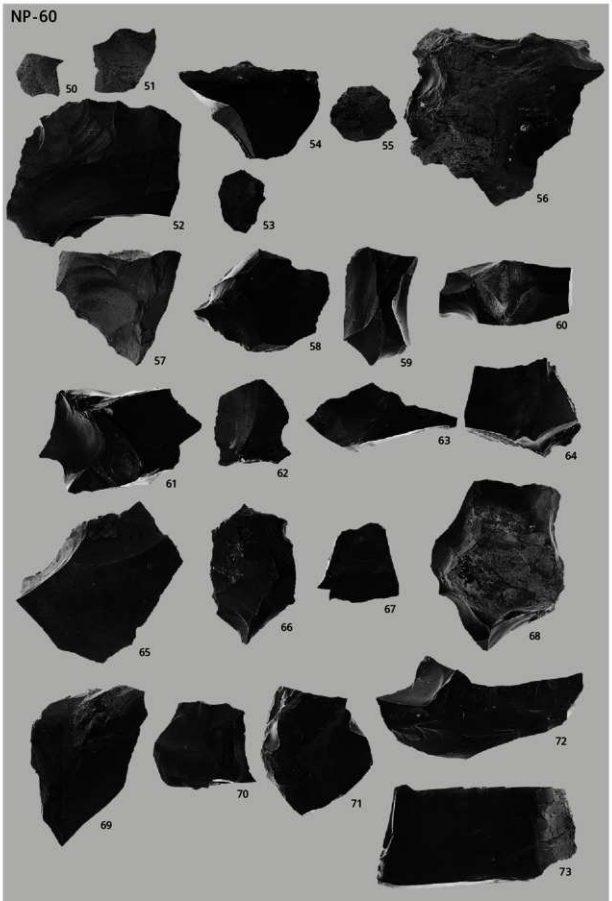
遺構出土の遺物（13）



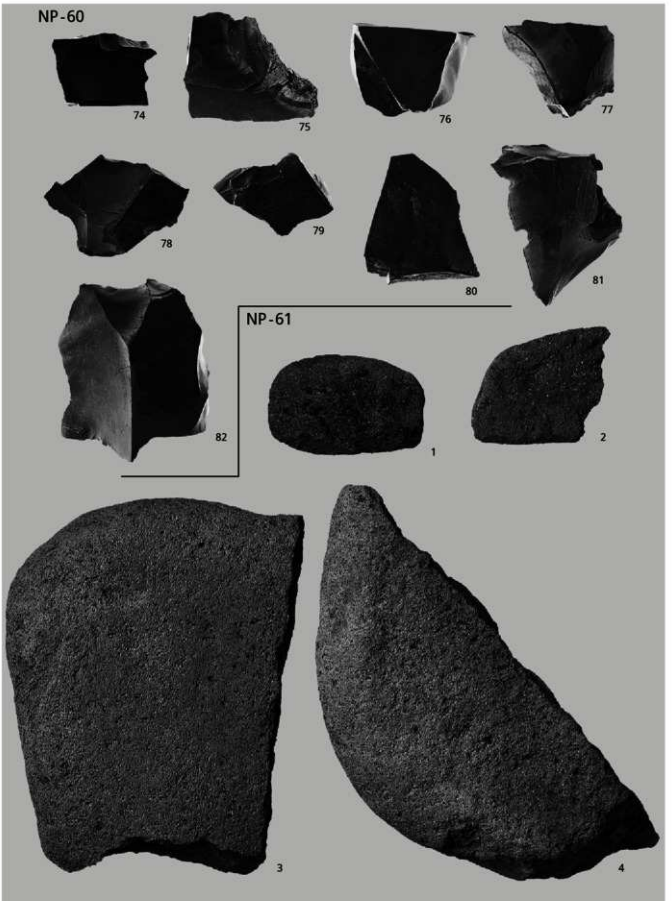
遺構出土の遺物（14）



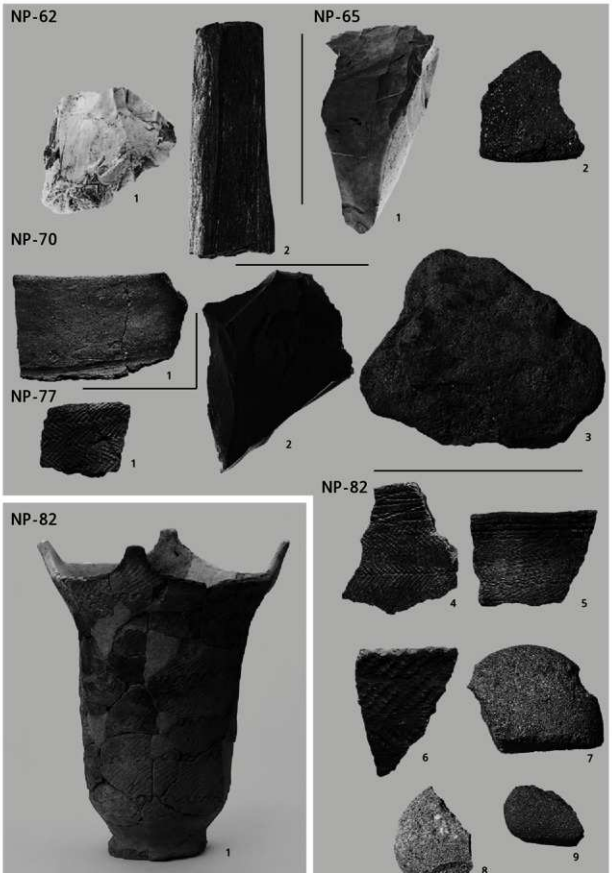
遺構出土の遺物（15）


NP-60
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

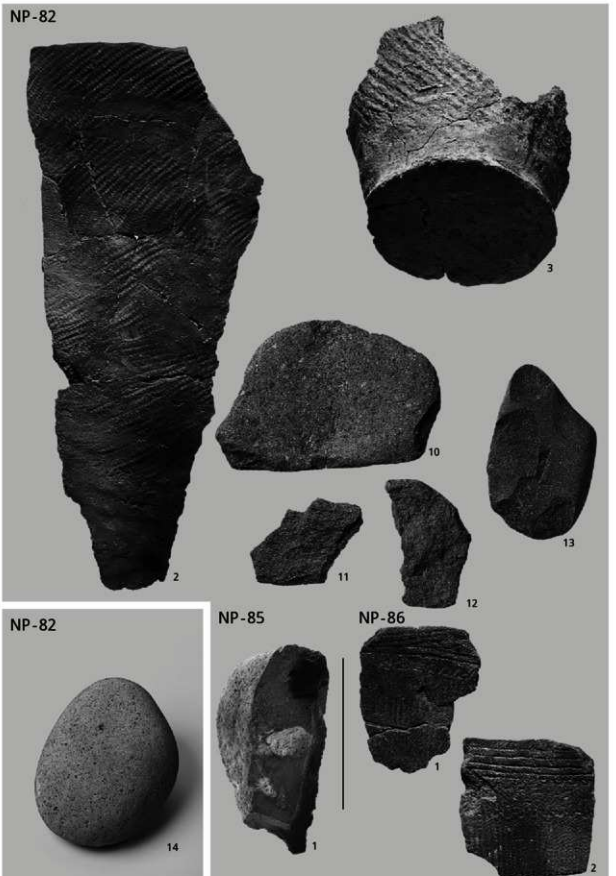
遺構出土の遺物（16）



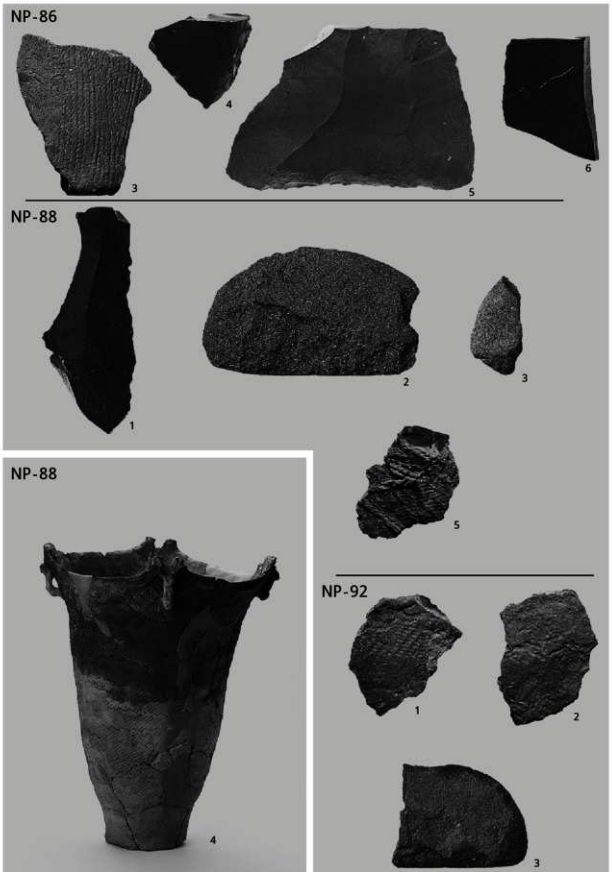
遺構出土の遺物（17）



遺構出土の遺物（18）

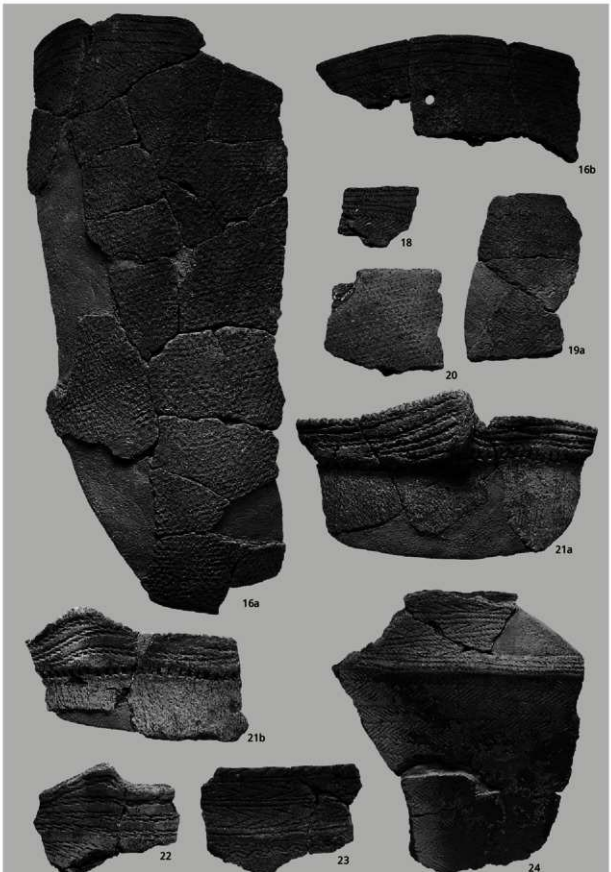


遺構出土の遺物（19）

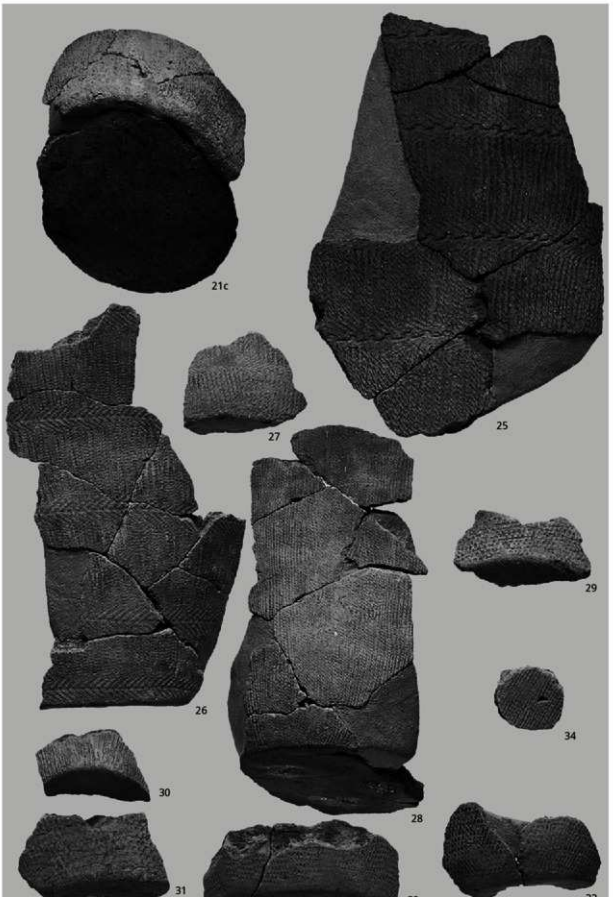


遺構出土の遺物（20）

包含層出土の土器（１）

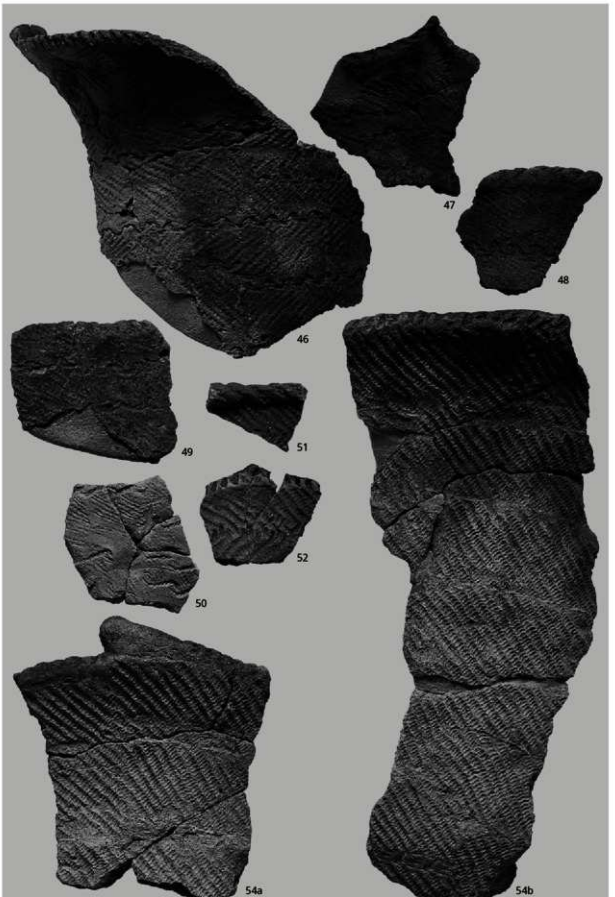


包含層出土の土器（２）

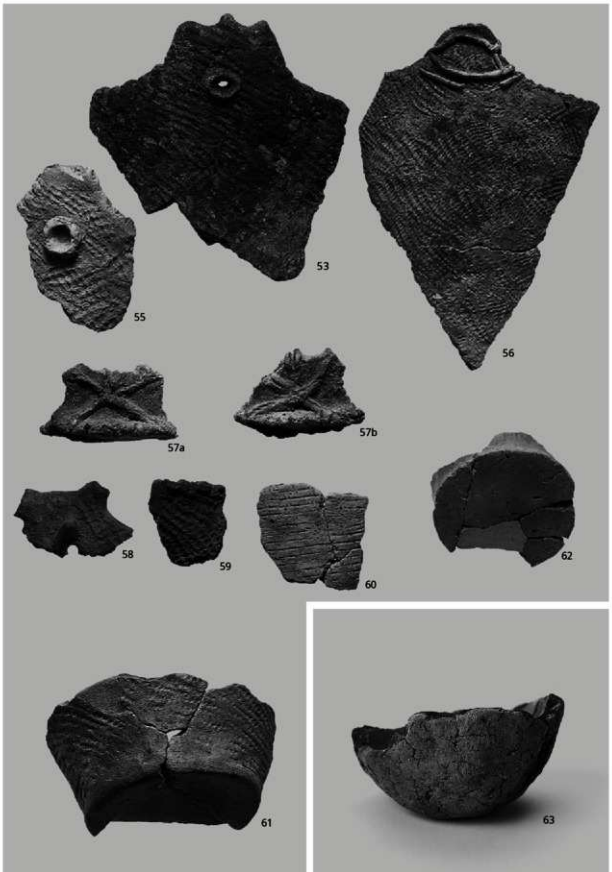


包含層出土の土器（３）

包含層出土の土器（４）



包含層出土の土器（５）

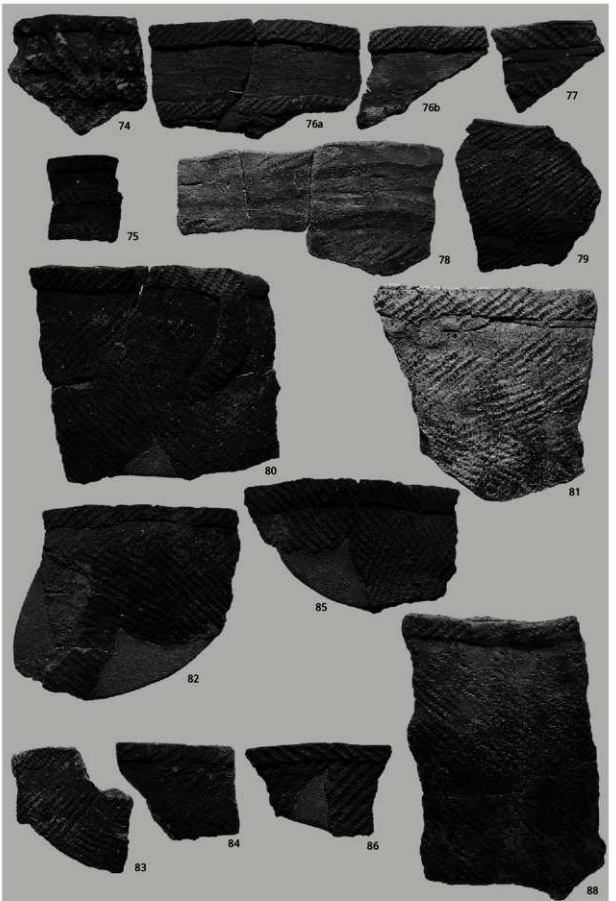


包含層出土の土器（６）

図版50

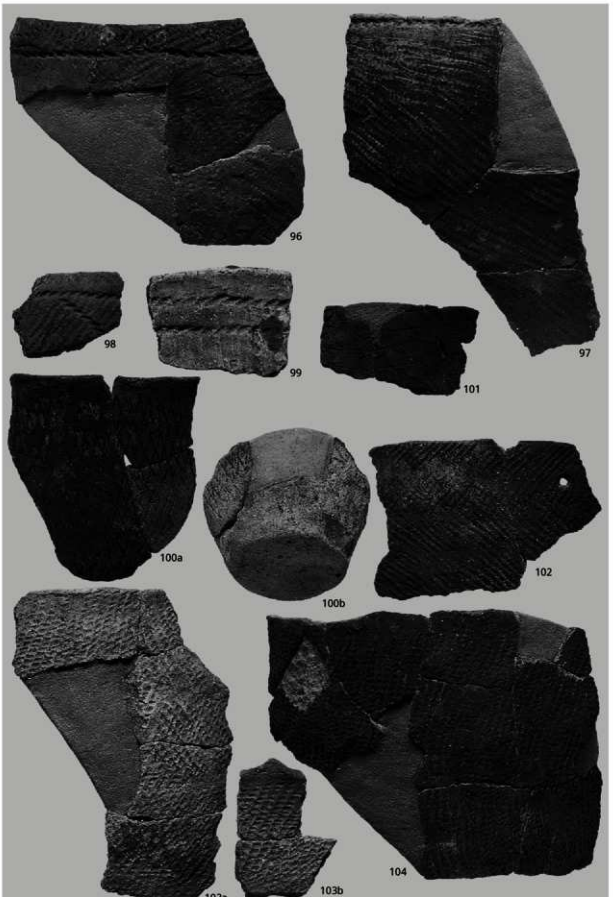
包含層出土の土器（７）

包含層出土の土器（８）・土製品

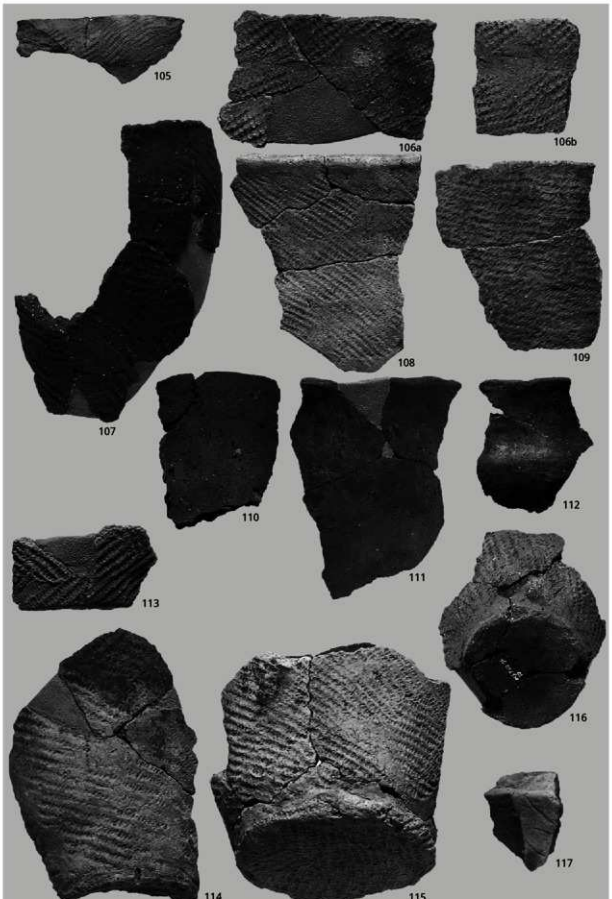


包含層出土の土器（９）

包含層出土の土器（10）

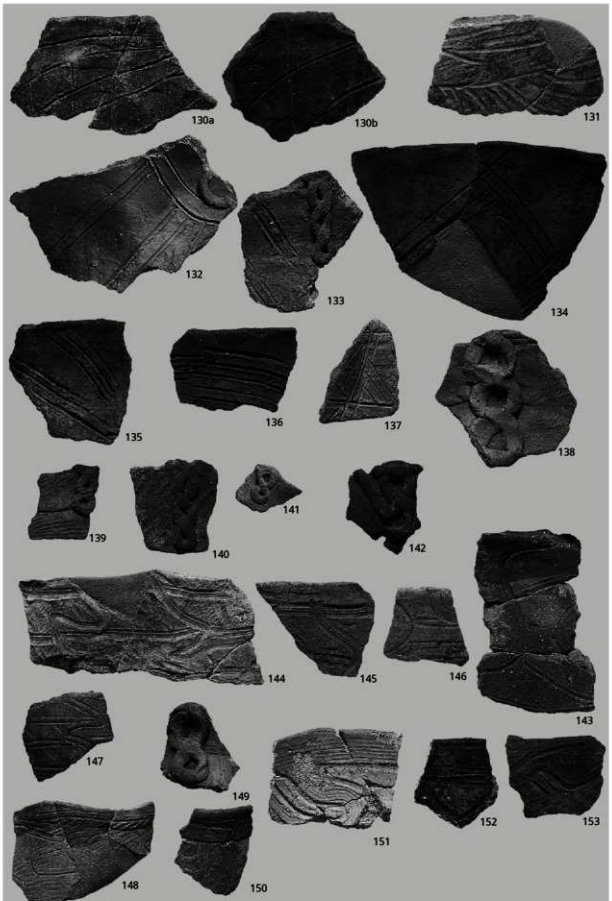


包含層出土の土器（11）



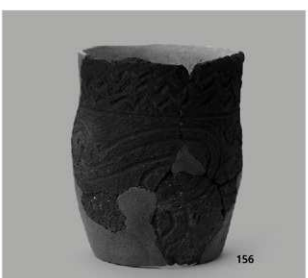
包含層出土の土器（12）

包含層出土の土器（13）

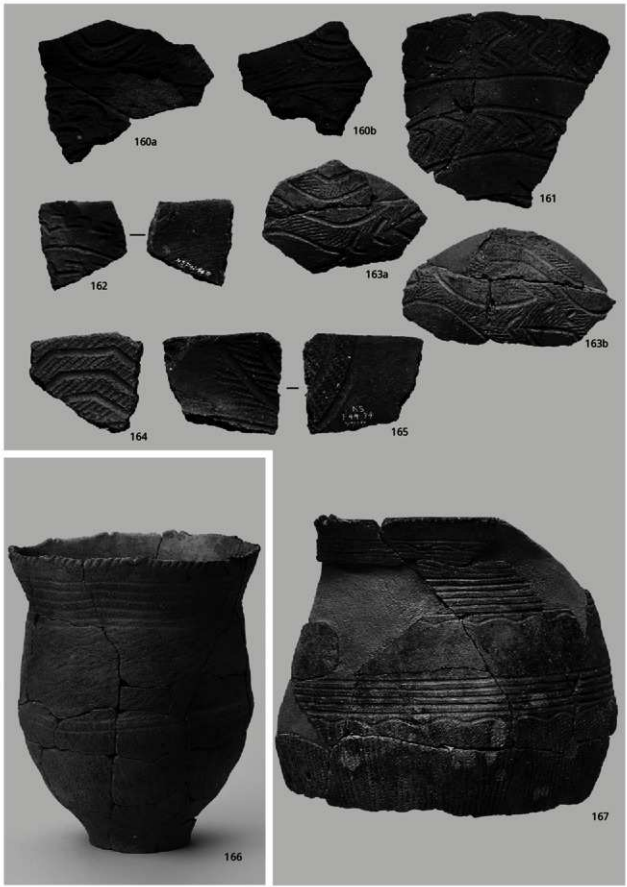

130a
130b
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153

包含層出土の土器（14）

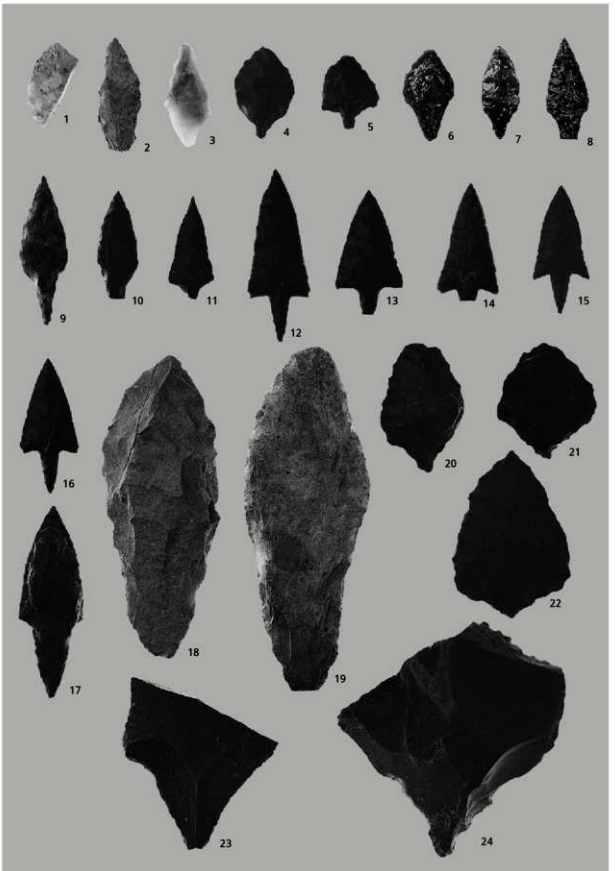
図版58



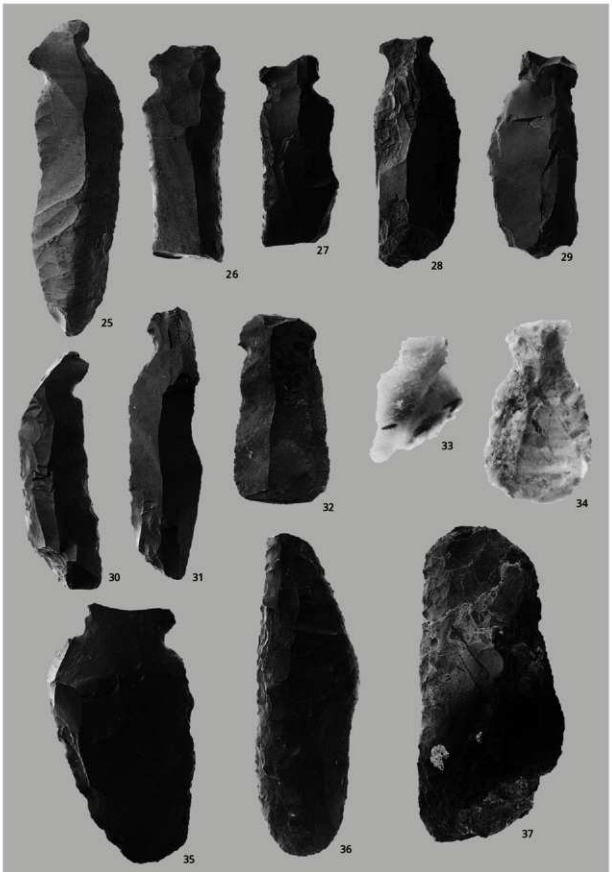
包含層出土の土器（15）



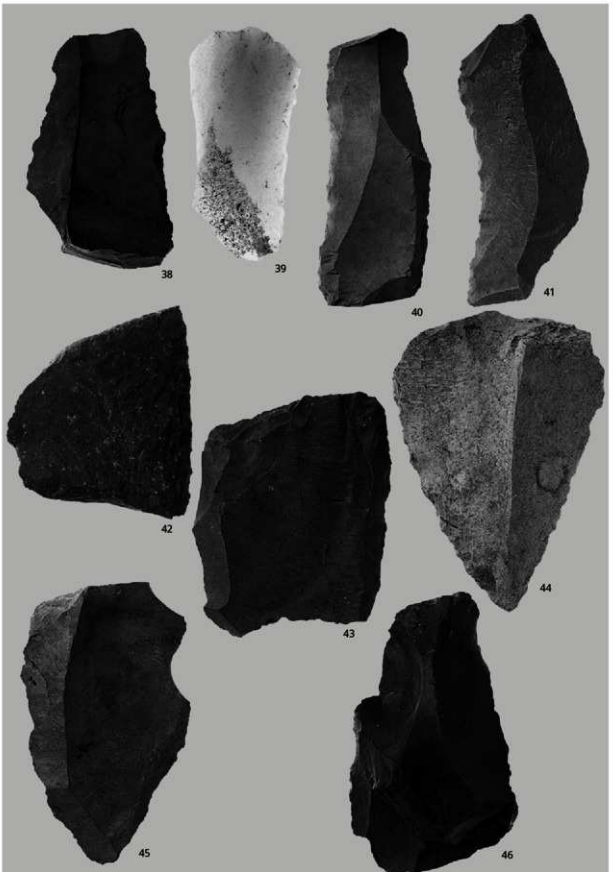
包含層出土の土器（16）



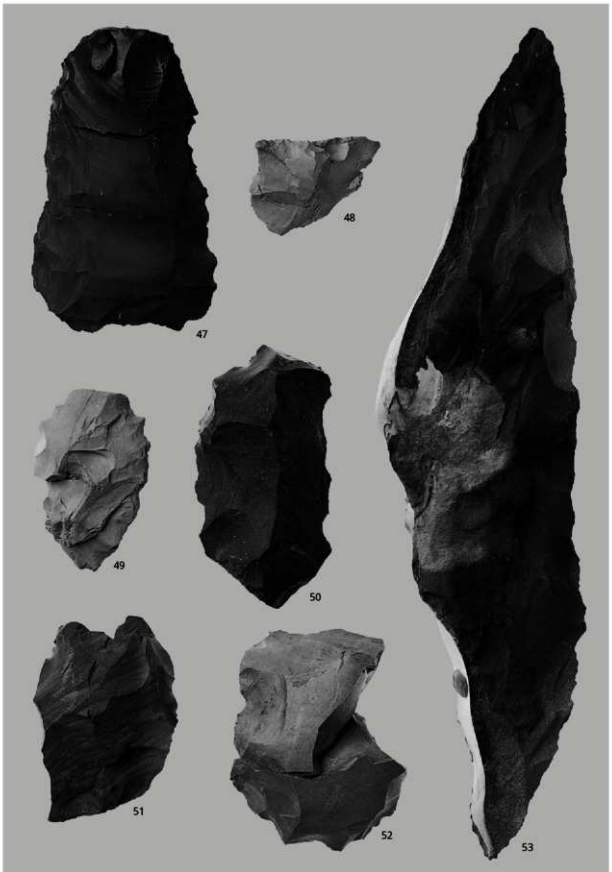
包含層出土の石器（１）



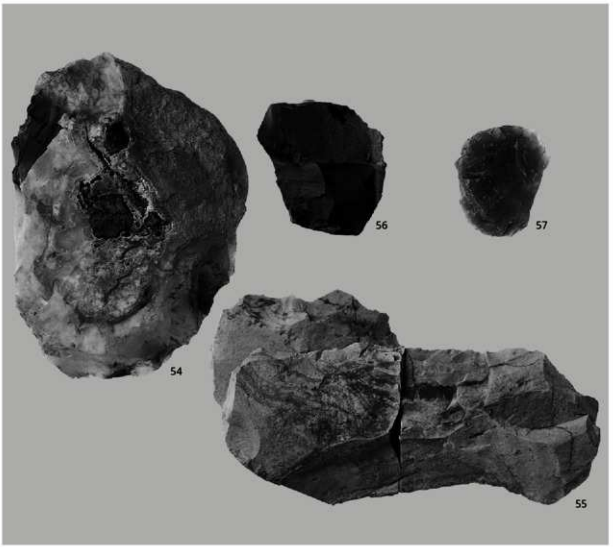
包含層出土の石器（２）



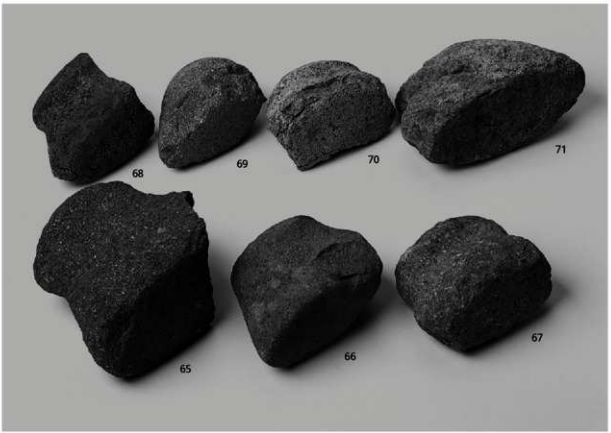
包含層出土の石器（３）

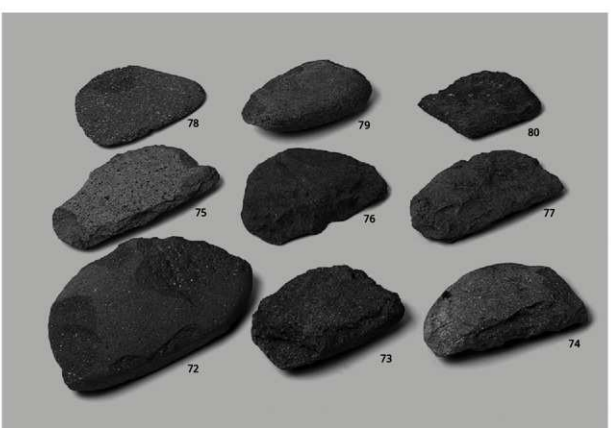


包含層出土の石器（４）



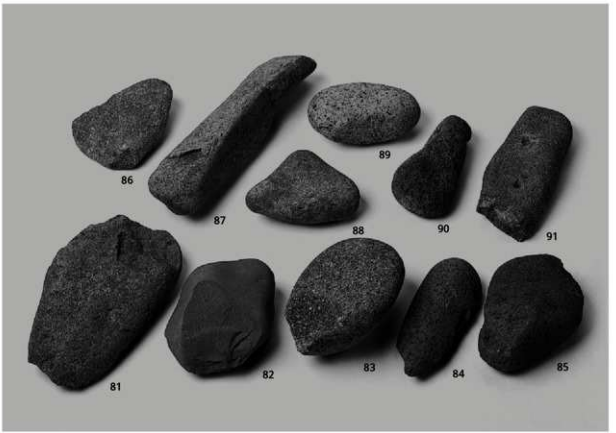
包含層出土の石器（５）

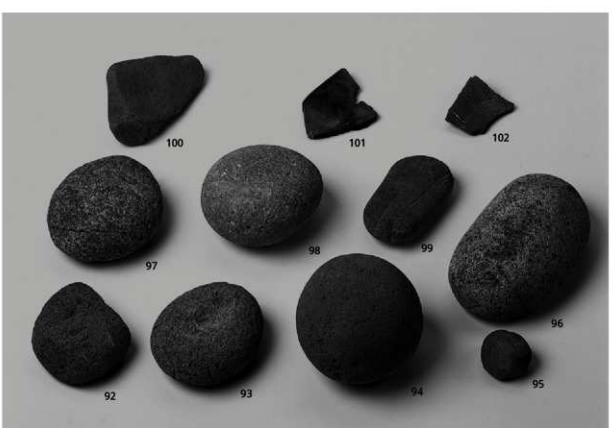




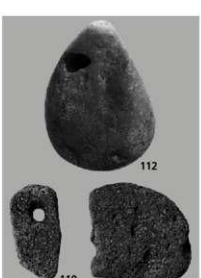
包含層出土の石器（６）

図版66





包含層出土の石器（７）



包含層出土の石器（８）・石製品

報告書抄録

ふりがな	もりまち　にごりかわさがんいせき　びいちく
書名	森町　濁川左岸遺跡　－ B地区－
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第190集
編著者名	村田大・影浦覚・大泰司統・中山昭大・袖岡淳子・熊谷仁志
編集機関	財団法人　北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地-1　TEL 011-386-3231
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にごりかわさがんいせき 濁川左岸遺跡	ほっかいどうかやべぐん 北海道茅部郡 もりまちいしくらちょう 森町石倉町 401ほか	01345	B-15-22	42 8 49	140 28 57	20010724 ～20011026 20020507 ～20020830	1,300 3,630 （A・B地区）	高速道路 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
濁川左岸遺跡	集落跡	縄文時代 前期 中期 後期 続縄文時代	住居跡　8軒 土壙　30基 （B地区のみ）	縄文土器 円筒土器下層ｄ式 サイベ沢Ⅶ式　見晴町式 トリサキ式　大津Ⅶ群 続縄文土器 恵山式 土製品 石器等 石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・偏平打製石器・石核・フレイク・石斧・たたき石・すり石・砥石・石皿・台石・加工痕のある礫・焼成礫・礫など ヒスイ製玉 （B地区のみ）	縄文時代前期後半～後期前葉の集落・墓域

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第190集

森　町

濁川左岸遺跡　－ B地区－

― 北海道縦貫自動車道（七飯－長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成15年3月31日

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地１
TEL（011）386-3231（代表）
FAX（011）386-3238

印　刷　札幌大同印刷株式会社
〒004-0003　札幌市厚別区厚別東３条２丁目
TEL（011）897-9711